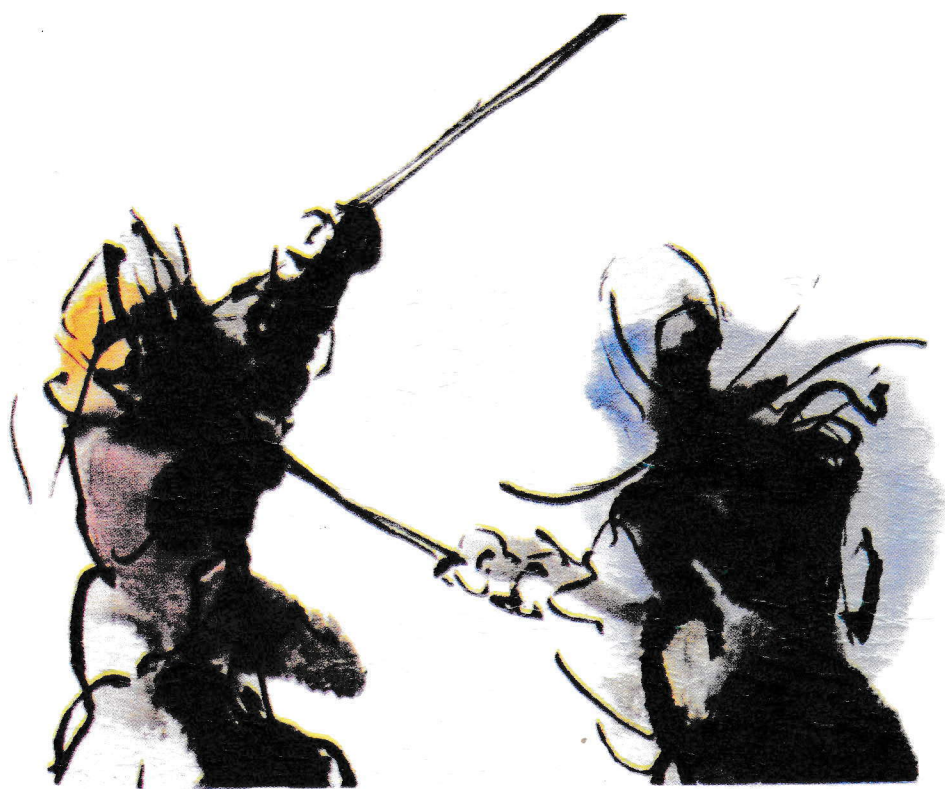


# 徳島の剣道

第17号



徳島県剣道連盟



四国範士会

平成十二年五月二十一日

鳴門武道館



井上晋一範士をお迎えして  
剣道秋季講習会

平成十二年十一月五日

松茂町体育館



# 心の時代へ

徳島県剣道連盟会長 遠藤 一美



新世紀の幕開けの年にあたり、  
謹んで御挨拶申し上げます。

徳島県剣道連盟も皆様の温かい  
御指導と御協力を頂き、新世紀へ  
と大きく成長発展してまいりまし  
た。

しかしながら、社会に目を向けますと、最近の社会と  
生活環境の急激な変化によって、家庭内暴力・いじめ・不  
登校といった出来事が、数多く新聞等で報道されていま  
す。次代を担う青少年をどのように育成していくか、学  
校だけではなく、社会全体の問題として、とらえていか  
なければなりません。

私達は、剣道を通じて健全な人間をつくるという剣道  
の理念「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道であ  
る」を自ら実践しつつ、後輩を教化していく責務があり

ます。心の豊かさが問われる今日であれば、あるほど、  
剣道のもつ特性を青少年の健全育成に活かして行かして  
いけると思っています。

心の豊かさは、自分自身に対する精神的きびしさを、  
包含していなければ、自分勝手な甘えでしかありません。  
先人が長い年月をかけて築きあげてきたこの剣道の修行  
こそ、日本人としての心の豊かさを体現できるものと確  
信します。

誇りをもって、剣道を通し、心豊かな、自分自身と後  
輩の育成に、共に汗を流して行きましょう。

# 『徳島の剣道 第十七号』 目次

巻頭言 ..... 遠藤 一美 ..... 1

顕彰一覽 ..... 4

剣道有功賞

体育功労賞

中学校剣道優秀選手

高等学校剣道優秀選手

剣道有功賞をいただいて

特別寄稿

三つの言葉

徳島剣人として郷土へ感謝

先生を偲ぶ

高島永吉先生

中河虎男先生

前林利雄先生

父を偲ぶ

父の思い出

思い出の一枚

私はだれでしょう

全国講習会報告

西日本中央講習会

居合道中央講習会

柳生講習 ..... 松村 和宏 ..... 43

徳島の剣道史

坂本 裕二 ..... 45

支部だより

麻植支部

鳴門支部

各種大会に参加して

全国スポーツ少年団剣道交流大会

全日本都道府県対抗剣道優勝大会

四国四県剣道大会

全国家庭婦人剣道大会

全国矯正官剣道大会

全国高校選抜大会富岡東高校(女子)

インターハイ富岡西高校(男子)

富岡東高校(女子)

全国教職員剣道大会

関西医歯薬大会

全国少年錬成大会

中学県総体・四国大会・全国中学大会

全日本女子剣道選手権大会

全日本東西対抗

国民体育大会

全日本居合道大会

全日本剣道選手権大会

植田 一夫 ..... 54

伊賀上仙一 ..... 55

寺西 明弘 ..... 57

木原 資裕 ..... 61

堀金 實 ..... 63

手塚十三子 ..... 66

中村 稔裕 ..... 69

矢野裕美子 ..... 70

松本 真治 ..... 72

小林かおり ..... 73

福多 雅英 ..... 75

近清 素也 ..... 76

水上 玲子 ..... 80

笠井 恵之 ..... 81

大石 真也 ..... 85

村井 正志 ..... 86

坪井さくら ..... 87

近藤 亘 ..... 88

中尾 正輝 ..... 90

岡田 友香 ..... 92

吉岡 修一 ..... 93

吉田 茂生 ..... 95

全国青年大会	切中	克樹	96
全国警察剣道大会	平野	誠司	97
第十一回全日本選抜剣道七段選手権大会	平野	誠司	98
全日本高齢者武道大会	阿倍	全司	100
ネンリンピック	山田	仁	101
<b>大会所感</b>			
眉山杯学生大会	勝沼	信彦	103
寺西杯大会	寺西	ひとみ	103
中四国学連剣友(OB・OG)大会	木原	資裕	106
<b>随想</b>			
剣道における自己点検の大事	勝沼	信彦	108
国体の思い出(続)	大澤	孝彰	109
学校剣道連盟についての思い出	高下	正義	110
居て合すこと	平尾	勝美	112
開館十周年の節目を迎えて	中山	啓男	114
私と二刀流	山名	信行	117
<b>称号・段位合格者</b>			
教士号に合格	平尾	満紀	121
七段に合格して	福多	雅英	123
感謝の気持ちを込めて	村井	正志	124
おかげさまで	元木	武	125
心懸けたこと	磯部	洋一	127
たかが七段されど七段	藤本	雅史	128
剣道に感謝	岡崎	明	129
剣道七段に合格して	青木	博志	130
剣道を人生の糧として	武岡	勝美	132

七段に合格して	坂本	憲一	133
剣道は大嫌い	米田	利彦	135
称号・段位合格者一覧			137
<b>がんばろう徳島</b>			
剣道少年団発表会	岩見	恭輔	142
少年強化京都遠征	平野	千尋	143
	長地	千景	147
教室だより	福永	竜己	148
	大川	功	149
	佐藤	佳宏	150
年間最多稽古賞	竹内	佳代子	151
	平野	悦子	152
強化遠征・受け入れ記録	近藤	亘	154
徳島県下稽古場所・時間帯一覧(改訂版)			
事務局だより	長谷川	陽子	159
大会記録新聞記事			160
<b>昇段審査学科問題・解答例</b>			
<b>徳島県剣道連盟事務分掌</b>			
<b>平成十三年徳島県剣道連盟行事予定表</b>			
<b>平成十三年度審査実施計画表</b>			
<b>徳島県剣道連盟審査資格・審査料等</b>			
<b>編集後記</b>			

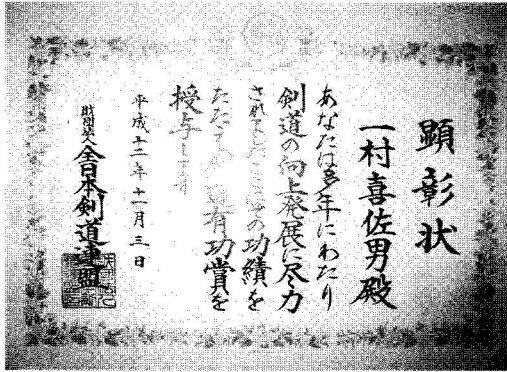
平成十二年度

# 顕彰一覧

## 剣道有功賞 (全日本剣道連盟)

○一 村 喜佐男 (大正元年八月十五日生れ)

十一歳より剣道を始め、以来七十七年の永きに亘り剣の道の修業に励み、各種大会に出場し活躍した。また、地域剣道発展の要として永きに亘り努力された成果は、多大であり、その真摯な姿勢は他の指導者の模範となっている。



## 体育功労者表彰 (徳島県体育協会)

○松 村 克 隆 (昭和十二年十二月二十一日生れ)

徳島県警察在職中は、警察剣道および県下剣道の発展に尽力した。警察退職後も中央武道館長として、県下武道の育成に努め、また、少年剣道教室の指導にあたる等、本県体育発展に寄与した功績は顕著である。

## 平成12年度 徳島県中学校剣道優秀選手

男 子	学 校 名	女 子	学 校 名
大 石 真 也	阿 南 第 二	白 井 佳 織	阿 波
西 崎 雅 弘	坂 野	昇 志 穂	木 頭
岩 本 正 尊	石 井	東 根 直 子	相 生
福 川 智 也	相 生	池 袋 一 葉	北 島
谷 澤 健 太 郎	相 生	寺 西 由 佳	鳴 門 第 一
山 田 裕 一	阿 南 第 二	住 友 香 織	阿 南 第 一
田 村 洋 介	阿 南 第 二	岡 本 侑 子	阿 南 第 一
横 田 竜 二	阿 南 第 二	村 井 千 裕	阿 南 第 一
元 由 和 樹	阿 南 第 二	佐 竹 加 容 子	阿 南 第 一
折 坂 浩 太	平 谷	茂 村 美 穂	阿 南 第 一
小 林 一 平	平 谷	檜 本 倫 子	相 生
品 川 康 太	平 谷	昇 里 紗	相 生
鮎 合 輝 記	津 田	井 東 香 澄	相 生
河 野 二 郎	石 井	笠 井 友 加	鳴 門 第 一
近 藤 慎 也	市 場	大 栗 里 恵 子	入 田
高 瀬 広 詩	坂 野	久 保 雅 美	加 茂 名
多 田 賢 司	阿 波	是 安 志 保	貞 光
佐 伯 隆 仁	小 松 島	岡 部 安 紀 子	牟 岐
高 石 龍 一	相 生	美 馬 絵 里 奈	市 場
篠 原 和 貴	阿 南 第 一	堀 口 あ ゆ み	藍 住 東
湯 浅 大 輔	阿 南 第 一	久 米 可 奈 子	新 野
三 木 健	阿 波	後 藤 遥 奈	木 頭

## 平成 12 年度 徳島県高等学校剣道優秀選手

男	子	学 校 名	女	子	学 校 名	
藤	崎	友	富 岡 西	桂	麻 衣 子	池 田
松	本	真 治	富 岡 西	重 松	裕 里	鳴 門
大	西	雅 照	富 岡 東	山 内	み ゆ き	鳴 門
岡	山	真 輔	富 岡 東	茂 村	早 苗	城 西
瀬	ノ	上 学	富 岡 東	吉 岡	優 美	城 西
大	谷	篤 史	富 岡 東	下 久 保	奈 々 枝	川 島
仁	木	進 介	阿 南 工 業	阿 部	久 美	川 島
森		義 晴	阿 南 工 業	矢 部	智 子	川 島
山	本	一 成	阿 南 工 業	松 村	広 子	川 島
品	川	健 太	徳 島 東 工 業	河 野	裕 美 子	川 島
瀬	尾	太 作	徳 島 東 工 業	白 井	智 美	川 島
中	川	健 太	徳 島 東 工 業	矢 野	裕 美 子	富 岡 東
木	村	琢	徳 島 東 工 業	小 林	か お り	富 岡 東
鎌	矢	佳 宏	新 野	樫 本	美 紀	富 岡 東
森	本	浩 二	那 賀	岡 田	友 香	富 岡 東
中	田	匡	新 野	山 崎	恵 里 子	富 岡 東
河	野	俊 樹	城 ノ 内	森 本	香 奈	富 岡 東
中	村	浩 章	城 ノ 内			
宮	本	康	城 北			
西	岡	勲	城 北			
多	田	義 夫	川 島			
秋	山	雄 治	川 島			
大	野	和 則	川 島			
石	田	明 宏	川 島			
石	川	佳 樹	川 島			
藤	井	一 平	川 島			

## 剣道有功賞をいただいて

阿波支部 一 村 喜佐男

此の度は、先輩諸氏が沢山御健在なのに、田舎剣士の私が大変有意義な有功賞を戴くことになり、本当に感謝に堪えません。皆々様に御支援御指導を賜り厚く御礼申し上げます。

光陰矢の如しと言いますが、私が剣道を始めてから七十七年。十歳の時に竹刀を握りました。少年時代、青年時代と神社が道場で、先生も沢山おられました。終戦後、道具の置き場に困った時もありましたが、解禁を待つて、再び道場へ、現在は市場署の道場で稽古しています。

御承知の如く、戦後、少年犯罪が多くなり、其の対策として、多くの剣道教室が設立され、我が市場町でも坂本裕二先生と相談の結果、青少年非行防止と銘打って市場剣道教室を昭和五十年十月に発足する事が出来ました。

その後、十四、五年は参加する子供も多く、試合成績もよく、活気がありました。しかし現在では、少子化に伴い、大変淋しくなっています。

昔の諺に七十の手習いと言われましたが、私にとっては八十の手習いで、毎日が勉強です。範士井上正孝先生の指導の中に「二つ叱つて三つ褒め、五つ教えて良い子にぞせよ。」また、「打たれ上手に褒め上手」と言われますが、指導はなかなか大変な事です。稽古を

終えて、面を取る時、道具に対して手入れの方法も指導はしていても、中に一人二人自分が可愛くて、先ず自分の顔をふく者がいます。亦其の時に今迄一時間に余つて道具にお世話になったのだから先ず道具の手入れ、そして自分と言う風に、感謝の念を育てたいものです。

プロ野球の選手が三振すればバットで地面を打つ、捕球しそこなえばグローブを地面に投げる。やはり、こんな事でも見ている子供には悪影響になると思います。剣道の自ら律する精神が、これから益々大切になってくるものと確信します。

最後になりましたが、此の度は大変有り難う御座いました。徳島県剣道連盟の皆様は今後益々の御健康と御発展を心よりお祈り致します。



# 特別寄稿

## 三つの言葉

香川県剣道連盟名誉会長

範士九段 植田 一



頂けたらと申し上げた。

私は「和合一体」、「温故知新」、「至大至剛」を修業の過程における座右の銘として、今も常に深く心に刻んでいる。

### 和合一体

和合一体は、昭和三十八年（四十九歳）剣道八段を允許されたとき、開いてくれた祝賀会でお礼中引用した言葉である。

和合一体とは文字通り「相手と自分と溶け合って一つになる」とことで、つまり相手を打ってやろうと意気込みすぎるのではなく、相

手の中へはいり、また自分の心の中、動きの中へ相手を引き入れてくる。そこには決して無理のない渾然一体の姿、そこで始めて正しい技が、生まれてくる。

日頃稽古している相手が、即ち自分の師であると考え、自分だけの剣道ではなく、相手と共にある和合一体の状況において、剣の道を行ずべきだということを、齢五十近くなったその頃つくづくと感じたものである。今もなおそうであるが、稽古をした後で、ほのぼのとした互いの余韻が残る気品と風格のある剣道を、今後とも修行し続けたいと心から願っている。

### 温故知新

次に四十四年（五十五歳）範士の称号をいただいた祝賀の席で挨拶をしたときの心境を表した言葉である。

「古きを温めて、新しきを知る」であるが、論語の中に「子曰く、故きを温ねて新しきを知る。以って師と為すべし」とあるように、古い物事を究めて、新しい知識や見解をひらくことで、語源的には「肉をとる火で煮つめて、スープのような知恵のエッセンスを得る。それが現在のことがらについて新しいものを教えてくれる」との意だそうである。古い形式や、考え方を重んじる剣道において、古いことだけにとらわれすぎると進歩がなく、新しいことに走りすぎると迎合に陥りやすくなる。

古いことに失しない、新しいことにかぶれない、絶えず過去と前途を正しく見つめて、しっかりと進んで行く。ここに温故知新たる由縁があり、真の立派な剣道の探求、向上が得られるものだろうと

思う。

### 至大至剛

最後の至大至剛は、大に至り剛に至るで、私自身の修行にあわせて、今、青少年たちを指導する心構えになっている。

大は大きく雄大であり、剛は意志の力、節操の固くて強いこと、即ち直である。「この上もなく大きく育て、剛く育て」という願いを込めたものと解釈している。孟子の訓え「浩然の気」の中で説明されているし、また宮本武蔵の剣法でも、「直道以って極となす」ということで、その修行の第一に、「心に邪なきことを思う、世々の道にそむくことなし」をあげている。

直とは至大至剛で、大悟にいたるまでの真つ直ぐな道である。邪なきは心の迷いなきことであり、道にそむくことなきは天理遵法の大精神であって、これこそ剣道修行の最終のものであると思う。こうした心の持ち方、言動、行動を人間形成を目指す基盤として、ただ道場の中だけでなく、広く社会生活を営む上において活かすこと、それは、今日生を受けた我々剣を学ぶ者の務めだと考えている。

私の剣の師は実父平太郎である。これまで父のことで剣道関係の雑誌その他から色々聞かれているが、父の偉大さを書くのは面映ゆいので、いつも遠慮お断りさせて貰っている。昨夏たまたま香大剣道部合宿地へお出で下さっていた木原先生にお見せした、亡父の教え子山田好数君（旧制高松高等商業卒、住友銀行奉職）が、香川大学経済学部同窓会誌（昭和六十三年十一月）に投稿しているコピー

を「三つの言葉」の後に掲載出来たらとその依頼を頂いた。

父は徳島の近江佐久郎先生や高島永吉先生等とは生前大変ご昵懇（じつこん）に願っていたことだし、その両先生にゆかりのある先生方から現在ご指導を受けている方々が、お読み下さるのであれば洵に結構なことだと、私も折に触れ「四国は一つ」であると申しておる関係で、もし徳島の剣道愛好者諸兄のこれからの剣道修業における心の持ち方において、少しでもそれがお役に立つのであればと敢えてここにのせさせて頂くことにした次第である。

徳島県剣道連盟剣友各位の益々のご活躍、ご発展を心からお祈りいたしております。



至大至剛の前で正座する香大剣道部OBと部員達

# 植田平太郎範士を偲んで

山田好数（本科十五回）

十三才の時から剣道を志して五十四年、今は月二回のペースで稽古を続けているが、剣道を生涯の友として、その醍醐味を教えてくれたのは、今は亡き植田平太郎範士である。

## 初稽古

昭和における三度の天覧試合で「東に持田、西に植田あり」との勇名を馳せた先生に、初めて稽古を願ったのは、坂出商業剣道部五年のころと記憶している。ところは高松武徳殿で暑中稽古のときである。この好機逸すべからずと、必死になって打ち込んでゆくが、面を打たんとすれば小手、小手を打たんとすれば面と、一歩先々と打たれる。そのうちに息が切れてヘトヘトになる。何をと体当たりによければ、パツと竹刀を取られる。全く処置なしであった。

## 合宿

高松高商の剣道師範であつた先生は、合宿稽古のあと、よく剣道講話をして下さつた。

「所謂剣道の大家と称される者は、初心者に対し動かないで、ホイホイと稽古をつけているが、あれでは上達しない。構えて動かなければ相手に打たれる。鉄砲でも的が動いていれば当た

らないものである。しかしやたらに動いても疲れるだけで、動きにイ偏という工夫をつけて働きにすれば、儲かるという訳である。」

「何が怖いといつても、不意を打たれる程怖いものはない。どんな相手に当たつても負けないためには、常に苦手、苦手と稽古をし、いついかなる技を仕掛けられても対応できるように心技ともに磨いておかねばならない。」

## 模範試合

岡山六高との定期戦が終わつたあと、六高の剣道師範で当時中国で敵なしといわれた小野派一刀流の千頭範士と植田範士との模範試合が行なわれた。両校の選手が瞬きもせず見守る中、千頭範士は正眼に構えて微動だにせず、その竹刀の先を植田範士の竹刀が、軽妙な足捌きを伴いながら、上から下からと軽く触れる。お互いの間は突けばとどく距離まで詰まっている。トゥー裂帛の気合とともに千頭範士が喉を目にかけて諸手突き、一閃植田範士が体を左に開き、相手の竹刀の下から小手を斬る。息もつがず千頭範士が更に突く、それも払つて面、もう一度突く、払つて面……。やおら植田範士得意の左上段に構える。一呼吸打ちおろして面、見事に決まる。千頭範士もこれではならじと上段を取る。植田範士左上段から正面の右手右上段に構え直すと見るや、右手で相手の左小手を打つ、これも決まる。一本の無駄打ちもなく、剣道の形を演じているようだ。格段の差である。私の生涯でこれほど真剣で鬼気迫る試合は初めてで最後であつ

た。

### タイミンク

「剣道では、やたらに打つても当たるものではない。必ず打つべき機会がある。それは相手の起こり頭を打つことである。その起こりまでには、一瞬のうちではあるが、三つの段階があつて、先ず匂いがする。次に兆しがある。それから起こりが生ずる。匂いするとき、また兆しるときに打つても成功しないで、打ち返される。この三つの心の動きを掴えるためには、無心でなければならぬ。無我の境地に達するため、無限の修行が続くわけである。」

### 出征

昭和十七年一月に現役人隊が決まり、挨拶のため植田範士の自宅を訪問、色々と率直な質問をした。

「今先生が宮本武蔵と立会われたら、どんな勝負となりますか。」

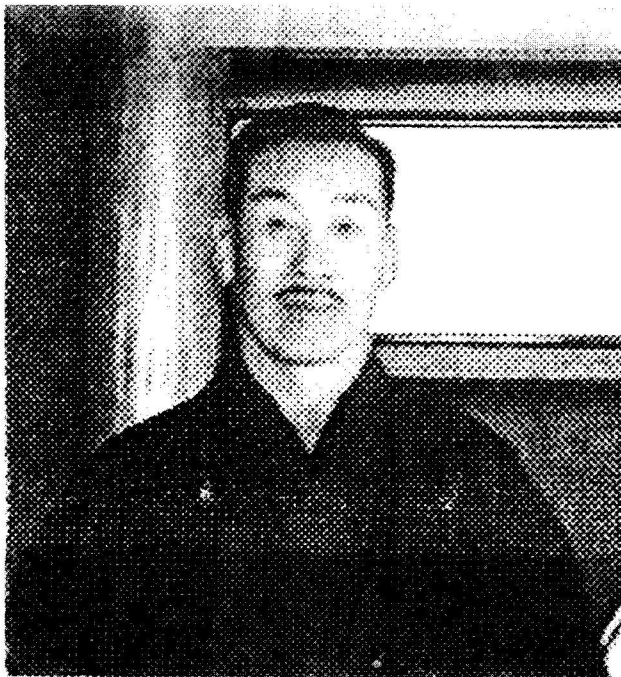
「真剣を持つての勝負なら問題にならないだろう。常に生死の境を歩いている武蔵の気合は近寄り難いほど鋭いに違いない。しかし武蔵も突然現代に現れて車の走るのを見たら戸惑うだろうし、竹刀を持つての勝負なら立会えるかも知れない。昔から強さを表すに、名人・達人というが、私は剣道上手という段階だ。いま日本で一番強い剣客は持田範士だろう。」

### 永遠の今

植田平太郎範士は昭和二十四年七月、享年七十二才で逝去さ

れた。

私が親しく指導を受けたのは、昭和十三年からの、そして範士が最も円熟していた六十二才からの三年間であつたが、私の五十年に亘る剣道人生のバックボーンとなつて、今もその精妙なる心技は、私の体の中に生き続けている。またとなき良き師にめぐり逢えたしあわせを噛みしめながら、稽古に励んでいる。今日此の頃である。



ありし日の植田平太郎範士

# 徳島剣人として郷土へ感謝

法政大学体育会剣道部師範（前監督）

## 吉田博三

貴誌へ投稿の機会をいただき誠に有り難うございます。また日頃のご無沙汰を深くお詫び申し上げます。

徳島剣道界の素晴らしいご活躍、ご発展誠におめでとうございます。陰ながら拍手を贈らせていただいております。こ

れ偏に遠藤会長、堀江名誉会長をはじめとしたご指導にあたられた諸先生方のご薫陶の賜物と深く敬意を表する次第です。

私は美馬郡江原町で農家の長男として生れました。昭和二十九年四月、城西高等学校農業科へ入学、片道約三時間の通学が始まりました。昭和三十年、徳島農業高等学校と校名が変更となり、また四十数年経った最近、元の城西高等学校へと校名が変更しております。

剣道を始めたきっかけは、故下村富夫先生にお会いできたからでした。神仏のお導きと感謝しております。この恩師とのご縁がなかったならば、現在の私は存在し得ないはずでした。高校生活三年間、文字通り益も正月も返上で剣道の指導にとどまらず人間としての生き方から礼儀作法、果ては切腹の仕方まで指導いただいた事を先日のように思い出します。終戦後、剣道は一時占領軍により禁止されておりましたが、やっと解禁になった頃でした。全ての剣道愛

好者は剣道の稽古が出来る事の喜びで一杯であり、試合とか段位とかは予想も期待もしておらず、稽古出来る事が全てであり、最高の幸せでした。

剣道復活の気運は急速に高まり、普及奨励の観点から段位、称号の復活、全国的な各種大会が開催される様になり、高校剣士も日本一を目ざせるチャンスが訪れました。

我が母校である徳島農業高等学校剣道部は下村富夫先生、山田仁先生、両師の名コンビによるご指導により全員一年生部員でしたが、県大会、四国大会、全国大会等に出場し、思いがけず素晴らしい成果を収める事が出来ました。大会の結果は以下の通りです。

昭和二十九年十一月  
県下高等学校剣道大会 準優勝（団体戦）

昭和三十年七月  
県下高等学校剣道大会 優勝（団体戦）

昭和三十年  
四国高等学校剣道大会 鈴木 清（個人戦優勝）

昭和三十年八月  
第二回全国高等学校剣道しない競技大会出場（ベスト8）

小生（藤田）優秀選手に選ばれる。

昭和三十一年七月

県下高等学校剣道大会 優勝（団体戦）

昭和三十一年八月

第三回全国高等学校剣道しない競技大会（ベスト8）

優秀選手に再度選ばれる。

昭和三十一年九月

四国大会団体予選 優勝（団体戦）

昭和三十一年十一月

第十一回国民体育大会 高校剣道の部第三位

出場選手名

吉田博三（旧姓藤田）、鈴木 清、石本芳照、川田武志（旧姓

堀部）、吉田 寿、久次米俊二、蓑手 誉

良き師、良き剣友に巡り合い心を一つにして高校日本一を目ざした日々の剣道部生活は夢の様な充実した一時でありました。県下の諸先生方にご指導をお願い出来た事は最高の幸運であり感謝の気持ちで一杯です。

昭和三十二年、縁あって法政大学へ名先鋒を務めた鈴木清君と一緒に入学いたしました。彼は体調をくずし最後まで剣道を続ける事は出来ませんでした。期待が大きかっただけに非常に残念な思いを致しました。しかし、彼は勉学に励み、教育者として大成されております。

剣道部へ入部しますと「我こそは日本一の部長である」と自負なされた丸山義一先生に下村先生に勝るとも劣らぬ剣道一直線の厳しい指導を頂戴する事となりました。先生は常日頃、自分は剣道の専門家ではないと言われて剣道技術に関する事は一切教えず、反面全国的にご高名な諸先生方をお招きし、学生の技術向上に対応されました。お陰さまで部員は居ながらにして沢山の有名な先生方の

ご指導を直に生身を打たせていただきながら仰ぐ事が出来ました。丸山先生には就職、結婚と人生出発点のお仲人をお願いし大変可愛がっていただきました。心配のみおかけして何一つご恩返しが出来ず悔やまれてなりません。

学生時代の主な戦績は

昭和三十四年六月 全日本学生剣道選手権大会

個人（ベスト8）

昭和三十五年五月 関東学生剣道選手権大会

個人（準優勝）

昭和三十六年九月 関東学生優勝大会

団体（優勝）

大学卒業後は本格的な稽古に取り組む環境ではなくなりましたが、母校の監督、師範を拝命し、学生の指導に当たれた事は誠に有難い事と感謝しております。徳島県から入学された剣士の方々も各分野でご活躍の由、大変心強く存じております。

剣道は日本独特の文化遺産であると言われております。我々が修得する事も大切ですが、海外へも是非正しい剣道の普及をしていければと願っております。その一環として海外遠征を始める様になり、一昨年は西オーストラリア・パースへ伺い、有意義な体験と国際交流に努めてまいりました。昭和五十四年に竣工、小生が館長の剣道場「春風館」は地元剣士及び学連関係、その他高段者の稽古場として開放し、活用願っております。正に「交剣知愛」を實踐致しております。今こうして元気で稽古が出来るのも又、実業人として頑張っております。



# 先生を偲ぶ

## 先達に学ぶ

名誉会長

堀江 幸夫

二十世紀は、どうやら暗い話題を山積みにして暮れようとしています。二十一世紀、二十一世紀とさわがしいですが、さて新しい世紀には明るい社会、明るい生活が待っていてくれるのでしょうか。

「待てば海路の日和」そんな風見鶏では何の解決にもなりません。私共は二十世紀の日々を省みて正しい反省をしなければと思いません。

自分のことを棚上げして、あれも悪い、これも悪い、何もかも悪いのだと間違った反省ではぶち壊しです。世界を相手に戦争して無茶苦茶にやられて、それでいて今日の日本を築き上げた我々です。

ここでもう一度冷静に正しく反省して、それぞれの分野で伝統精神に根ざした使命感に目覚め、真面目に努力すれば、明るい二十一世紀が展げるのではないのでしょうか。私たち剣道を学ぶ者も新しい世紀を迎えるにあたり、今日までの修業姿勢を正しくふりかえり、その反省の上になつて真剣に二十一世紀の修行を考えたいと思えます。

剣道は練習のことを稽古と言っております。稽古は古きを考えるということです。そこで、先ずその手始めに我々の先輩先生方の修行の姿から、その教えを知り、誤りない道筋をたてる二十一世紀

の第一歩を踏み出したいと思えます。

ここに先達の剣道に対する心構えを記した文がありますのでご紹介いたします。これは郷土の大先輩高島永吉先生が皇紀二千六百年を記念した樞原神宮奉納大会に全国の教士から選抜された三十二名の指定選手として出場した時の高島先生の感想文です。文中真に得難い教訓の数々を精読玩味して稽古と精神の陶冶の糧といたしましょう。

紀元二千六百年は昭和十五年です。この年は紀元二千六百年を記念して宮崎神宮大会、樞原神宮大会に次いで皇居済寧館に於いて天覧試合の三大会が開催されて高島先生は天覧試合と宮崎・樞原両神宮大会にすべて指定選手として出場の光栄に浴され、

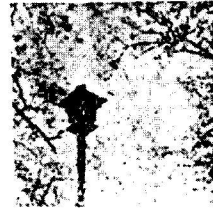
樞原神宮大会では優秀選手に選ばれております。(写真参照)

高島先生(後に範士)は、  
県警察本部、徳島刑務所、  
徳島中学校(現城南高校)  
の師範をされていました。  
現城西中学校校長の高島稔  
之先生(教士七段)はお孫  
さんです。



受賞の八剣豪

向かって左から優勝者浅子教士、第二位の越川教士、ほか高島、千頭、岩城、小澤、増田、四人の六教士。



## 樞原神宮奉納武道大會所感

劍道教士 高 島 永 吉

瑞氣満ちみつる大和畝傍の麓八紘一字の理想も宏き樞原の神域、神武の功彌々高く由來も遠き聖地に於て、皇紀二千六百年の聖代を壽ぎ、日本武道の眞髓を顯揚し、神意を慰め奉らんと全國武道家の俊豪を選び、奉納武道大會を舉行され而も大盛會裡に納會されたことは目出度極みにて、出場選士は勿論、武道に志す者の齊しく主催者に對し深甚の感謝と敬意を捧げる所であります。又不肖不圖も其席末に列し乍未熟宿年修業の劍道を無事神前に奉納し得ました事は劍取る身の名芳之に過ぐる者なく感慨無量であります。

申す迄も無く武道は武によつて徳を修むる道即ち、神に通ずるの道にして、特に奉納演武の如きは至誠只道を行する姿の外なく、勝敗に耳捉はれ道の神聖を冒瀆するは神慮に背き大會の主旨に悖るものであります。然し試合に勝ち度は自然の人情です。が之は迷の一つで強いて捉はれると却つて思つた通り行くものではない。兎に角私は見苦しき試合はしたくないが無論負け度もない。勝敗は天運としても只遺憾無く全靈全力を擧げて戦ひ後悔無き試合が致し度念願で毎日猛烈な練習を續けました。然るに三月十八日の一寸の拍子に左足の筋肉を傷め練習不能となり歩行にも困難を感じる事になりました。一時は長太息しましたが幸輕傷故、手當養生が良好なれば出場出来る見込が付いたので只管手當に専念しました。若し出場不能となれば武道家の不面目此上なく神怒の程も恐れ多しと、見學に過す焦慮の苦は又一入、然し一面又味深き者にて、臆て潮待つ心も起り靜かに思索三昧に過

## 感所會大道武納奉宮神原極

す内漸く迷夢も薄らぎ光明さへ輝きて稍々安心しましたが、遂に試稽古も出来ず當日が迫りました。若し試合中再發すれば夫迄、斃而後止の氣概で會場に臨んだ譯ですが、御陰で安外無事に一回戦二回戦と漸く責任を果し得ました。知人は二回戦に入りて相當足に氣を引かれて居た様だと慰めて呉れたが、自分は全く平氣で始終冷靜に戦へた事を喜ぶと共に、之偏へに神の加護に依る者と感謝に堪へない次第であります。

省れば第一回戦に不圖も優勝出来た事は天運にして第二回戦に惜敗したは自分の修業未熟によるもの、其他色々考へさるゝ點もあり、遺憾な事も無きにもあらざれど、已に戦は終つたのであります。颯風一過寂然として一切空、不斷の修練に精進の一路を辿るのみであります。只々御稽古願へた六人の先生方に深甚の感謝と衷心敬意を表する次第であります。

其他諸先生方の多年の御修練による入神の業、立派なる試合態度等さすが當代粒選りの選士であると敬服の外なく、之でこそ尙武日本の眞髓を顯揚し一般人士に好模範を示され、本大會をして尤も有意義ならしめたと同慶に堪へない者にて定めし神慮も御満足のことと拜察奉る次第であります。就中優勝の榮冠を獲られた淺子先生は終始一貫不動の氣力態度等寔に劍を修むる者として敬服の外はありませんが、特に竹刀を眞劍と等しく武人の魂として靈視せられ道場と控所を不論衷心禮を以て終始尊重せられた御心境は御優勝と併せ考へて洵に意義深く敬虔の念禁じ能はざる者があります。即ち禮と武道、武道と神道、神道と禮、或は至誠と不動心等誠に高遠な理想を如實に拜見して心私かに敬意を表する者であります。洵に恐れ多き事乍ら、

明治天皇の御製を拜借し奉つて愚感の一端を結び度いと存じます。

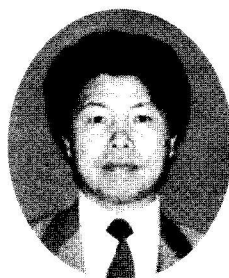
目に見えぬ神の心に通ふこそ人の心のまことなりけり。

心だにまことの道にかなひなばいのらすとて神やまもらん。

## 中川虎夫先生の思い出

上八万剣道倶楽部主宰  
徳島県庁剣道部長

### 河野通宣



「地元の子供達に剣道を教えてみないか。」中川先生から私にこのようなご提案がありました。当時私は、PTAとかスポーツ少年団、町づくり等々のボランティア活動の中で、青少年の健全育成と地域の連携を深めるためにも何かをと考えていた頃でした。剣道が特に好きという訳でもなかった私は、卒業以来竹刀を握ることもなく、実は、学生時代に剣道とともにかけた卓球のサークルづくりにも傾いていましたが、これも先生の娘を妻とした因果かと剣道教室を主宰することを決意しました。

こうして「宅宮<sup>たくのみや</sup>剣道教室」(後に上八万剣道倶楽部と改称)が徳島市上八万町に産声をあげました。昭和五十七年四月のことでした。稽古の場は氏神さまである宅宮神社(河野家が代々宮司を勤めてきた)の境内で、夏には莫塵の上で黙想していると蚊の一斉攻撃を受け、冬には寒風吹きすさぶ中で面に積もる雪を払いながらの稽古でした。また、雨が降れば、保護者ともども雑巾で水を拭い、雪が積もれば雪かきをする日々でした。厳寒も酷暑も、土煙のあがる境内



第1回 上八万地区剣道大会の表彰式で S 58. 5、宅宮神社境内

での稽古、このような環境に子供達が耐えられるであろうか……。先生は随分心配をしておられました。

しかしながら、厳かな神苑で僅か九名で発足した剣道教室が来年は二十周年を迎えようとしています。上八万町というこの小さな地域で、これまでに中川先生の教えを受けたちびっ子剣士は百八十余名を数え、各方面で活躍をしています。また現在、小学生三十八名を含め八十五名が剣道に親しんでいるという現状を見ますと、いかにこの地に剣道が定着し、先生の教えが浸透しているか、さらに、いかにその業績が大であるかを物語っていると思います。

豆剣士神苑に散り初稽古

往き帰り竹刀で打たるねこじやらし

「青雲」と号した俳人でもあった先生は、稽古日にはいつも早くから来られて付近を散策し、作句に余念のないご様子でした。

風入れて稽古疲れの汗しぼる

去年今年防具の重みずっしりと

子供達の稽古に続いて私達指導を行う者にも稽古をつけて下さっていたあのお元氣な先生も、さすがに古希を過ぎた頃にはふっと防具の重さを感じることがあったのでしょう。同時に誠実なお人柄の先生のこと、責任の重さもつくづくと感じておられたのではと察せられます。

南部中学校校長を最後に三十八年間の教職から退かれましたが、こよなく子供達を愛する「優れた教育者」であった先生からは、何ごとにも体でぶつかってゆく熱意と山のような意志を感じたものでし



真剣な眼差しの新入生をやさしく指導する先生 S 61. 4、上八万小学校体育館

た。先生は私達指導をする者に対して特に次の三つのことを言われていました。

①決して無理をしてはいけない。鍛練本意に流れず、基本をきちんと身につけさせ、興味を持たせるように指導をする。長く続けさせることによって礼儀、忍耐、勇気、判断力などが養われ、剣道の技術も自然に上達するはずだから。

②保護者との関係を円滑にして、後援と指導と教育の接点を明確にした心構えが大切である。

③一斉指導するうちにも個を教え、個人を指導するうちにも多数を見逃してはならない。指導者の言語態度はいつとはなしに子供達にうつるものである。

私達はこれらの教えを深く心に刻み、今後とも青少年の指導に当たっていくつもりです。そして、いついつまでも、たとえ世代が代わっても中川先生がこの地に打ち立てた精神を必ずや受け継いで行ってくれるものと信じています。

豪放磊落なお人柄で、古武士の如き温容の「酒豪の剣士」であった先生は、きつと今頃天界で親しかった清原先生や稲木先生達と竹刀を交え、また、お酒を酌み交わしていることでしょう。合掌



ありし日の中川虎夫先生

## 故 前林利雄先生を偲ぶ

鳴門支部

佐藤

勇

当初、前林先生とは終戦後、職場で顔を合わせ、挨拶する程度の知り合いでした。人のめぐり合わせは不思議というか想像を絶するものがあります。勤め先の関係もあり一緒に稽古をすることになり、いつの間にか兄弟のように親しくお付き合いをして貰いました。旅行に、稽古に、趣味の会又高齢剣（遠征）など、他の剣友から金魚の糞と言われる位行動を共にしてきました。

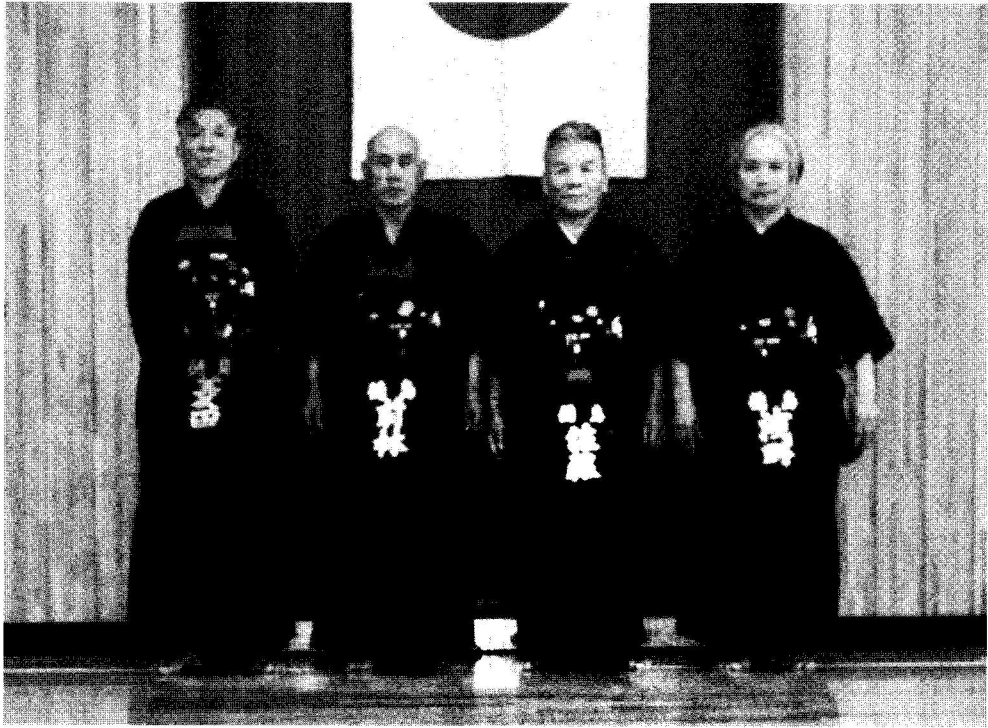
地域の為にも鳴門支部長を永年つとめられ、規約など支部活動の基本になるものを作っていました。不肖私も会計として従いました。また、高齢剣の理事として鳴門の高齢剣連の為に尽力（六年間）されました。

偏屈というか、いい加減な事が嫌いで真面目を絵に描いたような人で、人を立て譲るべきところは譲るといった付き合い程に味のある人でした。天命には勝てず、八十才を前に夭逝されました。告別式には親類は素より遠近を含む剣友・地元の教え子達、多数の参列していました。立派な人柄が偲ばれる告別式でした。鳴門支部の私達も共々にお手伝いをさせて頂きました。

生前、生い立ちから小学校（川内）中学校（撫養中）卒業、海軍志願、戦後の生活、剣道の履歴など書き残されたものがあり、これを転記して先生を偲ぶ「よすが」としたいと思います。



ありし日の前林先生（右）と筆者



平成7年3月 鳴門武道館にて

生前の前林先生を回想し、心より先生のご冥福をお祈り致します。

## 前 林 利 雄 大正十(一九二二)年生まれ

剣道歴 五十八年 二十年より中断五年―二十五年竹刀競技

二十七年五段―中断三十年―五十七年再々開

板野郡川内町に農家の四男として誕生、昭和七年十一歳小学校五年生から剣道を始めた。学校では親戚の四段錬士のS・I、が力を入れて教えてくれて毎日二時間練習をした。裸電球一つのもと、校舎と校舎の間の土の上で練習し、袴を泥まみれにしたこともあった。

また夜には、他の小学校、よその村と練習に励んで、六年生の時は大将をつとめた。県下では強い学校で、どこでも負け知らず、どこへ行っても優勝した。

昭和九年、撫養中学校に入学、正課での剣道では同級生では相手にならず先生と何回も稽古をした。放課後は剣道部で稽古をした。また一年の時、水泳部に行ったら、「剣道をやれ」と怒られたこともあるが、水泳は得意で特に平泳ぎは早かったし、

臨海訓練は得意であった。剣道で正選手でないときは一、二時間しか稽古しなかつたので、その後着替えてラグビーをよくしていたが、運動場が石炭からで倒れるとすぐ傷をするので親は嫌っていた。

四年生で正選手となつて、京都大会には四、五年生と二回出場した。そして五年生では、県下で三人であつた初段になつた。

昭和十四年、中学卒業後は、父親の弟が海軍兵学校にいた影響か、他の兄弟と同じように（長男陸軍「十三年戦死」、次男海軍と）志願して海軍に入隊した。訓練期間は半年で、その間二カ月間は剣道を出来たが、その後は銃剣術だけであつた。軍艦に乗り込んでからは銃剣術だけをしていた。十六年、真珠湾攻撃の後、五男も戦死した。

終戦はフィリピンで迎え、捕虜生活二年を経験した。終戦になつて現地協定（講和条約）を結び、その時食べたチョコレートはそれは旨かつた。キャンプではメリケン粉のどろっとしたものを食べていたが、バナナのしんこ、パイヤの根っこ、椰子の実、バナナの青いのを火で焼いて食べたり、また時には水牛を殺したり、隠しておいた火薬で魚を捕つたりして食べた。ただ未決の事件（強姦、挑発、盗みなど）が生じると、悪いことをした者と同姓の者が全部呼び出され、調べ終わると捕虜番号をいわれ処罰されたことが忘れられない。

昭和二十二年一月一日復員して、家に帰つたが、食物に不自由するといふので、四月にはD家に婿養子にいかされた。昭和

二十三年長男、二十五年長女、二十八年次女が生まれた。

剣道は二十五年頃、尾形郷一先生が直接家に来て、高松での博覧会場での大会に出場した。三越百貨店の三階で各県一チームによつて行なわれた。全日本剣道連盟の出来る前で、竹刀競技であり、「柔らかいあてっこ剣道」で、何分間に何本という数多くあつたほうの勝ちという、剣道をスポーツ化したものであつた。二十七年には五段となり、鳴門の瀬戸中学で先生にという話もあつたが、義父が剣道をするのを嫌つたのでその後三十年間は剣道を止めていた。

昭和三十二年S I石油に勤めるようになる、十六年間勤めて、四十八年の八月に辞めた。

同年九月からはH O建設工業に転職した。

五十一年には腎臓を患い二カ月の入院、その後八年の通院治療を要し、また五十二年頃からは喘息の発作に苦しんでいた。家庭生活では、五十一年義父、五十五年には若い頃から体が弱くて入退院を繰り返していた妻、五十六年義母と死亡している。

五十七年、剣道再開のきっかけになつたのは、喘息の発作であつた。夜、医者が開まる頃になるとしんどくなるがよくあつた。たまたま入つた喫茶店で見たスポーツ新聞の記事に、スポーツ心臓のことが出ていて、死ぬまで運動を続けたら、喘息は直るといふことが書いてあつて、それで反対する親もいなくなつたからと再開した。すると喘息は二カ月で治つてしまつた。さらに五十九年九月には前立腺肥大で手術と病気が続いた

のだが、この手術で幸いに腎臓も回復した。

五十九年、六十三才でHO建設工業を退職し、現在は農業をやりながら、剣道を続けている。「剣道は人間形成、礼儀とつけの習得、若いときは心身の鍛練になると言い、年寄ってからは健康と言う。また小さい子供を教えるのは義務だ」と考えている。そして、尾形先生が言った「剣道ちゅうのは道楽ぞ、先生、先生言うてくれて顔のええ道楽ぞ」と言われたことを今実感している。

子供達は順調に成長し、長男は結婚して同居しているので、息子の嫁は、畑と一緒に出ているし、日曜日には長男も手伝っている。長女は現在は結婚して桐生にすんでいる。次女の方は八年前に結婚し、佐古に住んでいる。

出来事関連図 前 林 利 雄

時代	年齢	時代背景	定位家族	生殖家族	教育職業	運動歴	その他
1920 (T9)		農業			小学校入学		
1930 (S5)	9	T10	誕生 親類I先生 4段錬士		中学校進学	剣道 小中大何とこへいっても優勝 剣道部 本休(中)、ラグビー	
1940 (15)	19	終戦フィリピン 捕虜 復員 食糧難		結婚婿養子	海軍志願 農業	武道禁止令	
1950 (25)	29		長男誕生 長女誕生 次女誕生 義父反対		SI石油	尾形先生の要請 竹刀競技出場 5段 瀬戸中学教諭に要請 剣道断念	
1960 (35)	39						
1970 (45)	49		長男結婚(同居) 長女結婚 義父死亡 妻死亡		HO建設		腎臓の病 2ヵ月入院 8年の通院
1980 (55)	59		義母死亡 次女結婚				喘息 すぐ治る 前立腺肥大手術 この後 腎臓も回復
1990 (H2)	69	支部長4年間務め 高齢剣理事も6年 務める			退職 農業	剣道再開	
1998 (H10)	77	12.22 死亡		長男の孫剣道開始			

## 父の思い出



石井 康

父が亡くなってから一ヶ月が過ぎてしまいました。二十一世紀の元旦を自宅で迎え「おめでとう」の声を聞きながら病院へ戻りましたが、回復の兆しもあり、「まさか」と思いつつ病院へ急いだが、残念ながら死に目には会えなかった。

亡くなってからつくづく思うには、腰を落ち着けて話をしておらず過去のことは余り知らない。学生時代や戦時中のことを聞いた記憶もなく、父も敢えてそんな話を持ち出す機会も無かったのではないか。

真面目で几帳面な性格ではあるが、どこか厳格で頑固な一面を持ち合わせており、高校時代までは怖い存在であったのも原因の一つであったのかも知れない。

近年は、かなりまろやかになっていたが、戦前、戦中、戦後と苦しい時代を生き抜いてきただけに、厳格、頑固、辛抱強さが身についていたのではないだろうか。

父は一九一四年に生まれ、麻植中、京都の武道専門学校（武専）を卒業後、広島で国語、剣道の教師をしていたが、兵役のため徳島の第四十三連隊に入隊し、主に中支方面の作戦行動を行っていたと

聞いている。

作戦中に敵機銃掃射をうけ右胸部付近に被弾。この時は間違いなく痛みがあったと思われるが、命をかけて戦っている時には被弾した事さえわからず「適が撤退して初めて軍服が血に染まっているのに気付いた」と言っていたので少々痛さは痛くないのかも知れない。

戦後徳島に帰り、私が生まれたが何分にも食糧事情が悪く、育てるのに苦労し虚弱に育った事を随分と気にしていた様である。

いつの頃は思い出せないが、私が「剣道を習いたい」と言った所「そんな細い体力の無い体では無理」として許可してくれなかったのも、やはり体調や体力を気にしてくれていたのかも知れない。そんな父が熱心に剣道に通い出したのは退職後のことである。勤務していた時期は時間がなく、余り稽古をしていなかったが、運動免許を取得、車を購入してからは行動範囲も広がり、武道館や各地の大会を通して、一生涯のスポーツとして鍛練してきた。最近は高校の剣道講師や少年剣道の指導を日々送っていた様である。

免許を返納（スポーツをしているが、年齢と共に運転が危なくなってきたので）してからは近くのバス停まで自転車で行き、バスに乗り換えてまでも指導や練習に出かけていた。

その外出には自分なりの持論があり、人一倍身嗜みに気を使い、年がいつでも常にお洒落心を忘れない人であった。

入院中であっても、そのお洒落心は欠けておらず身なりにはうるさかった父も、目の前からいなくなってしまうました。

今は愛用の椅子に、愛用の防具と竹刀が寂しそうに乗っています。誰か使って欲しいと思っているのかも知れません。でも我が家ではもう使える人も、使う人もいません。

父、祖父と二代に渡り、長年の積み重ねの結果、最高榮譽の範士号を戴きました。

奇しくも命日が同月同日となった親子が、天国か地獄かはわかりませんが、剣道談義を交わしているのかも知れません。

いずれにしても三代目を育成してないので、剣道とは是でひとまずお別れしなくてはなりません。本当に長い間ありがとうございました。

剣道連盟の皆様や親交のあつた皆様には心よりお礼申し上げます。

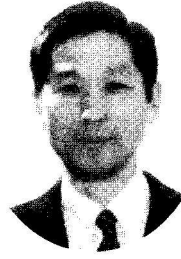


ありし日の父 石井克太郎



## 我が父の思い出

小川憲司



父、本書の突然の訃報に、さぞや驚かれた方が多かったことと存じます、数年前胃を患い一時入院したことがありましたが、その後は豊饒ゆたかそのもので、以前にも増して活動的であっただけに、我々家族でもにわかには信じられなかったほどでありました。残念ながら、私は剣道の道には進みませんでしたので、父が実際に剣道を指導している場面に接する機会はほとんどありませんでした。このように剣道には全く門外漢の私が、剣道のことについて述べることは、大変恐縮しています。しかし、亡き父の縁の一齣いっしゅうとして、素人の私にも伝わって来た点について、思いつくままに少しだけふれさせてもらいます。

思い起こしますに、年少の子どもたちの剣道教室をはじめ、地域の中高校生の指導、さらには成人の方々の修練などを通して実幅の広い関わり合いがあったことが印象に残っています。葬儀の折りに、遠路よりわざわざ参列していただきました多数の方々を拝見致しております、本当にそのことが実感されたのであります。こよなく剣道を愛していたからこそ、お互いに触発し合えたのだと

思います。週三日の稽古を始めた晩年、稽古を終えて帰宅すると、きまって子供たちの上達ぶりを話していつもご機嫌でした。一方、子供たちの指導においては熱が入りすぎてしまうこともあったのではないかと、危惧しております。個々の練習場面を再現しながら『もう一步、もう一步』と、一人一人の練習育成に対する願いが高じていくことがありました。試合を控えた時などは格別であり、さらには、試合の後の講評さえ真剣な口調で諳そとんじていることがありました。

父が剣道を始めたのは、旧制中学校からようです。その後、軍隊生活、終戦などといったのまにやら三十年が経っていたある日、知り合いの方の家で偶然見つけた『剣道の道具』。それまで忘れていた剣道への思いが一気に吹き出してきたのでしょうか。それからというもの、剣道が正に父の生きがいの一つになりました。諸先輩の先生方にかわいがられて、剣道連盟の理事まで仰せつかることにもなつたようです。それほど任に十分お応え出来たかどうか心配しております。生前の本人の言によりますと、(多少の誇張が含まれているかもしれませんが)、元来器用な面があり、何をやらせても際立っていたようです。スポーツ面でも、中学時代に水泳の学校代表選手に選ばれたこともあったようです。基本的な自分の身体に対する自信、分析力に恵まれていたのでしょう。実際、趣味は多彩で、多岐にわたっていました。ゴルフ、テニス、日曜大工、庭木の手入れ、手料理、どれをとっても自分が納得できるまで熱心に打ち込んでいく姿が思い起こされます。

一言で言ってしまうえば、父の生き方には一本筋が通っていたようです。口癖の一つであった「それが言う、『美』じゃよ！」に、よく表されていたように思います。父の生涯とは、自分自身が獲得した美意識を強く意識したものであったように思います。名前の『本書』から受けるイメージは、いちいち事細かに説明しがちな面でありますが、一方でいざ行動するときには、心・技・体が統合された姿で見事に動くことが出来たのでしょう。剣道についての講釈？を、ジェスチャー混じりで繰り返す時など面目躍如たる感じでした。念入りに説明する段には、スローモーションで誇張した形でやってくるわけですから、素人にもそれなりの説得力を持って伝わってくるのです。そんな時の父は、童心に還ったような、純粋に「我、剣道をせむとや生まれけむ。」とまでも言わんばかりでした。そして、その表情が、家族一同の爆笑の渦を巻き起こすことがあったことも、また事実ですが……。

父は逝きました。我々家族にも懇ろに言葉を交わすこともなく、一人自分のやりたいことをやりたいだけにして、そそくさと「後は、あるがまま、なるがままに！」とでも言うかのように……。父は我々家族の心の中に、そして皆様方との思い出の中にも今もなお生き続けています。時々、思い起こしてもらえれば、黄泉の国で、父も「ほんに剣道真利じゃー」と、呵々哄笑してくれることでありましよう。

最後に、生前の皆様方のご厚情に改めて心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。歳末の慌ただしい時期の告別式、その後

の喪中でのご挨拶等々不行き届き、失礼なる点が多々あったことと思えます。どうか、父の遺徳に免じてご容赦ください。今後の、剣道連盟のご発展並びに皆様方のますますのご多幸ご健勝を祈念いたします。



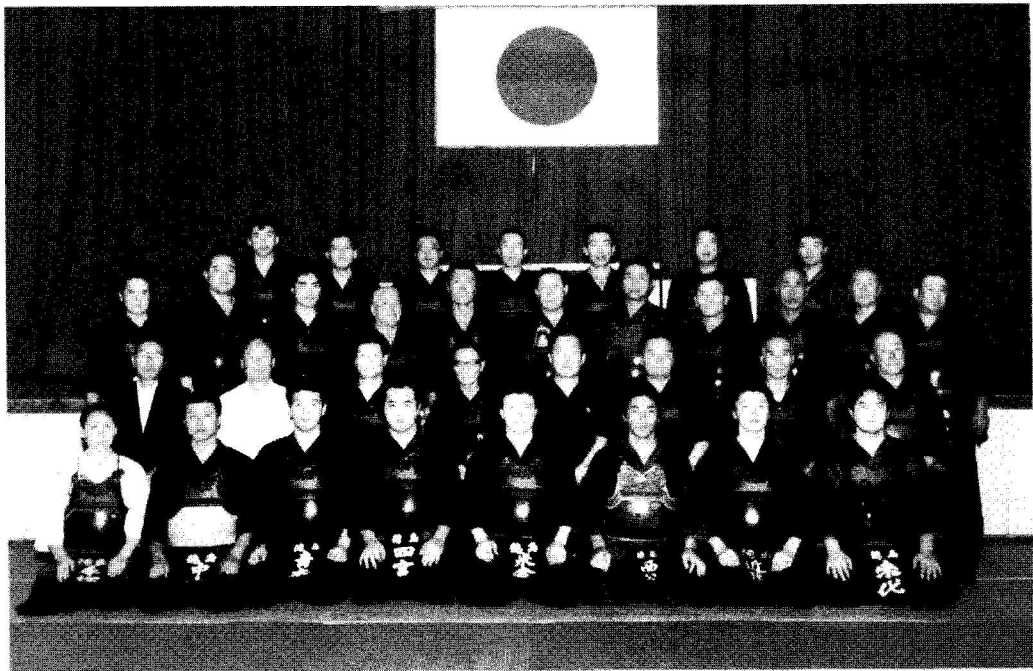
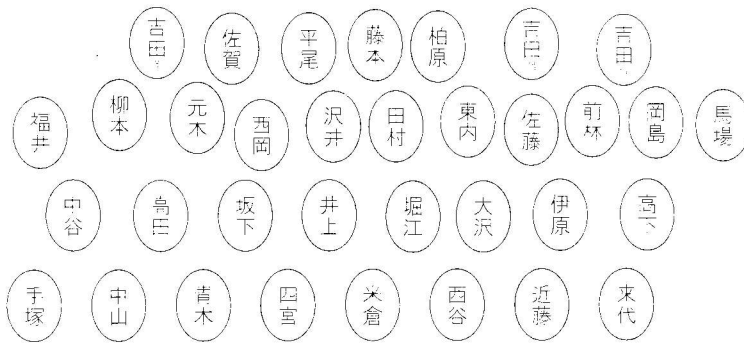
2000年正月、自宅近くの伊沢神社にて

# 思い出の一枚

名誉会長  
堀江幸夫

旧武道館朝稽古会が県立中央武道館の完成のため発展的解散の最後の稽古を終えて記念に写したお別れ写真です。

旧武道館は昭和三十五年九月十五日完成、昭和六十三年十月老朽化のため閉館しました。朝稽古会は昭和四十年九月二十四日から昭和六十三年十月まで二十三年間つづけられました。



徳島県武道館朝稽古会 昭和63年9月24日

# 少年期の思い出

刑務所支部 中村 稔 裕



ここに掲載した写真は、昭和三十五年八月、名西高校三年時に高校総体県予選において優勝し、全国大会、四国大会出場を果たした記念のものであり、いわば高校時代の集大成と言ったものでしょうか。

あの日から既に四十年の歳月が過ぎ去ったものの、当時の猛稽古の状況が昨日の出来事のようにはつきりと脳裏に焼き付いておりま

す。  
私は、昭和三十三年四月、高浦中学から名西高校に入学しましたが、同時に高浦中学から榎本正勝が、また城西中学から今津善博、重松宣男の兩名が、更に他校から四名の計八名が剣道部に入学しました。当時名西高校の剣道部は高瀬嘉十郎先生指導の下、約二十名の剣道部員が活動していましたが、入部早々の一年生部員を前に高瀬先生から

「わしは、このチームを三年計画で作り上げる。」

と、私達に対する期待を表明されたわけです。と言うのも、高浦中学組は高橋静夫先生から御指導を頂き、城西中学組は中川虎夫先生



の御指導により、県下大会において上位入賞の実績を持ったレギュラーだったからだと思えます。

私達一年生部員の日課は

- 一、稽古前の道場の雑巾掛け
  - 二、上級生の剣道具の準備
  - 三、三年生、二年生との稽古
  - 四、高瀬先生との稽古
  - 五、三年生との稽古
  - 六、上級生の剣道具の片付け
  - 七、稽古終了後の道場の雑巾掛け
- でした。

稽古内容は基本技の反復稽古はなく、すべて地稽古となっておりました。高瀬先生は常に左上段をとり一年生部員にも容赦なく面を打ち降ろされ、上段の経験は初めての一年生部員はなすすべもなくまるで杭を打つ如くビシビシと面を打ち、

「勝つためにはどうすれば良いか、自分で勉強せえ。」

の一言しかなく、私達一年生は上級生と高瀬先生の稽古を見取っては其の真似事をして、少しづつ技を覚えていったのを記憶しております。

私達が二年生になった時、乾寿男先生が転勤されてこられ、高瀬、乾の二人体制での御指導が頂けることとなりましたが、その他にも私達は指導者に恵まれておりました。

石井隆介範士、須見喜富範士、久保勇先生、高橋静夫先生、野口

直之先生、松島隆先生等が相次いで来校され、熱心に指導して頂きました。特に四季を通じて純白の稽古着姿の石井範士は静かに稽古される方でしたが、掛かる私達は恐ろしさを感じる程緊張感がありました。一方、須見範士には、打てども打てども

「おーそうか、おーそうか」

と、面の奥で笑みを浮かべながら、まるで赤子の手をひねる如く軽くかわされ、くたくたになるまで掛かったのを覚えております。また久保先生には「おったー」の掛け声と同時にドスンと打たれる面は背筋を走り抜ける程こたえ、私達は「おったー（面が落ちた）」等と笑いのネタにした程でした。

名西高校の教えは「勝たねばならぬ。」であり、部員一人一人が個性のある剣道をしていました。今思えば、

「打たれても 打たれても立ち上がれ」

の雑草魂を教え込まれたように思います。

当時、徳島県の高校剣道界は下村富夫先生率いる徳島農業高校（現城西高校）が圧倒的に強く、私達の先輩達も各大会であと一步のところまで徳農の軍門に下り、私達後輩に打倒徳農の夢を託して卒業していきました。こう言うことから「勝たねばならぬ。」が生まれたのかもわかりません。

私達二年生時、三年生部員が相次いで退部し、一・二年生主体の剣道部となりましたが、そこは雑草魂でカパーし、昭和三十四年十月、県下高校新人大会において宿敵徳農を下し、優勝を勝ちとりました。この日は、坂崎洋一先生自ら道場で選手を迎えて下さり、女

子教員手作りのカレールライスで祝勝会をして頂きました。

この時のメンバーは

先鋒 川崎 昭夫(一年) 副将 重松 宜男(二年)  
次鋒 榎本 正勝(二年) 大将 今津 善博(二年)  
中堅 中村 稔裕(二年)

であり、私達が卒業するまで不動のメンバーでした。

三年生になってからは、今津キャプテンを中心に早朝稽古、夏休み中一日二回稽古等すべて選手が立案し、先生にも賛同を頂き、よりハードな稽古となっていきました。この頃、高瀬先生との稽古は先生に勝たなければ「それまで」の声が掛からず、ピンク色の小便が出る程になっておりました。当時他校との交流稽古、試合等は全く無く、自分の学校のみ稽古に終始しました。当時のライバル校は鳴門高校(山田武雄先生)、脇町高校(滝下勝先生)、富岡西高校(松本一城先生)、徳島工業高校(伊原秀文先生)等でありました。昭和三十五年度の高校総体県予選は七月に加茂名中学体育館に十二校(男子のみ)が参加し勝敗を争いましたが、我が名西高校は準決勝で徳島農業高校を破り、決勝戦では鳴門高校に勝ち、優勝を勝ち取り全国大会出場を果たしました。又個人戦でも私と高瀬芳昌(徳農)の二名が出場することになりました。

全国大会は高知県が開催県でありました。団体戦の第一試合は九州学院(熊本県代表)であり、一対一から大将戦となり惜しくも二対一で敗戦となりました。個人戦では私は福山電波高校(広島県代表)の選手と対戦し、一対〇で敗戦となりました。団体戦のベスト

8のうち九州勢が五校残り、レベルの高さを見せつけられた大会でした。優勝は小牛田農林高校(宮城県)と記憶しております。

四国大会では一回戦は志度高校(香川県)に勝ち、二回戦では高松商業高校(香川県)に破れてしまいました。

幸いにして、私達が三年生の時は県下大会すべて名西高校が制覇し、後輩に引き継ぐことが出来ました。

名西高校が県下の頂点に立った最大の要因は、同じ部員仲間での強い競争心があった事、打倒徳農と言う大きな目標があったからこそハードな稽古にも耐えられたと思います。

卒業後四十年を経た今日、御指導頂いた先生方の多くは既に他界され、時の流れのむなしさを感じますが、中学生の私に剣道を、初めて手ほどきをして頂いた高橋静夫先生、稽古の厳しさを教えて頂いた高瀬嘉十郎先生、乾先生、そして正面から側面からバックアップしてくださった諸先生方との出会いがあり、どれ一つとっても忘れる事ができません。今もって剣道ができる喜びは何物にもかえられず感慨深いものがあります。これからもより多くの先生方、剣友との出会いができるよう自ら求め、命尽きるまで修業に励みたいと願っています。



私はだれでしょう

紀元 2600 年建国記念 1940 年  
檀原神社大会出場 S 15 年 12 歳 左から 2 人目



第 13 回 国民体育大会 (富山国体、庄川町)  
次鋒として出場 1958 年 (S 33 年) 30 歳 左から 1 人目



第23回全国教職員剣道士会 1981年（S56年）  
監督（53歳）左から3人目

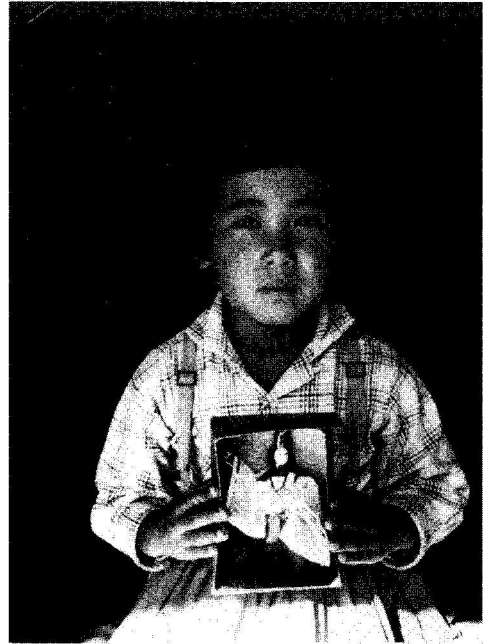
現在の私

細川昭典  
（72歳）





何歳ぐらいでしょうか？  
4、5歳かなア……



昭和27年10月撮影

小学1年生



小学2年生 左から3人目



現在の私、手塚十三子（45歳）です



# 全国講習会報告

## 剣道中央講習会（西日本）報告

阿波支部 佐藤吉邦



今回の西日本講習会は第三十五回となります。この講習会の趣旨は「各都道府県剣道連盟の中核的立場にある者の技能の向上を図るとともに、全剣連の決定事項を的確に連絡する。また、全国組織の剣道団体に対し、全剣連の決定事項を連絡する。」となっております。非常に重要な任務を受け持つ講習会に、徳島県から松村明文先生と私の二名が、的確に伝達できるかどうか先だつ不安を持ちながら、受講してまいりました。

日程は、去る四月十三日から十五日の日程で、神戸市立中央体育館で開催され、西日本各地から五十数名が受講いたしました。先ず最初に石原忠美先生より剣道講話があり、引き続き指導法は大坂の小林三留先生、審判法は広島島の熊本正先生、剣道形は京都の奥島快男先生の各講師の下で受講してまいりました。そして最終日には全剣連会長の武安義光先生の話があり、講習会を閉講致しました。

先ず最初に石原先生の話があり、講習会を閉講致しましたが、「不老の剣と攻



石原忠美先生による剣道講話

め打ち26ヶ条」という題目でお話しがあり、先生の実体験をもとに、体得されました貴重なお話しでした。

かいつまんで報告します。(話がつながらない部分がありますが)日本剣道形が石原先生におかれましては「不老の剣」として、非常に重きをなしているとの話でした。また剣道における老化は、肉体と剣道のバランスが崩れることである。無理にそれを取り返そうとすると、ますます老化を早めることになりかねない。この時期に大切なことは稽古を中断しないこと。急ぎ過ぎないこと。ゆっくり時間を掛けて、当たりを落とさないこと。 中省略

剣道で大切な「以心伝心」のところ、つまり攻めはこうですよ！呼吸はノ打つべき機会はノ気迫はノ重厚さはノ気位はノ迫真性はノ残心はこうですよ！と身をもって教え込まれ、それがあつたから現在があると感謝しています。また①呼吸法の工夫②すり足の活用③掛け声の省略④無駄の省略(遠間の攻め)をすることによって、今の私の剣道があるというお話しでした。以上が講話の概略の一部です。

引き続き、小林先生から指導法(理論・実技)を(十三日二時間、十四日二時間)受講してまいりました。「基本的事項」、「重点事項」につきましては昨年と変わっていないと言う事、補足として

① 技術以前……幼少年のしつけ問題、礼法、着装が乱れがちであるので、徹底指導をお願いしたい。また面紐の長さ四十センチと決まっていますが、高段者の先生方にも長い方がいらっしやるようです。気をつけていただきたい。

② 竹刀の操作……「刀の取り扱いにおける精神的要素を盛り込んで指導す」となって、おりますが、竹刀は日本刀の觀念で修業することが大事です。剣と言うことが、剣道の中心であつて、剣を除いたら剣道は成り立ちません。剣道理念に述べられているとおりで、

従いまして、竹刀も触れば切れる、真刀であり、自分の手足であるといった要素を盛り込んで指導していただきたい。そのほか、竹刀を跨いだり、杖にしたり、道具にしたりするような粗末な扱いを最近平気でやっていることが見受けられますので、こういったところの指導も十分やっていただきたい

③ 一足一刀の間合いから……面打ちを徹底してやっていただきたい。面打ちはすべての技の基本である。

④ 正しい鏝迫り合い……つば迫り合いについては、審判法との関連が非常にあるので、徹底指導をお願いしたい。

⑤ 剣道の理解……「心の問題についての認識を深め」、この文面が以前はなかった。現在心の問題が非常に叫ばれる時代と言う事で今年度から挿入されている。技術偏重になりがちな剣道ではなく、講話の中に心の問題も取り入れ、幅広い指導をやっていくことが大事であると言うことです。指導のあり方については「幼少年剣道指導要領」に詳しく載っていますので、則つて、指導をお願いしたい。

第二日目審判法(試合・審判規則説明・審判実技)について熊本先生より講習がありました。

まず、全剣連では各講習会で、剣道講話、指導法、審判法、剣道形と四本の柱で組み立てています。これは剣道の正しい伝承と指導者の育成あるいは振興を目的としたねらいがあります。

そして、全剣連の考え方が、中央講習会、そして各地区の講習会で伝達されているのです。

中略……この経過の中にあつて、社会あるいは剣道の流れの中で、時代にあつたような改正がなされてきています。その中で試合・審判規則として変わらないものがあります。また、変わってはいけないものがあると思います。

競技性という面からとらえますと①公平性②安全性③武道性④教育性⑤競技力の向上の五つが大きな基になつて決められていると思います。

武道性……武道としての剣道 刃筋とか打突部位のこと、

教育性……礼法など 公平性、安全性、競技力についてはお分かりになると思います。大幅改正から現在まで五年間経過しています。先細りの竹刀とか、物打ちの位置とか、重さなど規制を運用する間で、その都度改正されてきました。このたび新しくカーボネイト面が公認されました。(使いなさいではなく、使っても良いと言う事です。)まだ、普及が余りありません。それ以外の改正は今回ございません。

「重点事項」の中で「4・不当なツバ競り合いと別れの適正な運用」とありますが、前回は「不当なツバ競り合い」と「別れの適正な運用」と二項目でしたが同一項目になりました。これは一体のも

のであるとして考えを統一しました。それ以外変わっていません。反則と有効打突について考えてみたいと思います。剣道は本来「打つ」、「突く」、「捌く」、であると思います。勝敗が決まるのは「打つ」、「突く」であります。

反則が勝負を決するのは、剣道の本質からいっていかがなものでしょうか？ 競技だからやむを得ないという一面もありますが、「打つ」、「突く」の有効打突で勝敗が決するのが本来の姿だと思えます。運用の仕方では剣道の姿が変わっていくということをご承知おき下さい。反則は指導面と関連してきますが、反則を厳しくすることは大切ですが、見極めることがより大切であります。

有効打突について考えてみたいと思います。

ネンリンピックのことでした。長年、剣道を修業され、非常に枯れた剣道をされ、枯れた技を出される先生がおられました。評価はゼロでありました。なぜかといいますと、若い審判員だったので、審判員は自分の今の剣道の有効打突の感覚で審判されている。当然取らなくてはいけない技なのですが、理由を聞けば、「打ちが軽い」とのことでした。女子の剣道においてもそういう面が言われています。有効打突を考えてみますと、規則第十二条に「有効打突とは……省略」

一つの決められた条件です。それを判断するのは審判員の先生方です。子供には子供の有効打突があるのではないだろうか、若い人には若い人の、女性には女性の、高齢者の方には高齢者の方の有効打突があつてしかるべきではないだろうか。ここに審判員の難しさ

があります。往々にして、審判員の任にあたる時、自分の現在只今の有効打突の基準で審判をしているのではないだろうか？

そうすると子供たちの有効打突が取れない。女性だから、高齢者だから「軽い軽い」でとれなくなる。

また、子供の試合において、「先生だから審判してやる」ということがあるのではないだろうか？子供の試合ほど、審判員は真剣に謙虚な気持ちで臨むべきである。何故かというと、子供には剣道の理合が分からないと言う事です。大人ならば、軽くても良い時機を打たれたならば納得しますが、子供はそうはいきません。有効打突には物理的な打突と、精神的な打突があります。物理的打突だけでは考えると、打ちがしっかりした十分な打ちでなければならぬ。そうになると、女性・高齢者の技は取りにくくなる。ですから、二つをうまく組み合わせさせて審判にあたる必要があるのではなからうか。こちら辺のさじ加減が、審判員の能力になってくるのではないでしようか。

熊本先生が今までに指導を受けられた中で、有効打突の目安・判断基準をいろいろと考えたことを披露して下さいました。

有効打突の七則、一、打つべき機会に打つ 二、打つべき間合いから打つ 三、打つべき箇所を打つ 四、打つべき気力で打つ 五、打つべき姿勢で打つ 六、打つべき剣技で打つ 七、打つべき呼吸で打つ

審判員としてどうするか！先ず自分の経験則、体得したもので判断する。そして、加えて音で聴き・目で見る事が大きな条件にな

らうかと思えます。そのためには審判員は常に二等辺三角形の位置を、常に見える位置にいるのが基本です。

それを剣道の理論の中にあてはめてみますと、「一眼・二足・三胆・四力」の教えがありますが、「一眼」は有効打突を正しく見てやる。「二足」は正しく見るためには正しい位置に常に足を運ぶ、「三胆」は何物にも侵されない不動心の気持ち、「四力」は正しい修練から身についた技で判断する事だと思えます。

剣道を良くするために、試合・審判規則が非常に大切なんだと言う事をご理解して頂いて、正しい剣道の発展にご尽力を賜りますようお願い申し上げます。と、締めくくられました。

日本剣道形(三日目)については、奥島先生のご指導のもと受講してまいりました。全く内容は変わっていません。

資料としましては、奥島先生の経験をもとに、解説書には書かれていないことを少し加味しました。指導される場合に参考にしていただければありがたいとのことでした。

#### 一般的注意点

- 一 抜きあわせた刀身の交差は、横手とする。
- 二 「剣先を下げる」とは、構えを解くことで、自然に。
- 三 五歩引くときは、最後の右足を引き付けること。
- 四 「機を見て」とは、「兆しを見て」という意味。
- 五 相手から目が離れるのは、七本目に打太刀が仕太刀の正面に打ち込む一瞬だけ。
- 六 小太刀の「半身の構え」の時、肩は一直線にならない。
- 七 小太刀の「入身」は攻めである。
- 八 小太刀は腕の延長と思うこと。

	打太刀	仕太刀
太 刀 の 目	四本目 相打ちから相中段になるまでの鐺の削り方。仕太刀の刀の棟を擦り込む。前かがりと、刀のやや左への流れ。	“同左” 突くはなを巻き返す時の手の内の作用。支えを外すように。
	五本目 柔らかく、一本目との違いを理解し、刀の切れを利用して摺り上げられた後の刃の返りが仕太刀を生かす。	頭上に摺り上げるように。
	六本目 押さえ切れずに上段に変化するが、なお攻められ直ちに中段となる。攻め続けられて出小手を打つように。	三歩進みながら、攻めが始まっていること。間が接してからの、剣先の攻めの方向が後の動作を左右する。緩めず攻め続けて、「待っていた」とばかりに、手の内の冴えで摺り上げる。
形 の 目	七本目 真っ直ぐの面で、振りかぶった時点から発声を大きく、やや長めに。素早く仕太刀を振り返る。	右足を小さく右斜め前に移動する時、上体をそのままにして手の動作を起こし、右足を出す時、胴の右半分を打ち、手の内を柔らかく、すれ違うようにして、左足の右前に右膝を突く。流れる如く、終始目が離れず、最初の刀の角度を維持して、鐺を落とすようにすると良い。 残心をとった後、右膝を軸として、打太刀に向かって左右の足を平行に向けながら剣先を交える。
	八本目 引き上げるように大きく後に引く。	

	打太刀	仕太刀
太 刀 の 目	一本目 柄もろとも、豊かさをもって大きく。残心の効果を引き出すのは、打太刀の気である(二本目以降も同じ)。一本目の出来が重要である事を自覚すること。	残心は、そのまま切り下ろす気迫で。
	二本目 真っ直ぐ、小手の幅だけを切り落とす。	刀を下げながら左斜め後ろに下がる動作の時に剣先は中心線から外れない。その時に自然にできる刀の軌跡が半円である。真っ直ぐに切り下ろし、残心はそのまま突く気迫をもって。
	三本目	突き返しから位詰めに至るまでの間にある意味を知る。

	打太刀	仕太刀
小 太 刀 の 目	一本目 入り身になるうとするはなを打ち込む。	三歩進んだ続きが、攻め(入身)となる。  指を緩める。頭より上で体さばきを伴って受け流す。
	二本目 このままでは、攻め入られるので、立て直そうとするが、なお攻められて脇構えに開く。  このとき、剣先が上がらないこと。	小太刀で制する形をはっきりと示し、すかさず攻め込む。この形をはっきりと示すことによって、この形が生きる。
	三本目 半身の構えから、入身になるところを捉える。  大きく、やや横から。	摺り上げ、擦り落としが、はっきりとできること。擦り落とした小太刀の剣先が生きていること。そのままの刀の向きで、腰の切れで擦り流し、すかさず手を返して擦り込む。擦り込む瞬間の時に、制しが効く方向があることを知り、その一点で制したことを利して鐺元に押さえ入る。

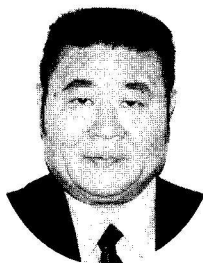
以上が抜粋した伝達講習会の内容ですが、資料に記載された分などは県剣道連盟伝達講習会で配布した剣道講習会資料でお読みいただけたりと思います。後になりましたが今回初めての試みで参加しやすく、又、広範囲に伝達するために、徳島県下を三ブロックに分けて実施いたしました。

西部は大石先生、南部は北条先生にご苦労かけ多くの先生方に参加して頂きましてありがとうございます。当日は、お聞き苦しい点、等あったと思いますが、ご了承の程お願い申し上げます。

以上で伝達講習会の報告とさせていただきます。

## 第二十七回居合道 中央講習会に参加して

居合道部長 原 田 勝



平成十二年九月九日(土)から十日(日)にかけて京都市武道センターに於いて、平成十二年度の居合道中央講習会が開催され、本県からは、平尾勝美先生と私・原田勝の二名が参加させて頂きました。

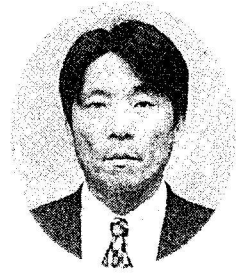
この講習会は伝達講習会を条件とし、各都道府県剣連において中核となる指導的立場の者を対象に行われるもので、その内容は、全剣連居合の正確な普及と、審判員としての心構えに加えて、審判実技の講習に重点を置き、全国統一された正確な技能の向上を図ることを目的としたもので、居合道六段以上(六段以上の資格者がいないときは五段を認めることがある)の者で各都道府県に帰り、責任を持って伝達講習のできる資格者でなければならぬとされており、その責任は重大であります。

特に、今年は今までの全剣居合十本のうえに、平成十三年度より二本が追加されることになりました。その趣旨については、現在の全剣連居合は制定三十年を経過し、居合道の発展に成果を上げてきました。世紀の変わり目にあたり、さらに内容の充実を図り今まで

以上に剣居一体の実をあげるため、剣の理法に基づき心気力一致を目指して、呼吸の仕方や、手の内の修練を図り、さらにより多くの人々が居合道に親しみ易く実施しやすい技を追加することにより、居合道の向上に努めるとともに、剣道人にも愛され、特に刀の操方に習熟できるよう二本の追加をすることにしたものです。追加二本を含め技の解説を大阪の範士九段福田一男先生が行い、模範実技を、大分の範士九段河村好雄先生が行われました。午後は各段に別れて、居合道委員の範士の先生方が実技指導にあたられて五時まで繰り返し稽古を行いました。

二日目は大分の範士九段河村好雄先生による居合道試合、審判規則等の解説がありその後、大阪の範士八段池田晃雄先生による審判員としての心構えと、審判実技を通して勝敗の判定基準、審判を行う上での着眼点の説明ならびに宣告、旗の表示要領についての説明を受けた後に交代で審判実技を行いました。午後は各流派に別れて古流の研究会となり、同じ流派であってもいろいろな理合がある事も良く分かり大変良い勉強になりました。受講者は百二名であり、年々全剣連居合が普及統一され、大変良くなったことは喜ばしい事だと思います。

帰県後の九月十七日石井町勤労者体育センターに於いて伝達講習会を行い、平尾先生が解説を行い、私が実技を担当して全てを伝達しましたが、受講者は昨年より十四名多い三十六名であり、本県居合道も少しずつではあるが前進しつつあると実感しながら無事伝達講習を終了しました。



徳島支部

松村 和宏

### 第三十八回剣道 中堅剣士講習会に参加して

平成十二年六月十四日、十八日までの五日間、柳生正木坂道場にて講習会がありました。西日本より二十八名が参加、十四日十六時集合、全日本剣道連盟の小林様から事務連絡の後、開講式が始まりました。全剣道連常任理事の園田先生他、児嶋、熊本、加藤、古田、川本、上垣、松井の各先生方で、参加研修生はほとんどは警察、教員です。実業団の参加は一部でした。柳生に来たくてもなかなか選ばれないのが実状で、この研修に参加出来る事は名誉な事と受け止めている人がほとんどでした。私は他県の人の話を聞いて初めて此処に参加させて貰えた事が良かったと感じました。

開講式の後、三班に別れ、年齢の高い人が班長、一番年下の人が副班長となり、役割分担をしました。講師先生のお世話係、トイレと庭掃除、道場の掃除と一日交代でした。家でほうきや雑巾等持った事のない私は良い勉強の場にさせて頂きました。私は車で行ったものですから、夕食時の講師先生の送迎をさせて頂いたのですが、最初是要領が解らず、初日は入浴も出来ませんでした。

松井先生に「松村ちよつと来い」と声を掛けられ、何を言われるのかと子供の様にびくびくしながら行くと、「堀江先生、藤本理事

長元気にしてますか」と聞かれ、「私は、徳島出身です。道場での稽古は厳しいから最後まで気を抜かず怪我のない様頑張ってください。」と<sup>ねがひ</sup>芳いのお言葉を頂き、気持ちちが和みました。

毎日の稽古は、決して私にとって楽なものではなく、基本打ち練習、切り返し連続三十秒打ち、打ち込み及び掛かり稽古等、剣道形の講習、審判法実技内容は研修生同士が練習試合をしてそれに基つき講習がありました。スポーツ医学について剣道と関係のある整形外科的疾患の最新治療について等、大変勉強になりました。毎朝三十分の座禅と朝食前一時間の朝稽古も普段では味わえ無い緊張の間でした。

柳生での五日間、世間の煩わしさから逃れ、テレビ、ラジオさえ無く全く社会で何が起きているのか何の情報も入って来ないので。この様な時間が持てた事すら、今の私達には、無い空間の様に思いました。

三十八期生全員で話し合い、道場に研修生の名前を刻んだ置き時計と、講師先生方に三十八期生が名を付けた「実和会」と刺繍した袴を贈らせて頂きました。修了証書を頂き記念写真を撮り、「実和会」が五月に京都に集合し、稽古が出来る事を約束し解散となりました。

研修内容を詳しく書きたいのですが長くなりますので書けません。この研修に参加し、私は色んな面で勉強させて頂きました。剣道だけではなく色々な事に目を向け、視野を広げていければと思います。講習会参加の機会を与えて下さった堀江先生、藤本理事長に

は大変有難く思っております。今後、柳生道場へ研修参加される方は、前もって下見がてら柳生の里を観光すると良いと思います。私も研修の一ヶ月前下見に行つて来ました。五日間は長いかと思われませんが、決して無駄には成らない意義深いものです。



# 徳島の剣道史

## 貫心流剣術の道統

剣道史担当理事

坂本裕二

はじめに



貫心流剣術は藩制時代阿波で最も盛んに行われた剣術である。この流儀の遠祖は源九郎義経といわれ、流祖は宍戸家俊司箭で芸州広島で発展した。

戦国時代の末、家俊は伊予の河野大蔵通昭に伝えたが、河野家は豊臣秀吉との

戦いに破れ築山と改名したので、その後義経伝来の秘術『心勝心利之形法』の奥義は築山家が伝承した。その後文化年間（一八〇四〜一七）築山嘉平通欽に師事した阿波の浪人細六郎義知に伝え、細家三代が伝承した。明治元年（一八六九）細致義の時、芸州広島藩は剣術を貫心流に統一して御家流とし、細六郎致義を唯一の師家とした。

一方阿波においては、元禄年間（一六八八〜一七〇三）芸州から阿波に來た溝口甚五右衛門（鉄柱無端）は多くの門弟を教導した。

この門弟たちは各地で活躍して、幕末期には最大の流派となり、明治、大正から昭和の初期にかけての剣術は貫心流の流れを汲む剣道家が中核となった。

今ここに貫心流の道統と、これを担った人物像を探索して、貫心流剣術の体系を明らかにする。

### 一、芸州広島貫心流剣術の道統

源九郎判官義経は鞍馬山で多聞天に祈り『心勝心利之形法』の兵法を授けられた。その後、義経は弁慶らを従えて、奥州に下った。この時藤原秀衡は家臣由利忠太正之に命じて、義経を護らせた。そして義経は正之に秘伝の兵法を伝授し、由利家はこの兵法を一子相伝の秘法として長く受け継いだ。戦国時代に入り永禄元年（一五五八）由利正俊は戦いに破れて毛利家の本拠芸州高田郡吉田に來住した。

#### 宍戸家俊司箭について

源頼朝の末弟知家の四男家正は常陸国宍戸の庄を領し、ここに住し、姓を宍戸と称した。その四代の後裔朝家は元弘三年（一三三三）足利尊氏に従い、六波羅の攻略に参加し、その功により芸州甲立庄を賜った。その後裔五龍城主宍戸元家の三男家俊は幼少から武を好み、一を知れば十を悟る英俊で、武芸の達人であった。由利正俊は彼を見込んで、由利家の秘伝の兵法を家俊に伝授した。その後、家俊は元龜元年（一七五〇）四月四日愛宕山に住みこの秘法を伊予の河野大蔵通昭に伝えた。

通昭は天正十一年（一五八三）七月、豊臣秀吉の四国征伐に破れて、予州を明け渡し、芸州竹原に隠棲し、姓を築山と改めた。

以後、築山家が伝来の兵法を継承した。築山依通の時、この兵法を貫心流剣術および司箭流薙刀を体系化して初めて公に教導した。

この依通の門弟鉄柱無端(溝口甚五右衛門)は阿波に来て貫心流剣術を各地に広めた。依通の三代後裔通欽は有名な頼山陽とその子与一の剣術師匠であり、また阿波から広島に修行に行った細六郎義知の師匠でもあった。

源九郎義経——由利忠太正之——由利藤太正清——数代不明

「由利刑部正俊——宍戸家俊司箭——河野大藏通昭」

「築山斎通清——築山主水通護——築山五郎太夫通有」

「築山斎依通——築山斎嘉平通標——築山文五郎通衡」

「鉄柱無端(溝口甚五右衛門)」

「築山嘉平通欽——細六郎義知——細六郎義為」

「頼山陽——頼与一」

「細六郎致義——細容造」

「細亀之助」

「細家の当主は兵庫県住」

細三代

イ 細六郎義知

細六郎義知は阿州那賀郡楡淵村郷高取糸田川藤助の従弟で延享三年(一七四六)に生まれ、十三才の時から剣術を学び、二十五才で伊賀役五人扶持十六石小沢長作から免許された。明和年間(一七六四〜七二)に諸国武者修業に旅立ち、江戸で居住、文化二年(一八〇五)芸州広島に行き築山嘉平通欽に師事して、同六年六十五才の時伴義為と共に印可状を授かり、同年讃州金毘羅宮と安芸宮島の千

疊閣に木刀・木薙刀の武道額を奉納した。義知は文政五年(一八二二)死去、広島市薬研堀禅昌寺に葬る。

ロ 細六郎義為

細六郎義為は幼名友吉、号は呑空、天明六年、(一七八六)阿波で生まれた。

文化四年(一八〇七)二十一才の時父と広島に行き、同六年二十三才の時通欽より印可を授かり、一時広島を離れていたが同九年(一八一二)再び広島に来て、同十一年に広島に定住を願い出て許可された。文政二年(一八一九)五人扶持を給せられ、文政十二年(一八二九)切米八石三人扶持、御歩行仰せられ、天保十三年、十四年(一八四二〜三)大広間の庭でその剣技を藩主に閲覧された。嘉永七年(一八五四)七十二才で没し広島市薬研堀禅昌寺に葬る。

ハ 細六郎致義

細六郎致義は義為の子で文政元年(一八一八)生まれ、弥右衛門といい、号は鉄腸斎という。天保十四年(一八四三)三人扶持御歩行となり、嘉永六年(一八五三)切米八石賜った。嘉永七年式石加増され、安政二年(一八五五)度々藩主に剣術を閲覧された。

安政三年、弟亀之進と三人扶持を与えられた。この年、弟と江戸神道無念流斎藤弥九郎の錬兵館の門に入り、その奥義を極めた。翌四年帰国し、同年六月御左右歩行小姓役仰せ付けられ、役料三石を賜った。

この年、阿波の山根政雄(戸籍名)(通称名・正雄)は十七才の時武者修業に来て、致義に親炙した。明治元年(一八六八)広島藩

の剣術は貫心流、一流儀とし師範は細致義のみと定めた。明治二年十月禄二十五石中士に昇格した。明治四年（一八七一）九月死去、享年五十三才、禅昌寺に葬る。

以上が芸州広島における貫心流剣術の道統である。

## 二、阿波における貫心流剣術の道統

築山齋依通に師事した前万里小路大納言雅房の四男溝口甚五右衛門（鉄柱無端）は若年から武を好み諸国を周遊して十一の流儀を学び、最後は芸州の築山依通に師事して貫心流の奥義を極め、元禄年間（一六八八〜一七〇三）、徳島市の眉山南麓仏日山竹林院永明寺に来て門弟を教えた。（以下、溝口甚五右衛門を無端と書く）無端は宝永元年（一七〇四）八月十四日没した。芸州より阿波に来て指南した期間は十年余でなかるうか。その間優秀な門人多数を育成した。その中で主な門人は柿原重次郎、辻理左衛門、宮嶋嘉助、玉置常左衛門近正などである。以下この四人について記述する。

### 一、柿原重次郎

柿原重次郎は無端の縁者といわれ、芸州広島で無端から免許を授与されている。恐らくは広島から伴って来た門弟でなかるうか。重次郎は鉄炮小頭湯浅四兵衛を教導した。湯浅は鉄炮小頭新山茂一左衛門を、新山は銀札場手代木村裕作を教えた。

無端——柿原重次郎——湯浅四兵衛——新山茂一左衛門——

木村裕作

### 二、辻理左衛門

四人扶持十一石辻理左衛門は倅平次兵衛、弟武左衛門及び林御奉

行四人扶持十二石稻井七五郎を指南した。平次兵衛はまた板野郡大寺村小高取福家為左衛門の弟福家周平、天野理八らを指南した。福家の後裔は大寺村方面でその師家となる。

無端——辻理左衛門——辻平次兵衛——福家周平——

天野理八

辻武左衛門

稻井七五郎

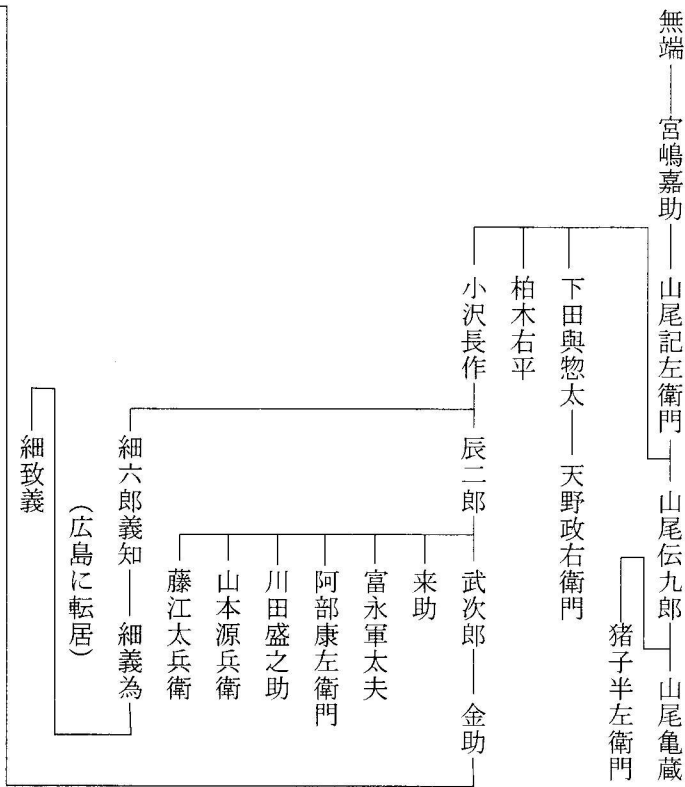
### 三、宮嶋嘉助

阿波の浪人宮嶋嘉助は五人扶持十三石小姓格山尾記左衛門を教導した。記左衛門は倅伝九郎及び御武具櫓奉行四人扶持八石下田與惣太、喜三太様小姓格柏木右平、伊賀役五人扶持十六石小沢長作を指南した。伝九郎は倅山尾亀藏および蜂須賀駿河家臣猪子半作衛門を教導した。

小沢長作は倅小沢辰之助を指導する。小沢辰之助は倅小沢武次郎をはじめ板野郡奥野村百姓来助、富田屋敷目付四人扶持八石富永軍太夫、西尾重右衛門家来阿部康左衛門、渡辺慶右衛門の家来川田盛之助、蜂須賀大和家来山本源兵衛、御目付裁判御弓之者藤江太兵衛を教導した。

小沢武次郎は享和三年（一八〇三）無端百年遠忌に門人らと計り藩の儒者柴野碧海の銘文を刻した石灯籠二基を墓前に建立して盛大な追悼法要を行った。この時、藩の中老格船手頭高千六百石森甚太夫と大小姓格五人扶持十石柏木右平も共同で石灯籠一基を寄進した。現在竹林院に無端の墓は見当たらないが本堂の正面に二基と左

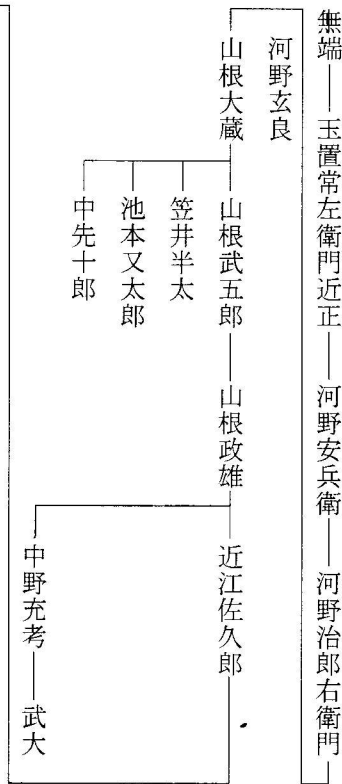
横に一基がある。小沢武次郎の倅金助は父の跡を継承し、明治二年（一八六九）藩が長久館を西の丸に建設した時、剣術の教授となり、多くの藩士を教えた。また原士の江東貫一、同高見良正、同江東一左衛門、その他一般人も教えた。



四、玉置常左衛門近正

藩士日帳格玉置常左衛門近正は家老池田登の家来、河野安兵衛を教えた。安兵衛は倅治郎右衛門を、治郎右衛門は倅玄良を教え、三代続いて師家を継承した。治郎右衛門の門弟が山根大蔵である。山根家は名西郡関の山口作十郎を祖とするが、作十郎は玉置常左衛門近正の弟子佐藤忠右衛門俊信に親炙する。

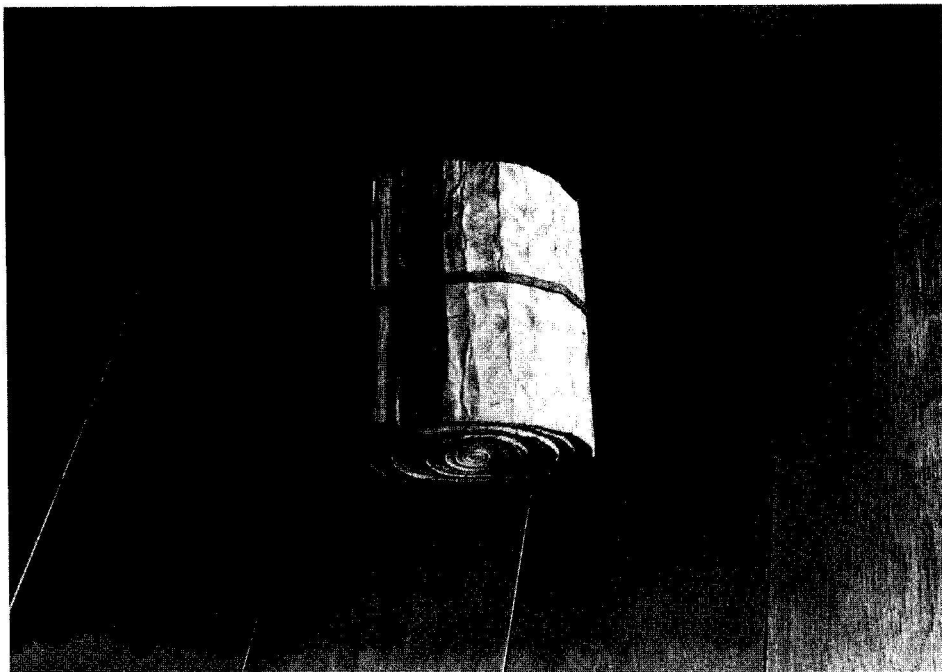
山根大蔵は倅武五郎を、武五郎は倅政雄を教え、山根家は川島の稲田家臣杉山家の出自で、家老稲田家に仕え、主にその家臣を教導した。



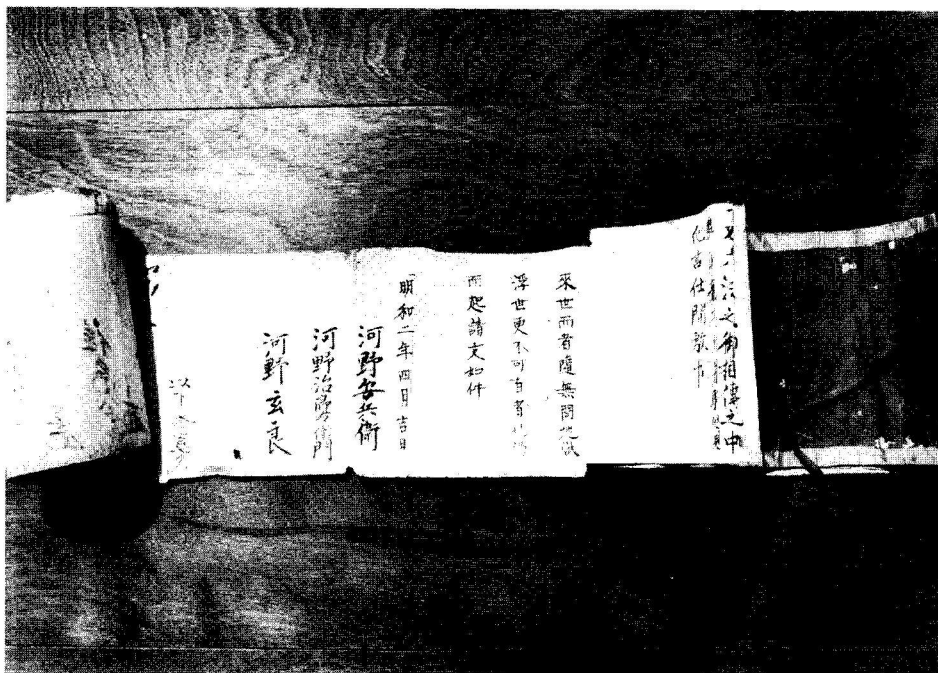
玉置常左衛門近正は原士七条家の家臣の佐藤忠右衛門俊信を教導した。俊信は同忠左衛門信行を教え、信行は同常右衛門信矩を指南した。信矩は同忠右衛門正信を教え、正信は同兵八郎信行を教導して五代続いて師家を継承した。四代同忠右衛門正信は阿波藩家老賀嶋家の招聘を受け、富岡で幕末から明治三十年頃まで賀嶋家の家臣や一般人を教えた。明治三十四年八月六日没す。



河野師家の起請文中 文化6年(1804)に山根大蔵正満が記載



明和二年(1765)より文政四年(1821)間56年門人307名  
河野安兵衛、治郎右衛門、玄良、三代貫心流剣術師家起請文 長さ20m×巾0.14m



起請文 明和二年（1765）より文政四年（1821）までの門人 307 名記載

無端——玉置常佐衛門近正——佐藤忠右衛門俊信

七條弥藤治

佐藤忠左衛門信行——佐藤常右衛門信矩——佐藤忠右衛門正信

山口作十郎

佐藤兵八郎信行——

佐藤師家は代々麻植郡麻植塚村（現鴨島町）で居住していたので川真田一統、西麻植の郡一統、同じく笠井一統に門弟が多い。佐藤家の菩提寺は鴨島町麻植塚の西円寺で墓は向麻山西端の墓地にあり、四代正信の墓は阿南市富岡町石塚景德寺にある。

#### 阿波の貫心流剣術の伝播の状況

寛政元年（一七八九）阿波藩で行なわれていた剣術の流儀と指南者を幕府に報告した蜂須賀文書『武芸指南面々名目伝来控帖』によると

貫心流十八名	関口流	九名	浅山一伝流四名
円一流 二名	伯耆流	三名	頭軍流 三名
田宮流 二名	無尽流	三名	南波流 一名
天真流 一名	心形刀流三名		新陰流 四名
直指流 二名	丹石流 一名		

当時十四流儀の剣術が行なわれ、五十八名の指南者のうち、貫心流は十八名で他の流儀に比べ圧倒的に多い。これは如何に貫心流剣術が普及発展していたかを示すものである。



享和元年（一八〇一）四月十日卒  
佐藤忠右衛門信行之墓  
心空無外居士



文政十三（一八三〇）十月二十五日卒  
志道貫善居士 佐藤常右衛門信矩之墓  
日笠綱三郎 日笠綱三郎  
武知文四郎 福田栄市郎  
野口清左衛門 河野民之助

明治三十六年（一九〇三）九月十二日卒  
佐藤兵八郎先生之墓



さらに十八名の系統を調査してみるとほとんどが無端に親炙した弟子たちの系統である。これは無端が偉大な指導者であったことを物語るものでなかるうか。

### おわりに

芸州広島ならびに阿波における貫心流剣術の道統の概略を記したが、貫心流剣術は他の流派のように技の目録が無いため具体的にその内容を知ることが出来ない。今後何らかの方法で明らかにする必要がある。

次に阿波で貫心流剣術が発展したのは、無端の技群の指導力とその系統の弟子たちの尽力によることは言を揆たないが、伊予河野一族が豊臣秀吉に破れて四散した時、阿波の各地に来て土着した。この一族が貫心流、或いは司箭流武術をもたらし、伝播してこれが基盤となって貫心流剣術が他の流派よりも隆盛を極めたのではなかるうか。

### あとがき

貫心流宗家宍戸家

宍戸家は毛利氏が関ヶ原戦慶長五年（一六〇〇）に破れ、周防、長門に滅封され、芸州から萩に移った時、牟礼（防府）を領有し毛利一門の筆頭家臣となった。その後寛永二年（一六二五）知行替えがあり、周防熊毛郡三丘の領主となった。宍戸家は代々貫心流剣術を御家流とした。特に八代宍戸就年は文化六年（一八〇九）学校徳

修館を創立して文武両道を奨励し全盛を極め幕末まで続いたが、明治初年師範山脇延衛孝徳が没した後、衰微の一途をたどった。旧男爵宍戸家は流儀の滅亡するのを憂えて昭和十三年（一九三八）当時貫心流正伝保持者阿波の近江佐久郎のもとに三丘の剣士原田侃、山本一郎を派遣して技を習得させ、その復興と保持を計った。

阿波の細六郎義知は文化二年（一八〇五）に、山根正雄は十七歳の時安政四年（一八五七）に、近江佐久郎は十六歳の明治十九年（一八八六）にそれぞれ貫心流剣術の発祥地広島に武者修業に行き、宗家宍戸家に立ち寄った。これは貫心流武芸の正伝を得るため行ったと言われている。以上

#### 主な参考文献

- 国史大辞典
- 日本剣道史
- 徳島藩士譜
- 「憲政元年武芸指南面々芸名名目伝来」控  
蜂須賀文書
- 貫心流司箭流の研究  
広島憲廿日市高等学校  
森本邦生著



防防口（山口県）熊毛郡三丘<sup>ミツマ</sup>の旧男爵宍戸邸

# 支部だより

麻植支部長 植田 一夫

麻植支部の成立と現況についてお知らせ  
します。

第二次世界大戦後、連合国軍総司令部が全面的に禁止を考えていた社会人剣道は、昭和二十三年ごろから復活の兆しが見え始め、麻植郡内でも昭和二十六年末ごろから鴨島・川田両町有志によって稽古がおこなわれだしました。

昭和二十七年九月、名西郡浦庄村出身の宮本仁平教士が川島町に住居を構えられたことを契機に、両町の有志は川島警察署の道場で指導を受けるようになりました。そのころから、剣道の地域振興を図るために麻植支部結成の機運が起り、同好有志が協議し、郡内町村長に協力を要請しました。会長には川島町長を、その他町村長を顧問に、宮本教士を支部長に選出して、昭和二

十八年二月、徳島県剣道連盟麻植支部が発足しました。

また、連合国軍総司令部によって禁止されていた学校剣道は、昭和二十七年四月に学校体育として解禁され、県内高等学校にもクラブ活動に取り入れる学校が出てきました。支部では、郡内の剣道振興策として、県下高等学校対抗剣道大会を計画し、郡内町村長の協力で優勝旗を作り、昭和三十一年十月、支部主催第一回県下高等学校対抗剣道大会を川島高校体育館で開催しました。この大会は、その後連続して第九回まで開催されましたが、大会開催にあたって多くの困難が生じ、その後自然消滅となりました。しかし、この大会の実施は、剣道普及に大きな貢献を果たしました。

社会人剣道の復活とともに、少年剣道も次第に盛んになりました。昭和三十年代前半までは、施設の老朽化で練習場の確保に苦勞しておりました。しかし、その後、体育館などの建設が進み、練習場の確保が容易に成りました。鴨島町に於いては、当時

剣道錬士の平尾勝美先生が麻植支部副支部

長として、宮本先生共に鴨島剣道クラブを結成し、町内外の剣士諸氏とともに旧公民館に於いて稽古を始めました。山川町では、昭和四十一年にスポーツ少年団剣道部が結成され、同年より山川少年剣道大会が開催されるようになりました。

続いて、昭和四十九年には少年の剣道志向にこたえ、鴨島町少年剣道教室が開催され、同年より同じく鴨島少年剣道大会が開催されるようになりました。この山川少年剣道大会と鴨島少年大会は、昭和五十七年から山川・鴨島両町交互に開催するようになり、現在に至っています。なお、鴨島少年剣道大会は、平成六年より平尾杯争奪県下少年剣道鴨島大会と改称されました。また、川島町で、昭和五十八年に川島小学校スポーツ少年団剣道部が開設され、現在に至っています。

居合道においては、昭和四十三年、居合道徹心道場が創設され、平尾勝美先生が指導に当たり居合道の普及に努めました。昭和五十五年には門下生の段位合計が百段を数える発展をし、現在に到っています。目

下、一般二十七名、少年部は四十一名となり特に少年部の発展はめざましいものがあります。

次に、現在の支部の状況ですが、段位保有者五十五名、会員は二十二名で、上記の山川町・川島町・鴨島町の少年剣道教室を核として活動しています。支部内にある少年剣道教室の現況は、次のとおりです。

・山川スポーツ少年団修練館

指導者代表 植田一夫（剣道教士六段）

稽古日（月・水・土）常時参加者二十七人

・川島小学校スポーツ少年団剣道部

指導者代表 前坂政義（剣道四段）

稽古日（火・土）常時参加者十人

・鴨島剣道教室

指導者代表 笠井恵之（剣道錬士五段）

稽古日（火・木・土）常時参加者六十人

・無双直伝英信流居合道徹心道場

指導者代表 平尾勝美（居合道範士八段）

稽古日（月・水・金）常時参加者

少年部三十名

一般二十名

鳴門支部長

伊賀上 仙 市

鳴門支部は西より板野町、藍住町、松茂町に接し、北は海に面し、間近に兵庫県淡路島が目の前に見え、海峡には大渦潮が巻く所に位置しています。

当支部は、剣道教室が三教室に分かれてはいますが、各教室には、指導者として七段を筆頭に全員が有段者であり、剣道教室には先生方の日々地道な努力と自らの稽古と共に、青少年育成の為、ご指導頂いております。

支部の現状

現在、鳴門支部登録会員は、七段五名、六段二名、五段十五名、四段八名、三段七名、二段八名、初段二名、休会六名、計四十七名で構成されています。

各教室で自己を修練されている先生方の中で成果として、平成十二年五月三日、京都審査会に於いて藤本雅史先生が（現、事務局長）七段に昇段され、又、元木武先生も七段に昇段され、さらに、平成十二年十一月三十日、藤本雅史先生、竹内佳代子先生、伊賀上仙市が、錬士号取得されました。

又、都合上休会を、余儀なくされている先生も居ますが、少しでも早く復帰され、一緒に汗を流し、剣道の良さを話し合う日が来る事を祈るばかりであります。

当支部には明るいホットな話もあります。平成十二年五月二十一日、四国四県剣道大会が鳴門武道館に於いて開催されました。大会出場の中で、当支部会員の平野悦子先生（五段）が次鋒、七将に平野誠司先生（七段）が出場されました。両先生は、ご夫婦であり、この様な大会にご夫婦で出場されたと言う事はほほえましい事であり、先生の日々修練の結果の賜物であると私は、両人に拍手を贈り、今後も期待したいと思っております。

鳴門支部では毎週月曜日七時より八時三十分まで県鳴門運動公園武道場に於いて鳴門支部指定稽古日と定め日々練習に励み、自己の技術向上は言うに及ばず県剣道連盟の諸先生方のご来場を頂き、御指導と御鞭撻を賜ります様お願い申し上げます。

最後に、当支部会員の修練の場、剣道教室及び道場の概況を説明致します。

大麻錬成館 (大麻中学校武道場)	運動公園 (剣道教室)	鳴門市剣道場 (光武館)	道場名及び教室名
(土)(火) 毎週 PM6:30~7:30	(土)(水)(月) 毎週 PM3:30~5:00 PM6:00~7:30	(土)(木)(火) 毎週 PM6:30~8:30	稽古日及び時間
088-689-2641	088-685-4611	088-685-0703	連絡先
松本日出夫 近藤敏晴 藤本雅史	岡本茂 浅野精一 菱田晋 伊賀上仙市 元木武 木原資裕 佐藤勇	渡辺美保 福地加奈子 平野悦子 竹内佳代子 寺西明弘 寺西慶裕	指導者
五段	五段 五段 五段 六段 七段 七段 七段	二段 三段 五段 六段 五段 七段	段位

# 各種大会に参加して

## 第二十二回

### 全国スポーツ少年団 剣道交流大会に出場して

監督 寺西明弘



平成十二年三月二十八日、「まもなく、新千歳空港に着陸します。」の機内アナウンスとともに、

窓の外を見下ろせば辺りは白銀の世界、選手達には、無心で大会に臨もうと指示したものの、私にとっては、初めての北海道、初めての全国大会監督とすべてが初めて尽くしで不安と重圧に苛まれ、勝負へのこだわりを拭いきれなかった。

そんな気持ちのまま、平成十二年三月二

十九日（三十一日）、北海道立総合体育センターにて第二十二回全国スポーツ少年団剣道交流大会が開催されました。

本県では、昨年十二月六日、予選の結果団体戦（小学校）

監督 寺西明弘（鳴門市光武館）

先鋒 村井 僚（徳島至誠館）

次鋒 井口あすか（入田錬成会）

中堅 林 勇作（鳴門市光武館）

副将 島田 和佳（大野小学校）

大将 原 怜司（大野小学校）

個人戦（中学校）

男子 大石 真也（阿南第二中学校）

女子 寺西 由佳（鳴門第一中学校）

以上の皆さんが代表選手として選抜された。

代表選手が決まってからは、小学校を中心に月一、二度の合同練習を光武館で実施、当初はお互い知らない者が多かった為、私を含め、選手も何かぎこちない様子で心配した。

しかし、大会前には香川県代表チームや県下のチームと練習試合をし士気の向上に

つながるとともに、選手一人一人が県代表であるという自覚と活気に目覚めチームが一丸となって大会に臨むことができた。

ただ、中学生については、各個人に練習や調整方法をまかせた為、小学生の団体チームとは、大会当日まで交流することはできなかった。

その上、大石選手、寺西選手は共に三月二十五日（二十八日）の間、佐賀県で行なわれている、全国中学校神崎杯剣道大会に出場しているのが大会前日、佐賀県から北海道まで出向かなければいけないという強行日程であり、到着も深夜に及んだ為、疲労度を心配した。そんな心配をよそに大会当日を迎えることとなった。

第一日は開会式、団員基本練習、指導者研修、交歓会等の日程で、開会式の入場行進ではさすが全国大会、一人胸の鼓動と感無量の感激を覚えた。

指導者研修では、剣道の指導方法を詳しく講話していただき、今後の指導にプラスとなった。

基本練習では、林朗先生等、有名先生方

に元立ちとなつて稽古をつけていただき、選手達もかなり勉強になつたと思う。

交歓会では、各県の特産物等をゲーム方式で交換し、各県選手と交流を深めた。

第二日目。さていよいよ大会本番、予選リーグの始まりだ。予選リーグ一回戦、対戦相手は岩手県。先鋒村井選手はスムーズな足さばきで攻め、引き面を先取しそのまま一本勝ちしチームを上昇気流にのせ、負けじと井口選手、林選手とともに二本勝ちし、この時点でチームの勝利が決まつた。島田選手は緊張のあまり本来の動きができず、二本負けするも大将原選手が貫禄の二本勝ちで勝利を収めた。

予選リーグ二回戦、千葉県との対戦は井口選手が引き分けただけで、他の選手はすべて二本勝ちで圧勝した。二回戦に入る前、島田選手は一回戦で自分一人が負けたことを悔やんでいたが、チームが勝利したことや普段どおり無欲の試合をすればいいと指示したところ二回戦では本来の力を取り戻し二本勝ちを収めた。

予選リーグ圧勝で突破し、全予選リーグ

の中でも勝数8、取得本数15はトップであり、各チームから「徳島はどんなチームか」

「徳島は強い」等の声が聞こえてきた。

男子個人戦予選リーグ一回戦では、大石選手が素晴らしい引き胴と引き小手を決め幸先の良いスタートを切つたが二回戦では出小手を先取するも、遠征の疲れから足が止まつた瞬間、小手面に飛び込まれ、二本返されて予選リーグ突破はならなかつた。

しかし、大石選手の剣道は基本に忠実で出場選手全てを比べてもナンバー1といつても過言ではなく、将来有望な選手の一人として全国に印象つけたと思う。

女子個人戦予選リーグ一回戦では、私の娘寺西選手が勝ちたい気持ちが出過ぎ平常心が失われ、堅くなつていたためいつものスピードがなく、攻撃をするもかわされ引き分けてしまった。二回戦では、動きは寺西選手のほうがよかつたが、前に出た瞬間、後ろに下がつた瞬間に面を二本取られ予選リーグ突破はならなかつた。

予選リーグ一回戦

徳島県

岩手県

先鋒 村井 メ

次鋒 井口 ドコ

中堅 林 メメ

副将 島田

大将 原 メメ

予選リーグ二回戦

徳島県

千葉県

先鋒 村井 メメ

次鋒 井口

中堅 林 メド

副将 島田 コメ

大将 原 コメ

男子個人

大石(徳島) ドコ

大石(徳島) コ

女子個人

寺西(徳島) 引分

寺西(徳島) — メメ関

第三日目大会最終日、当初の目標である予選リーグ突破は達成できたが、気を引き締める意味でミーティング時に、「これで満

締める意味でミーティング時に、「これで満

足するな、君達の剣道は、十分全国に通用する、この好調を維持し、三位以内入賞を目標に頑張ろう。」と指示した。

試合前の練習では大石選手が率先垂範し号令を掛け、試合のない中学生の選手達が元立ちになって団体戦のメンバーを励まし指導してくれたことはありがたく、頭の下がる思いだった。

決勝トーナメント一回戦、対戦相手は予選リーグで強豪新潟、鹿兒島を破って立ち上がってきた奈良県、先鋒村井選手は相変わらず動きがよく相手に隙を与えず面を二本先取、次鋒井口選手は相手の手元が上がった瞬間小手を決め、面を返されるもすぐ小手を取り返し勝負を決めた。中堅林選手も得意の面を打とうと見せて小手に行きそれが見事に決まり二本勝ちを納め、この時点で準々決勝への進出が決定した。副将島田選手は昨日一回戦の動きが嘘のように小手を連取、大将原選手へと引き継いだ。原選手はチームの見事な勝ちっぷりを目の辺りにし、肩に力が入り本来の実力を出せぬまま二本負けした。

準々決勝の相手は岡山県、試合前、村井

選手が「松井選手と以前対戦し敗戦している

ので自信がない」と私に話していたが、

さすがここまで全勝の村井選手いざ試合開

始になると中心線を攻め攻撃するが、相手

選手もここまで立ち上がってきたチーム、

先に出小手を決められた。しかしすぐ小手

を返し引き分けとなった。次鋒井口選手は

積極果敢に攻め、得意の引き胴を仕掛ける

も不十分、逆に面を取られ負けてしまった。

中堅林選手はここまで相手に一本も与えず

すべて二本勝ちを納めている好調ぶりだけ

に期待がかかる。林選手は得意の小手で一

本先取するもすぐに小手を返されたが、勝

負の声とともに捨て身で面に飛び込み見事

に勝利を納めた。副将島田選手は負けまい

と果敢に攻めるも一本負け、期待の大将原

選手がもしここで二本勝ちすると本数勝ち、

「たのむぞ」と声を掛け試合に送り出すと、

開始早々面に飛び込み決まったかに見えた

が打突と同時に腕を引き上げてしまい旗一

本のみ、溜め息がもれるなか面、小手を先

決勝トーナメント一回戦

徳島県 奈良県

先鋒 村井 メメ | 篠原

次鋒 井口 メコ | メ 天野

中堅 林 ココ | | 横井

副将 島田 ココ | | 浅田

大将 原 | | メメ 田村

準々決勝

徳島県 岡山県

先鋒 村井 コ 引分 メ 松井

次鋒 井口 | | メ 植月

中堅 林 コメ | | コ 神原

副将 島田 | | メ 美浪

大将 原 | | メコ 佐藤

試合終了後、選手達の顔には悔しくて涙

する者、落胆し怒った表情の者、誰もが無

口になり、語ろうとはしなかった。

しかし、閉会式には気を取り直したかの

ようにサバサバした表情で「よい経験がで

きた」「自分の力を出しきった」と満足感を

もって臨んだ。

今大会を終了して私自身、他チームの大

ができたのだろうかと心配になり、悩み考  
えた。しかし最後の夜、ホテルで私の部屋  
を原、林両選手が訪ねてくれ、「先生、僕た  
ち将来警察官になりたいのでいろいろ教え  
て下さい。」と話しかけてくれた時は気持ち  
がやすらぐ思いでうれしかった。

今大会の結果は団体ベスト8、中学校個  
人戦は予選リーグ敗退だったが、選手達は  
徳島県代表として試合だけではなく礼儀、  
態度とも、申し分なく全国の印象に残った  
と思う。

最後に大会出場準備にあたって、遠藤一  
美先生、阿南支部、鳴門支部、出場選手が  
所属する各道場の先生方、また合同練習、  
練習試合でお世話になった光武館の保護者、  
本当に言葉では言い表せないくらいに御協  
力いただきありがとうございます。

今大会は開催地が北海道で選手の保護者  
にはかなり負担となったと思う。しかし選  
手達はもちろんのこと保護者の方もお金で  
は買えない貴重な感動の経験をしたと思う。

この経験を生かし、たとえ道が変わって  
も選手達は歩のごとく一步一步前進して全

ての面で活躍し飛躍してくれることを信じ、  
たくましく未来を切り拓いてくれることを  
祈念し、大会の報告とさせていただく。



## 第四十八回

# 全日本都道府県對抗 剣道優勝大会報告

監督 木原資裕

毎年、ゴールデンウィークの五月三日、憲法記念日にこの大会は、行われています。

戦後、全日本剣道連盟が発足した直後の昭和二十八年より、職業・年齢・段位等による区分で構成され、今回で四十八回目の実施ということになります。平成十年よりは女子二名の区分が加わり、七人戦となりました。以前より、各都道府県剣道連盟の総力により優勝を争う大会と言われています。

我が徳島県の代表選手は以下の通りであります。(区分条件)

先鋒・竈土 恵子(年齢十八歳以上三十歳未満の女子。高校生・大学生を除く。職業に制限なし。)

次鋒・佐藤 智(年齢十八歳以上三十歳未満の男子。警察職員・刑務職員・教職員・高

校生・大学生を除く。)

五将・平野 悦子(年齢三十歳以上の女子。職業に制限なし。)

中堅・玉田 晋作(教職員の男子。年齢に制限なし。)

三将・吉田 茂生(警察職員及び刑務職員  
の男子。年齢に制限なし。)

副将・白木 崇(年齢三十歳以上の男子。警察職員・刑務職員・教職員を除く。)

大将・近藤 亘(剣道教士七段以上の男子。年齢四十歳以上の者。)

組み合わせの連絡が、事務局より入った時、一回戦の相手はきびしいなどの思いがよぎりました。相手は、半年前の国体で総合優勝を飾っている熊本県です。しかし、勝負は一瞬。勝利の女神が微笑んでくれることを祈りながら、大会当日を迎えました。

〈先鋒戦〉竈土の相手は、三月に行なわれた世界選手権大会の日本代表選手の梅津、中盤までは、竈土の粘りと、時折みせる絶妙の引き面に日本代表の梅津をあわてさせ、だが、終盤にメンをとられ、取り返そうと出るところをコテに決められ、二本負け。

〈次鋒戦〉昨年まで、大阪体育大学で副主将を務め、厳しい稽古を積んできた佐藤の動きは軽快ではあるが、今ひとつ、相手をとらせることができず、引き分け。

〈五将戦〉平野は、小柄ではあるが、足さばきが絶妙であり、相手につけ入る隙を与えないで、終盤までもつれ込むが、勝負のメンに出たところを、身長に勝る相手が、上からメンにあわせ、これが一本となり、一本負け。引き分けに持ち込めるかと思える内容だけに残念。

〈中堅戦〉ここでは、ポイントを挽回したいところ、玉田は、初太刀、相手がコテにくるところを見事なコテ返しメンを決める。場内にどよめきが起ころほどの切れ味のあるすばらしい技であった。しかし、相手もさるもの、長身からの捨て身のメンが中盤と終盤にポイントとなり、逆転負け。初太刀の技が見事だっただけに、惜しまれる敗戦。

〈三将戦〉これまでのスコアは〇対三。もう後が無い。今年の全日本選手権へも徳島代表で出ている吉田、相手も熊本県警のイー

ス宮上、中盤、勝負をかけた吉田の相手を呼び込みながらの狙い澄ました飛び込みメンが決まったと思ったが、審判の旗はあがらず。この後、相手は無理をして、技を出してこず、時間切れ、引き分け。この時点で徳島の敗退が決定。

〈副将戦〉徳島の意地を見せたいところ、白木は中盤、相手の出ばなにコテを炸裂させ、その後も相手につけ入る隙を与えず、一本勝ち。

〈大将戦〉ここでも、近藤の気迫が相手を上回っているものの、相手が勝負をかけてこないため、技が決まらず、引き分け。

内容的には、スコア以上に接戦であり、国体優勝県を相手に徳島にも十分勝機はあったように思います。しかしながら、ここ数年、都道府県対抗では、こういった接戦をもののできていない現実があり、ここを克服する努力をしなければならぬと痛感しながら、会場を後にしました。

〈二回戦〉	徳島	竈土	佐藤	平野	玉田	吉田	白木	近藤	1(2)
		⊗ コ	⊗	⊗	⊗ メ メ	⊗	⊗		
	熊本	梅津	山本	平山	植田	宮上	堀田	松岡	3(5)



## 第五十二回 四国四県剣道大会

監督 堀 金 實



昭和二十四年

高松市で、第一  
回四国四県剣道

大会が開催され、

半世紀の歴史を

刻んだ二十世紀

最後の第五十二回四国四県剣道大会が平成十二年五月二十一日徳島県剣道連盟主管の元、挙行されました。思えば、本県選手団にとっては、平成八年鳴門武道館での第四十八回、翌年高松武道館での第四十九回大会と連続優勝という輝かしい戦歴を有するも、ここ二年程優勝の二文字から遠のき、悔しい思いをして来たが、今年こそは主管県として文句のない闘い内容で優勝して見せるという強い決意で選手は女子を始め各年齢層の錚々たるメンバーで選手団を編成

し、連盟の稽古日をはじめ、職場或いは支部の稽古日等で自主的に稽古を重ねる他、一泊合宿稽古を実施する等して全員が優勝を目標にして臨んだ大会でした。結果は苦しい試合もあったが選手の健闘により三戦三勝の成績で三年ぶりに四国の頂点に立つ事が出来ました。監督としては一戦一戦の試合毎に胸を締めつけられ様な思いがいたしました。

試合当日は、開会式後、範士八段大澤孝彰先生と教士七段坂下彦之両先生の日本剣道形の演武が行なわれた後、先鋒女子二名を含む十三人制の団体戦が二コートに分れ開始された。

第一戦は第二試合場で高知との戦い。

試合開始早々先鋒竈土選手は自分の身長を生かし攻めるも初戦とあってなかなかなく硬さが見られ技が決まらず引き分け、続く次鋒の平野選手がコテ一本を先取し、まず一勝と幸さい先よいスタートを切りましたが、その後が続かずその後一対一の同点となるも、七将平野選手が二本勝ち、続いて近藤、米倉の両選手の活躍で一気にリー

ドを広げさらに三将北條選手が二本勝ちをばたし、残りの試合を待たずして勝負を決し、先ず一勝をあげる事が出来ました。やはり初戦とあって硬さが見られた一戦でもあった。

第二戦は第一試合場での愛媛との対戦である。愛媛は初戦の香川戦で二対三の僅差で敗れているだけ徳島戦が起死回生の一戦でもあり、本県選手にとっては、絶対負けられない一戦となった。始め、宣告で試合開始となった。女子戦は先鋒次鋒とよく健闘するも引き分け、続く十一将戦は一本一本の勝負の末敗れ、続いて九将が二本負けと、前半六試合で勝者なし。その頃私の心の中おだやかでなく心臓の鼓動の高まりを感じ、不安が脳裏をかすめる状況下で、後半戦へと試合が進み、一回戦で活躍した平野選手が一勝したが、続く六将五将が引き分け、あと四試合を残した時点で一対二、勝ち本数二対四と戦況不利な状況で四将戦に突入し、米倉選手が鮮やかなメンを決め二対二の同点とするも、まだ本数負けの戦況で副将戦となり、中尾選手が得意の攻撃で

二本勝ちをし三対二と逆転し、大将戦を引き分け、最後でかろうじて勝利を収める事が出来たが、本当に苦しかったの一言につきる試合であった。

第三戦は昼食を挟んでの午後からの試合で、対戦相手は二勝し、勢いづいている香川との戦いで、この試合に勝った方が優勝という正に天王山の戦いである。選手自身に愛媛戦の緊張感が逆にいけるといふ自信に満ちた雰囲気を感じられ、試合が開始なるや予想にたがわず、先鋒竈土選手が立ち上がり早々コテを先取し一本勝ち。続く十一将前田選手がメンの一本勝ち、更に九将玉田選手が一本一本の勝負の末メンを決めて三対〇と差をつけた。その後引き分けが続く、五将の近藤選手がメン二本を決め一気に四対〇と形勢を優位にし、四将米倉選手が引き分け、この時点で徳島県の三年ぶりの優勝が決定した。結果的に四対一という試合内容で総ての試合が終了した。

かえりみまずと、大会直前に大将の川田先生が体調不良の為、急きよ松村先生と交代するというアクシデントもあったが、選

手全員が一致団結し、一人一人が持てる自分の力をその時その場で十分に発揮し、十三人の総力戦で優勝を勝ちとったものと思えます。監督として、選手の皆さんに苦勞さん、おつかれさんでしたと感謝を申し上げます。

又本大会に際し、堀江名誉会長、遠藤会長をはじめ連盟の諸先生方の物心両面に亘る暖かいご支援ご指導に対し心より御礼を申し上げ、二十一世紀冒頭開催される第五十三回大会への連勝を目標とし、選手の皆さんの更に精進される事をお願いし報告いたします。ありがとうございました。

合掌

### 第 52 回 四国四県剣道大会成績表

	香 川	愛 媛	高 知	徳 島	勝 数	勝者数	得本数	順 位
香 川		○ $\frac{5}{3}$	○ $\frac{7}{4}$	△ $\frac{3}{1}$	2	8	15	2
愛 媛	△ $\frac{3}{2}$		○ $\frac{9}{5}$	△ $\frac{5}{2}$	1	9	17	3
高 知	△ $\frac{2}{1}$	△ $\frac{6}{5}$		△ $\frac{1}{1}$	0	7	9	4
徳 島	○ $\frac{6}{4}$	○ $\frac{6}{3}$	○ $\frac{7}{5}$		3	12	19	1

徳島県	年令別	女子		20代		30代			40代			50代		60代	
	順位	監督	先鋒	次鋒	11将	10将	9将	8将	7将	6将	5将	4将	3将	副将	大将
	氏名	堀金 實	竈土恵子	平野悦子	前田秀一	山室雅幹	玉田晋作	白木 崇	平野誠司	福多雅英	近藤 亘	米倉 滋	北條憲治	中尾正輝	松村克隆
	年令段位	75	19	35	25	26	34	35	35	40	45	45	53	57	62
	職業	無職	三会社員	主婦	四刑務官	五警察官	教員	六県庁職員	七警察官	教員	警察官	自営業	自営業	警察本部	県庁職員

第二試合二コート	県名	順位	先	次	11	10	9	8	7	6	5	4	3	副	大
	高知	氏名	清水	福留	宇賀	東野	小笠原	中澤	中越	野中	岩崎	濱田	中谷	中尾	友永
		得点	$\frac{1}{1}$	X	X	X	X	⊗	X	X	X	X	X	X	X
	徳島	氏名	竈土	平野	前田	山室	玉田	白木	平野	福多	近藤	米倉	北條	中尾	松村

第三試合二コート	県名	順位	先	次	11	10	9	8	7	6	5	4	3	副	大
	愛媛	氏名	吉川	松本	渡辺	徳永	池内	伊藤	菅	石本	谷口	清水	徳安	佐伯	桑原
		得点	$\frac{5}{2}$	X	X	⊗	⊗	X	X	X	X	X	⊗	X	X
	徳島	氏名	竈土	平野	前田	山室	玉田	白木	平野	福多	近藤	米倉	北條	中尾	松村

第六試合二コート	県名	順位	先	次	11	10	9	8	7	6	5	4	3	副	大
	香川	氏名	行天	秋山	小野	矢野	山内	宮本	西本	村上	三浦	伊丹	白石	定住	小田
		得点	$\frac{3}{1}$	X	X	X	⊗	X	X	X	X	X	⊗	X	X
	徳島	氏名	竈土	平野	前田	山室	玉田	白木	平野	福多	近藤	米倉	北條	中尾	松村



## 第十七回

# 全国家庭婦人剣道大会

平成十二年八月一日(火)

於 日本武道館

徳島商業高校教諭

## 手塚 十三子



昨年度、三位入賞の追い風に乗り、今年には是非「優勝」の密かな意気込みで、徳島を飛び立つ

た私たち。日本武道館では、互いのチームワークを信じて、全力で立ち向かいましたが、あえなく向かい風を封じることができませんでした。

徳島県代表選手

先鋒 玉田 真理 (徳島支部)

次鋒 岩本 淳子 (徳島支部)

中堅 平野 悦子 (鳴門支部)

副将 多田 郁子 (麻植支部)  
大將 森本 敦子 (板野西支部)  
監督 手塚十三子

予選リーグ

熊本 2 (3) — 1 (1) 徳島

福島 3 (3) — 2 (5) 徳島

晴れの舞台を振り返っての、選手の方々の感想です。

〈先鋒 玉田 真理〉

試合の空気の重さを何年かぶりに強く感じた。県予選後の足首負傷、防具をつけての稽古もできないまま全国大会。試合で体を十分動かすこともできず、メンバーにも迷惑をかけ後悔の気持ちで一杯である。

しかし、試合後、喜びの気持ちも湧いてきた。自己満足だが高校時代しか、まともに剣道をしていなかった私が、出産を経て全国大会という大きな大会に出る事ができた。この喜びを、これからの剣道に生かし頑張れたらと思う。

〈次鋒 岩本 淳子〉

昨年に続き二度目の日本武道館。今年の目標は「先ず一本」。自分の中では気で攻め

て、攻め抜いて相手がぐつと引く様な一本を打つ予定だったが、結果は惨敗。思い出したくない。

私は後悔という言葉が一番嫌いで、今まで数々の反省はしてきたが、後悔をしたのはこの試合が初めての様な気がする。中途半端な気持ちを稽古で挑んだのが結果に表れた。主婦であろうと母であろうと条件は皆同じ。結果がどうであれ、全力を尽くせたとと言える事。それがこれからの目標である。

〈中堅 平野 悦子〉

今年で三回目の出場となりますが、どの大会も大変思い出深いものとして、私の剣道人生の貴重な一ページになっています。昨年は三位入賞という結果にもつながり、充実した気分です。帰って来ましたが、今年はず選敗退という事で、自分の力を出し切る事、一本にする事の難しさを痛感し、これからの稽古の課題を沢山頂いて来ました。目の前の勝ち負けより、全国には沢山の人が、家庭・仕事と剣道を両立しているんだと思うと、大変心強く励みになります。こ

れからも、剣道を続けていける事に感謝し、充実した自分を求めていきたいと思っております。

〈副将 多田 郁子〉

十七年間も剣道から離れていた私にとって、剣道を通して再開することができた級友や、先輩達からのアドバイスは、大変貴重なものでした。このような私が婦人大会に参加することになり、久しぶりに練習を始めたものの体が思うように動きませんでした。

「継続は力なり」の一語に尽きます。他

県の選手は、日頃の練習で鍛え抜かれた体力、気力の持ち主ばかりでした。そのため二試合とも相手のペースで進み、攻めることも技を出すこともないまま惨敗に終わりました。練習しながらも剣道を続けていращやる皆さんと再会でき、充実した日々でした。ありがとうございます。

〈大将 森本 敦子〉

試合になると緊張してしまい、平常心を保てぬまま、どう始まってどんな展開になったのか、何も覚えていない、思い出せない

という事も度々ありました。しかし家庭婦人大会は同じ「主婦」という立場の五人の剣友とチームを組んでの全国大会ということで、道中でも和やかな雰囲気のもとに、試合に集中することができました。

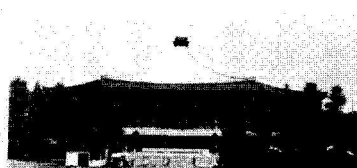
日本武道館という大舞台に送り出していただいた剣連の先生方には、大変感謝いたしております。そして、日頃の剣道活動をするにあたって協力をしてくれず主人・家族にも感謝の気持ちを忘れることはできません。主婦として一番ありがたいことだと思っております。今後ともよろしくお願ひします。

〈監督 手塚十三子〉

心地よい緊張感と、多くの課題をいただいたその瞬間、主婦としての日々の業と、わずかな時間であっても、互いの思いを竹刀に託す熱い業が再び始まりました。今在ることの全てに感謝の気持ちを捧げながら、焦らず、倦まず、自己の掲げた目標に向かつて研鑽を重ねて参りましょう。県下の女性剣士の皆さんの激しくも和やかな稽古会への一人でも多くの方の参加を、心より期待します。



第17回 全国家庭婦人剣道大会 © 日本武道館 平成12年8月1日



© 日本武道館

第17回  
全国家庭婦人剣道大会

平成12年8月1日

# 全国矯正職員

## 剣道選手権大会観戦記

徳島刑務所支部

中村 稔 裕



平成十二年十月十一日第四十八回全国矯正職員剣道選手権大会が大阪刑務所武道場において

開催され、観戦する機会を得ましたのでその状況をお知らせします。

午前八時三十分からの開会式は白井法務大臣の祝辞に続き、前田宏矯正協会長祝辞、各来賓の祝辞、審判長西善延範士九段の訓示で緊張した式典が終わり試合開始となった。

八管区の予選を勝ち抜いた三十六選手によって試合が展開されたが絶対的な優勝候補がなく、観覧席の下馬評では選手層の厚い東京管区か、実力者揃いの名古屋管区か、

はたまた大阪管区代表とかいろいろ予想されたが、大方の見方は

河内 隆浩（広島刑務所……全日本剣道選手権大会 広島県代表）

溝口 夏樹（名古屋刑務所……全日本剣道選手権大会 愛知県代表）

浅見 基司（大阪拘置所）  
高橋 博美（名古屋拘置所）

渡辺 大三（青森刑務所）  
の中から優勝者が出ると予想されていた。

予選は四く五名を一組に八ブロックに別け、リーグ戦によって先ずブロック代表を争った。

徳島刑務所から北村仁志五段が高松管区第二代表として出場していたことから応援にも一段と力が入ったが、全国の予選を勝ち抜いた選手ばかりであり、北村選手もよく健闘したものの簡単に勝ち運にのれず残念ながら二分け二敗となり予選敗退となった。

各試合ともに一本差という厳しい内容が多く、緊迫した試合の連続であり、観戦する者にとっては我を忘れ懸命に声援するこ

とが出来た大会であった。

準決勝戦で、四回目のタイトルを目指す溝口選手と初出場の下川和秀選手（大阪拘置所・福岡大OB）の対戦となり延長戦の末に下川選手が小手を決めて決勝戦進出を果たし、一方櫻井寛選手（東京拘置所）が石橋力選手（大阪刑務所）に延長戦の末面を決めて決勝戦進出となり東西対決の決勝戦となった。櫻井、下川両選手共に初出場でありいかなる試合を展開するか期待されたが、動の櫻井に対し静の下川と好対照の剣風を見せ、終始冷静に攻めた下川選手が小手、面の二本勝ちをおさめ初優勝を飾った。

閉会式において、西審判長の講評として「剣道は相手の隙を狙うものであるから、隙を狙うことなく打ち込んでも意味のないことを念頭におき、相手の隙をつくりだす攻撃により、その隙を打ち込むなどの研究を重ね、ますます稽古に励まれるように。」との激励を受け大会を終了した。

ところで今大会出場三十六選手の内容を見てみると

七段一名、六段六名、五段十五名、四段十四名

となり、また平均年齢も二十八歳と大きく若返りが図られ、一方選手も年々大型化し百七十センチ以下は十一名に留まっている。

矯正の武道選手も最近高校、大学で実績を持った者が多く採用され武道のレベルアップを図るとともに、日本・韓国との間において毎年親善武道大会を開催し選手の育成にも力を注いでいる。

全国大会の過去の優勝者の名簿に田島善人、榊原 正、井上義彦、北川政俊、下村清、菅波一元といった現在八段として全国的に活躍されている先生方の名前も見られ心強く感じるとともに、これら諸先生方に続く剣士が矯正武道選手から多く誕生することを期待し報告とします。

## 全国高等学校

### 剣道競技大会

#### 三位入賞して

富岡東高校三年

矢野 裕美子



平成十二年三月二十七・二十八日に全国高等学校剣道選抜大会が行なわれました。この大会は、

私たちにとって新チームにかわり初めての全国大会であったので、チームにも慣れていなくてこれからという時でもありました。しかし前年度のレギュラーが三名残っていたので、周囲からの期待も大きく、いろいろなプレッシャーの中チームが一丸となるようお互いに励まし合いチームを盛り上げ、この大会に挑みました。まず私たちは、予選を突破するという願望のもと初戦に挑みました。初めは緊張もありましたが、試合を重ねるとともにチームの調子も上昇し、

今までにない試合を展開できました。そこで私たちの願いも叶い、予選リーグを第一位で突破し、決勝トーナメントに進出することができました。やはりどのチームも予選リーグを勝ち残ってきただけあって実力のある学校ばかりでした。決勝リーグ一回戦の対戦相手である島原高校は、スピードがあり実力のある有名校です。私たちはそのチームの威圧感に圧倒されないように、これまでに作り上げてきた自分たちの力を信じるとともに、お互いに信じ合うことを忘れず挑みました。試合が終わってみれば、三―〇で勝つことができ次へと駒を進めることができました。二回戦の博多女子にも二―〇で順調に勝ち、準決勝戦まで進み、広島安芸女子高校と対戦しました。平成十一年に行なわれた全国高校総合体育大会で負けてしまった学校でもあったので、私たちはおもいきってぶつかっていききました。両者とも引くことなく一―一の引き分けて、勝負は代表戦へともちこみましたが、後一步というところで負けてしまいました。そして、このまま広島安芸女子高校は決勝戦

へと進み、勝利を収め大会優勝校となりました。最後、準決勝戦で負けてしまいました。だが、私たちには後悔はなく逆に、満足感や今後の大会の向けて新たな目標を持ち、さらに上位を目指せるようにという気持ちでいっぱいでした。

これまでたくさんの練習試合や遠征で県外の強豪チームと剣を交えてきましたが、自分自身が研究し、工夫する気持ちを忘れないということも大切だと思います。先生や先輩、共に稽古に励む仲間たちにアドバイスをもらっても、聞き納得するだけでは効果がないと思います。やはり、そのアドバイスを素直に受け止め、自分なりのやり方を見つけ、日々向上し続けていかないとはいけません。私は河田先生がいつもおっしゃっている、

「薄い一枚の紙を毎日一枚ずつ重ねていけば、しだいに分厚くなって一センチ二センチとなっていくんだ。」

と、という言葉をお忘れず入学してからずっと稽古にとりくんできました。スランプにおちいることもありますが、その時でも忘れ

ることなく地道にやってきました。その成果として全国三位という結果を残すことができたのだと思います。

私たちは、この伝統ある富岡東剣道部で、遠藤先生や河田先生をはじめ先生方、先輩方や両親、そして共に支え合い励ましあえる仲間とともに剣道ができるというのをうれしく思い、感謝しています。そして、これからそれぞれ進む道は違いますが、これまで学んできたことを忘れず、自分たちの場で常に努力して活躍していき、いつまでも輝き続けていきたいと思っています。

### 【女子】予選リーグ

富岡東	4-1	甲府商(山梨)
榎本	1-1	藤巻
○美馬	メメ	筒井
○小林	メ	松本
○昇	コメ	吉川
○矢野	メメ	小沢

富岡東	5-0	秋田商(秋田)
○榎本	メ	三浦梢
○美馬	メコ	菅原
○小林	メ	保坂
○昇	ドド	大淵
○矢野	メメ	徳山

### 【女子】決勝トーナメント一回戦

富岡東	3-0	島原(長崎)
○榎本	メ	松島
美馬	メメ	田浦
小林	1	増田
○昇	メド	太田
○矢野	メメ	光永

### ▽準々決勝

富岡東	2-0	博多女(福岡)
榎本	1	古沢
○美馬	メメ	山口
小林	1	嘉連川
昇	1	下川
○矢野	メ	千野

▽準決勝

広島女商 1-1 富岡東  
代表勝ち

坂川 | 榎本

後 | メーコ | 美馬

光本 | メ | 小林○

○長原 | メ | 昇

鬼沢 | | 矢野

代表戦

○長原 | メ | 小林

# 岐阜インターハイに 出場して

富岡西高校三年

松本真治

平成十三年八月二日から四日にかけて、岐阜県大垣市でインターハイが行なわれた。県予選をチーム一丸となり、接戦の中を勝ち抜き、このチームとして初めて全国大会へ足を踏み入れた。

この場所での全国の頂点に立つチームが決まる。そして私たち三年生にとって最後の試合になるという大きなプレッシャーと緊張感の中、全員で悔いの残らないように、自分達の持っている力を全て出し切ろうと闘志が漲るまま試合が始まった。

予選リーグ第一試合は、京都府代表の日吉ヶ丘高校と対戦した。強豪の高校が集まる京都府を勝ち抜いてきているだけあり、先鋒から大将まで穴のない総合力の高いチームだった。先鋒の星野が初戦で動きの悪い相手に対しておもいきった技で面を奪い一

本勝ち。つづく次鋒の原は引き分けたが、中堅の松本が延長の末面を奪われ、副将の榎福が引き分けたためチーム成績を五分とし大将戦となった。相手の大将は、京都府を個人戦一位で勝ち抜いた実力派に対して対等に戦った大将の藤崎だったが胴を奪われ、惜敗した。

第二試合は、岩手県代表の盛岡南高校と対戦した。先に日吉ヶ丘高校が二勝したため予選リーグ突破はなくなったが、徳島県代表として、はじない試合をしようと、もう一度みんなで気合いを入れ直し試合に臨んだ。先鋒の星野は、第一試合からの勢いをそのまま保ち、面を二本奪いチームに流れを呼び寄せた。つづく次鋒の横手は先に小手を奪ったが、面を二本返された。中堅の松本は胴、面を奪い二本勝ち。副将の榎福は小手を二本奪われ二本負け。第一試合と同様、大将戦となった。大将の藤崎は落ち着いた動きで相手のスキを見逃さず小手を二本奪い、チームに勝利を導いた。

予選リーグを突破することはできなかったが、全国という大きな壁が、自ら剣を交

えることによつて、相手も同じ高校生なんだという確信を得ることができ、手の届かないものではないことを実感し、私達が学び、磨き上げた技術を全国で挑戦できることの喜びを覚えた。

このように自分が目標に向かって挑戦し続けることができたのも、日々熱心に御指導して下さいました山田先生を始め、他の先生方、いつも温かく応援して下さいました保護者の方々や沢山のOBの方々のお陰です。そして、どんな時も共に辛さを分かち合った仲間感謝したい。この仲間と共に輝いた時は、私にとって一生の宝物になるだろう、

富岡西 3-2  
(徳島)

○星野 メメー 高橋直 (岩手)

○横手 コーメメ 坂下○

○松本 ドメー 熊谷

○榎福 ココ 金崎○

○藤崎 ココ 高橋徳

## インターハイに 出場して

富岡東高校三年

小林 かおり



八月一日から  
四日にかけて、  
『切り開け岐阜  
から未来の一  
ページ』の大会  
スローガンのも

と、岐阜県大垣市で全国高等学校校総合体育大会が行われました。

インターハイは、高校生最大のイベントであり、三年生の私たちは、このチームで試合するのはこれで最後です。だから全員が一丸となり、この日を迎えるまで、課題克服やコンディション作りに励んできました。

予選リーグ一回目は、北海道代表、札幌日大でした。つば迫り合いの反則も厳しく、また初戦という緊張もあり、多少かたさも

徳島の剣道

### 〈予選リーグ〉

日吉ヶ丘 2-1 富岡西  
(京都) (徳島)

下岡 ーメ 星野○

松岡 ー 原

○岩切 メー 松本

○篠原 メーメ 榎福

○市原 ドー 藤崎

ありましたが三―一で一勝目をあげることができました。

二回目は、強豪佐賀県代表、佐賀学園でした。大将戦までもつれ込む接戦でしたが、チームワークで上回り、三―二で勝ち、決勝トーナメントに進むことができました。

インターハイへ懸ける思いはどの学校も同じで、どのリーグも接戦をものにして勝ち進んできただけあり、決勝トーナメントに残った十六校は、やはり強豪といわれる学校ばかりでした。トーナメント一回戦は、静岡県代表、御殿場西高校でした。このチームは、足を使い引き技を得意とするチームです。私たちもねばり強く攻めていこうと声をかけあいました。会場内のものすごい熱気と緊張感の中で試合が始まりました。

先鋒は、スピードのある激しい試合でしたが惜しくも一本負け。次鋒は、お互いゆずらず引き分けになりました。中堅の相手は上段でした。延長戦になりましたが一本負け。副将も惜しいところがありました。旗が上がり負けしてしまい、大将も六分間攻め続けましたが、終わってみれば〇―

三でした。結果的には負けてしまいました。この日まで一人一人が努力し遠征を何度もして、苦しい練習にも耐えてきて、いい経験ができて本当に良かったです。

私たちがこうやって大きな舞台に立つことができたのも、応援し支えて下さる方々、厳しくそして試合の時には、私たちのことを信じてくれ、優しく見守って下さる河田先生のおかげです。私の周りの多くの方々の温かい応援とお世話のおかげで思いっきり戦うことができました。本当にありがとうございました。

予選リーグ

富岡東 3―1 札幌日大  
(徳島) (北海道)

〇樫本 ドコ 岡田

美馬 メメ 森下

〇昇 コー 三上

〇矢野 コー 今村

富岡東 3―2 佐賀学園  
(徳島) (佐賀)

〇樫本 メー 萩原〇

美馬 コー 尾崎〇

〇小林 コー 田代

〇矢野 メー 秀島

決勝トーナメント一回戦

御殿場西 3―0 富岡東  
(静岡) (徳島)

〇大門 コー 樫本

飯田 岡田

〇佐野 メー 小林

〇梅原 メー 昇

小松 矢野

# 第四十二回

## 全国教職員剣道

### 大会に出場して

城北高校教諭

福多 雅英



平成十二年度

の全国教職員剣

道大会が、翌年

に開催される第

五十六回国民体

育大会剣道競技

のリハーサル大会として、平成十二年八月

九日(水)・十日(木)に宮城県河北町総合

センター「ビッグバン」で開催されました。

本県の代表選手として、六月十日に城西

高校で開催された予選会を経て次のメンバー

が出場しました。

団体戦

先鋒 谷 喜史(阿南工業高校教諭)

次鋒 佐々木和人(城西高校教諭)

中堅 富浦 廣志(由岐中学校教諭)

副将 本田 敦彦(徳島市立高校教諭)

大将 影山 美雄(赤松小学校教頭)

個人戦

女子の部

竹内佳代子(大麻中学校教諭)

幼・義務教育の部

白木 洋一(石井中学校教諭)

高校・大学・教育委員会の部

福多 雅英(城北高校教諭)

団体戦は、二回戦でこの年の国民体育大

会開催県である富山県と対戦しました。先

鋒と副将に国体選手を擁した富山県チーム

は、稽古量の豊富さを窺わせる試合ぶり

であり、本県チームも健闘しましたが、惜し

くも一対二で敗退しました。試合結果は次

の通りです。

徳島 一対二 富山

先鋒 谷 一 ココ 田 中 ○

次鋒 ○ 佐々木 コー 中 川

中堅 富浦 メ × メ 浅 野

副将 本田 メ × メ 高 瀬

大将 影山 ー メ メ 油 谷 ○

個人戦女子の部では、この部での最ベテ

ラン選手である竹内選手が、大分県の藤川

選手と一回戦で対戦、三十分近い大熱戦の

末惜敗しましたが、持ち味を充分出さきつ

た好試合でした。

竹内 ー コ 藤 川 (大分)

個人戦幼・義務教育の部では白木選手が一

回戦で大阪府の川上選手と対戦、序盤から

堂々とした攻めで相手を圧倒し、三十分近

い試合時間の中で終始攻勢であった白木選

手でしたが、延長の末惜しくも敗退しまし

た。

白木 ー メ 川 上 (大阪)

個人戦高校・大学・教育委員会の部では、

福多が決勝で前年度全日本剣道選手権大会

で三位に入賞した地元宮城県の佐藤充伸選

手と対戦し、引き面を打たれ一本負け、準

優勝しました。試合結果は次の通りです。

一回戦

福多 コ ー 櫛 田 (北海道)

二回戦

二回戦

福多 コー 山 口(山 梨)  
三回戦

福多 コー 辻 (沖 縄)

四回戦

福多 コメー コ 大 関(栃 木)

準決勝

福多 コー 居 村(石 川)

決勝

福多 ー メ 佐 藤(宮 城)

今回の大会を振り返って感じたことは、  
勝敗は別にして本県選手団のレベルは全国的に見ても決して引けは取らないという点とであります。結果を出すためにはあと一歩というところではありますが、それをうめるためには日々の稽古しかないように思いました。

また、気になったことは、年齢制限のある団体戦における副将(四十歳以上)・大将(五十歳以上) 以外の本県選手の平均年齢が全国一高かったこととあります。児童生徒の減少にともなう教員採用状況の厳しい現実や多忙な職務の都合などもあります。若手教員の奮起を期待し、県予選を通過で

きるよう頑張っていたきたいと言うこと  
であります。

また、大会の上位入賞常連県の先生方にお聞きすると全国教職員大会や全国都道府県対抗大会の予選会への出場者の多さに驚かされます。その上、多数の参加による教員の稽古会等による強化など、本県においても見習わなければならない点が多々あるように思われました。

剣道は「師弟同行」でありますから、生徒に稽古を通して教えることと同時に教わること、つまり共に学ぶ姿勢が大切であると考えられ、生徒と共に自らを高めて行くことは剣道を指導する者にとって必要なこととであり、また喜びでもあります。剣道は試合に勝つことが全てではありませんが、試合や稽古を通して理合や技の向上をはかり、互いに交流を深め研鑽していくことが、本県中学校・高等学校における競技力の向上や活性化にもつながるのではないかと自らの試合を反省しつつ今大会を振り返り改めて実感しました。

## 秋季関西医歯薬 学生剣道大会 "優勝"

—徳島大学医歯薬学部

剣道部の紹介を兼ねて—

徳島大学医歯薬学部剣道部

近 清 素 也



ご存知のない方もいらっしゃるかもしれませんが、先ずは自己紹介から始めさせていただきます。

ます。

われわれ徳島大学医歯薬学部剣道部は、徳島大学蔵本地区の学生を中心に蔵本地区体育館にて稽古を行っています。師範に、大澤孝彰先生、勝沼信彦先生をむかえ、また多数の先生方、OBの先生方のご指導を受けています。また、他大学の部員も多く参加しており交流を深めています。現在の部員は、医・歯・薬学部の学生で二十四名、

出身地も北は北海道、南は鹿児島と全国にまたがっています。大学に入学して剣道を始めるものも多く、また、女性も約半数の十一名います。昇級・昇段審査も積極的に受審し、初心者の中でも二段まで取得しています。参加している試合としては西日本医科学学生大会・全日本歯科学学生大会・関西歯科学学生大会・中四国医科学学生大会・四国歯科学学生交歓試合・眉山杯など医系学生の大会が中心となりますが、機会があれば県別選手権や県女子剣道大会などにも出場しています。

標記の大会は春季・秋季と年二回あり、関西を中心とする大学医学部・歯学部・薬学部、医科・歯科・薬科大学が出場します。今回は十八校が参加し、平成十二年十一月二十六日に奈良県立医科大学主管のもと行なわれました。われわれは昨年の秋季大会で準優勝しているだけに、プレッシャーのかかる状況でしたが、逆にそれが励みになって普段の稽古どおりの実力を出すことが出来ました。

予選リーグは五校で戦われ、四選全勝、

無事一位で通過することが出来ました。勝つことだけを意識してしまい身体が硬くなってしまうように、常に普段の稽古を思い出し普段どおりの実力を出せるように出場選手に言い聞かせ、また、応援する者も余計なプレッシャーをかけてしまわないように心掛けて臨んだ結果だと思っています。

決勝トーナメントは、予選リーグの四ブロックから上位二チームが出場し、合計八チームで戦われます。一回戦は近畿大学医学部。準決勝は主管校である奈良県立医科大学。どちらも過去に対戦したことのあるチームで決してあなどれない相手ですが(特に奈良医大は主管校ですから)、気持ちの面でこちらのほうが勝っている為か、勝ち進むことが出来、決勝戦を迎えることが出来ました。決勝戦の相手は、福井県立医科大学(関西と言いつながら何故、福井か?)と思われませんが徳島もよく似たものでしょう。このチームには春季大会の決勝トーナメント一回戦で敗れているだけに雪辱戦であり緊張する試合でしたが、副将までの活躍で優勝を飾ることが出来ました。(私も大将戦

で勝ったかったです)。

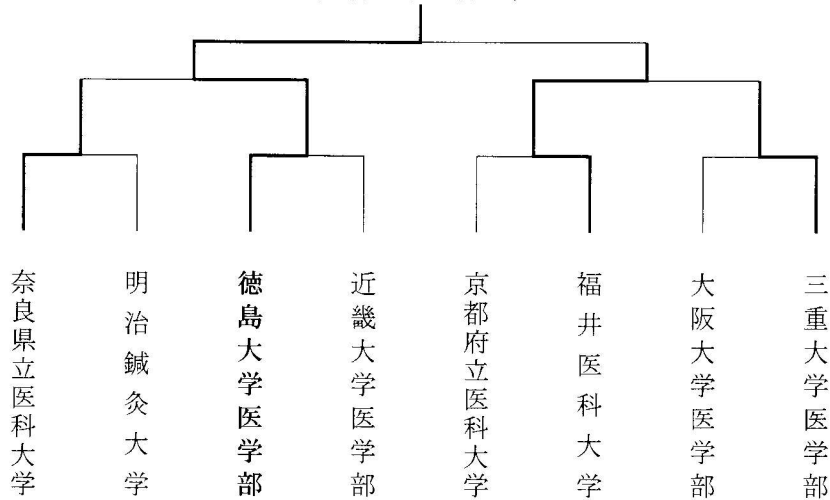
われわれ歯科学部の学生は学業の方も忙しく稽古の時間は多くありません。しかしその限られた中でどれだけ多くのことを考え学んでいくことが出来るかを常に心掛けて稽古に精進しています。また、多くの試合に参加していますが、出場し勝つことだけに目標を置いていくわけではありません。試合やレセプション(懇親会)など多くの機会を与えられるうえで、多くの人に会いそこから多くのことを学ぶことによつてこれからの医療に携わるものとしての人間性を高めていくことを常日頃から心掛けています。

ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

	三重大	徳島大	大阪医	関西医	滋賀医	勝敗	勝点	順位
三重大		$\frac{2}{1}$	$\frac{4}{2}$	$\frac{2}{2}$	$\frac{6}{3}$	2-1	5	2
徳島大	$\frac{6}{3}$		$\frac{4}{2}$	$\frac{7}{2}$	$\frac{4}{2}$	4-0	8	1
大阪医	$\frac{2}{2}$	$\frac{1}{4}$		$\frac{5}{3}$	$\frac{5}{3}$	2-2	4	3
関西医	$\frac{2}{2}$	$\frac{6}{2}$	$\frac{1}{0}$		$\frac{8}{5}$	1-2	3	4
滋賀医	$\frac{0}{0}$	$\frac{0}{0}$	$\frac{0}{0}$	$\frac{0}{0}$		0-4	0	5

◎男子団体戦(参加十八チーム)  
 (萩 喬博・田中貴之・富山直敏・大場博史・  
 矢野俊夫・山本武範・近清素也)  
 ○予選リーグ(Dブロック)

優勝…徳島大学



○決勝トーナメント

◎女子団体戦(トーナメント戦、参加29チーム)

Aチーム

今井 亜美・桑田 亜希・杉浦 良子……1回戦敗退

Bチーム

酒井 和香・山田安希子・前田恵利子……2回戦敗退

○予選リーグ（対関西医科大学戦）							
	先 鋒	次 鋒	中 堅	副 将	大 将	勝 数	本 数
徳島大学	矢野	大場	富山	田中	近清		
	⊗メ	⊗メ	⊖	⊗	メ	2	7
関西医科大学		⊖▲	ココ	コ▲	メ⊗	2	6
	東森	福井	松本	宮原	大岡		

●決勝トーナメント（対近畿大学医学部戦）							
	先 鋒	次 鋒	中 堅	副 将	大 将	勝 数	本 数
徳島大学	矢野	大場	荻	田中	近清		
	⊗		メメ	⊗メ	⊗メ	4	7
近畿大学医学部		▲	⊗		コ	0	2
	安岡	北山	小谷	北畑	石部		

●決勝トーナメント（対奈良県立医科大学戦）							
	先 鋒	次 鋒	中 堅	副 将	大 将	勝 数	本 数
徳島大学	矢野	大場	荻	田中	近清		
		⊖ド	⊗		⊗	3	4
奈良県立医科大学	⊗			⊗		2	2
	太田	中西	桑田	吉岡	朝比奈		

●決勝トーナメント（対福井医科大学戦）							
	先 鋒	次 鋒	中 堅	副 将	大 将	勝 数	本 数
徳島大学	矢野	大場	荻	田中	近清		
	⊖	⊖メ		⊗メ	メ	3	6
福井医科大学			コ▲		メ⊗	2	3
	上村	磯崎	加藤	椎野	奥野		



秋季関西医歯薬学生剣道大会

## 全日本少年剣道 錬成大会に参加して

徳島錬心館

水上 玲子



このたび、七月二十六日・二十七日に開催された、第三十五回全日本少年剣道錬成大会に参加させていただきました

きました。

六年生の次男にとって、去年に続き二回目の参加となりました。

今回は、学校では同級生であり、毎回練習では一緒に汗を流し、お互いの家で遊んだりと、特に仲の良い仲間たちとの参加という事で、決まった時点から、大変な盛り上がりでした。付き添いの親たちも同じような様子で、二泊三日の大切な思い出作りの機会となりました。

二十五日、早朝の飛行機で出発、羽田へ到着後バスでディズニーランドへ。試合前

に遊んでしまうことに、少し気がひけたのですが、翌日の東京は大雨となり、結果的には良かったということになりました。

二十六日、試合当日、タクシーで日本武道館に到着、あこがれの夢舞台を目の前にして、立派さ、大きさ、そして、あまりの人の多さに驚くばかりです。

いよいよ、試合場はライトアップされ、大きな太鼓が打ち鳴らされ、試合の始まりとなりました。第一試合場にて徳島錬心館は、栃木武徳殿と対戦、全員落ち着いてい動きができたのですが、残念ながら、一回戦負けとなってしまいました。

二十七日、第二十五回全日本選抜少年剣道個人錬成大会に、次男が参加しました。

第七会場にて、広島県の黒瀬剣道教室、小林祐輔君と対戦しました。一本目は小手が決まり、去年先鋒で出場して二本勝ちしていたので、「もしかしたら今年も勝てるかもしれない。」と思った瞬間、動きを読まれて一本とられ、瞬く間に二本目、終了となりました。誇らし気な次男の顔を、もう一度見たいという思いは叶いませんでしたが、

真剣で一生懸命な、全国の少年剣士を間近で見ることができ、剣道の素晴らしさを再確認することができました。心の日記帳に、輝かしい一ページを残して東京大会は終わりました。

子供たちは、「日本武道館」この夢舞台に立った歓びと、誇りを生涯大切にもってくれるものと思います。そして、このような輝かしい試合に出場できるよう、御指導くださった大澤先生の元で、もつともつと剣道に励むことでしょう。それは、子供たちの心の拠り所となり、自信となるものとして信じています。

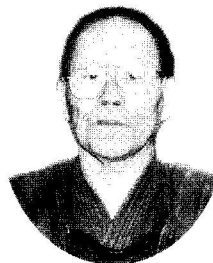
私は、全国大会へと導いてくださった大澤先生を始め、日本武道館への道を拓いてくれた先輩方に感謝し、日本武道館で試合ができる子供を持ったことを誇りに思いません。

そして、彼らの一生懸命な姿を忘れないように、これからも見守り続けていきたいと思えます。

## 全日本少年武道 (剣道)大会に臨んで

鴨島少年剣道教室

道場長 笠井 恵之



平成十二年、  
二十世紀最後の  
七月二十九日東  
京・日本武道館に  
おいて開催され  
た「全日本少年

武道錬成大会」で、わが鴨島少年教室は二十三日目の挑戦の末、初めて優勝旗を手中に納めることができました。

この錬成大会は、二回戦までが基本判定試合と一本勝負で勝敗を決します。

基本錬成は、四十秒間で切り返しと応じ技を二本以上交えた打ち込み稽古で判定を行います。判定基準も、礼法・着装から始まり竹刀の振りが正しいか、足運びは正しいか、間合いは適切か、気剣体一致であるか、残心ができているか等と、沢山の課題

の中、対戦する二チームのそれぞれの監督が元に立ち、先鋒から大将まで五人の切り返しと打ち込みを受け、かかる子供たちの姿形が評価され、三名の審判員の旗で勝敗が決められます。

今大会の出場は、当教室においても最高学年の集大成であり、勝負に囚われることなく、しっかりと基本打ちが打てることに重点を置き、その苦しい稽古の中で、共に切磋琢磨し、互いの信頼を築き、全員の力の向上に努めました。

大会に向けての練習を始めたころは、四十秒間の基本錬成の間に、ことまかに子供達に指導していましたが、気を抜くことなくひた向きに練習に取り組んでいる子供達の成長は早いもので、指導者の想像以上の早さで、技術・チームワーク共に最高のチームができました。

日本武道館の太鼓が鳴り響き、全国から参加した四三一チームの入場行進が始まり、見る見るうちに武道館のフロアが少年剣士で埋め尽くされました。私はその様子を観覧席から眺めながら、この日本武道館

で今まで学んできたこと、また、苦しかった思い出の全てを叩きつけて欲しいと願っていました。

試合が始まり、私の願いが通じたのか、子供達は水を得た魚のように試合場狭しと活気に満ち溢れた剣道を見せてくれました。

一回戦：若竹少年剣友会の果敢に攻めてくる試合ぶりがとても印象的でした。

二回戦：小牧桃武館は、五人中三人が五年生でしたが、気迫のこもった剣道は清々しいものでした。

三回戦：能勢武勇館は、基本を大変良く練習しており、体さばきに無駄がなく、打ちが正確で美しいと思うほどでした。

四回戦：栗原剣友会は、構えが良く、ガードが固い上に技の尽きた時等、打つべき機会に迷うことなく攻めてくる、理にかなった剣道は私も大変勉強になりました。

五回戦コート決勝：札幌平岸剣道少年団は大柄のチームで、なおかつ実力があり、いよいよ正念場だと思いました。

試合は、先鋒が勝ったことにより、続く次鋒・中堅と連勝しましたが、その後副将・

大将と連敗しました。子供達も私と同じ気持ちだったのか、試合内容は、今まで以上の気迫のこもった緊迫した大変厳しいものでした。

全国レベルの剣道を見せられた気がしました。子供達がこの一勝で得たものは計り知れないものだと思います。

六回戦ブロック決勝：神戸剣道スポーツ少年団も、五回戦の相手同様強いチームでしたが、今の子供達の勢いを止めるとは到底できません。

副将で勝負が決まった瞬間、夢にまで見た「優秀賞」が現実のものとなり、応援の家族と共に子供達の頑張りをたたえ、大いに喜びを分かち合いました。

しかし、今こうして感激し喜べるのも、子供達が頑張った以上に、過去対戦した少年剣士の諸君を始め、ご指導下さった全ての先生方のお陰だと心から感謝いたしております。

閉会式も終わり、誇らしげに優勝旗を掲げ大きく成長した子供達の胸には日本武道館を表した八角形の金メダルが輝いています。

第一回戦	対戦チーム名		先鋒	次鋒	中堅	副将	大将
	鴨島少年剣道教室	選手名	西岡	岩雲	片山	須見	塩田
		基本判定	3	3	3	3	3
		一本勝負	コ	メ	メ	メ	メ
東京若竹少年剣友会	一本勝負						
	基本判定	0	0	0	0	0	
	選手名	小山	矢作	塚越	中村	丸山	

第二回戦	対戦チーム名		先鋒	次鋒	中堅	副将	大将
	鴨島少年剣道教室	選手名	西岡	岩雲	片山	須見	塩田
		基本判定	3	3	3	3	3
		一本勝負	コ	メ	メ	メ	メ
愛知小牧桃武館	一本勝負						
	基本判定	0	0	0	0	0	
	選手名	松浦	樋樋	山崎	三宅	山口	

第三回戦	対戦チーム名		先鋒	次鋒	中堅	副将	大将
	鴨島少年剣道教室	選手名	西岡	岩雲	片山	須見	塩田
			メコ	コ	メメ	メコ	メメ
	兵庫能勢武勇館						
選手名		徳永	太田	渡辺	武田	藤脇	

第四回戦	対戦チーム名		先鋒	次鋒	中堅	副将	大将
	鴨島少年剣道教室	選手名	西岡	岩雲	片山	須見	塩田
			メコ	コメ	メ	メコ	メ
	神奈川栗原剣友会				下		
選手名		新里	武井	中野	小俣	安藤	

第五回戦 コート決勝	対戦チーム名		先鋒	次鋒	中堅	副将	大将
	鴨島少年剣道教室	選手名	西岡	岩雲	片山	須見	塩田
			メ	メ	メ	メ	メ
北海道札幌 平岸剣道少年団		メ			メ	メ	
	選手名	小倉	大島	鶴見	江口	櫻井	

第六回戦 ブロック決勝	対戦チーム名		先鋒	次鋒	中堅	副将	大将
	鴨島少年剣道教室	選手名	西岡	岩雲	片山	須見	塩田
			ド	コ	メ	メ	コ
神奈川神戸剣道 スポーツ少年団		メ		コ		メ	
	選手名	村田	山田	野口	吉田	黒川	

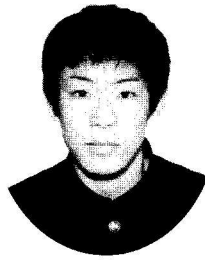


## 全国中学校

### 剣道大会に出場して

阿南第二中学校三年

大石 真也



平成十二年八月二十二日から三日間、鹿児島県で第三十回全国中学校剣道大会が開催された

した。少し前に行われた四国大会では予選リーグ敗退というくやしい思いをしていたので、全国ではという強い気持ちで臨みました。

僕は団体、個人共に出場していたので団体よりも先に個人戦に出ることになりました。普段どおりの動きをしようと考えていました。思ったように体が動かず、一本先取されそのまま終わってしまいました。自分の剣道を出すことができないまま負けたのは悔しかったです。そしてそのあとすぐに

団体戦が始まりました。予選一試合目は岩手県山田中学校と対戦しました。勝負は同点のまま大将戦となり僕にまわってききました。そこで二本取って勝つことができ、チームに勢いがついたのは嬉しかったです。そして二試合目、神奈川県金旭中学校と対戦しました。お互いよく力が似ていて一本リードという状況で大将戦がきました。自分では一本取ったと思った打ちは逆に相手の一本となり、あせって出た所をもう一本取られてチームは負けました。あと一步の所でベスト十六入りを逃したのは本当に残念でした。

#### 試合結果

個人二回戦 大石 — 〇宮崎(熊本)

#### 団体

阿南二中(2) 1-0 山田中(岩手)

阿南二中(3) 1-2 金旭中(神奈川)

一勝一敗で予選リーグ敗退

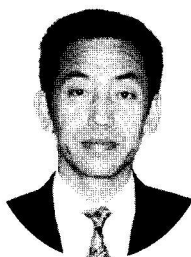
しかし改めて勝負の厳しさというものを学ぶことができました。いつでもどんな状況でも自分の剣道ができる、そこで上位のチームと自分たちの違う所でした。そして基本ができていなければ強くなれないと準決勝、決勝を見て感じました。

この大会を通して学んだことはたくさんありますが、それを無駄にしないようこれからの練習や大会で生かしていきたいと思っています。最後になりましたが指導して頂

## 四国、全国中学校 剣道大会に参加して

河南第一中学校剣道部

顧問  
村井正志



七月二十三日、

県中学校総体が  
鳴門武道館で行  
われ、女子団体  
戦で念願の鹿児  
島行きの切符を

手に入れることができた。今年のチームは  
飛び抜けた選手こそいなかったが、チーム  
全体としては、よくまとまっていたと思う。

八月六日の四国総体では地元徳島県での  
開催であり、選手たちには県の代表という  
自覚をもたせ三位以内入賞を目標に掲げた。  
四国大会でマークするチームは、砥部中(愛  
媛)、高知中(高知)であった。この二チー  
ムを含め他の県外チームとも何度か練習試  
合を行ったことはあったが、その中でも特  
に砥部中、高知中は実力のあるチームであっ

た。しかし、予選リーグで対戦した砥部中  
には負けはしたものの、内容的にいい試合  
をすることができた。最終的には予選リー  
グ二位ということで決勝トーナメントには  
進出することができた。決勝トーナメント  
では砥部中同様、実力校高知中との対戦と  
なった。選手たちは非常によく粘りいい試  
合をしたが一对三(高知中)というスコアー  
で負けてしまった。目標としていた結果を  
出すことはできなかったが、それからは全国中学  
校剣道大会で悔いのない試合ができるよう  
気持ちを切り替え、日々の練習に励むこと  
にした。

全国中学校剣道大会は八月二十二日～二  
十四日の三日間、鹿児島県の鹿児島アリー  
ナで開催された。会場内は大変広く、選手  
たちには伸び伸びと試合ができる雰囲気  
があった。二十二日は開会式のみで二十三  
日から予選リーグであった。その為選手たち  
は時間的にも余裕を持って試合に臨むこと  
ができた。予選リーグの対戦チームは高千  
穂中(宮崎)と湯本中(岩手)で第七試合  
場の第一試合目(高千穂中)と第五試合目

(湯本中)での対戦であった。高千穂中は  
過去に優勝もしている強豪校である。この  
高千穂中に勝てば決勝トーナメントも見え  
てくると思いい、ここが勝負だと選手には落  
ち着いて試合をするよう指示していた。試  
合が始まり先鋒戦はなかなかいいすべり出  
しではあったが惜しくも一本負け、続く次  
鋒は鮮やかに二本勝ちここで流れが変わり  
ひよっとしたらという思いもあったが、中  
堅、副将、大将と立て続けに負けてしまっ  
た。しかし内容的にはまったくひけを取ら  
ない互角の勝負だった。続く湯本中戦は三  
対〇で圧勝することができた。高千穂中は  
そんなに強く感じなかったが勝負に対する  
かけ引き等試合巧者ぶりを感じた。

今回の全国大会では九州勢の活躍が特に  
素晴らしく、優勝を含めベスト8に五チー  
ムが入賞するなど九州勢のレベルの高さに  
は本当に驚かされた。とにかく試合運びが  
上手で、剣道をよく知っていると感じた。  
全国的に見れば四国のレベルも高いところ  
にいると思うが、九州の各県の激戦区を勝  
ち抜いてきたチームは、四国、特に徳島の

チーム以上に勝つための執念のようなものが感じられた。

最後になりましたが、県中総体で優勝し、四国大会、全国大会に出場するにあたり、たくさんの方々にあたたかいご指導や心遣いを頂き本当にありがとうございました。再度四国・全国大会に出場する機会がありましたら今回の経験を生かして、今度こそ上位に入賞できるように頑張りたいと思っています。

## 最後の出場

筑波大学四年（富岡東高校出身）

坪井 さくら



昨年九月三日、名古屋市中村スポーツセンターで全日本女子剣道選手権大会が行われた。全国

各地の女性剣士が集まり、高校生、大学生、教師、実業団、警察官、主婦といったいろんな肩書きを持った選手が剣を交えた。

私がこの大会に初めて出場させていたのは高校一年生の時である。何もかもが初めてで、緊張しっぱなしで終わったのを覚えている。次いで高校三年の時に二回目、大学二年に三回目の出場を果たした。そして今回で四回目の出場となったのだが、今までとは違う気持ちで試合に臨んだ。私は基本的に結果に目標をおくより、自分の力を出しきることに目標をおくように心掛

けている。今回もそのつもりであったが、いつもと違って「ベスト8」という目標を立てた。なぜなら、過去最高が「ベスト16」であったことと、学生として出場するのはこれで最後であるからだ。

剣道を始めてから十六年になるが、自分の周りは常に十分な稽古量が確保でき、稽古不足とは無縁の環境で思う存分剣道に専念できた。特に大学の四年間は高校時代に日本のトップで活躍された先輩や後輩と稽古することができ、これ以上ないというほど素晴らしい環境で稽古させていただいた。そして、剣道にこれだけ集中できるのも大学生までだと考えると、体力的にも精神的にも今が最も充実しており、最後の思い出になる大会にするためにも、「ベスト8」という成績を残すには今回が最もいいチャンスだと思った。いろんな思いを抱きながら大会に出場し、結果は以下のようになった。

成績 ベスト8

- 一回戦 高嶋（福井） — 延コ坪井
- 二回戦 加行（宮崎） — 延メ
- 三回戦 中岡（東京） — メ

準々決勝 田中（京都）メー（延）

前回、初戦で田中選手と対戦し負けていたので、ベスト8といっても同じ相手に続けて負けたのは悔しかったが、目標達成でき、おまけに敢闘賞までいただけたことに關しては学生最後の思い出となった。

今回対戦した選手は全員社会人であり、自分より年上の方であった。社会人になっても充分立派な剣道ができることを実感した。今後は社会人として、また夢である教師（指導者）になることを目標にしていきたい。

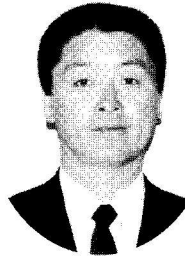
## 第四十六回

### 全日本東西対抗

### 剣道大会に参加して

警察支部

近藤 亘



昭和五十五年、

第二十六回全日

本東西対抗剣道

大会が、鳥取市

の県立武道館で

開催されました。

同大会には、本県から堀江幸夫先生が出場されており、私は一人車で応援に行きました。

堀江先生は、三将で出場し、神奈川県倉沢照彦先生に面を先取されながらも、小手を連取して逆転勝ちをおさめました。団体の勝敗は、両軍勝ち星同数となり、大会史上初の引き分けに終わりました。

試合前の堀江先生に、「今の心境はいかがですか。」などと、お尋ねしたことを思い出します。

あれから二十年、鳥取県で再び東西対抗が開催されることとなりました。場所は、鳥取市から米子市に移りますが、同市に、立派な設備・機能を備えた近代的な鳥取県立武道館が開館し、平成十二年九月二十四日（日）、第四十六回全日本東西対抗剣道大会が開催されました。

大会の約一ヶ月前、出場の通知が届き、対戦相手が愛知県の東良美七段と知りました。

東七段は、私よりも二歳年下ですが、腰の入ったしっかりとした剣風で、面・突きを得意とした強豪選手です。

対戦した場合、相手の攻めにどれだけ耐えられるか。私の攻めがどれだけ通じるのか、自分の実力を試すには良い機会です。

また、お陰で大会まで熱の入った稽古ができました。

大会前日は、東西両軍に別れ稽古会が行われました。普段稽古できない先生方に稽古をお願いできる良い機会であり、今回も気持ちのいい稽古をさせていただきました。

また、夜には、東西両軍の選手が一堂に

会しての交歓会が催され、親交を深めました。

大会は、男子の部・女子の部に別れ、男子の部は、大将・副将を範士八段、三将以下十二将までを教士八段、十三将以下三十将までを七段、三十一将以下先鋒までを六段という三十五名の選手構成で行い、女子の部も、東西より選抜された各々五名の選手によって行われました。

始めに、女子の部が行われ、終始緊迫した試合の結果、三勝二敗で西軍が優勝しました。

男子の部は、先鋒が勝ち、幸先良いスタートを切りましたが、その後三連敗し、三十一将で一矢を報いたものの、五連敗を喫するなど、私の前までに四勝九敗という、西軍にとっては不利な展開でした。いよいよ、私の出番。「相手に対する先入観を捨てて、思い切って戦おう。」と、心に決め試合に臨みました。

以下は、私の記憶に残る試合の内容です。静かに立ち上がり、私から気合いを掛ける機会をうかがったが、相手も迂闊には出

てこない。こちらも機会がないから出るこ  
とができない。何回か相手が打とうという  
素振りを見せたので、小手に変わるうとす  
ると、相手も出てこない。

相手がいらだってきたのか、体当たりの  
後押してきて、場外間際まで下がる。審判  
の「止め。」その後、東選手得意の「突き」、  
別れ際の「竹刀を巻く」も出してきたが、  
これは警戒していたのでかからなかった。

また、相手が体当たりしてきたので、こち  
らも負けじと体当たりの応戦。(場内が沸く)  
延長戦に入り、私が相手陣地に攻め込ん  
でいくと、相手の思いきった「面」が見え  
たので、思わず「返し胴」を打った。納得  
のいく打ちではなかったが、審判の「胴あ  
り。」で決着がついた。

何か物足りなく感じましたが、ともかく  
試合が終わりホッとしたのも事実です。

相手の攻めは、試合前に私が思っていた  
ほど強く感じませんでした。しかし、私も  
思いきった技を出せませんでした。「もしか  
してここで打てば、返されるのでは。」とい  
う不安があったように思います。

その後、試合は西軍が有利に展開し、八  
段戦最初の十二将戦で十二勝十二敗の同点  
に迫いつき、九将戦で西軍が逆転しました。  
しかし、その後すぐ、東軍が追いつき、ま  
た西軍が引き離すといった、見応えのある  
白熱した試合が続きました。決着がついた  
のは副将戦でした。東軍、千葉県の岩立八  
段が、西軍、奈良県の井上八段に伸びのあ  
る見事な面を二本決め、東軍に勝利を導き  
ました。結局、東軍十九勝、西軍十六勝で  
東軍の優勝となりました。

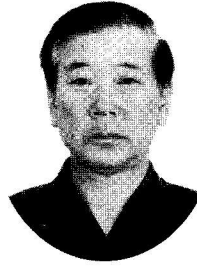
この大会で、八段戦を拝見して感じたこ  
とですが、どうしたらあそこまで、「辛抱」  
できるのか。「タメ」があるから「捨てきつ  
た」打ちができるのではないか。これから  
の自分の課題が与えられた気がしました。

大会が無事終了し、一週間ほどして、鳥  
取県で大きな地震が発生しました。この地  
震が大会前に発生していたら、と思うと、  
大会関係者の思い入れの強さを感じないわ  
けにはゆきません。

# 富山国体（秋季大会） に出場して

徳島県警察本部教養課

中尾 正 輝



平成十二年十

月十七日（火）

富山県東礪波郡

庄川町青島「庄

川町民体育セン

ター」において、

第五十五回国民体育大会「二〇〇〇年とや

ま国体剣道競技成年の部」が開催されまし

た。

本県は監督・大澤孝彰先生、先鋒・山名信

行（警察本部機動隊）次鋒・富田圭介（警察

本部機動隊）中堅・福多雅英（城北高教員）

副将・近藤亘（警察本部機動隊）大将・中尾

正輝（警察本部教養課）の布陣で臨みまし

た。

一回戦は、強敵宮崎県と対戦、三（五）

対一（三）で快勝しましたが、二回戦で山

形県に思わぬ敗戦を喫しました。

国体に向け堀江幸夫先生をはじめ遠藤一美県剣道連盟会長などの温かいご配慮により、熊本県や高知県などへの県外強化訓練を実施し実践的な試合技術の習得に努めてまいりました。

この大会には、大将として川田武志先生が出場予定でありましたが、稽古中に足を負傷され、私がピンチヒッターとして出場しました。

第二十五回岩手国体に先鋒として参加させて頂いてから、次鋒、中堅、大将と七回目の出場となりました。

国体に初出場してから三十一年、時間の過ぎる速さに驚くばかりです。

さて、宮崎県との第一戦が開始されました。

先鋒戦は、山名選手対山本選手、二刀に構える山名に対し山本選手が積極果敢に攻撃。面二本を連取される。いやな雰囲気がか漂う、しかし、次鋒富田選手が中盤鮮やかな抜き面を決め一本勝ちし対に戻す。

中堅福多選手、副將近藤選手は、難なく

勝利しチームの勝利が決まった。

大将戦で甲斐選手と戦う。甲斐選手とは、一昨年、昨年の熊本合宿や警察大学校での剣道指導者講習等で試合や稽古をお願いした方である。

一回戦の試合結果は、次の通りであった。

徳島県 3(5) 1(3) 宮崎県

山名四段 ーメメ 山本四段○

○富田五段 メ 坂本五段

○福多七段 コメー 長友七段

○近藤七段 メ 大重七段

中尾七段 コ×コ 甲斐八段

強敵宮崎県に勝利し、気合いを入れ直し第二回戦（山形県）に駒を進めたが思わぬ敗戦を喫した。

二回戦の試合結果は、次のとおりであった。

山形県 3(4) 2(3) 徳島県

布施四段 ーメコ 山名四段○

○石田五段 コー 富田五段

貝田五段 ーコ 福多七段○

○中村六段 メメー 近藤七段

○鈴木七段 メー 中尾七段

幸先のいいスタートで中堅福多選手で二勝、楽勝と思つたが近藤選手の思わぬ敗北、大将戦になる。

大澤監督から「国体は大將戦になるから。」と言われていたのであるが、まさかこんな形でやってくるとは。

徳島県の全期待を背に戦いに臨んだが、つばぜり合いからの引き面を取られ時間切れとなる。

私の過去の試合（全国警察官大会等）振り返ったとき、チームにとってここ一番という大事な試合に私の敗北によってチームの勝利がかなえられなかった試合が多くあった。

その原因は、どこにあるのか。自分にはよくわかつているのである。

ともかく、この試合において勝つことの難しさ、一本の重みを感じた一戦であった。今年の国体も、終了した。来年の宮城国体に向け戦いは始まっている。一人ひとりが切磋琢磨し、上位入賞を目的に毎日の稽古に励みたいものである。

私のモットーは、「三挑戦」である。

○強いものに挑戦

○自分自身に挑戦

○苦しいことに挑戦

最後になりましたが、県剣道連盟会員の皆様の温かいご支援に感謝し終わりといたします。



# 国体五位入賞して

富岡東高校三年

岡田友香



十月十五日から、第五十五回国民体育大会が富山県で開催されました。今年

は富岡東高校から四名、川島高校から一名が県代表として国体出場が決まり、たくさんの遠征や練習試合を重ね、四国予選も一位で通過しました。途中、それぞれに悩んだ時期もあったと思いますが、みんなで励まし合いチーム一丸となって頑張ってきました。一回戦は、石川県でした。練習試合でも対戦することがなく、どんなチームか分らなかったし、私は初戦ということで大変緊張していました。落ちついてすることだけを考えたのか勝つことができ、チームも三対一で勝つことができました。

二回戦は、強豪鹿児島県との対戦でした。私は良い所もほとんどなくあっさり負け、てしまいました。チームのみんななど大將の見事な一本のおかげで、四年ぶり三度目の三回戦進出が決まりました。私はその試合内容に満足できず、このままでは終わりにたくないと思ったのを覚えています。

三回戦は、広島県でした。広島は大変実力のあるチームですが、練習試合等で何度か対戦していたので、相手の動きなどは分かっています。試合は、一対二で副將の私の番になりました。私が負ければ、そこで勝負がついてしまいます。初戦とは違った緊張感と絶対勝つという気持ちで臨みました。途中、私の得意技も思い切って出したのですが、軽くて決まらず延長戦になりました。そして、延長開始早々、私はなぜか「いける。」と思い、面に出ました。相手は待っていましたとばかりに私の胸を抜き去り、「しまった。」と思った時には、三人の審判の旗はあがっていました。これが、私の高校最後の試合となりました。私は大將までつなげられなかったことが悔しくて、

またどうしてあの時あんな面を打ったんだろう、なぜもつと慎重にできなかったんだろうと、今でも思います。

しかし、終わってみれば五位入賞という素晴らしい結果でした。私個人の結果としては、一勝二敗という残念な結果であまりチームの役にも立っていないのではないかと思います、そんな素晴らしい賞をいただくのは何だか申し訳ない気持ちでした。それに、富岡東のチームとしてははもとも私は補欠で、国体に出ることは私の憧れでもありませんでした。県の予選で本当に運良く勝つことができた時は、嬉し涙が止まりませんでした。最後は、私で勝負がついてしまうという結果でしたが、国体は私の中で最高の思い出です。高校三年間、剣道をやってきて本当に良かったです。私が今まで頑張ってきたのも、河田先生を始め、これまでご指導くださった、たくさんの諸先生方、先輩や後輩のみんな、保護者の支え、そして三年間ともに励まし競い合ってきた仲間たちのおかげだと思います。本当にありがとうございます。私は剣道を通じて学んだこと、

経験したことを忘れず、これからの生活に生かしていきたいです。

一回戦

徳島 4-1 石川

○昇 ココ 宗藤

○下久保 メコ 諸井

小林 ココ 塩谷○

○岡田 ドメ 中村

○矢野 メメ 杉村

二回戦

徳島 3-2 鹿児島

○昇 コメ 有上

下久保 ド 西○

○小林 メコ 杉本

岡田 メメ 南田○

○矢野 メメ 小高峰

準々決勝

広島 3-1 徳島

○後恵 コ 昇

後陽 コ 下久保○

○鬼沢 ド 小林

○長谷川 ド 岡田

長原 | 矢野

第三十五回全日本居合道大会に参加して

監督 吉岡修一

平成十二年十月二十一日(土)大分県立総合体育館において第三十五回全日本居合道大会が開催されました。九州は昔より尚武の地といわれ、武道が盛んで特に居合道においては範士九段の先生がお二人もおいでるのは東京都と大分県だけです。大分県では、範士九段河村好雄先生と国広金熊先生がおいでになり、居合道が全国一盛んな県でもあります。

毎年七月に別府市において開催されます大分居合道大会に毎回参加しております。その中で兵法二天一流の形第十代宗家今井正之先生と免許皆伝岩見利男先生の気迫のこもった見ごたえのある形又女性の方の関口流懐剣の形は優美で流れるような形を毎年拝見させてもらっています。今大会には本県より、不肖私が監督、七段の部・岸田光博選手、六段の部・斎藤吉

明選手、五段の部・高野康寛選手がそれぞれ出場しました。

第一試合場では六段の部、第二試合場では七段の部、第三試合場で五段の部で各段同時に試合が始まりました。

戦績は七段の部、岸田光博選手(五十二歳)は一回戦はシードで二回戦福岡県井出友太選手(五十二歳)に三対〇で敗れました。相手の井出選手は、全日本居合道大会で優勝一回、二位三回というとても有名な選手であります。

六段の部、斎藤吉明選手(四十三歳)は一回戦鹿児島県上国料勉選手(四十八歳)に三対〇で完勝。二回戦は千葉県大蔵選手(五十三歳)に二対一で惜敗しました。斎藤選手は左手甲の負傷で思いきった居合が抜けなかったことが残念であります。

五段の部、高野康寛選手(五十二歳)は一回戦栃木県酒巻照由選手(六十一歳)に二対一で惜敗しました。団体一位は地元大分県、二位神奈川県、三位福岡県、各段優勝者は七段の部・地元大分県久保純一選手(四十五歳)、六段の部・地元大分県小坂隆

一郎選手（四十四歳）、五段の部・北海道木村廣志選手（五十一歳）でありました。

本県の順位は出場四十六都道府県中三十二位でした。なお個人演武に出場されたのは、五段・満寿良史先生、六段・西山光次先生、七段・前田健志先生と高橋憲司先生、八段・原田勝先生と平尾勝美先生でありました。大会は「静と動」静かな中にも気迫のこもった烈しい太刀さばきが見られ、実に見ごたえのある試合が多くありました。

今大会に際しまして、徳島県剣道連盟会長遠藤一美先生をはじめ、高段の先生方にご指導ご鞭撻賜わり、又、居合道部部长・原田勝先生、範士八段平尾勝美先生をはじめ、居合の高段の先生方にたびたび強化練習会等においてご指導を賜りましたこと、この場をお借りして、厚くお礼を申し上げます。諸先生方にご指導を賜りましたのに戦績が不振でありましたこと監督として責任を痛感しております。

大会終了後いつも思うことですが、所作においては各選手とも出来ているので、後は稽古量を多くして、稽古のマンネリ化を

反省して漫然と稽古することなく一挙一動に理合あると考えながら稽古に打ち込むことが大切であると思います。居合道道歌の一つに、「居合道とは己が心に克つばかり、人の非を見て人にさからうな」と歌われております。

次大会は山梨県にて開催されます。「己に克」ことによって稽古をつみ、居合道部員の技量を向上し少しでも上位に入れますよう努力いたしますので、今後とも宜しくお願ひ致します。

**第35回**  
**全日本居合道大会**  
**都道府県対抗優勝試合**

平成12年10月21日(土)  
午前9時開始  
大分県立総合体育館

主催 財団法人全日本剣道連盟  
主管 大分県剣道連盟

後援 大分県 大分県教育委員会 財団法人大分県体育協会  
大分市 大分市教育委員会 大分合同新聞社  
NHK大分放送局 OBS大分放送 TBSテレビ大分 OAB大分朝日放送

# 全日本剣道選手権 大会結果報告

警察支部 吉田茂生



平成十二年十

一月三日、日本

武道館において

全日本剣道選手

権大会が開催さ

れ、私は一回戦

で埼玉の（上段）菊池選手と対戦しました。

菊池選手とは中央講習会で何度か稽古をし

たことがあり、ある程度相手の手の内は知っ

ているつもりでした。十月の始め、対戦相

手が決まってからは福多先生に稽古を付け

ていただき、警察の愛知遠征では警察界屈

指の上段、北村・山部両選手と試合稽古をお

願いするなど、良いタイミングで試合を迎

えることができました。

しかし結果は、メンの一本負け。試合を

見ていた人からの話ですが、私が居着い

たときのメンだったそうです。結果的にい

えば敗因は「集中力」が持続できなかったことだと思えます。もちろんそれだけではないのですが。

今、私の前には大きな壁があります。それをうち破らなければ前進はありません。内容ある稽古のみ。

本大会出場に際しまして、応援に来てい

ただきました藤本事務局長、手塚女子強化

部長、ご支援いただきましたまして諸先輩方、同

僚に深くお礼を申し上げます、結果報告

とさせていただきます。ありがとうございます

ました。



## 第四十九回

# 全国青年大会に出場して

小松島支部

切 中 克 樹



二〇〇〇年十

一月十日より四

日間、素晴らし

い青空のもと、

地域のスポーツ

や文化活動の最

大の集約の場である、全国青年大会が盛大

に開催されました。

そして、剣道男子の部で小松島支部が本

県の代表として出場させていただきました。

私達の小松島支部は、全員が小松島高校剣

道部出身者で構成された為、チームワーク

は抜群でした。

しかし、試合当日はみんな緊張のせいか、

なかなか自分の試合が出来ず、団体戦の初

戦では石川県と対戦し、代表戦まで持ち込

まれましたが、大将・佐藤が代表戦で勝利し、

二回戦へと駒を進めました。

二回戦は、先の試合で勢いがつき、宮崎

県に四対一と快勝し、三回戦では強豪・東京

都と対戦となり、一対四で完敗しました。

けれども、ベスト8まで進出できたので、

敢闘賞という素晴らしい賞を授賞すること

ができました。

翌日行われた個人戦では、各選手が精一

杯戦いましたが、満足のいく結果は出ませ

んでした。しかし、今後の稽古に対する課

題と意欲をもつことができました。

十一月十一日(土) 東京武道館

団体戦

(代表戦勝ち)

一回戦 徳島 2×2 石川

二回戦 徳島 4×1 宮崎

三回戦 徳島 1×4 東京

※ベスト8 敢闘賞

十一月十二日(日) 東京武道館

個人戦

二回戦敗退 田中 靖彦

武蔵 純郎

三回戦敗退 佐藤光太郎

園田 慎吾

原 知永

四回戦敗退 切中 克樹

又、この大会を振り返り、一番大きな成

果は、剣道から離れていた人が、十年ぶり

に竹刀を握り、稽古を再開していただいた

ことです。大会後も積極的に稽古に参加さ

れ、先日の昇段審査にも見事合格されまし

た。そして合格された本人と同様に、剣道

の素晴らしさ、奥深さを追求できたことを、

私達は嬉しく思います。

最後になりましたが、熱心に御指導をい

ただいた、堀金實先生、高木壽史先生をは

じめ小松島支部の先生方や、諸先輩方の御

指導、ご支援のおかげと感謝しております。

この誌面をお借りしまして厚くお礼申し上

げます。



## 全国警察剣道大会

警察支部 平野誠司

今年の全国警察剣道大会は、第二部において岐阜県、鹿児島県と予選リーグを戦いました。現在の規定では、毎年成績によって第一部と第二部が四チーム、第二部と第三部が六チームの入れ替えがあります。

徳島県警は、予選リーグ対岐阜戦を四対二で落とし、続く対鹿児島戦も四対〇で負けてしまい、結果的に鹿児島二勝・岐阜一勝一敗・徳島二敗となり、第三部陥落という初めての試練を体験しました。

スコア結果以上に試合は接戦で白熱したものでありましたが、やはり最後の「一本にする」という認識が足りず、詰めの甘さを感じずにはいられない内容でした。

一本になる機会に技は出ているのですが、有効打突にならない。旗が挙らないのです。一つ上のステージに上がるには、ここらの微妙な違いを一人一人が認識し、自分には何が不足しているのかを分析して地力をつ

けていかなければならないのです。

稽古をいくらやっても、今の自分を分析できなければ同じ事の繰り返しです。冷静に自分と向き合い、何が一体足りないのか自問し、その課題を自分に突きつけていくことができれば稽古が積み重なっていかない。自分としての考えを持った剣道になっていかなければ、自己表現が剣道ならば、流されずに自分と向き合うことを忘れてはならないと思います。それが自信を持った自分の剣道・個性のある剣道として確立していくことなのです。

管区最下位の汚名返上のために部員はよく頑張ったと思います。しかし、地元徳島で精一杯やっても、中央に比べればまだまだです。その環境の違いをハンデとして背負っていることを常に頭に置き、ハイレベルにイメージした剣道の中に自分を置いて稽古していくことが重要になってきます。そして、自分はそのイメージをどうやって持続させるのか、一人一人が試行錯誤して実行していかなければその地方の壁はうち破れないのです。

我々特練員は警察剣道という立場を肝に銘じ、中央で得られた刺激を練り直してイメージとして伝えていく責任があると思います。これからの徳島の剣道を高めていくため、日々高い目標を見据えた自分と葛藤しながら、精一杯の汗を流してゆきたいと思っております。

最後に、ご指導・ご支援くださいました県連盟の先生方に御礼を申し上げ、結果報告といたします。

## 第十一回全日本 選抜剣道七段選手権 大会に出場して

警察支部 平野誠司

剣豪「丸目藏人」生誕四五〇周年を記念して開催されるこの大会も今年で十一回を数えます。この大会の出場依頼が届いた時は、大変光栄に思うとともに何か熱いものが自分の中で満たされていくのを感じました。

今年のこの大会は、全国から三十二名の招待選手が集まり、宮崎選手の三連覇も懸かった大会でした。この大会の試合場は、他の大会と異なり中央にひとつの檜舞台で行います。全日本選手権でも姿を消したあの檜舞台を設置しているのです。自分は経験がなかったためにいつもより緊張をしていました。

試合内容は次の通りです。

第一回戦の相手は、鹿児島県の田中選手。初めての対戦でもあつて慎重に相手の出方

を見るつもりでいた。立ち上がり、先をか  
けながら対峙していると相手は徐々に後退  
していく。次に小さく鋭く入ると、相手の  
手元が浮くのを感じた瞬間小手を打った。「は  
いった。」と自分では確信したが、旗は二、  
三度交錯しながら、小手に反応してすりあ  
げて打った相手の面に挙っていた。

しかし、後から思ってもこのとき驚くほ  
ど落ち着いていたように思う。ここで慌て  
ふためいていたなら初戦敗退は目に見えて  
いたのであろう。二本目。また、静かに間を  
詰めていくと、相手は立ち上がり以上に後  
退していく。逃がさないように少しずつ、  
じりじりとコート角に追いつめていった。  
そして、攻めがそのまま双手の突きとなっ  
て相手の喉元へ。突き刺さった瞬間、身震  
いしたように思う。勝負。さすがに相手も  
下がりません。今度は取りにこようとす  
るのが体全体に表れてきた。相手の竹刀をか  
いくぐって小手を打つとこれが決まった。

第二回戦の相手は、京都府警の定金選手。

警察官で大学時代からよく対戦した選手で  
す。立ち合い、またしてもコート角まで追

いつめると今度は面に出たところを、余し  
ぎみに返し胴を打たれてしまった。二本目。  
コート中央で対峙が続く。小さく鋭い攻め  
を見せて裏鎧をはうように小手に出れば見  
事にこれが決まった。残り十秒位。まだつ  
いていると思つたのを覚えている。延長と  
なり、またこちらの攻めに後退を見せ、角  
まで来ました。初太刀が脳裏をよぎり、そ  
の瞬間表を攻めてから裏に回して突いた。  
相手は面に反応していたので、そのまま喉  
元へ。初戦に続く逆転勝ち。

第三回戦の相手は警視庁の寺地選手、今  
大会の優勝者である。攻めに対しても今度  
は竹刀をうまく抑え流して絶対退がらない。  
中央で対峙が続く中、突然相手が担いだと  
思うと小手にきた。不意をつかれた。手元  
は挙げなかつたつもりでいたが、無情にも  
旗は挙げた。その後も機会を待つて技を出  
しましたが、ことごとくはずされてしまい、  
決定打のないまま時間切れ。この手の使い  
手を捌くことが今後の問題でもある。

結局はベスト8で終わり、もう一つ上に  
いきたかったという気もありましたが、初

めて経験した七段戦で自分の剣道を出しき  
た満足感に浸っておりました。七段戦とい  
うことで「自分の剣道を出し切ろう」と思っ  
たことが良かったと思います。若い時は勝  
つことが自分の支えとなって自信につな  
がることもあり、「自分の型」より「勝ち」が  
優先する時期もありました。「勝ち」にこだ  
わりすぎて自分を崩して勝負してしまうと、  
負けたときに名にも残らないように感じて、  
今の稽古が果たしてこれでいいのか判断が  
できなくなり、稽古の場にも何も生かさ  
れないのです。自分は毎日の稽古そのものが  
一番大事であると思つているので、今の自  
分を出しきる事で勝負さえできれば、勝つ  
ても負けても今後の方向付けがしやすいの  
です。

剣道は普段の稽古も試合も、そして昇段  
審査もすべて同じに表現するのが理想です。  
試合では今の自分に何が足らないかがよく  
わかるし、審査でも反省ができるのです。  
試合用・審査用といった自分は、すなわち

「有為の自分」であり、すべてを一つにし  
ていれば、「無為自然な自分」によって集約

していけるはずなのです。どんな場でも「いま、ここで、自分の剣道」を表現するだけだどつくづく感じた次第です。

最後に、いつも先生方から貴重な課題を与えて頂き心より感謝しております。今後とも精進の糧として大切にしていきたいと思えます。

## 全日本高齢者 武道大会について

### 阿部全司

第二十二回大会が去る平成十二年六月五日（月）、日本武道館で実施されました。

その模様は、寿組・八十歳以上六十五名、特組・七十五才〜七十九才八十八名、A組・七十才〜七十四才百六名、B組・六十五才〜六十九才七十名、C組・五十五歳以上五十九名、計百七十五名、剣道のみ。他に、銃剣道、なぎなたを含めて、五百六十一名の参加、盛大でした。本県からは一村喜佐男氏八十七才を筆頭に、前会長勝浦守先生が寿組へ、吉田祖先生、阿部全司、阿部三十三先生、特組へ、遠藤一美先生、近藤康次先生が佐藤勇先生、中山啓男先生がA組へ、東内勉先生がC組へ計十名が参加しました。

年齢別のコートに分かれてトーナメントの試合に出場し、一回戦で破れる者、二回、三回と勝ち進む者、皆それぞれに矍鑠たる戦果を修めて、会終了と共に武道館を後に

しました。

今年の入賞者無しで、寂しい思いでしたが、九段会館で、四泊した者達は三菱道場や、野間道場の朝稽古に出たり、西山道場の午後八時からの稽古に出て交剣知愛の有意義な時を過ごすことが出来ました。以上。

## 第十三回

# 全国健康福祉祭大阪大会

ねんりんピック二〇〇〇大阪

監督 山田 仁

平成十二年十一月二日、県庁にて結団式後、バス四台で出発、午後八時頃、東大阪市の県選手団宿舎に着く。

十一月三日、総合開会式（大阪ドーム）に参加。今年は近藤康次選手が県旗の旗手を務め、堂々の入場行進であった。後、剣道交流大会会場（羽曳野市総合スポーツセンター）に移動し、監督会議と歓迎会があった。（宿舎天王寺から電車とバス乗り継ぎ一時間二十分余りかかる。）

十一月四日、いよいよ剣道交流大会当日。五十九チーム三百六十三名の剣士が集まり開始式。直ちに試合開始。四試合場の内、我々は第一試合場の第四試合で岐阜県と一回戦。各選手健闘したが及ばず。

次いで第二試合で岩手県と二回戦。両者

正々堂々の模範的な試合を展開し辛勝する一勝一敗となったが、残念ながら決勝トーナメント出場ならず。ブロック二位で敢闘賞を貰って帰る。



戦績は次の通り。

予選リーグ一回戦

	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	
岐阜県	篠田	三島	杉原	松久	林	○
	X		メメ	コメ	コメ	$\frac{6}{3}$
	X		メ			$\frac{1}{1}$
徳島県	川田	鈴木	滝本	近藤	糸谷	×

予選リーグ二回戦

	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将		
徳島県	川田	鈴木	滝本	近藤	糸谷	○	
	コメ	X		コ	X		$\frac{3}{1}$
		X		メコ	X		$\frac{2}{1}$
岩手県	高野	寺田	桑原	千葉	菊地	×	



第13回全国健康福祉祭大阪大会剣道交流大会 平成12年11月4日～5日  
大阪府羽曳野市立総合スポーツセンター

# 大会所感

## 徳島四大学・学生選手権

### 〔眉山杯大会〕

徳島大学剣道部師範

勝 沼 信 彦



徳島県に所在

する四大学、徳

島大学・徳島文理

大学・四国大学・

鳴門教育大学の

個人選手権であ

る眉山杯は、昭和五十七年に私の発案により

創設されて以来、今年で第十九回になります。

年々参加者も多くなり百五十名程の

大学生が毎年十二月に集まり、その年の一

位から三位までの男・女受賞者を決定してお

ります。大会には県剣連から審判と指導に

十名内外の先生が協力していただき、試合

後には合同稽古をしていただいております。

今年は大澤孝彰八段に審判長を務めていただき盛大に開催され、第十九回大会の結果は次の如くでありました。

男子 優 勝 矢野 俊夫 (徳大・医)

準優勝 国安 直樹 (徳島文理大)

三 位 田中 貴之 (徳大・医)

三 位 山内 崇光 (徳島文理大)

女子 優 勝 平尾 奈海 (徳島文理大)

準優勝 岡本 恭子 (徳島文理大)

三 位 杉浦 良子 (徳大・医)

三 位 近藤 多恵 (徳島文理大)

今年の試合で特記すべきことは、徳島文

理大学の国安が大学に入ってから始めた逆

二刀で活躍し、準優勝したことであります。

徳島県下四大学の大学生剣道集団は県剣

道連盟としても大切な集団として益々の育

成をお願いしたい。

## 寺西杯

### 第三回大会を終えて

鳴門市光武館

寺 西 ひとみ



先ず、この大会にかかわって下さいました総ての方々にかから厚く御礼申し上げます。

運営全般に亘ってお世話になった光武館

保護者会の皆様、後援した下さったそれぞ

れの機関の方々、御参会の来賓、役員の方々、

終始審判の労を担って下さった先生方、道

場の先生・選手の皆さん、応援の保護者の皆

さん、寺西杯を盛り立てて頂きまして本当

に有り難うございました。皆様方の熱い御

協力あつての寺西杯大会でございます。

最初手探りで始めた大会でしたが、三回

目の大会の申込みを受けた時の余りの多さに

驚き、慌て、どうなることかと心痛めま

したが、皆様の御理解と御援助により、やっと終了することが出来たように思います。

思い起こせば三年前、家族だけで始めた手作りの大会でした。長年、警察官という

仕事の傍ら、少年剣道の指導に励み自らもそれを生きがいにしてきた夫が退職して、「こ

れからは剣道一筋に打ち込めるぞ」と言った矢先、病を得て、もっと剣の道を極めた

いという願望が断ち切られてしまいました。剣道具をつけて子供達に打ち込ませていて

も、どこか心もとない感じで、傍目にも痛々しく見えました。昭和三十五年から今日ま

で四十年余、他のことには目もくれず、仕事以外では剣道だけに明け暮れて来た夫の

寂しさが、手に取るように分かる家族としては、何とかして夫が登って来た足跡を顕

彰してあげたい、父の思いを形にして残したいという気持ちにかられて、誰に相談す

ることも誰の力を借ることも考えず、家族だけの手作り大会を始めたのです。

優勝旗を買いカップやメダルを用意し、プログラムもワープロで、市民会館を会場

に、第一回目の大会は始まりました。

招待道場も鳴門市近辺だけに止どめ午前中に終わるようにしました。従って、優勝旗やカップは殆ど光武館の選手が持つて帰りました。

市民会館での試合は珍しいので会場を間違えて、市内をうろろしたチームがあつて、その到着を待つて開会式を始めたり比較

的のんびりした大会でした。その後の反省会で保護者から「先生の長

年の御苦労に報いるのは我々保護者の役だ。来年の寺西杯は保護者主体でさせて下さい」と、申し出て下さったのです。あり難い申

し出に家族一同涙いたしました。それが第二回大会でした。保護者会会長

さんをトップに、何回となく会合をもち、資金面・運営面と、それはそれは頭の下がる

ような御苦労で大会は大成功を収めました。規模も大きくして県下に呼びかけ、少年

剣士諸君に試合の機会を提供し、互いの友情を育み、剣道を好きになってもらい、この道を益々発展させたいという願いのもと、

皆一丸となって頑張りました。ご存知のように光武館は、毎年真夏にモー

ターボート主催の小学生の剣道大会を行っています。文字通り汗だくたくで保護者やOBの人は試合運営に当たってくれていま

す。それに加えて真冬に、もっと大きな(中学生も参加するので)大会の運営をしますから、指導者・保護者の負担は並々ならぬ者があります。

こうして迎えた第三回大会は、県外からも「是非呼んで欲しい」との要望があり、

こちらの思いとはうらはらに予定をはるかにオーバーした参加者で、試合が夜になつてしまい、先生方には非常に御迷惑をおか

けてしまいました。誌上をお借りしまして深く深くお詫び申し上げます。

この大会の特色は、団体戦のメンバーを低学年と高学年で構成したこと、中学生の個人戦があること、団体戦の選手も個人戦

に出場できることだと思えます。今後の課題としては、もっと広い会場を借りるということだけです。何とかして県

民体育館が借れるように努力しますので皆様も御声援お願い致します。そして、この大会が今後も益々発展継続できますように、

## 第1回 平成10年12月23日 鳴門市市民会館

	優 勝	準 優 勝	3 位	
団 体 戦	鳴 門 市 光 武 館 A	上八万剣道倶 楽 部	藍住剣道スポーツ少年団	
個人低学年	山 本 義 行 (光 武 館)	梅 木 宝 命 (光 武 館)	松 浦 一 真 (入 田)	
個人高学年	川 口 雄 大 (光 武 館)	橋 本 祐 希 (光 武 館)	米 田 正 人 (光 武 館)	
個人中学男子	佐 伯 隆 仁 (小松島中学校)	木 田 崇 史 (北島中学校)	湯 村 潔 喬 (蔵本中学校)	山 口 裕 輔 (藍住東中学校)
個人中学女子	寺 西 由 佳 (鳴門第一中学校)	笠 井 友 加 (鳴門第一中学校)	福 田 まり子 (藍住東中学校)	久 保 雅 美 (加茂名中学校)
団体監督賞	寺 西 明 弘 (光 武 館)			

## 第2回 平成11年12月19日 鳴門総合運動公園武道館

	優 勝	準 優 勝	3 位	
団 体 戦	徳 島 至 誠 館	大 野 小 学 校 剣 道 部	鳴 門 市 光 武 館 A	小 松 島 小 剣 ク ラ ブ
小学1・2年	曾 根 健 貴 (至 誠 館)	岩 佐 将 希 (練 武 館)	大 羽 寛 史 (新 野)	桑 原 大 樹 (鴨 島)
小学3・4年	村 井 僚 (至 誠 館)	松 本 明 真 (至 誠 館)	中 山 大 地 (鴨 島)	山 本 敬 太 (光 武 館)
小学5・6年	芳 田 安 美 (本 町)	新 田 裕 (龍 虎 館)	西 岡 敬 太 (鴨 島)	林 勇 作 (光 武 館)
中学男子	西 崎 雅 弘 (坂野中学校)	佐 伯 隆 仁 (小松島中学校)	高 瀬 広 詩 (坂野中学校)	山 本 義 裕 (鳴門第一中学校)
中学女子	寺 西 由 佳 (鳴門第一中学校)	住 友 香 織 (阿南第一中学校)	佐 竹 加 容 子 (阿南第一中学校)	久 保 雅 美 (加茂名中学校)
団体監督賞	中 山 繁 輝 (至 誠 館)			

## 第3回 平成12年12月17日 鳴門総合運動公園武道館

	優 勝	準 優 勝	3 位	
団 体 戦	龍 虎 館	鴨 島 少 年 剣 道 教 室	徳 島 至 誠 館	大 野 小 学 校 剣 道 部
小学1・2年	岩 佐 将 希 (練 武 館)	木 下 裕 貴 (入 田)	松 本 好 史 (至 誠 館)	渡 辺 貴 文 (香川養心)
小学3・4年	福 川 敬 太 (龍 虎 館)	桑 原 大 樹 (鴨 島)	桜 木 鉄 也 (坂 野)	小 西 貴 大 (那賀川B&G)
小学5・6年	玉 田 越 大 (至 誠 館)	山 本 義 征 (光 武 館)	大 津 孝 太 郎 (阿 南)	片 山 将 志 (鴨 島)
中学男子	大 石 洋 史 (阿 南 二)	玉 田 康 朗 (文 理)	浅 井 敬 博 (石 井)	大 西 喜 雄 (阿 南 一)
中学女子	吉 岡 穰 (阿 南 一)	新 居 見 綾 (鴨 島 一)	中 川 一 美 (小 松 島)	近 藤 三 菜 子 (鴨 島 一)
団体監督賞	本 田 耕 二 (龍 虎 館)			

## 栄光の記録

少年剣道が益々盛んになり、道を踏み外す

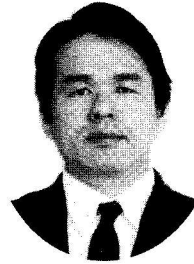
少年たちが少しでも減少しますように願ひ

ましてこの稿を終わります。

## 第二回 中四学連剣友剣道 大会を主管して

鳴門教育大学

木原 資 裕



平成十二年十二月十日、鳴門教育大学体育館において、第二回中四学連剣友剣道大会が開催されました。この大会は、大学剣道部出身の卒業生たちの大会であり、関東や関西では、十数年前より、実施されています。中四国では、第一回大会が、平成十一年に岡山で行われ、今回、鳴門で行われたわけですが、大会をお引き受けした時には、数少ない剣道部員（当時、学部生六名、大学院生四名）で鳴門でできるだろうか、地理的な問題で、参加者が少なくなるのではないかと等々、不安がありました。

補助員につきましては、徳島大と四国学院大の剣道部員が、応援に来てくれました。参加者も、前回とほぼ同数の選手・役員約三百名が集いました。何よりも、審判長に大澤孝彰先生をお迎えし、審判員として数多くの徳島県剣道連盟の先生方にたいへんお世話になりました。また、堀江幸夫先生には、記念手ぬぐい作成のために揮毫して頂きました。さらに、天候にも恵まれ、無事、大会を終えることができました。

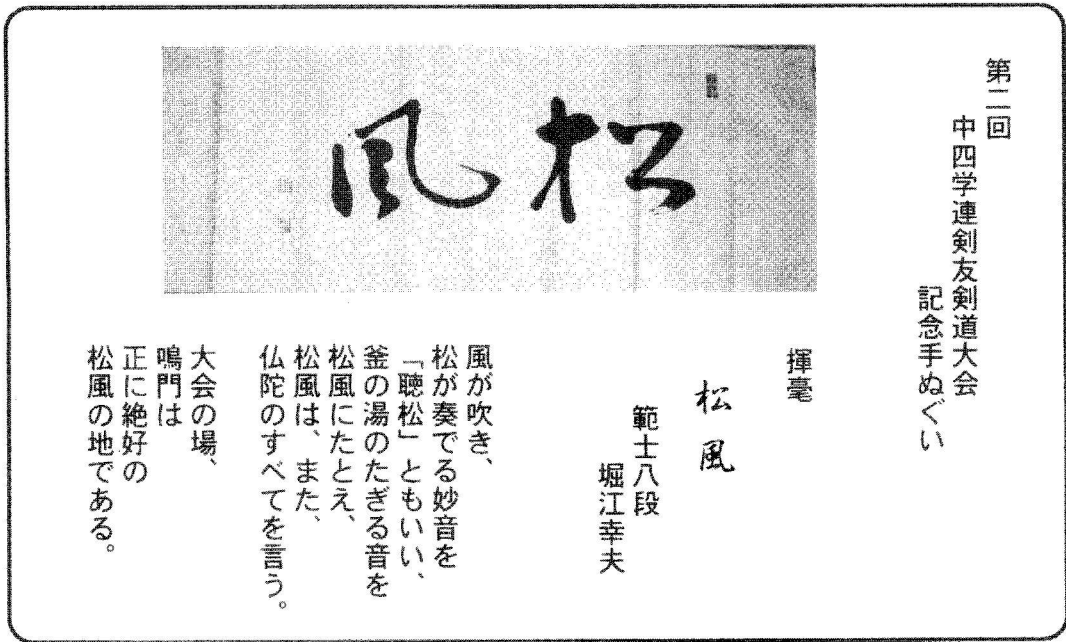
この試合は、三人戦で行われ、組み合わせは、チーム内の選手の合計年齢順に配列することにしました。実際に、二十代選手が集まったチームもあれば、四十代半ばの選手が集まったチームもあり、できるだけ、年齢の近いものが試合できるようにと、今回より、試みられた方式でした。

選手の中には、世界選手権や全日本選手権等で活躍している使い手も多く、見ごたえのある試合が展開され、好評でした。徳島県関係では、飯田栄一・加藤哲裕・河田清実選手が筑波大Cが三位入賞し、大会で選手宣誓をした竹内佳代子選手率いる筑波大

Bが、女子の部で、準優勝と健闘していました。

次回の第三回大会は、再度、地理的条件の良い岡山で開催されることが決定しています。徳島より、今回以上にメンバーが集い、剣道の資質向上とお互いの親睦を図ってほしいと思います。





## 中四学連剣友剣道大会 栄光のあと

### <男子団体戦>

大会回数	期日・会場	優勝	第2位	第3位
第1回	H11.11.28 岡山大学第2体育館	筑波大学A	日本体育大学C	日本体育大学A 法政大学A
第2回	H12.12.10 鳴門教育大学体育館	松山大学A	筑波大学A	京都産業大B 筑波大学C

### <女子団体戦>

大会回数	期日・会場	優勝	第2位	第3位
第1回	H11.11.28 岡山大学第2体育館	筑波大学B	鹿屋体育大学	香川大学 筑波大学A
第2回	H12.12.10 鳴門教育大学体育館	筑波大学A	筑波大学B	表彰なし

# 随想

## 剣道における

### 自己点検の大事

副会長 勝 沼 信 彦

会社・学校・社会組織では今日、自己点検・自己評価の重要性が言われている。次の進歩・飛躍のためには先ず現状の自己点検・自己評価からスタートすべきということである。

私は昔から剣道ほど自己点検の重要さが色々の表現を借りて強調されてきた芸はないと考えている。剣道は自己の内面を見つめる芸であるとも言える。剣道における至極の目付けと言われている「遠山の目付け」というのは相手と相対していながら「自己の心の内面を見つめている」ことの大切さを言っていると考えられる。

剣道社会では良く言われる言葉の「無心」「無」「放心」などは勝敗の欲から離れる、

というような次元の低いことを言っているのではなく、上記のような心境になることを言っているのであると解釈する。本来「心を無くす」と言うことは良くない事と考えている。無心で勝った、というのはフロックで勝った事を誤解していることも多いものである。無心で勝った事などは本来おぼえていないという事なので再現はできないし、進歩はしていないと考える。

私事で恐縮であるが、私が一番強いときは、敵と相対して構えていながら今、自分の左拳はどんな型でどこにすえられているか、左足はどの位置にある

か、等を自己点検している心境のときであると思っている。自分の心は自由に解き放たれているか、と内面を見つめているときであると考えている。更に、剣道は有り難いことに稽古・試合で自分が行った全過程をスロービデオの如く頭の中でイメージ的に何度でも再現

でき、自己点検できる運動である。従って学生として、社会人として、教師・学者として多忙であり、実際の稽古時間が少なくても、常在座敷、イメージトレーニングで、自分の頭の中のスロービデオで稽古・試合を再現して点検し、工夫することができ運動である。考え、工夫し、自己点検しない人は決して上達しないと云える。或るところ以上は剣は心術であるからである。また、剣は生きざまの美学の追求であるからである。此の文、独断をお許し願いたい。



## 国体の思い出(続)

副会長 大澤 孝 彰

三、監督と審判は楽し?



選手として、

昭和四十年第二十回岐阜国体から平成七年第四十八回徳島国体まで二十三回出

場しましたが、監督としては一回も参加しませんでした。又、審判としては昭和六十二年八段に昇段して数回参加しました。選手として出場している時、監督審判はなんとなく「いいなあ」と羨望していました。

昭和四十七年第二十七回鹿児島国体では副将で参加しました。監督は竹原常雄先生(現在九十八才でほんとうにお元気ですばらしい生活をして居られます)でした。

徳島の剣道  
高松―岡山―福岡―鹿児島と列車を乗り継いで成年の部(剣道)だけの楽しい旅でした。途中何処の駅だったかよく思い出せま

せんが停車した時竹原先生がホームに走り出て「おやつ」をたくさん買ってきてくれました。ちょうど退屈して何かほしいなあと思っていた矢先でした。その動作の敏捷な事、もう七十才近くになられていたと思いますが、只々感心しました。これは一つの事例ですが選手が試合に全能力が発揮出来るよう出発から無事帰県するまで、剣道指導健康管理は勿論の事使い走り小使いさんの役まで一手に引き受け、やりこなせなければ、伊達や酔狂で監督は出来ないと感じ、監督は「いいなあ」と云う思いは消えてしまいました。

堀江先生が、八段に御昇段され、国体の審判員として連続で参加されて居られる時、監督に抱いた初めの感情と同じように感じ、堀江先生がお話される審判苦労話等、上空で聞いていました。ところが、私が審判員で参加する事になり一試合終わる度に控え席や控え室等で審判員を指導される大先生に姿勢、態度、審判旗の上げ下ろし等基本から有効打突の見極め等々まで細かい厳しい指導を受け、全く散々な目に合いまし

た。しかも、朝は朝星、夜は夜星という言葉がある通りの重労働でした。当然の事とは言いつら、全神経を集中して、ほんとうに三日間の審判で心身共にたくたくたになり、あらためて審判員の重要さと御苦勞を認識しました。

四、折角なのに何故観光しないのか

二十三回も選手で全国各地に行ったのに各地の観光は殆どして居りません。亡妻に折角あちこちに行くのに試合が終わって少し位、観光して見聞を広めたらどうですか。勿体ない、とよく云われました。代表で国体に参加しているので、観光なんか不謹慎だと答えていましたが、本音は試合に備えて一生懸命、稽古で頑張って試合が終わると勝っても負けてもほっとしてもう早く家へ帰ろうと云う気持ちになり、観光等余裕はありませんでした。早く帰って次に備えて、早速稽古を頑張ろうと云う気持ちならすばらしいのですが。

只一度だけ昭和五十三年第三十三回長野国体に参加した時は黒部ダムが近いのでこれは絶対一見の価値ありと思ひ試合後、選

手全員で本格的に見物しました。当時はまだ宅急便等余り無く、剣道具をかついで「ダム」を見学している写真が残って居ります。汗を拭き拭きの剣道具の重さがたくさんの尊い犠牲者を出して建設された黒部ダムの壮大さに拍車をかけた記憶が残って居り、ここだけはもう一度行ってみたいなあと思っ  
て居ります。

(続) 五、六は次にお願ひしたいと思っ  
ています。

## 学校剣道連盟に ついての思い出

副会長 高下正義



学校を去って、  
最早十五年、気  
分は若いつもり  
でも、気分には  
がついて行かな  
いことを痛感す

る昨今となりました。ところで、平成十年、  
学校剣道連盟の創立四十周年にあたって、  
次のように表彰を受けましたので、その思  
い出を記したいと思います。「あなたは多年  
にわたり、本連盟の役員として、この運営  
に尽力し、学校剣道の普及振興に貢献され  
ました。よって本連盟四十周年にあたり、  
その功績を讃え、表彰いたします。平成十  
年八月十日、財団法人全日本学校剣道連盟  
会長 坂本三十次」誠に有難く、関係者  
に感謝いたしております。

さて、私が学校剣道連盟のお世話をす

ようになったきっかけは、昭和四十七年、  
剣道七段に合格し、奈良県柳生での全剣連  
中堅指導者講習を終えた頃と思います。富  
岡西高校の松本一城先生と徳島農業高校の  
下村富夫先生から学校剣道連盟の世話をし  
てほしいとの依頼がありました。特に、下  
村富夫先生からは、自分は管理職であるの  
で、学校剣道連盟の世話を全面的に頼むと  
言われました。当時事務局は、中川虎夫先  
生から高島稔之先生(現城西中学校長)に  
引き継がれ、私が理事長代理としてお世話  
をすることになりました。五十年頃から下  
村先生が会長に、私が理事長として、昭和  
六十年まで経過したと思います。何分に二  
十年く三十年前の事なので、記憶に誤りが  
あるかも知りませんが、御容赦願いたい  
と思います。

学校剣道連盟とは、全国の小中高校、大  
学、教育委員会の教員及び職員を以って組  
織され、事業として、毎年全国のどこかで、  
全国教職員剣道大会とその開催地で剣道講  
習会が行われ、その時に公認審判員の試験  
を実施しておりました。昭和五十年代になつ

て四国教職員大会も実施されるようになり  
ました。この発案は、高知で高校四国大会  
の前夜祭の時、本県の下村富夫先生の発案  
で、高知の腰山先生と相談し、「四国は一つ  
だ。お互いに切磋琢磨し、教職員の向上と  
親睦をはかろう」と言うことで、実施する  
ことになり、先ず第一回は徳島でやろうと  
の事で、徳島市で実施しました。

県段階の事業としては、全国大会の団体  
及び個人の選手、四国大会の選手を決める  
ための予選会（試合）を実施、会場として  
は初期は徳島農業高校で、しばらくして南  
方に選手が多かったので、富岡西高校で毎  
年実施しました。

次に学校剣道連盟会員相互の稽古会を、  
毎週土曜日、徳島農業高校で三年位、徳島  
商業高校で二年位（平島先生在勤中）実施。  
毎回五、六名出席し、高校生と共に稽古を  
しました。

又、学校剣道連盟の総会を高校総体の時、  
審判慰労を兼ね日本旅館（中川虎夫先生宅）  
で実施。剣道連盟の先生方はじめ会員の先  
生二十〜三十名位出席、各位の共通理解と

親交を深めました。

又会員の皆さんと全国大会に参加したの  
は昭和四十三年東京、四十五年長野、四十  
六年鹿児島、四十七年千葉、四十八年茨城  
の下館、五十年名古屋、五十一年青森の八  
戸、五十二年大阪、五十三年高千穂、五十  
四年日光、五十五年島根と選手二回、監督  
兼選手一回、監督八回出場。全国講習会、  
長野と千葉に参加。大会の状況、選手の皆  
様、他県の選手、開催地の状況や温かい人  
情等に接し、剣道とそれ以上の人間生活に  
ついての勉強になったと思います。

全国大会について苦労したのは、毎年選  
手の旅費の捻出で、県剣道連盟へ補助金を  
お願いし、又特別寄付金として企業等から  
もいただき、お世話になったことを感謝い  
たしております。

次に、私は高体連に所属しており、生徒  
が四国や全国大会に参加することが少なかっ  
たので、審判として、四国大会・全国大会に  
参加しました。高校の四国大会の審判は四  
国を三回位巡回、又全国大会の審判は五回  
（滋賀、高知、愛知、鹿児島、秋田）参加

でき、一回につき審判講習一日、審判四日、  
全国レベルの剣道を目のあたりに拝見し、  
又多くの先生方と接し、お互いの研鑽と親  
交を深め得たことは、私の剣道人生に大き  
く得るところがあったと感謝いたしております。

当時、本県学校剣道連盟の会員数は三十〜  
四十五名位でしたが、今日若い剣道の先生  
方が沢山生まれ、会員数百名近い人員にな  
り、生徒の指導陣が充実し、中体連・高体連  
の大会でも沢山の審判の先生ができて、学校  
剣道のため、又本県剣道会発展のためにも  
慶賀にたえない次第です。

尚、この機会に失礼とは思いますが、先  
輩の先生方からよく聞いた話でもあり、私  
の所見の一端を述べさせていただきます、会員  
の皆様の参考になれば幸いです。

一、県内外の大会、研修会には積極的に  
参加すること。

二、生徒との稽古ばかりに終わらず、大  
人の強い稽古をして、実力をつけるこ  
と。

三、剣道の気持ちで、自信を持って生徒

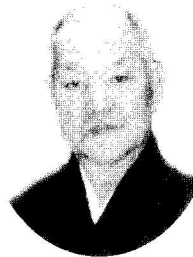
指導にあたること。

今回編集の先生から随想との事でしたが、自分のことを申し述べ、失礼いたしました。が、本県学校剣道連盟の発展と、会員の先生方のご健康、ご多幸をお祈り申し上げます、筆を擱きます。

## 居て合すこと

審議委員長

平尾勝美



私達の身の周辺には、人間関係を始め、天災、人災、交通事故、病気等否応なしに迫ってくる

色々な事象があります。望むべくもない事柄ですが、さりとて避けて通ることのできないことで、私達は之を受け止め、善処して行かなければ人生と言う長い道を歩むことは出来ません。

人間関係にしましても対処の仕方により喧嘩にもなれば、又災い転じて福と成し、雨降って地固まるの例えの如く、それを契機にお互いの理解を深め、信頼と真心で固い絆を築きあげることも出来ます。私達は、自分の心を磨き、礼節を重んじ、人様を尊敬し、平和な解決の出来る人間性を養わな

ければなりません。又、身に危険が迫った時、素早く対処して難を逃れることも、身の安全上極めて大切だと思えますが、剣道や居合道の修練に依り、気の働き、身のこなしを体得した人は之を避け安全を確保することが可能であると思えます。

それは剣道連盟の会員各位の中には怪我や、特に交通事故に遭う人が一般の方よりも大変少ないということで立証されて居ります。因みに私が鴨島少年剣道教室を創設して今年で二十八年になりますが、その間数多くの少年諸君を受け入れて参りましたが、交通事故で入院した人は全くありませんでした。間合いを知り、気の配りを身につけた結果でありまして、何はともあれ外に自負できるようなことは何もありませんが、このことだけは大いに気を良くして居るところでありまして、子供達をお預け頂いた御父兄の皆様に対する感謝の贈り物と思つて居ります。

居て万象に対処し、安全且つ平和裡にこれを解決して行くことは剣道、居合道の神髓であります。居合道は剣道の源でありま

して、人の知恵が動物の皮の利用法を考え出した結果、袋竹刀の出現に依り、動く相手と直接稽古出来るようになったのが剣道であります。居合道の修練により、気を練り手の内を会得することが、剣道を助長し、又剣道の稽古で、体捌き、気位、気迫等を体得することにより居合道の修練に役立つところ大なるものがあります。茲に両者の相乗効果が生まれることは先人の教えとして今に伝わって居りまして、正に「剣居一体」の所以であります。

全日本剣道連盟におきましても、居合を通じて抜刀や納刀は勿論、刃筋、気迫、手の内など剣道人にも大いに役立てて頂きたいとの願いから数多い流派の中より基本的な技を抜き出して、「全日本剣道連盟居合」なるものを作り上げ国内はもとより世界各国で盛んに修練されております。剣道を愛好される皆様には剣居一体の真意をご理解の上居合の修練にも取り組んで頂きたいものと願って居ります。

剣道、居合道の修練はもとより日常生活の中にも常に「居て合す」ことを心掛け剣

道の理念である。「人間形成」を目標として生ある限り精進して参りたいと思つて居ります。



# 開館十周年の 節目を迎えて

徳島至誠館

中山啓男

## 一、父と子の約束

昭和四十三年当時、私は日和佐中学校の教師として、また、部活動では卓球に情熱を燃やしていた。ある日剣道部顧問の大橋先生から「剣道してみませんか。先生は剣道に向いていると思います。」と言葉巧みにお誘いを受けた。

私の年代は、戦時中とあって軍事教練は必修科目であり、軍刀代わりの木刀で切り込み隊の稽古が日課であった。配属将校の腰にする軍刀に異常なまでの興味を抱いたことを思い出していた。戦後は、G・H・Qの指令で剣道は禁止されていたので剣道とは縁のない青年期を送った。剣道をしてみたいとの衝動に駆られながらも、それは卓球部員に対する裏切り行為であり良心の呵責に深く悩んだが熟慮の末、剣道を選ぶことにした。今もその当時の卓球部員の顔

が思い出されて胸が痛む。

厳しい稽古が始まった。三十代後半に始めた剣道は大変苦しいものであった。煙草も止めて摂生に努めた。時には生徒達が基本を教えてくれた。また、平岡・若松・張野・福井・影山の各先生方にもご指導いただいた。数年が経過し、奥深い剣道の魅力を体感する中で、これは自分だけで終わらせてはならない、息子にも是非剣道を通じて、心と体を鍛えて欲しいと願い剣道に誘った。少年野球に熱中していた彼は、中学入学を契機として剣道の道を選んでもくれた。父と子が同じ汗をかき、共通の話題が弾む時の喜びは格別のものがあつた。

彼が中二の夏、県総体で個人優勝するこゝとができた。幸運とは言いながら、我が子の将来を決める出来事であつた。「可愛い子には旅をさせよ」の古い教訓に倣い、高校は愛媛の新田高校に進学させた。稽古の厳しさ、上下関係、人の世の厳しさを嫌と言うほど味わったはずである。この事について多くを語らないが、親の私には手に取るように分かつていた。「将来剣道場を開き、

日本一の剣士を育てよう」これが親子が交わした男の約束であつた。

高校を終え、日本体育大学に進んだ彼は武道学科で剣道を専攻した。現在は徳島文理高校で教鞭をとり二十余年を数えている、部活動では剣道部長として、監督の玉田先生と二人三脚で、県下制覇に熱く燃えている。かたわら道場での指導も、指導者の協力を得て、子供達に力をつけている。

## 二、道場開館と素晴らしい出会い

平成三年十二月、堀江剣道範士八段、平尾居合道範士八段の両先生をはじめ、有志多数ご出席のもとに徳島至誠館は、羽ノ浦の一角に産声をあげた。三十年の昔、親子で交わした約束が現実のものとなった感慨は言葉では言い表せないものがあつた。しかし、この陰には私たち親子に対してご声援を頂いた先輩、友人、知人の存在は忘れはなるまい。

徳島至誠館は「至誠通天」を道場訓として、心身を鍛え、将来社会に貢献できる子供の育成を目指している。「ねばり強い子。良く考える子。思いやりのある子。」を実践

目標として、孫娘二人を含む道場生十一名で船出した。また、石井博先生（現、城東中教頭）がお嬢さん同伴で加わってくださった。

人には、出会いという不思議な営みがある。もし、大橋先生との出会いがなければ剣道とは無縁であり、今頃は老いた体を引き摺りながらピンポン玉を追う老後であったかも知れない。彼との出会いは、私の人生を大きく変えた。

石井先生と副館長との出会いもまた不思議な縁であった。先生が中体連専門部長時代に、道場開設のお話をしたとき、「軌道に乗るまで私がお手伝いしましょう。」と力強いお言葉を頂いた。との報告を受けて親子で喜んだあの日が懐かしく想い起こされる。附属中から美郷中にご栄転になるまでの四年間、後援会組織の草案、結成など徳島至誠館の骨子をまとめてくださった。そして、開館後初めての県下優勝を見届けられて新境地に赴かれた。

石井先生を語らずして、徳島至誠館を語ることは、私たち親子には出来ない。この

出合いをいつまでも大切にしたい。

河田・村井・鎌田・曾根・清野・上田・白木・玉田の各先生が、それぞれジュニアを伴ってのご参加を頂き今日に至っている。特に河田先生には、全国レベルの富東剣道部を育成する極めて多忙の中、徳島至誠館の稽古日には欠かさずご参加頂き、剣道の本質である基本の重要性を力説し、私たち指導陣にも大いなる糧となっている。子供達はこれらの先生の厳しい指導に耐えて技を磨き、今では機関誌「徳島の剣道」に多くの名を刻んでいる。何にも代えがたい喜びである。また、毎週木曜日夜、八時三十分～十時まで・日曜日の夜、七時～九時まで、子供から中・高・一般に至るまでを対象に広く解放している。剣連会長さんはじめ、他都市からも多くの剣道愛好家が集い充実した稽古日となっている。

### 三、今後の夢

今までの十年を振り返る時、子供、保護者、指導者の先生から、実に多くの事を学んだ。子供は、素晴らしい感性と計り知れない可能性を秘めている。保護者もまたこ

の親にしてこの子ありである。協調性に優れ、常に支えられている喜びを実感できる日々である。指導者もまた、前者に勝るとも劣らぬ、抜群の説得力と指導力を併せ備えている。今後もより多くの事を学んでゆきたい。

三代目の育成も今後の夢の一つである。孫娘、希実子が「道場を引き継ぐのは宿命」と自覚してか、現在、東京の修得高校に学び、厳しい剣の終業に励んでいる。近い将来、ふる里徳島に帰り剣道界のお役に立ちたいと希望している。嬉しい限りである。自分の選んだ道、あらゆる苦難を克服し、花開く日のためにひたすら祈りたい。

全国制覇は誰もが手の中にしたい共通の悲願であり、指導者のロマンでもある。だが、その主役はあくまでも子供である。あせらず、たゆまず、子供にやる気を掻き立てる指導こそ私たちの大きな使命である。

私も高齢に達し世代交代を実感している。引退を申し出ているが、未だ副館長の許可は下りていない。「老兵は消え去るのみ」と遺して去ったマッカーサー將軍のあの名言

に做いたいものである。

折角の貴重な紙面をお引き頂いたにも拘わらず、私事に終始したことをお詫び致します。徳島至誠館道場の歴史は県下で最も浅く、今後に残された課題が山積みしています。先輩各位、剣友の皆様のご指導ご叱正を宜しくお願い致します。

おわりになりましたが、徳島県剣道連盟の益々のご発展と会員各位のご健勝をお祈りし拙文を閉じます。

## 戦績

※不参加 (県剣道連盟主催大会)

大会名	五年度	六年度	七年度	八年度	九年度	十年度	十一年度	十二年度
県少年剣道 練成大会	一回戦	ベスト8	二位	優勝	優勝	優勝	優勝	二位
県小・中剣道 強化大会	※	ベスト8	三位	優勝	二回戦	優勝	二位	優勝
県社会人大会	※	優勝	優勝	三位	三位	二位	優勝	優勝



徳島至誠館開館1周年記念

平成4年11月5日

# 私と二刀流

警察支部 山名信行

徳島へやって来て今年で三年になります。本当にあつと言う間に月日が経ってしまつたと感じています。

今回、『徳島の剣道』への執筆を依頼されたわけですが文章を書くことが大変苦手な私は戸惑い、何を書けば良いのか迷いました。しかし、私にはこれしかないと思い、私と二刀流について書くことにしました。

よく質問されることですが、「何故二刀流を始めたのですか？」と聞かれます。私は「勝ちたかつたからです。」といつも答えません。

おおよそ、剣道家らしくない答えです。私もそう思います。

剣道は理念にも述べられている通り「剣の理法の修練による人間形成の道である。」

と、あります。

これから考えれば、私の考え方は理念に

相応しくなく、唯、勝負にだけこだわりをみせる三流以下の剣道家でしかないように思われますが、私はそうは思っていません。なぜならこの「勝ちたかつたから。」という思いから沢山の人の繋がりができたように思うからです。ですので、その思いは、私が二刀流を始めた頃から、今に至るまで変わっていません。

その理由をお話するには、私が二刀流を始める切っ掛けからお話したいと思えます。

私が初めて二本の竹刀を持ったのは大学三年生になる春休みのことです。

私が通っていた国際武道大学剣道部は部員数が約四百名という日本一のマンモス部です。その中で個人戦のレギュラー枠はたったの十四名しかありませんでした。大学四年間で試合へ出られないものが大半という正に毎日がサバイバルでした。

私は中段の構えを取る普通の部員でした。入部当初は、常にどうすれば選手になれるかと考えていましたが、月日が経つごと

に同年代の選手とのどうしようもない力の

差に半ば入部当初の闘志は消失しようとしていました。

ですが、その闘志は再び燃え上がりました。

それはある一本のビデオテープから始まりました。

春休みで帰省する少し前、なんとなく学校の図書室でブラブラしていると、ふと一本のビデオテープが目に入りました。

何も考えずに観てみると、そこには二刀流の剣士の姿があつたのです。私は思わず観入ってしまいました。

観賞中、私の心は「これだ、これに最後の一発逆転を賭けるんだ。」と囁きました。ですが、私自身「もし失敗すればただの道化でしかない。もう、選手は諦めよう。」とその場は思いました。

確かに思った通りです。二刀流という奇抜なスタイルを取る以上は弱くてはただの変わり者と物笑いの種となってしまうからです。

ですが、帰省の日が近づくにつれ、何か心の中でもやもやとしていました。「1%

でも可能性があるのに何もしないまま終わることは本当によいのだろうか。このままでは負け犬以下ではないだろうか。それは嫌だ。なら自分はもう一度これに賭ける。」と、決心させると心のもやもやが晴れ、今まで消えかけていた闘志に再び火がつきました。

しかし、二刀流を始めるには、問題が山積みでした。

まず、師範や監督にどう願ひ出るかでした。とにかく、考えても仕方がないと思い、

直談判しかないと思腹をくくり、監督の所へ行きました。

最初監督は、「武道大学と言う看板がある以上は、認められない。中段を磨きなさい。」と言われたのですが、それでも諦めきれず何度も通ひ、やつとの思いで承諾を得ることができました。その最後には「誰も教えることはできない。どうなるかは解らないぞ。それでもやるのか。」と言われましたが、私の決心は堅く「やります。」と答え、監督には「なら、頑張れ。」と激励を頂きました。

また、師範の岡憲次郎先生にも同じようなことを言われましたが、「二刀流を教えることはできないが、昔、対戦した経験から教えてやる。」と言われ本当に感激しました。

私の二刀流はここから始まりました。それから時間との戦いでした。

私が目標としていた関東学生選手権は毎年、五月にあります。言い換えれば、時間は約一年しかありません。全く未知のことを始めるわけで、すべてが手探りでした。

初めにしなければならなかったことは、二つありました。

二刀流に対しての知識を身につけることと片手で竹刀を操れるだけの腕力を付けることです。

私は帰省を延期し図書館に籠もり、知識を手にするため、二刀流に関する書物を読みました。それと平行し、片手で竹刀を振り、打ち込む練習を行いました。

ですが、壁はすぐにやってきました。

本の内容だけでは、どうしても掴みにくいとこや、片手で振る腕力にしても一朝一夕につくもではなく毎日腕が悲鳴をあげ、

本当にこれで良いのだろうか、何か突破口はないのかと悩む日が続いていました。

そんな時、二つの幸運がやってきました。

一つは、現在二刀流の第一人者と言われる戸田忠男先生が、偶然にも、大学近くの企業の剣道部合宿に、ゲストとしてやって来られたのです。その剣道部員の中に同期生の先輩がいて、彼を通じその合宿に参加することができました。

そこで戸田先生から本当の基礎の基礎を教わり、最終日には色紙に一字とそれに対するお言葉を頂戴しました。

色紙には一文字《戯(たわむれ)》という文字が書かれていましたが、その文字は何か不格好にも《虚》と《戈》が離れていました。その言葉について先生はこう話されました。「二刀流は奥が深い二刀流は幅が広い。だから二刀流は一つの型に捕われる事なく、遊び心を持ち自由な発想を持つて稽古に励みなさい。それが、《虚》と《戈》が離れている意味だ。」と。

それから私は何かが吹っ切れ、人が見れば奇怪な技や練習を行いました。

その後も、学生時代には正月ごとに年一度ですが稽古を戴いていました。

もう一つの幸運は、二刀流の稽古の方針も固まり、実家の京都へ帰省した時です。

そこにも、二刀流を志す学生剣士がいたことです。その方は、私よりも二刀流の経験期間が長く、知識と実戦経験も兼ね備えておられたので、様々なアドバイスを貰い、何かの手応えを得た時期でした。

今思えば、この二つの幸運のどちらが欠けていたとしても今の自分の二刀流はなかったと思います。

その後、確かな手応えと共に、春休みを終え、大学に帰ったのですが、それほど現実には甘いものではありませんでした。

大学の稽古が始まる頃には、何とか形にはなったものの、所詮は形だけで、めった打ちを食らい、毎回稽古が終わる度、体中の筋肉が悲鳴をあげていました。

「このままでは終わりたくない。終わってなるものか。」その頃の私はそれだけを考えていました。

そこで考えたのが、近くの町道場に通う

ことです。町道場には様々な人が来られるので、今の自分のレベルに合わせた相手と稽古ができると考えました。

でも、今思うとかなりの強行軍を強いていたように思います。学校の稽古が終わった後、地元出身の同期生に紹介してもらい道場に通っていましたが、そこは寮から片道四十km離れ、週三回若しくは四回を愛車の二五〇ccバイクで疾走していたのですから、もし、今なら到底できないと思います。

それからは、自分で言うのもなんですが、少しずつですが地力を付けていったように思います。

その努力が実を結び、四年生の時に部内予選を勝ち上がり念願の関東学生選手権の個人戦選手として出場しました。あと一歩で全日本学生の個人戦に手が届く所まで行ったのですが、残念ながら手は届きませんでした。

けれど、ゼロからの、いや、マイナスといてもよいところからスターとした私には、本当に二刀流が、あのビデオテープが夢を再燃させ、かなえてくれたことに感謝

しました。

これが、私が二刀流を始めた切っ掛けです。

読んで戴ければ解るように、私は二刀流に出会った時、それはマイナスからのスタートでした。そこからはい上がってこれたのは

「生き残るためには、勝つためには、勝ちたい。」こう思うだけで剣道に対し、前向きになれたからだと思います。

また、それだけではありません。その「勝ちたい。」という気持ち、自分を積極的に動かし、様々な人との出会いと剣を交える場を与えてくれたのです。それが、私が考える人との繋がりであり、私の進む道を作ってくれているのだと思います。

私の二刀流は二刀を通じ出会った人々の力があつたからこそ、今に至るのだと思います。



## 独学の二刀流を操り 最年少の県警代表に

右手の太刀は3尺7寸、左手に小太刀。剣豪宮本武蔵と同じ正二刀の構えだ。11月10日に東京で開かれる全国警察剣道大会に、県警代表として出場する徳島東署地域3課の山名信行さん(24)＝写真＝は、全国でも珍しい二刀流剣士だ。

小学校3年生で剣道を始め、高校時代に国体に出場。だが、進学した国際武道大(千葉県)の剣道部には、そろそろたる部員が約400人もいた。「このままでは埋没しかねない。何とか抜きでる道を」。二刀流に光を求めた。

「教えてやることもできない。一刀流で続ける」。こう忠告する先生の言葉を振り切って2本の竹刀を握ったのは大学3年の春。武蔵の「五輪書」などを参考に、「構え」から独学した。片手で1本ずつ竹刀を操るため、練習後には右手ではしを持つにも不自由を感じたが、約2ヵ月間で一刀流と渡り合えるように。1年後、関東学生剣道選手権に出場し、警察官になってわずか2年で最年少の県警代表になった。「強くなりたい一心で励んできましたが、そのおかげでやりがいのある仕事に就けました」。面を取ると、親しみのあるお巡りさんの笑顔がのぞいた。

朝日新聞 (H 11.10.23) より



# 称号・段位合格者

記念すべき

第一回剣道教士号

全国審査に合格して

学科試験の傾向と対策

警察支部 平尾満紀

私は、去る十一月十一日に行われました、記念すべき第一回目の全国審査に合格することができ、大変嬉しく思っています。これも徳島県剣道連盟の先生方のご指導のおかげと、この場をお借りして御礼申し上げます。

さて、このたびの審査から称号審査は、審査方法が改正され、全国審査となりました。

徳島の剣道  
審査方法は、東京、兵庫、福岡の三会場に別れ、試験時間は、各科目（時限）五十分間を三科目（各科目間の休憩十分）の筆記試験で行われたのですが、初めての全国

審査であり、出題科目は展示されているものの、どの程度の問題が出題されるか見当も付かず、試験開始まではとても不安でした。そこで今回、この場をお借りしまして、

これから受審される方に参考としていただくために、出題された問題がある程度正確にお伝えしておきたいと思えます。

一時限目（十三時三十分～十四時二十分）

一 日本剣道形（日本剣道形解説書、全

剣道講習会資料から出題）

次の（ア）～（セ）に適切な言葉を記

入しなさい。

○ 太刀の形一本目

打ち太刀は、諸手左上段、仕太刀は諸手右上段で、打太刀は左足、仕太刀は右足から、お互いに進み、間合いに接したとき、打太刀は（ア）を見て右足を踏み出し、仕太刀の正面を打つ。

仕太刀は左足から体を少し後ろに（イ）

でひくと同時に、諸手も後ろにひいて、

打太刀の剣先を抜き、右足を踏み出し、

打太刀の正面を打つ。打太刀が剣先を

下段のまま（ウ）で一歩ひくので、仕

太刀は、十分な（エ）で打太刀を押しながら、剣先を（オ）の中心につけ、打太刀がさらに一歩ひくと同時に……

○ 太刀の形六本目

打太刀は中段、仕太刀は下段で、お互いに右足から進み、間合いに接したとき、仕太刀は機を見て下段から打太刀の（カ）の中心を攻める氣勢で、中段に上げ始めるので、同時に打太刀も、これに（キ）心持ちでやや剣先を下げて、仕太刀の刀と合おうとする瞬間、右足をひいて諸手左上段に振りかぶる。

仕太刀はすかさず中段のまま大きく右足から（左足もともなつて）一歩進む。打太刀は直ちに左足をひいて中段となり、機を見て仕太刀の右小手を打つ。

仕太刀はその刀を、左足を左にひらくと同時に、小さく（ク）を描く心持ちで、（ケ）ですり上げ、右足を踏み出し、打太刀の右小手を打つ。打太刀は剣先を下げて、左足から左斜め後ろに大きくひくので、仕太刀は左足を踏み

出しながら、諸手左上段に振りかぶり  
残心を示す。

打太刀、仕太刀とともに右足から(コ)  
になりながら、刀を抜きあわせた位置  
に戻り、剣先を下げてもとの位置にか  
える。

○ 小太刀の形一本目

打太刀は、諸手左上段、仕太刀は中  
段(サ)の構えで、打太刀は左足から、  
仕太刀は右足から、お互いに進み間合  
いに接したとき、仕太刀が(シ)にな  
ろうとするので、打太刀は右足を踏み  
出すと同時に、諸手左上段から、仕太  
刀の正面に打ち下ろす。

仕太刀は、右足を(ス)め前に、左  
足をその後ろに進めて、体を右にひら  
くと同時に、右手を頭上に上げ、(セ)  
を後ろにし、左鑓で受け流して……

○ 答

ア…機、イ…自然体、ウ…送り足、エ  
…気位、オ…顔、カ…両拳、キ…応ず  
る、ク…半円、ケ…右鑓、コ…相中段、  
サ…半身、シ…入身、ス…右斜、セ…

刃先

二 審査法(全剣連発行「剣道試合・審  
判規則・細則」から出題)

○ 剣道試合・審判規則の目的について述  
べなさい(規則一条)

○ 有効打突の基準について述べなさい  
(規則十二条)

※…二問とも一〇〇字程度

○ 有効打突としない場合(規則十二条)

一 有効打突が、両者同時に合った場  
合(相打ち)。

二 被打突者の剣先が、相手の上体前  
面に付いてその氣勢、(ア)が充実し  
ていると判断した場合。

○ 諸禁止行為(規則十七条)

一 定められた以外の用具(イ)用具(ロ)  
を使用する。

二 相手に足を(ウ)または払う。

三 相手を(エ)に場外に押し出す。

四 不当な(オ)を要請する。

○ 規則十七条の七項の禁止行為(細則  
十六条)

一 相手に(カ)または抱えこむ。

二 相手の竹刀を握るまたは自分の竹  
刀の(キ)を握る。

三 相手の肩に(ク)に竹刀をかける。  
四 倒れたとき、相手の(ケ)に対応  
することなく、うつ伏せなどになる。

五 故意に時間の(コ)をする。

○ 答

ア…姿勢、イ…不正、ウ…掛け、エ…  
不当、オ…中止、カ…手をかけ、キ…  
刃部、ク…故意、ケ…攻撃、コ…空費

二時限目(十四時三十分～十五時二十分)

一 指導法(全剣連発行「幼少年剣道指  
導要領」から出題)

○ 掛り稽古の要領と、元立ちの留意点  
に付いて述べなさい。

二 一般素養

○ 審査規則(全剣連発行「剣道称号・段  
位審査規則・細則」から出題)

称号・段位審査規則・細則、実施要領  
における、教士号を受審しようとする  
者の備えるべき要件について、箇条書  
きで述べなさい。

○ 安全管理(全剣連発行「剣道社会体

育教本」から出題)

☆ 準備運動と整理運動の必要な理由  
について述べなさい。

☆ 竹刀の手入れと安全確認について  
述べなさい。

※…全問とも二〇〇字程度

三時限目 (十五時三十分～十六時二十分)

一 生涯学習と剣道の修練について、私  
見を述べなさい。

二 社会から剣道人に対して、期待され  
ることは何か。私見を述べなさい。

※…二問とも四〇〇字程度

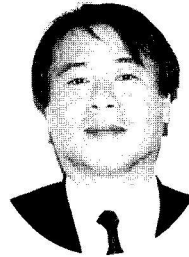
以上が、私が受審した教士号審査に出  
題された問題ですが、一部穴あけ式の問  
題を忘れていたところもあり、全問題の  
九五パーセント位しか思い出せず、書け  
ていませんがお許しください。

おわりに、今回の審査は、全国で十六  
名(東京十一名、兵庫一名、福岡四名)  
が受審し、合格者は十四名(東京会場で  
不合格二名)と、これまでの称号審査と  
比べ厳しいものとなっています。しかし、  
日頃から剣道の理念等、基本を忠実に稽  
古していれば、特別な勉強をする必要も  
なく、無事合格することは間違いありま  
せんので、安心してください。

## 剣道七段に合格して

徳島支部

福 多 雅 英



平成十二年五  
月三日、京都市  
で行われた剣道  
七段審査会に於  
いて、お蔭様で  
合格することが  
できました。

ご報告致しますと共に、誌面  
をお借りし今日までご指導ご鞭撻いただき  
ました皆様方に心よりお礼を申し上げます。

さて、今回の受験は私にとりましては二  
回目の挑戦で、前回平成十一年十一月の東  
京審査では、力不足を痛感させられる結果  
となり、昇段のためだけでなくこれまでの  
自分の剣道を見直し、新たな課題を設定し  
て取り組む機会となりました。前は、一  
人目を上段で二人目を中段で受験しまし  
たが、どちらも中途半端に終わってしまい、  
迷いの中で気の充実も体感できないまま  
でした。そこで、今回の京都審査では中段で

受験し、上段は平成十二年度の全国教職員  
大会に焦点を当てて稽古をすることとし、  
中段・上段共に課題を設け、初心にかえり基  
礎・基本から稽古し直すことにしました。具  
体的には中段では上段の気位や気攻め・体  
攻めを活かし、上段では中段の理合や諸手  
の技を活かすことを課題としました。

幸いにも平成十一年度より二年間にわた  
つて鳴門教育大学大学院での研修の機会を  
与えられていましたので、木原資裕先生に  
ご指導をいただきましたながら週三回の稽  
古だけでなく、各種剣道講習会や他大学の  
合宿にも同行させていただきました。週三  
回の大学の稽古では、道場掃除・素振り・基  
本打突から互格稽古・打ち込み稽古と、初  
心にかえり新鮮な気持ちで稽古させていた  
だき、各種剣道講習会等では、数多くのこ  
とを研修させていただきました。また、週二  
回の県剣道連盟の稽古会では、堀江幸夫先  
生をはじめ多くの先生方よりご指導いた  
だき、これらのことが七段合格や、全国教職  
員大会準優勝という好結果につながったと  
確信しております。多くの方々のあたたか

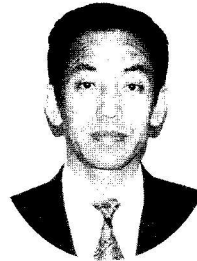
いご指導、家族の支援のお陰であり、感謝の気持ちでいっぱいであります。

剣道は修練することによって自分の人生をより豊かにしていく特性があり、段位や試合に勝つことが目的ではありません。段位や試合が意味するものは、剣道奨励の一つの手段であり、剣道という大きな枠組みの中のひとつに過ぎないと思いますが、段位に挑戦したり、試合に勝つことを目指して一生懸命修練し、研鑽を深めて行く過程が重要であり、さらに稽古を積み、修行に励み自分自身を高めていくことに意味があると考えられます。

## 感謝の気持ちを込めて

阿南支部

村 井 正 志



平成十二年五月三日、京都の七段審査を迎えることになった。六段審査での数多くの失敗を自

分なりに反省しての受験である。

今回の審査日は本校剣道部恒例の広島遠征に出かける日と重なった。当日は本校に生徒と同じ時刻（朝の四時半）に集合し、私は京都、部員達は広島へと遠征に向かった。当初は遠征とも重なり部員達には申し訳ないという気持ちがあり、一度は審査を次回にしようかという迷いもあった。しかし、今回必ず一回で合格するんだという強い気持ちがあったのと、また七段合格ということで生徒には先生も頑張っているんだとわかってもらえると嬉しい受験することに

しました。

では、今回七段審査に当たって自分自身に気をつけたところを振り返って見たいと思う。

第一に、今回審査が終われば、生徒のもとにすぐに移動しなければいけないという事もあり、あらかじめ京都に足を運び、会場の様子及び駐車場の確認と確保を行った。（審査当日は会場に駐車できない）

第二に、審査前にはできるだけ、多くの人からアドバイスを受けない事にした。この事は、審査間近に、たくさんの人からアドバイスを受けると私の性格上、当日自分自身に迷いが生じるからである。当日は自分の力を信じ、集中力を高め保持することに努めた。

その他。県剣連の昇級審査前の先生方との練習、道場（徳島至誠館）での練習、大会当日の朝の中生体連・高体連の先生方との練習、遠征先での監督の先生方との練習、また本校生徒との日々の練習等。今回は特に遠征先で他府県の監督の先生方に何度も練習をつけて頂く機会があった事が非常に

大きかった。その為、今回の審査には自身、ある程度の自信と手ごたえも感じ取っていた。また気分的にも余裕を持って審査に望む事ができた。

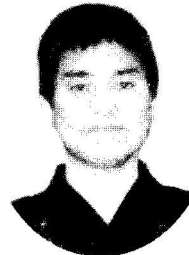
今回幸運な事に七段に昇段できたのは多くの人々の支援のおかげだと本当に感謝している。

県剣道連盟の先生方、道場や遠征先での先生方は勿論であるが、何よりも常日頃の生徒との練習に感謝したい。

これからも今まで以上に県剣道連盟の発展の為、青少年の健全育成の為、微力ながら頑張っていきたいと思っておりますので、より一層のご指導よろしくお願い致します。

### おかげさまで

鳴門支部 元 木 武



平成十二年五月三日、京都審査において剣道七段に合格させて頂きました。

これもひとえに

諸先生方、諸先輩はじめ剣を交えて下さった皆様のお陰と深く感謝しております。本当に有り難うございました。

振り返れば、高校から会社内の同好会と井の中の蛙でやっていた時に、社内の原修平氏より誘いを受け、一度藍住にいったのがきっかけで「知友会」にお世話になりました。

当時より剣連で活躍されていた高田亮、

高田豊両先生、全く触らせてもらえなかった原多三夫先生他、福永徳先生、吉永明彦先生、兵藤新平先生、金西重記先生、また家庭婦人で活躍の松田三千子・河野恵美子さ

んはじめ多士済々で社会人剣道の梁山泊を呈していました。剣道はもちろん人生経験の未熟な私（今でもそうですが）に剣交、酒交、交友を訓えて頂きました。その後金西さんに誘われ旧県武道館での「朝稽古会」に参加、以後閉館解散するまで数年間お世話になりました。堀江先生始め県剣道連盟・警察官・学剣連等の各先生の厳しい訓えを頂き、打突後に左足が残るという欠点を直させて頂きました。稽古以上に感銘を受けたのは稽古後、堀江先生の剣道訓あり人生訓ありの講話でした（昨年二月、この時の講話のメモを鳴門・佐藤勇先生よりお借りし私の不確かな文も集録、堀江先生に修正・追加して頂き小冊子「堀江語録」を完成しました。）また柏原浩先生には後輩ということでは何かと目をかけていただきました。そのお陰で、都道府県対抗大会に一緒に出場することができました。

その後、五年前より住居が鳴門の市街地に移動した事により鳴門運動公園少年教室にお世話になりましたが、私のわがままで中断してしまいました。しかし、一昨年、

近藤敏晴氏の意見で再開した週一回の社内での基本練習。中部理事に選出され、毎月の少年部の強化錬成会参加。錬成会では指導者同士での稽古、指導責任者・堀金實先生の実技指導等で基本の重要性を知りました。そして、運動公園への練習の再開。指導する側になって初めて自分が剣道に如何に無知であるかを知り、佐藤先生、菱田晋先生、浅野精一先生にご迷惑をかけながら現在勉強させてもらっています。少年指導後は、鳴教大・木原資裕先生に気を下丹田に下ろすことを心掛けた稽古をお願いした。

そして京都へ。前日は樽酒(美味かった)を飲みすぎ前後不覚に陥り、珍しく熟睡する事が出来た。受験番号は「611C」で、一人目「B」を観る事が出来た。大柄な人で打突は殆ど面であった。「始め」の合図で不思議と気合い充分、足が前に出て戸惑いながらも初太刀に面を打てた。後は面を交え、相手の面には小手或いは抜き胴を思い切って打った。二人目は石川県の人、初手抜き胴にいったところ面を打たれた。多分、いつもならここで終わりだった。しかし相

手の強い剣先の攻めに押され打突されながらも、小手・面にきたところを面、それと先の面を一本打てた。そして発表、「611D」真つ先に目に飛び込む、やはりと思いがながら何故かその左側の「〇〇〇B」を見た私はガックリ。その時「合格しとるでー」と横から大きな声、休暇を利用し応援に駆けつけてくれたいた柳本巖氏(板野東支部・大鵬薬品)であった。彼が冗談で言った。飲み過ぎ(二日酔いには、大鵬のソルマック)で本来の剣道が出来ずに良かったと。それから一ヶ月後、足が遠のいているにもかかわらず知友会の方々に昇段祝いをして頂き大変嬉しかったです。紙面をお借りしお礼を申し上げます。知友会の皆様、有り難うございました。

これまで多くの皆様に頂いたご恩を今後少しでもお返し出来ればと思っています。剣技はもちろん少年指導・審判等まだまだ未熟な私ですが、今後共ご指導の程宜しくお願い申し上げます。

追伸

毎週月曜日十九時三十分、鳴門運動公園

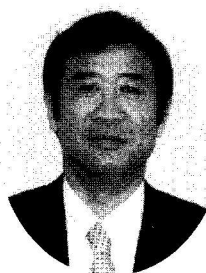
内武道館で鳴教大・木原先生を中心に「名月会」(仮称、鳴門・月曜日の語呂)と称し一般の稽古会を小人数でしています。各支部の剣友・先生方のご来訪をお待ち申し上げます。



鳴門運動公園少年教室 平成12年度卒業生とともに

## 心懸けたこと

徳島支部 磯部 洋一



平成十二年五月三日、京都で行われた審査会において、七段位に合格することができました。

これも偏に、先生方はじめ剣友の皆様のお陰と感謝いたしております。

私の昇段歴は、五段までは比較的順調に昇段できたのですが、六段審査で大変でこずりました。そこで、基本からやり直してみようと決意し、またご指導を頂いた先生方にも恵まれ、平成三年に六段に合格することができました。

六段で苦労しましたので、合格してからは、七段に向かつては、どのような心懸けで臨むべきかを考えました。結論の一つは「一人稽古を大切にしよう」でした。素振り

れでいいのか、剣先は振れているか、顎はでていないか、上体は前傾していないかなど。面打ちについても鏡の前でやってみて、正面から、真横から、斜め前から、構え、打った瞬間、左足の方向、腕の伸び方など、ことあるごとにチェックしました。

また、相手と打ち合っているときは、考える余裕などないので、稽古の後、何故あ

ういう剣道をする人が合格しているのか、また合格した人と自分の剣道を比較して、自分に不足しているものは何なのかを考えました。そして、次の受審までに不足しているものをプラスして、受審に臨むよう心懸けました。

最後になりましたが、今後の心懸けは、「打つべき時をいかに見極めるか」の一点に集中してみたいと思っております。

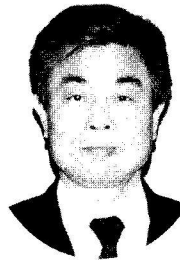
たのか、もう一度思い出し、同じ間違いをできるだけでなくすよう、心懸けました。次に、急に力はつかないので、毎年0.1段づつ腕をあげていこうと思いました。そうすれば五年目に6・5段に十年目に七段に届くであろう。そのためにはどうするか、結論は「できるだけ上手（うわて）にかかって稽古する」でした。そして、稽古のたびに、今回は前回より少しでも、気を抜かない、理にかなった稽古をしよう、心懸けました。

それから、これは六段受審のときにも心懸けたことですが、自分の実技審査が終わっても、多の受審者の実技審査を見学し、ど

# たかが剣道七段…… されど七段

鳴門支部

藤 本 雅 史



若い頃、剣道界の段位制度に反発していた時期があった。剣道の

段位が上位だけで技術的にも人間的にも全てを肯定する世界に疑問を持ち、不信を抱いていた。スピード、パワーに任せて打ってあげば当たる、打たれた打たれないと感情的になる。何か崇拜の念が湧かず、自分の修業の未熟さを棚に上げ自惚れていた。だから段位の取得に固執しなかったし、むしろ反発して趣味の世界として楽しんでいた。

しかし、ある剣士と一冊の本とのめぐり逢いによって、私のこれまでの剣道観はガラリと変わった。剣道を真正面から捉え、真摯に向かい合うようになった。自分の登っ

ている山以外に更に高く素晴らしい山がある事を教えていただき、剣道を基礎、基本から考え取り組んでみようと思った。ある先生に言われた「段を取る(目的) ことに向かつて一生懸命努力する過程は決して無駄にはならないし、素晴らしいことだと思いますよ。」成る程、私はその事を否定して、努力もしないで段位云々を言う資格はないと恥ずかしくなりました。

そんなときもあり、東京での審査に初めて挑戦。結果は見事に不合格。相手のことが気になり、自分を見失い、良いところを見せようと審査用の構え、攻め打突に取り繕っていた感があつたと反省した。それからの半年間は堀江先生から何時もご指摘を頂いている肚の稽古、即ち打たれるのを怖がって恐れたり、ビクついいたりせず、「攻めて起こりを捉え打突できる理合の剣道」を頭に置き、水・土の剣連の稽古会で坂下先生始め多くの剣士達に稽古をお願いした。特に近藤先生には機会を捉えたら石火の如く打突できるまで何度も何度も打ち込ませていただいた。

そして、京都の審査に臨んだ。これまでの「徳島の剣道」の合格者談にも載っているとおり、今までやってきたことを全て出し切るう、相手がどんな人であろうとも全力で立ち向かおうと思ったことである。全力を出し切ることに集中すると周囲のこと、相手のことなど何にも気に留まらなかつたし、落ち着いて余裕を持って臨むことができた。幸いにも合格の栄誉になつたわけですが、後でビデオを観てみると打ちたい打ちたいの色が見え、機会でもないのに飛び付いていたりと恥ずかしい限りです。まだまだ力の無さを痛感しています。

今後は、堀江先生からいただいた課題「崩れない構えの追求」即ち動じない肚の稽古、また理業一致の稽古、理即ち人間性の修業を目指し、只管「行」あるのみの一念です。「剣道七段」冠取ればただの人はなく、かの持田盛二先生のように、歩く姿を見られて武道家たる雰囲気、匂いを漂わせる剣道家を夢見て、今まで稽古をいただいた人達に感謝をし、これからも今以上に稽古のお願いをして報告とさせていただきます。

## 剣道に感謝

徳島支部 岡崎 明



五月の京都審査会で、幸運にも、七段に合格することが出来ましたことを、ご報告すると共に、

にご指導頂いた県剣道連盟の諸先生方また諸先輩方に心より感謝致したく、この紙面をお借りしてお礼申し上げます。

今回の審査にあたり、私なりに練習したことを何点か上げたいと思います。

自分の欠点（打ちが弱い・腰が開く・足が残る）

○基本打ちについて

練習の時、間合いを詰めて大きく腰から（一足一刀）打つことを心がける。

○発声について

声を出す時最後になるほど声質を高くすること。

○審査時の立ち会いについて

審査時に二人の立ち会いを最初の立礼から最後の立礼まで気を抜かない。

出来るだけ多くの先生と気を詰めて、審査時間に併せて短く練習をお願いする。

練習のなかで初太刀を大事に打つこと。

自分の欠点を少なくし良い所を、審査時に出せるようにすることを心がけて練習をし、多くの先生のご指導を頂き欠点を指摘してもらい繰り返し練習する。

今回の審査から午後になり、午前中の審査を見る事が出来、自分の審査開始の待ち時間や、審査会場に徳島の先生も何人かおいでだったので、先生方が見てくれているという思いで、心に余裕があり待ち時間を、うまく過ごせたように思いました。

審査の始まりです。立礼から気合いを入れて初太刀を、大きく迷わず、大きい透る声で真っ直ぐ打ち切ること、相手の先生の起こりを打ち、むだ打ちしないよう心に秘めて審査に当たりました。

今回は、二人の先生との立ち会いでは気位で勝っていたし、初太刀も攻めて打てた、

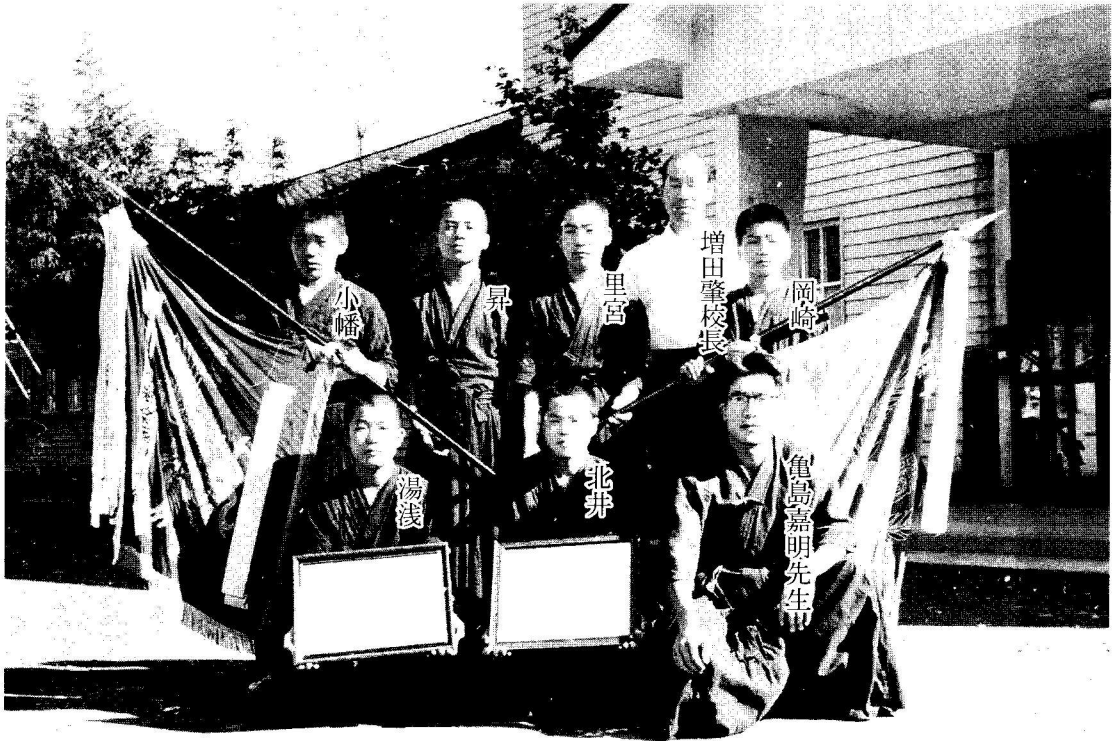
相手の先生の起こりを打てた、そう思い、発表を待っていたら幸運にも合格です。

審査会場においてた徳島の先生方の祝福と同時に、形の審査がはじまり心に余裕がないままでした。お手伝いして下さった先生には心より感謝いたします。

今まで続けられた剣道に感謝し、諸先生方に感謝、また少年剣士に感謝、家族にも感謝、これからも続けることができる剣道に感謝し、合格の報告いたします。

これからも、真の七段位として恥じることのない修練をし、「剣道」を通じ、人間として社会人の一員として精進していきたいと思っておりますので、今後共、ご指導の程よろしくお願い申し上げます。

次ページの写真は、私の三十八年前の木頭中学校時代の写真です。県大会の試合には、二泊三日、バスで片道八時間かけて出場した思い出の一枚です。



## 剣道七段に合格して

二十七年を顧みて

警察支部 青木博志



平成十二年十一月二十八日、  
日本武道館において行われた剣道七段審査に幸いにも合格する

ことができましたことをご報告しますとともに、ご指導くださいました皆様に心からお礼申し上げます。

私が剣道を始めたのは、中学一年生のときですが、今思えば、それ以来私の生活は剣道とともにありました。

私の母が、「剣道をする姿勢がよくなる。礼儀が正しくなる。」とよく言っていたのを今でも覚えていますが、初めて体験する剣道は、稽古前に道場を清掃して清め、黙想して精神統一し、道場の正面には「精力善用」の額が掛けられ、礼に始まり礼に終わ

る、毅然とした節度があり、そこには競技としての剣道の前に精神修養としての剣道がありました。

そして、初めて竹刀を買ってもらったときの喜び、防具をつけて面を打たれて、頭が割れるように痛かったこと、正座をして足がしびれて立てなくなったことなど、多くの思い出とともに、剣道初心者としての私の第一歩がありました。

それから二十七年の月日が流れました。この私が剣道七段をいただくことなど、夢のようなことでしたが、今言えることは、中学、高校、社会人と「剣道に親しみ、喜怒哀楽を共にしてきた」ことが夢の実現に結びついたということです。

この二十七年は、楽しいことばかりではありませんでした。苦しみ、怒り、悲しみなどとともに喜びがあり、それらを繰り返すうちに、いつの間にか月日が流れて、今日に至っていました。

中学・高校時代には、剣道のいろはを習い、機動隊に入ってから、技術的、精神的に高いレベルの環境で稽古を積む毎日でした。

今考えてみると、こんな素晴らしい環境で剣道ができたことを幸運に思いますが、同時に、その機会を十分活かすことができたかというのをあらためて考えてみますと、私自身の努力が足りなかったことを反省することしきりです。

今は勤務地も変わり、仕事が終わった後や休日等限られた時間での稽古を余儀なくされていますが、一回一回の稽古を密度の高い充実した内容にするよう心掛け、気持ちよく稽古を終えることが質の高い稽古に繋がるものと考え、それを私自身の稽古の目標にしております。

私の勧めで、小学生の長男と長女も入学と同時に剣道を習い始め、私も時間が許す限り、子供と一緒に稽古に汗を流す毎日ですが、自分の子供と剣道ができる喜びを噛み締め、その健全な成長を願っております。また、陰ながら私を支えてくれた妻に感謝するとともに、これからも私と二人の子供のために奮闘されることを祈っております。

さて、この度の審査の状況について簡単にお話しします。私の受審番号は、「二二四

A」。第二審査会場での最終組でした。緊張の中、二時間近くも待たされましたが、その間、素振り、体慣らしをしながら、どんな相手に対しても気分負けせず、自分を信じ、普段の稽古のとおり剣道をすることに神経を集中させました。

立ち会いは二刀流と対することになりましたが、平静を保ちながら、気力を集中して、自然に体が動くに任せ、立ち会い開始早々、初太刀に思い切って諸手突きを放ちました。これが自分でも驚くほど見事に決まり、その後は、心が落ち着いて終始自分のペースで剣道ができたように思います。全ての立ち会いが終了した後は、「これで落ちたら仕方がない」と思える程、稽古で積み重ねたものを十分発揮できたという満足感がありました。

この度の合格は、少ない稽古の機会で如何に心技体を充実させるかということや、本番での気分の持ち方、ここの一番で思いきった技を出すことの大切さ等、今まで試行錯誤してきたことがうまく噛み合ったことで、私自身、いろいろな意味で大きな自信とな

りました。

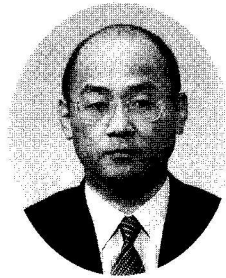
七段に合格したことは、言葉では語り尽くせないほど嬉しいことですが、それは決して自分一人の力で成せたものではないというのを肝に銘じて、感謝の気持ちを忘れないようにしたいと思います。そして、今後も精進を続け、剣道七段に相応しい人格と実力を身につけることに専心し、家庭と仕事と剣道の三本立てという、少し欲張りな目標を掲げて頑張りたいと思いますので、今後ともご指導ご鞭撻の程宜しくお願い致します。

## 七 段 合 格

「剣道を人生の糧として」

警察支部

武 岡 勝 美



平成十二年十一月、日本武道館で行われた剣道七段昇段審査に合格することができました。

これも偏に堀江先生をはじめこれまでご指導いただいた皆様のお陰と感謝しております。

私は、大きな仕事が一段落ちついたお盆を過ぎた頃、真剣に、「七段を受けよう」と心に決めて厳しい稽古を再開しました。ここ数年間稽古らしい稽古もしておらず、この一年間にはアキレス腱を断裂していたことも重なって、再開当初は、体が宙に浮いているような、足がもつれるような、手の内が落ち着かないような、剣先が定まらないような、なんとも情けない剣道で、七段

受審はおろか、六段であるということ自体が恥であるような状態でした。

こんな時、導きご指導いただいたのが師であり、元気づけ且つ厳しく稽古いただいたのが、先輩、同僚など剣道の仲間でした。そんななかで、私が稽古を通じて念じ、大切にしていたことは、「氣」であり、「正中線」であり、「柔」といったことです。逆に自分を戒めていたことは、当てた当てられた、打った打たれたといった目先小手先の剣道をしてはいけないということです。できる限り真剣勝負の稽古ができるように心を昇華することに気を配りました。

また、早朝、素振りと一人稽古に取り組み、心の持ち方、呼吸、構え、手の内、腹といったことに思いを馳せ、特に、「自然体」ということに意を注ぎました。

いよいよ審査本番、私が心掛けたことは、いかに心を集中して相手と対峙するか、言い換えれば、回り（審査員のことや会場の雰囲気など）や結果を気にすることなく、切るか切られるか、正々堂々、礼を尽くして相手と剣を交えるということでした。

実技審査が終わったとき、『自分なりに気持ちを集中して相手と剣道ができた、結果はどうであれ。』という思いでした。

長々と、稽古再開から合格までの一部を紹介させていただきましたが、これから先、受審されようとしている方々の何らかの参考になればとの思いから、恥を忍んでのことですのでお許しいただきたいと思えます。

ところで、私が剣道を始めたのは中学一年生で、そのきっかけは、両親から「剣道をやればちつとはましな子に育つだろうから」という勧めがあったからでした。あれから約三十年がたち、七段に合格して振り返ってみるとき、この剣道が、自分の人生の節目節目で自分自身を導いてくれたことを強く感じます。

あの時、両親の言うことを聞かずに剣道部に入っていないければ、当然ながら今の自分にはなかったのだと、改めて剣道に、そして両親に感謝しています。

剣道というものを通じて、人との出会いがあり、自己形成があり、私の人生があるように思います。

## 七段に合格して

居合道部 坂本 憲 一

思えば私が居合道を始めたのは昭和五十六年の秋、ちょうど三十三才の時でした。六年の秋、ちょうど三十三才の時でした。

社会に出て十一年目、職場では民俗資料展などの企画に加えて関係書物の編纂事業に取り組んでいました。編纂という仕事は、実に静的な仕事で、机に向かつてただひたすらに原稿を手がけるといふ日々が続き、気が付けば昼、そして夕方という具合で、締め切りが近づけば時間の経過などは全く無縁な世界。それが毎年のように続くものですから、ついには原因不明の腰痛に悩まされるようになりました。

どの医者からも同じ姿勢で机に向かうことが長期に続いたことと、体を動かさず思考優先の環境がもたらしたストレスからだと診断されました。学生時代には空手をやったこともあり、社会に出てからも人一倍活発に動くことを信条としていました。それだけに、環境の変化からくる運動不足が悪

影響となって現れたのだと思います。

前書きを長々と書きましたが、運動不足を補うために何かスポーツをやろう。これが私の居合道を始めた動機の一つでした。あれから、二十年、平成十二年十一月十八日の東京審査で七段位をいただくことができました。

受験資格を得た最初の審査は、六月に四国の愛媛で行われましたが、心ならずも仕事の関係で受験することができませんでした。それだけに五ヶ月後に行われた東京審査での合格はひときわ大きな慶びでした。

私にとって居合道は、運動不足解消という単純な動機から始めたものですが、段が増すにつれて考え方もずいぶんと変化して行きました。習い始めた頃には、相手が無くただ一人で黙々と稽古をする居合に疑問を覚えたこともありました。ここでは意識の変化を細かく書くわけにはいきませんが、そういった時期に師匠が語ってくれた居合道の歴史や道統の話、先輩達の数々の助言が、時には薄らいで行く興味を前向きに変えてくれました。そして、居合道は単

なるスポーツには非ずという考えに変わって行ったのも事実です。

また、実際に刀を使うこともないこの平和な時代に前時代的な姿をして、なぜ居合なのか。という武道家の誰からも叱咤しつたされたような疑問を抱いたこともありました。

武道には趣味という語彙ごいだけでは片づけられない奥深いものがあるのは確かです。しかし、今の私には、まだそれを語る余裕はありません。むしろわからないと言った表現が適切かもしれません。居合を始めた頃に、恐る恐る長老の高段者に尋ねた事があります。「長年の修練によって、心技共に悟りの境地に入られておられるのでしょうか」。先生曰く、「齢を重ねる度に、ますます奥が遠ざかるわ。あの世でも修行じゃ。」と、さりとて言っただけではありません。その言葉は今も脳裏に焼き付いて離れません。

良き師を得て、多くの人に支えられ、居合道を通じて多くの友に恵まれたことに深く感謝しつつ、さらなる努力をと肝かんに念ずる昨今です。



# 剣道は大嫌い

板野東支部 米田利彦



六段審査に挑

戦して二年六ヶ

月、春の京都、

夏の福岡、秋の

東京と受験して

きたが、合格者

発表では、いつも私の受験番号は見つからなかった。

今回は、審査直前まで稽古ができる名古屋で受験。実技審査では、相手の動きや審査をされる先生方と自分との位置関係も認識でき、自然に先の先で技が出せ審査を終えた。

後述の剣道  
実技審査合格者を記入した用紙が係員の手で掲示された。「合格者の発表だ。」自分の番号を見つけた瞬間、「あれ、同じ番号が発表されている。」なんかいつもと違う。隣で発表を見ていた人に、「あの番号はこの番号と同じやね。」と、自分の垂れを見せて確

認してもらった。「同じ番号だ。」と、言っている。「これは、何かの間違いだ。」まだ、信じられない。形審査の前に自分の順番や相手、受験コースの説明を受けてる時も、

なんでここにいるんだろうと思ひ、学科審査も夢の中で過ぎ、全ての審査を済ませて、本当に合格したのか半信半疑のまま、徳島に帰ってきた。

後日、剣道の雑誌で六段合格者一覧の中に、印刷された自分の名前を見た時のうれしさは感無量であった。調子に乗って、同じ雑誌を二冊も買ってしまった。

ここだけの話だが、私は剣道が大嫌いだ。小学五年生からはじめて、今まで剣道を好きになったことがない。夏は暑くて冬は冷たい。打たれると痛いし、おまけに臭い。かかり稽古では、いつも後ろへ並んで待っていた。だけど、中学、高校、大学、就職してからも、剣道が続けることが当然のように思っていたし、稽古のできる環境を選んでいた。

時々、知人から、「そんなに嫌いな剣道を、なぜ続けてるのか。」と、聞かれる。私は「剣

道が好きで始めたのなら、いつかは嫌いななってやめてしまいうけど、最初から嫌いだから、長続きするのだから。」と、答えている。

初対面の人に会って自己紹介をする時、勤めはどこどこ会社、趣味がどうかとか、色々あれもこれも言うけど、「貴方は今何をされていますか。」となると、「昔は、こんなことしてました。」とか言って、答えに困る人がいる。そんなとき、私は「いま、剣道をしています。」と言う、最近の自分に気がついた。嫌いな剣道でも、三十四年も付き合えば、空気のような存在になってくるのか、愛着を感じるようになってきた。「大嫌いだけど、これからも付き合ってるよ。」と、こんな冗談が言えるのも、六段に合格した自信からなのか。

剣道の指導者として、子どもたちに指導しているが、いっしょに稽古をした子どもが将来、「私は、剣道をしています。」と喜んでくれるような指導をしたいと思っている。私が、これまで剣道が続けてこれた本当の理由は、剣道教室の子どもたちと

いっしょに稽古ができたからだ。教室から  
巣立った子どもが、生まれた川に戻る鮭の  
ように、いつでも帰ってきて、稽古が再開  
できる環境を確保してやるのが、私にで  
きるこの子どもたちへの恩返しだと考えて  
いる。

今の私にとって剣道は、生活の支えの一  
つ。ただいま四十四才、青春ど真ん中。そ  
れでも、やっぱり「剣道の稽古は嫌いだ。」



平成十二年度

称号・段位合格者一覧

剣道

【七段】

【教士】

十一月三十日

平尾満紀

【錬士】

十一月三十日

小坂治

上田宏司

竹内佳代子

藤本雅史

伊賀上仙市

五月三日

福多雅英

村井正志

元木武

藤本辰夫

土川資雄

磯部洋一

藤本雅史

岡崎明

青木博志

武岡勝美

【六段】

十一月二十三日

米田利彦

【五段】

五月七日

山室雅幹

【四段】

五月七日

佐藤晋智

十三年  
二月十八日

三木琢司

日和田崇

福永康浩

笠井利求二

西岡隆英

堀川修

【三段】

九月二十四日

田中翔

品川健太

藤井一平

秋山雄治

吉田大輔

山口智之

石村行範

長浦理絵

後藤佳代子

北村ひとみ

五月七日

吉岡陵次

高木誠

三好やよい

拙友由佳

福池加奈子

藤澤伊佐子

十二月二十六日

元木高志

蔵本浩一

住友直城



塚折滝野掛中細佐住村林茂平松西林西戸三近尾宮西四谷服  
 原野川口田野川竹友井村林村尾田岡美久保川直真正靖大由健康  
 裕宏奈紗里雪加香千真美強安紀夫航文慶樹史也和人樹史也和人樹史也  
 美美津美彩世香絵子織裕代穂一夫航文慶樹史也和人樹史也

小安國大是藤太  
 笠藝見上安田田  
 秀芳重慶佐早紗  
 徳三人子映苗矢佳

竹辻吉小坂山尾川笠立西大遠武田八松大松加西三岩  
 内本本林東崎田口井岩浦麻藤市中外原田西田地岡好田  
 武弘真真俊了優春將和芳貴健喜輝伸俊啓純  
 理司哲憲伍司弘意利樹史昌貴才力洋輔雄大吾治介一

四月三十日

【初段】

富士川西細清藤兼田掛林須久白宮犬真日加近西大中黒清清武  
 本口宇川水田高中田見津井本伏野下藤藤條石村下本章涼岡  
 学雄真博裕俊直智亮政和浩慎賢学智雅正洋文光太太繁  
 希大之司太進介也也佑弘也志也三俊博惇也晃史人光太太繁

多犬高炭玉白田的森檜幸播三京尾福佐峰本河市道株野大佐  
 田伏瀬谷田木尾場本内磨木小阜永篠本田田原下田中宮川  
 賢勝広幸康健一資大匡臨慎良良晋崇晃森裕章真裕裕大克洋  
 司彦詩一朗郎資和史郎也幸平平史久也也訓吾之樹巧介仁介

谷篠森佐北竹鈴細島藤松三安安井大加宮加秋一湯河田林岡  
 澤原本川野内木川本原本木友崎上川藤本集月井浅村中久  
 鮎順行雄真有大アキラ明惇佑雄高全隆広健拓哲泰元良献  
 美守裕己悟一郎志太樹キラ人崇揮規斗明司史希太也郎典郎憲司

小井林是齐妹青三岡喜叶相湯瀧岡藤市近長森石米磯崎新須  
 棕内安藤尾木木部田井原浅口村井谷藤江井倉田川新居藤  
 沙香加志えり浩恵美安聖佑真有佐千真理三綾由由みゆき希菜綾  
 織織恵保か美莉帆子菓佳子希子秋実恵子美伊美

豊田裕生	賀川素貴	岩瀬武志	泰地俊公	石井寛幸	吉村崇司	平野雅英	平田雅人	栗尾太二	西口伸誠	檜谷陽介	井上陽平	貝塚克俊	徳留伸俊	徳留伸俊	金岡拓也	大西健太	新居祐大	花房祐希	六月十八日	原浦福海	元千絵美	武田怜子	井内安紀	林由佳理
藤倉智子	森本成美	小野朱未	吉村早紀	坂中沙弥	吉岡美菜子	美馬沙織	向馬有紀子	茶原達之	石木和幸	吉田雅彦	宮越康文	村上尚嗣	三木峰行	佐藤晋治	豊田修三	伊藤成二	大西直人	岡田憲章	八月二十七日	森永昌彦	藤本真太郎	森本浩好	曾並康之	木並康之
三木一馬	吉田尚太郎	多田智紀	森隆秀	笠井雅弘	山西川義孝	井原誠也	川村公則	橋本将大	岩野修治	藤田昌二	原田慎士	松本翔良	鈴木元紀	佐藤敬博	浅井宏亮	佐藤宏亮	岡野光洋	田中建次	八月二十七日	今井由美	池北智美	尾崎加奈	昇里紗	昇里紗
小林かおり	千頭美	林由夏	藤倉恵梨	佐々木知江	藤川由貴	綿瀬香裕	児玉裕二	田岡哲三	梶川佳樹	石川優也	大木孝典	福島孝陽	西田瑞里	真鍋洋平	岡田秀斗	大森達也	万代雄大	森田幸弘	吉田之	掛水敏伸	武市大樹	水口裕一	森本平	古本雄大
平岡達也	藤原秀行	坂本和太	増田雄也	竹島一也	高島暁	橋本拓	十月二十九日	北岡悠紀	中島穰	吉岡亜季	小笠原のどか	宮崎真理	武知明彦	細井正忠	三倉真太郎	倉崎建吾	笠井純一	井上壯	佐藤通	村川佳久	奥村優斗	森岡潤平	田中早香	楠本克枝
猪尾晃生	古谷勇人	海老名智也	古野力也	喜多賢治	立石徹明	高橋竜晃	沖川恭宜	岩田晋平	奥里浩司	中辺史亮	渡辺将巳	村口史郎	咲川直朗	根来真也	一ノ宮充弘	岡大介	富岡胤人	高木岳	一月二十八日	十三年	秋田正弘	中山祐次	十一月二十六日	十一月二十六日

佐藤雅紀 服部貴則 石川智博 新谷高史 近藤幸男 福家菜月 稲井春香 平尾愛香 佐藤美智子 福田早苗 木内祥子 一鷹綾 高倉梓 福岡七子 大野尚子 広岡由記子 吉成彩香 加戸紗智子 昇志穂

居合道

【七段】

十一月十一日

坂本憲一

【五段】

十一月五日

亀井洋祐

【四段】

十一月五日

西原仁

桑原愛奈

【三段】

五月七日

篠元徑夫

十一月五日

中川典子

亀井美和

【二段】

五月七日

川原健太

浜原昌隆

吉村敬子

岩本悦子

【初段】

五月七日

新居大

吉村崇司

近藤三菜子

白井佳織

西岡俊治

三木良平

三好祐司 米倉祐智 小野和敏 辻健一 林由美

# がんばろう徳島

平成十三年二月十八日、第二十三回日本剣道少年団研修会が日本青年館東京都新宿区)で行なわれ、体験・実践発表会へ、四国代表として、中学の部へ岩見恭輔君(徳島錬心館)と小学生の部へ平野千尋さん(鳴門市光武館)が出席し、お二人とも敢闘賞を受賞されました。以下にその発表内容を掲載します。

## 剣道を通して(剣道と健康)

徳島錬心館 中学一年生

岩見 恭 輔



僕が剣道を始めたのは、幼稚園の年長の時でした。僕には、幼少の頃から喘息という病気が

ありました。その病気を治すための一つの方法として剣道で気力、体力を強力にし、

体を作る意味で剣道を始めました。

剣道と平行して体を強くするために、スイミングも始めていましたが、一年間ぐらいは通ったと思いますが、母の方が剣道に熱心になり、スイミングは途中で断念してしまいました。

最初、防具をつけるまでの練習は、とても楽しかったです。足運びの練習、素振りの練習など、僕は、もともと、とびはねる事が大好きなので、喘息さえなければ、もっと楽しいだろうなと思いました。それから五ヶ月ぐらい後に防具をつけての稽古が本格的に始まりました。防具をつけてからの稽古は、楽しさばかりではありませんでした。

低学年の頃は、ほとんど、母にひっぱられて、つれていかれたと言う感じでした。でも、高学年になると、少し試合に出させてもらうようになると試合の勝ち負けが気になり出して、負けると悔しくて泣く事が多くなり、もつと稽古をしなくては駄目だと思ふようになりました。

その頃から、自ら進んで稽古に出るよう

になりました。特に僕の剣道観を強くさせたのは、小学六年生の時に出場した日本武道館での試合です。一回戦負けとなりましたが、あこがれの日本武道館で試合が出来たという事は、僕にとって素直にうれしかったです。

僕は、いろいろなきっかけをバネに剣道への思いを強くしていく自分を感じています。

今は、中学生となり、部活動でも剣道部に入学しています。中学校の剣道部は、道場の剣道とは少し違い、部員が多いせいか、あまり厳しくありません。剣道は厳しいものだと思っていた僕は啞然とする事が、たびたびあります。その他、今日ニュースなどで、少年の犯罪など、多くを耳にしますが、同じような年頃の僕としては、悲しく思います、やはり自分の行動には、責任を持たなくてはいけないと思います。

僕も中学生になり勉強面、生活面で悩み事も多くなってきました。今の自分を剣道を中心として見つめると、これからの自分の進みたい方向が少し見えてくるように思

いますが不安も多分にあります。

そんな僕の一つの目標は、道場の稽古は休まないという事です。僕は今、徳島錬心館という伝統ある道場に通っています。この道場での稽古は、礼儀から厳しく、僕達生徒は、一般の先生方の中に入って稽古を行います。

先生方との稽古には、常に緊張感があり、厳しく指導して頂く中で、充実した稽古となっています。でも、そうした厳しさの中で先生方は、僕の体を気遣ってくれ、僕に声を掛けてくれます。「大丈夫か」、「まだできるか」などいつも気遣いと、やさしさをを見せてくれる先生方です。体作り、体力作り、病気を治すために始めた剣道なのに、いつの頃からか真剣になり、勝負を主とする剣道に変わっていました。ぼくの喘息は、まだ治った訳ではなく毎日、朝晩五種類の薬を飲み、吸入器という機械を使って吸入を行わないと僕の生活は、始まらないのです。以前に聞いた話ですが、剣道が続けて喘息が治った人がいると聞いたことがあります。喘息には腹式呼吸がいいそうです。

剣道は、自然のうちに腹式呼吸になっているからぼくの喘息もきつと治ると思っています。僕が、今日まで剣道が続けてこれたのも全て、先生方の厳しい中にも暖かいご指導と両親は元より、祖父母の愛情と応援のおかげだと思いい感謝しています。

僕は将来、剣道の精神を生かし、警察官になりたいと思います。これからも、どんどん稽古に励み心身ともに鍛え、自分が受けた思いやりの心をだれかに分け与えられるような立派な人間になりたいと思います。僕は、剣道が大好きです。

## 剣道と家族

鳴門市光武館道場

小学  
五年生

平野千尋



私は、小さいときから父の剣道を見て育ってきました。竹刀でたたき合いをするなんて、と

ても痛いんだろうなとも思っていました。時々かがされる籠手の匂いもたまりません。でも、父と母がしている剣道を見てみると、とても楽しそうなので、私も早く大きくなっていっしょにやりたいなあと思わず思うようになっていきました。

けいこが終わって面をとったときには、道場一杯に汗いっぱいの顔が広がります。気持ちのいい、そんな顔を見るたびに、いっしょにやりたいなあという気持ちはだんだん強くなって、ついに私は、

「お父さん、私も剣道する。」

父はこの言葉を待っていたようです。次の日には、さっそく防具屋さんへ連れて行かれ、防具の注文をしました。

私に通っている道場は、鳴門市光武館といます。父が小学生の頃に習っていた道場で、全国でもめずらしく、鳴門市が管理している剣道専用の道場だそうです。

いざ剣道を習い始めてみると、毎日毎日、がすり足の練習ばかりでいやになってきます。道場でのけいこがない日も、家の前で父といっしょにすり足の練習をします。楽しい剣道はいつになったらできるだろうと、いつも思っていました。

父の口ぐせは、「剣道は、基本が一番。」そればかりです。私が、

「早く面をつけてお父さんやお母さんと打ち合いたい。」  
といつても、

「すり足ができるようになったらな。」  
といって、竹刀も持たせてくれません。私は剣道がこんなにおもしろくないなんて思ってもいませんでした。

半年ぐらいして、やっと素振りもできる

ようになり、いよいよ先生の面を打たせてもらえる日がきました。

### 『ポッコーン』

体中に電気が走ったようでした。やっぱり気持ちがいい。私が想像していたとおりです。初めて竹刀で面を打ったときのこの気持ちは一生忘れられません。

面をつけて試合に出るようになった今では、父の言っていた「基本が大事」という言葉の意味が少しずつ分かってきたように思います。手と足がバラバラではやっぱり勝負になりません。

五年生になってからは、団体戦のメンバーに選ばれ、今度は試合では負けたくないという気持ちが強くなってきました。男の子にも負けたくありません。いつの間にか、試合で負けると涙が止まらなくなっていました。

しかし、負けるのがイヤで後ろに下がったり、かわしたりして勝ったとしても、父は喜んでくれません。

「剣道は自分を表現することだから、思い切って前へでないとだめだ。そんな試合

は、千尋らしくない。」  
としかられます。そして、

「正々堂々と、いつもけいこをしていることを自分らしく思い切ってだしてやればそれでいい。」  
と教えてくれました。

二人の弟も剣道に参加するようになった今では、家族で剣道ができることが一番楽しいし、私に少しきびしいけれど、それがなぜかうれしくて、フアイトができてきます。

また、家の中では剣道の話をする事が多くなりました。何の問題がおきても最後はいつも剣道の話になって終わります。でも、私はこんな家族が大好きです。剣道によって家族が一つになっているこの空間をずっと大切にしていきたいと思えます。

私の夢は、この家族でチームを組んで大会に出ることです。きっと楽しい試合になるはずですよ。それまで、この家族のなかでいっしょけんめい剣道を続けていきたい、そして家族と共に学んだ剣道で社会に役立つ人になりたいと思っています。



発表会の五週間後、水戸の県立武道館で、第四十二回全国選抜少年剣道錬成大会が行われ、鳴門市光武館は、コート優勝し、ベスト一二となりました。参加チームは三六四チームであり、優秀選手に山本義征君が選ばれています。以下に試合結果を記載します。

1回戦

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	勝数	代表
茨城 千束剣友会	羽 戒	鈴 木	金 澤	佐々木	平 岡	1(3)	羽 戒
			メ		メ		
徳島光武館		メ				1(3)	コ
		メ			メ		
	梅 木	平 野	山 本敬	小 倉	山 本義		梅 木

2回戦

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	勝数	代表
徳島光武館	梅 木	平 野	山 本敬	小 倉	山 本義	3(5)	
		コ	メ		コ		
青 森 三沢少年剣道隊				メ		2(5)	
	コ	ド		メ	ド		
	向谷地	田 中	杉 山	和 田	仲 居		

### 3回戦

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	勝数	代表
徳島光武館	梅木	平野	山本敬	小倉	山本義	2(4)	
	コ	メ			メ		
神奈川県 征道岩尾道場	メ			ド		1(3)	
				ド			
	山田	小林	武田	平出	小島		

### 4回戦

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	勝数	代表
宮城 あらた道場	若松	庄司	北江	早坂	若松	2(3)	北江
	コ				メ		
徳島光武館		メ		メ	コ	2(3)	コ
	梅木	平野	山本敬	小倉	山本義		
							山本

### 5回戦（コート決勝）

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	勝数	代表
徳島光武館	梅木	平野	山本敬	小倉	山本義	2(3)	
		コ			メ		
埼玉武蔵館		メ				2(2)	
			コ	コ			
	杉谷	宮川	今濱	遠藤	後		

6回戦（決勝トーナメント）

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	勝数	代表
茨城 勝田若葉会	高 島	熊 谷	鈴 木	武 元	東 出	3 (7)	
	ド メ	X	メ コ	メ メ	コ メ		
徳島光武館						0 (2)	
	ド	X			メ		
	梅 木	平 野	山 本敬	小 倉	山 本義		

少年強化訓練・  
京都遠征に参加して

那賀川B & G剣道教室

長 地 千 景



私が、強化訓練に初めて参加した四月。どんなことをするのか、とても楽しみでした。

午前中は、基本練習。堀金先生の指導により、正しい基本が身につきました。月一回ごとに午前中の練習は、厳しくなってきました。

午後は、試合。他の剣道クラブの人と試合し、とても緊張しました。四回戦ほどで負けてしまったが、第一回では、いい成績が残せたと思っています。

試合が終わると、最後に、先生方にかかっています。私は、一生懸命かかっています。また、悪い所を注意してくれるの

で、いい勉強になります。終わると息が、上がっていました。

一日の練習が終わると、先生方から、お話しがあります。堀金先生のお話しは、剣道のためになる話だけではなく、私達自身のためになるお話もあります。今では、堀金先生の言ったことが役立っています。

こうして一日の厳しい練習が終わるのです。そして、平成十三年二月二十五日、私は、徳島の選抜として、京都の大会に出場しました。私は、県外へ行くのだから、強い人がたくさんいると思っていました。そして一回勝つのもむずかしいと思っていました。

そして、緊張の一回戦。幸運にも二本取ることができました。私は、「よし、一回戦は勝った。次の二回戦もこの調子でがんばるぞ。」と思いました。

二回戦。ここでも二本を取ることができ、ある程度自分に満足していました。

三回戦。何とか一本を取り、時間がきて勝ちました。ここまでできたからには、優勝までいってやる、という気持ちになりました。コート決勝。一本を勝ち。これで三位以

内が確実になりました。自分でも信じられないほど、おどろきました。

準決勝。私は、一分もたない内に勝ってしまった。はっきり言うと、私は相手に勝つ自信はありませんでした。けど、弱気になってはいけないという気持がありました。

決勝戦。私の気持ちはさらに勝とうという気持ちでいっぱいになりました。しかし、私は、二本を取られ、くやしきでいっぱいになりました。けれど、この大会に出場して、よかったと思っています。

閉会式の表彰。「準優勝。徳島剣道連盟選抜、長地千景。」私は、照れながら前へ出て、そして、メダルと賞状をいただきました。この時ほど、うれしいことはありませんでした。

そして最後に、この京都の大会で準優勝できたのは、日頃、B & G 教室で指導していただいている、山田先生、谷口先生、上野先生そして B & G で一緒に練習している周りの人達のおかげだと思います。

本当に、ありがとうございます。

## 少年強化訓練京都遠征

竜虎館 福永竜己



平成十三年二月二十五日にぼくは少年強化訓練の中から京都竹友会少年剣道大会に出場しました。

会場に行くとき京都近県から千人余りの選手がいて驚きました。周りをみると背が高く強そうな人がたくさんいて緊張してきました。

いよいよ試合がはじまりました。一回戦は向陵剣道教室の選手とあたりました。体が固くなってあまり動けませんでしたが、何とか相手から小手をうばい勝てました。二回戦からは少しづつ自分をとりもどすことができ、先に進むことができました。

準決勝まで進むことができた時、ぼくは自分でも驚いていました。自分がこま

で進めたということが信じられなかったからです。でも反対に「ここまできたら優勝を狙うぞ」という気が出てきました。

決勝トーナメントでの一回戦は篠剣道 JSC の選手で小さい体だけど動きが速くとも強そうな人でした。ぼくの方から攻めてみたけど、すきをつくらぬ構えや受け方、それに相手はスタミナもあって一本がなかなか取れずにいきました。何度か延長してやっと小手はらい面で一本取ることができました。準決勝で一本勝ち。

次ぎは決勝戦です。

相手の京都弘道館の選手はまるで中学生のような剣道をする人でした。「はじめ」の合図で小手を狙いにいききましたが、相手の面に負けてしまいました。とりかえそうと思ひ、面を打ちにいたら二本目を取られました。体も技術もぼくとは別格でした。残念でしたが、こんな人と試合ができてよかったと思っています。

この大会での反省は、もっと積極的に打って、気合い負けしないということです。もっと自分に自信をもっていききたいと思いまし

た。

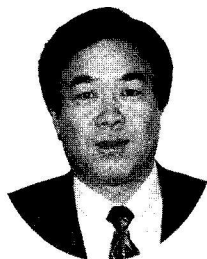
剣道を通して友達がたくさんできた事、小学校卒業間近にこのような県外の試合に参加できる機会をもらえたことが、とてもうれしかったし、勉強になったと思っています。

強化訓練で、お世話になった先生方、六年間指導してくださった竜虎館の先生方、本当にありがとうございました。

## 教室だより

半田町剣道教室

室長 大川 功



二十一世紀の  
新時代が始まり、  
各教室や道場の  
方々に置かれま  
しても稽古に励  
まれている事と

拝察致します。

さて、新時代の幕開けに先立ち、半田町  
剣道教室の状況を報告させて頂くことを幸  
いに思います。

先ず最初に私の所属する、剣道教室の概  
要について説明させていただきます。当教  
室は、昭和五十三年に半田町字小野の半田  
町小野公民館内を稽古場として小人数の稽  
古生とともに開設され現在も、ここで稽古  
に頑張っております。開設当時は指導者・稽  
古生を合わせても十人足らずでしたが、稽  
古の内容は、和やかな中にも厳しい稽古に

励んでおりました。年を重ねるうちに剣道  
の良さに気付いたのか、段々と稽古生が増  
え始め昭和六十年前後には、三十余名の稽  
古生を抱えるほどになっていました。

手狭な場所での稽古には限りがあり稽古  
量でも十分な事が出来ていなかったように  
思いますが、反面その頃の稽古では、指導  
者の数も七名ほどあり、所属していて稽古  
生の相手としては、十分であったように思  
います。その結果か、当時開催されていた  
各種大会に参加する都度、何名かは、入賞  
者がいた様に記憶しています。その頃は、  
指導者も、結果を踏まえ、稽古に対する心  
構えや指導方法も考慮しながら良い方向に  
進んでいました。

しかし、その時期をピークにして、どん  
な理由かは、解りませんが、稽古生が減少  
し始めました。卒業生に対して入門生が少  
ないのです。入門生が少ない理由はいろい  
ろあると思います。私も、稽古生が減少し  
始めた頃よりどうかしなればと、県剣  
連の先生方にも相談し、ご助言を頂いたり、  
稽古生が嫌がる稽古内容を変更し、楽しく

稽古に参加できる様、指導方法を変えてみたりと底辺拡大に努力してきました。しかしながら、減少を止めることが出来ず、教室にも平成十二年度の登録稽古生は、八名と激減しています。

これからは、少ない人数でも大会に参加し、入賞しようと言う稽古生の気持ちを中心にしながら、指導者四名で力を出し合い、自分達の資質向上と稽古生の心身鍛練・健全育成に努力していきます。

教室の今後の方向付けとしましては、以前の様な活気のある教室運営を目指して、保護者会とも連携しながら、剣道の底辺拡大に努めるとともに稽古生の確保に向かつて尽力し、充実した稽古が行えるように行きたいと思えます。

最後になりましたが、教室の運営に対し今後とも、県剣連の先生方の御指導・御助言が頂けますようよろしくお願いいたします。



平成2年1月 半田町剣道教室にて

## 入田錬成会

徳島支部 佐藤佳宏

入田町は、徳島市の西部に位置する人口約二千人の小さな町です。中学校の部活動では以前から剣道が盛んであり、全国大会にも出場するなど輝かしい実績を誇り、OBも多数存在しているという恵まれた環境の中、昭和五十八年入田錬成会が誕生しました。当初は小学生数名という小人数でのスタートでしたが、次第に人数も増え、一時は五十名を越す勢いでありました。しかし、最近は少子化の波に押された形で、部員の減少も否めないのが実状です。

現在、小学生十九名、中学生十六名の計三十五名で、火曜日と土曜日の週二回、入田中学校体育館にて、午後七時半から約二時間の稽古を行っています。小学校低学年、高学年、中学生と段階に応じた稽古内容を取り入れ、ただ勝つためだけでなく、基本を重視した、将来性のある剣道を目指した指導をこころがけています。

最近は、ただ見ているだけでは飽きたらず自ら防具を付け、子供たちと共に汗を流す父兄も多くなってきました。「交剣知愛」をモットーに、松村会長を筆頭として、指導者、父兄が一丸となって、入田錬成会を盛り立てていくようがんばっています。

## 年間最多 稽古賞を受賞して

鳴門支部

竹内 佳代子



週二回警察学校で行われている剣道連盟主催の稽古会が、今の私の唯一の練習場所となつて

います。学生時代と違い、社会人になると練習の機会や時間を自分で求めていかなければ、だれも何も与えてくれません。それだけに、この稽古会を大変ありがたく思います。成年女子が出来ての初めての国体で五位入賞という実績を残せたのも、六段に合格できたのも、すべてこの稽古会のおかげです。すばらしい先生方から適切なアドバイスをいただき、練習に打ち込めたことが大きな力につながりました。心から感謝をしています。

さてその稽古会では毎年、年末の最後の

稽古の時に、最も多く稽古会に参加して人に「最多賞」のご褒美が出されます。今までの私は、この賞を意識したことはなく、「行けるときだけ参加すればいい」と安易に思っていました。だから、仕事の終わる時間が少し遅くなったりすると、「今日はまあいいか」とすぐに休む方を選んでいました。でも、二千年の新年をむかえた時、今年目標を決めるにあたって、「今年は、最多賞を目指すぞ」と心に決めました。形に残る目標を持つことで、ただ漠然と剣道を頑張るのではなく、具体的に頑張ることができると考えたからです。(前回の最多賞は手塚先生、三位が平野悦子さんでした。こうしたお二人の女性の頑張りが刺激になったのも理由の一つです。)

だから、仕事、家族のこと以外での理由で稽古は休みませんでした。週二回とは言い、休まず稽古に参加するのはけっこうきつかったです。特に水曜日の練習の後は、家に帰ると我が子がうたた寝をしており、その姿を見ると心が痛みました。そこまでして稽古に行くべきかという悩みもできて

ました。そこまでして「最多賞」にこだわることか。でも、私がこだわったのは、「最多賞」という賞ではなかったように思います。それよりも、自分が一度決めたことを最後までやりとおしたいという気持ちが強かったように思います。幸いに、大麻中学校の保護者の方が気持ちよく車を出してくださいだったので、土曜日の稽古会には生徒共々お世話になることができました。生徒も、多くの先生方から御指導をいただけるので、警察学校に稽古に行くことを喜んでいきます。

去年の最後の稽古の時、平野悦子さんとともに同数で「最多賞」をいただいた時は、とてもうれしかったです。自分が目標に決めたことを達成できた満足感は、自分への自信にもつながりました。何をやりはじめてもいつも三日坊主になることが多かった私だけに、今回のことで、「自分もなかなか意志が強いな」と思うことができました。それで今年はその意志の強さを信じて、稽古会の参加に加えて、週二〜三回のペースでジョギングを続けることを心に決めました。(ダイエットをかねて)その先にある

目標は、「全国大会に出場、結果を残す」です。年が明けて二ヶ月が過ぎましたが、今のところジョギングも続いています。そのおかげか、今年は都道府県対抗の剣道大会に参加することができました。ただ参加しただけに終わらせず、満足のいく結果が残せるように、これからも頑張るつもりです。「継続は力なり」ということを実践してみせることで、生徒達のよい刺激になってくれればと願っています。

今私は毎日が楽しいです。目標を持って生きているからです。具体的な目標に向かって努力している自分があるからです。大事なのは、結果ではありません。本当に大事なものは、本当の心の充実とは、努力して頑張っている過程の中にあるということも生徒達に伝えたいと思っています。

“一生青春、一生現役”でこれからも頑張ります。

今年もご指導よろしく願います。

## 剣道を楽しむ

鳴門支部

平野悦子



気がつくど、剣道に復帰してあつという間に三年が過ぎていました。出産と育児のため剣道

から離れること十年、剣道のない生活にもすっかり慣れていたように思います。専業主婦の私にとり、家庭に入れば家事が優先するのは当然であり、それが自然であると思っていました。主人の応援だけがせめてもの接点であるとしていた私が、今更剣道を再開するなんて夢にも思っていませんでした。

しかし、平成十年に小学校三年生の長女が剣道を始めると、しまい込んでいた気持ち動き出し、「主人や子供たちと稽古をしてみたい。」「見ているだけではつまらない。」という考えになり、ついには竹刀を握る決

心をしたのでした。でもそれは、決して今までのような強制された剣道ではなく、自ら楽しみを求めるための動機にしか過ぎませんでした。

「剣道を楽しむ」と言っても、最初は稽古で楽しく、打っても打たれても気持ちのいい汗を流せばそれでいいと思っていました。しかし、回を重ねると共に稽古の中で打たれてばかりではおもしろくない。何か楽しくないことに気づいたのです。とにかく一本でもいいからいいところ打ちたいという気持ちが強くなり、知らぬ間に工夫をしたり、研究をしたりして、今思えばこの辺で本来への稽古へと変わっていくのです。

一口に「剣道を楽しむ」と言っても、すべて段階があってそのレベルでの楽しみ方が違うし、変わっていくのは当然です。まずは高校・大学の剣道観（やらされていた先輩後輩の重圧感等）をすべて捨て去って、今現在の動機付けをする必要があると思います。家庭婦人の中で、バレーボール・テニスといったママさんスポーツが盛んな

のは、毎日の生活の中で溜まったいろいろなことを汗とともに流してしまおうと考えているからではないでしょうか。みんな少しの余暇を利用し、いや時間を作っても何かに集中できること、真剣に向かい合えるものを求めているはずなのです。剣道を胸の奥にしまっている女性の皆さん、どうか汗を流すことの爽快感を思い出し、生活にリズムと活力を取り戻してはいかがですか。

今回、稽古会の最多賞をいただけたのも、三年間がこうして楽しみを味わってきたからであります。現在私は、火・木の少年剣道と水・土の強化練習の週四回の稽古をこなしています。分ち合える仲間が非常に少ないのがとても残念でなりません。どうか、毎日の生活の中で何かを感じておられる方は、町の少年剣道場でも結構ですから思い切って飛び込んでみてください。きっと何かが変わるはずですよ。

私も二千一年の新たな「楽しみ」を胸に、今年も気持ちのいい汗を流していきましょう。

# 強化遠征、 受け入れ記録（成年）

強化部  
近 藤 亘

平成十二年、選手強化のため、県外遠征・県外チーム受け入れを次のとおり実施しましたので報告します。

## 1 県外遠征

目的	実施日	遠征地	参加者	備考
都道府県遠征	4/8土	香川県 県立武道館	堀江幸夫名誉会長 木原資裕監督 近藤 亘・臼木 崇 玉田晋作・平野誠司 吉田茂生・佐藤 智 平野悦子・竈土恵子 10名	都道府県選手と試合及び稽古
	4/9日	高知県 練武館道場		同上
国体遠征	6/17土 ↓ 6/19月	熊本県 長陽村体育館	木原資裕監督 中尾正輝・近藤 亘 福多雅英・富田圭介 森 晋作・山名信行 森本敦子・平野悦子 9名	広島・福岡・佐賀・長崎 宮崎・熊本・鹿児島・徳島 8県の国体チームが合同合宿
国体遠征	8/5土 ↓ 8/6日	高知県 高知県立体育館	大澤孝彰監督 中尾正輝・近藤 亘 福多雅英・森 晋作 富田圭介・山室雅幹 山名信行 8名	京都・高知・徳島 3県の国体チームによる試合及び稽古
国体遠征	9/30土 ↓ 10/1日	香川県 県立武道館 香川県 機動隊武道館	堀江幸夫名誉会長 大澤孝彰総監督 藤本雅史監督 近藤 亘・福多雅英 富田圭介・森 晋作 山室雅幹・山名信行 9名	国体選手と試合及び稽古

## 2 県外チーム受け入れ

来県名(チーム名)	実施日	実施場所	参加者	備考
奈良県	1/22土	警察学校体育館	上垣八段 以下7名	
兵庫県 (明武館)	3/4土	警察学校体育館	平野七段 以下10名	
岡山県 (西大寺剣道連盟)	4/1土	警察学校体育館	石原範士九段 以下31名	試合及び稽古
(国際社会人剣道 近畿クラブ)	6/17土 ↓ 6/18日	警察学校体育館	国際社会人剣道 近畿クラブ会員 25名	稽古
滋賀県 (国体選手)	9/9土 ↓ 9/10日	徳島市B&G 海洋センター	脇本コーチ 以下6名	国体選手と試合及 び稽古

# 徳島県下稽古場所・時間帯一覽

一般社会の方が稽古できる場所と時間帯一覽を作成してみました。

主催	場所	住所	日	時	駐車場	常時参加人数	代表者	メッセージ
剣道連盟	警察学校体育館	徳島市論田町	水	第2・4土その他土	50台	30名	遠藤 一美 〇八六五七〇七	県下の実力のある剣士が集まっています。さらに充実した稽古会になるよう、さらに多くの人の参加を期待します。
徳島支部	県立武道館	徳島町城の内六番地	水	一九〇〇〇〇〇〇	無	15名	馬場 力 〇八八六八〇〇〇	剣道をやりたい人があれば、どなたでもおいでください。土曜のみ二七〇円利用料がかかります。
	東内道場	北矢三町四丁目 県営住宅前	水	土	5台	5名	東内 勉 〇八八六三〇七	老若男女年齢問わず。
	上八万小学校体育館	上八万樋口	水	一九〇〇〇〇〇〇	10台	30名	河野 通宣 〇八八六八〇〇七	小学生の練習は、水曜一八〇〇〇〇土曜一七〇〇〇です。
	加茂名中学校体育館	庄町一丁目	水	一九〇〇〇〇〇〇	有	10名	橋本 武 〇八八六七九七〇七	初心者も歓迎基本中心
	加茂名小学校体育館	庄町五丁目	木	一九〇〇〇〇〇〇	有	15名	橋本 武 〇八八六七九七〇七	少年中心の錬成
	加茂名南小学校体育館	鮎喰町二丁目	日	一九〇〇〇〇〇〇	有	8名	藤本 俊夫 〇八八六四〇七	一九〇〇〇〇より一般の稽古
	養武館	徳島市八万町馬場山 四三二	火	一九〇〇〇〇〇〇	5台	5名	米倉 滋 〇八八六八六六五	県下で唯一、空調設備の整った道場で夏でも快適！
	岫雲館	徳島市北田宮三丁目二	月	木	10台	10名	藤本 辰夫 〇八八六九四七〇七	基本練習からやっています。初心者の方も気軽にどうぞ。
	徳島清風館	徳島市国府町八九	火	木	15台	4名	植田 一夫 〇八八三三三五六	基本理念は「正しく楽しく仲良く」おいで頂くときは電話して下さい。
	県庁剣道同好会	県立武道館	徳島町城の内六番地	毎月一回土曜日	無	15名	寺西 慶裕 〇八八六八五〇七	平成九年に発足しました。細く長く続けるため、月一回どなたでも気軽に参加して下さい。
	鳴門支部	光武館	撫養町大桑島	第二日曜	30台	8名	浅野 精一 〇八八六六二六五	
	板野東支部	松茂町総合体育館	松茂町中喜来字群恵 二二五一一一	金	一八〇〇〇〇〇〇	300台	8名	米田 利彦 〇八八六九六六五

美馬東支部		阿波支部		板野西支部			板野東支部		阿南支部				主催	
穴吹小学校 体育館	脇町小学校 体育館	市場町立武道館	阿波中学校武道館	土成町農業者 トレーニングセンター	上板中学校 体育館	藍住町武道館	北島町立武道館	北島北小学校 体育館	徳島至誠館	羽ノ浦町武道館	那賀川B&G	大野小学校 体育館	阿南市武道館	場所
穴吹町穴吹字井口二三	脇町猪尻字西久保七八	市場町興崎字北分	阿波町字東原二三〇	土成町土成字漆畑	上板町神宅西金屋四〇	藍住町矢上前三二一一	北島町江尻柳池四一	北島町北村字巻町四友地	羽ノ浦町宮倉沢田	羽ノ浦町宮倉	那賀川町今津浦	阿南市下大野町	阿南市大湯町	住所
月 九〇〇〇〇〇〇〇	火 一九〇〇〇〇〇〇〇	月 二〇〇〇〇〇〇〇〇〇	水 二〇〇〇〇〇〇〇〇〇	水 一九三三〇〇〇〇〇〇	火 六三三〇〇〇七四〇	火 二〇〇〇〇〇〇〇〇〇	土 一八三三〇〇〇〇〇〇	月 一九〇〇〇〇〇〇〇〇	木 〇八八四四四六六〇	水 六〇〇〇〇〇七二二〇	水 二〇二二二〇〇〇〇〇	水 二〇二二二〇〇〇〇〇	火 二〇二二二〇〇〇〇〇	日時
30台	30台	30台	20台	15台	50台	20台	50台	20台	15台	10台	20台	20台	30台	駐車場
5名	5名	8名	10名	9名	15名	3名	7名	6名	20名	10名	2名	4名	13名	常時参加人数
大石雅生	細川欣典	河野耀雄 〇八八二六六二二〇〇	中尾誠 〇八八二六五四〇四	岡田京子	坂東伸光	高田亮 〇八六九一九三〇	大野義則 〇八六九八二二二六	伊賀雅人 〇八八六九四四五六	中山啓男 〇八八四四四六六〇	浜田逸郎 〇八八四四二九四五	山田耕司 〇八八四三三七六	池田洋一 〇八八四三三七六	有賀秀敏 〇八八四三三七六	代表者
いつでも歓迎。	いつでも歓迎。	初心者不可、ほか誰でも歓迎。	初心者不可、ほか誰でも歓迎。	少年教室を主として、一般を兼ねています。	早朝稽古ですが誰でも歓迎します。	初心者・再開する人・剣道大好きな人大歓迎です。町外の参加者もOKです。	いつでも歓迎。	いつでも自由に参加して下さい。	剣道を愛する人の為に門戸を開いています。初心者も遠慮なく。					メッセージ



# 事務局だより

事務局員 長谷川 陽 子



私は、事務局へ入り、丸二年が過ぎようとしています。

春の心地良い汗をかく稽古、

夏の苦しい稽古、秋のさわやかな稽古、冬の冷たく辛い稽古を頑張っている皆さんの姿を目の当たりにするとなぜか元気が出てきます。事務局の仕事は、大変ですが、頑張っている皆さんを応援出来る事は、私にとってたいへんうれしく思います。

でもね、ただ一つお願いがあります。大会や審査等の申込み期日を守ってね。私の心からのお願いです……。



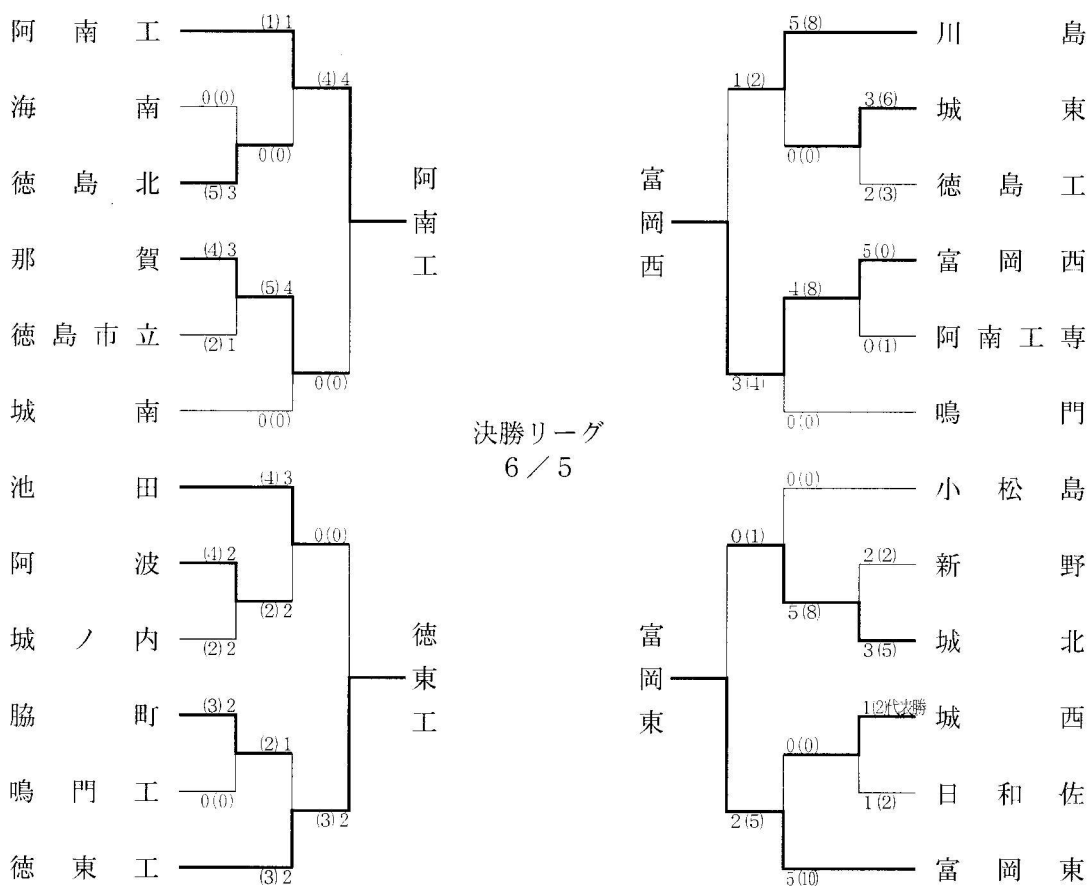
# 平成12年度 大会記録

## 第40回 徳島県高等学校総合体育大会

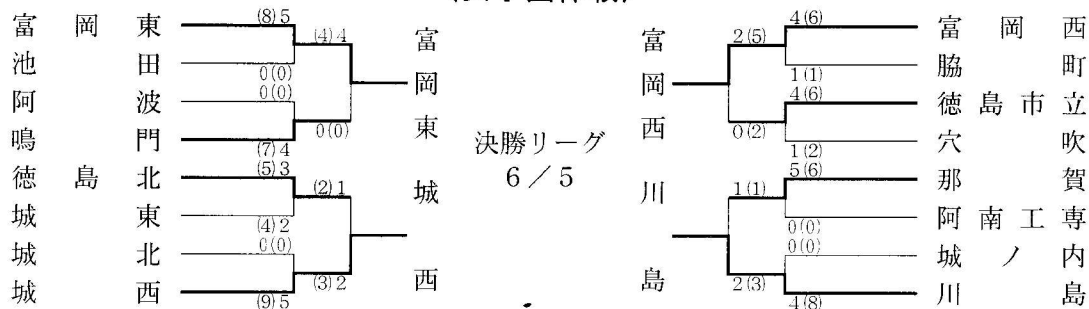
日時 平成12年6月3日～6月5日

会場 徳島県立城西高等学校体育館

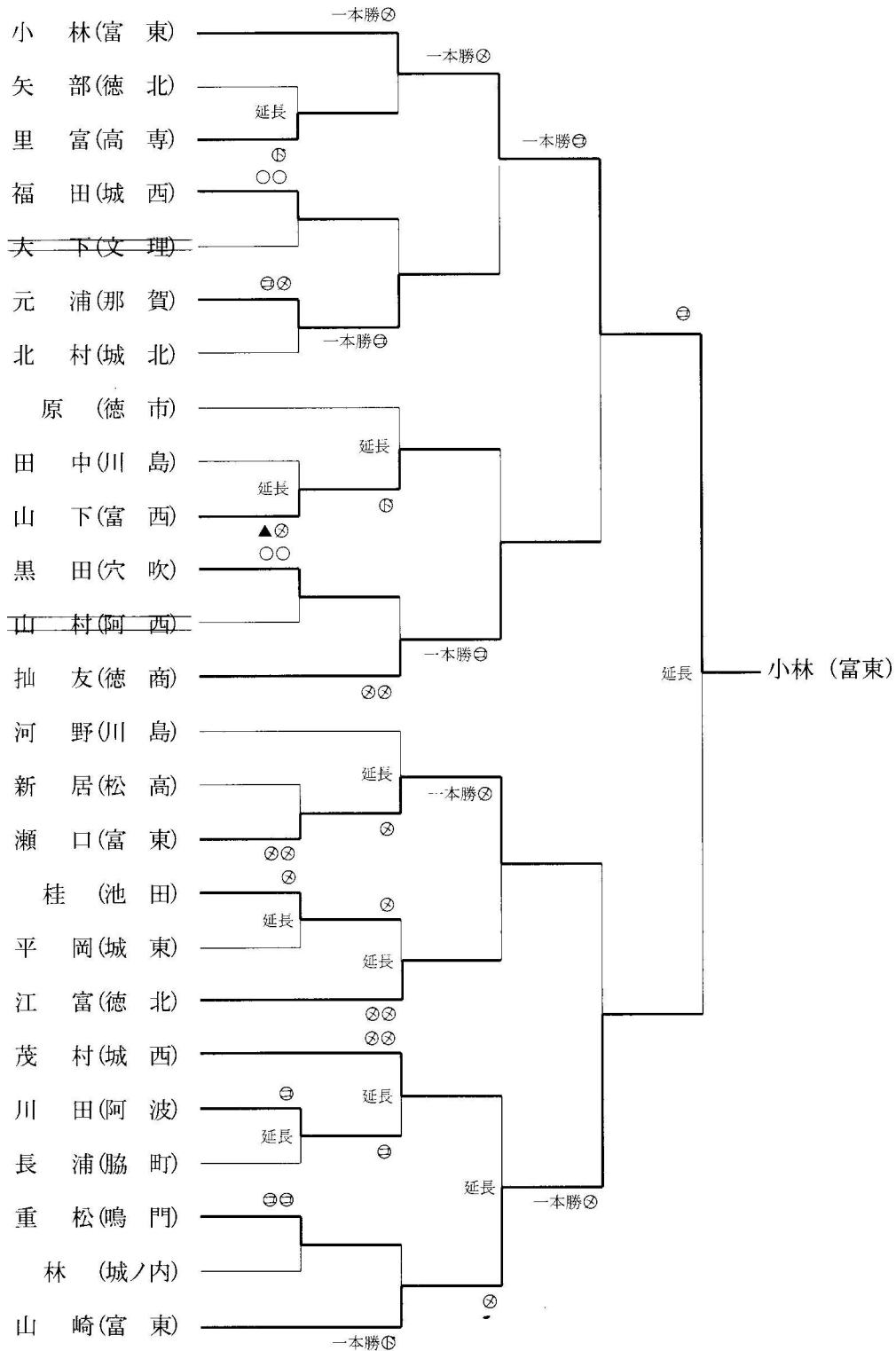
### 〈男子団体戦〉



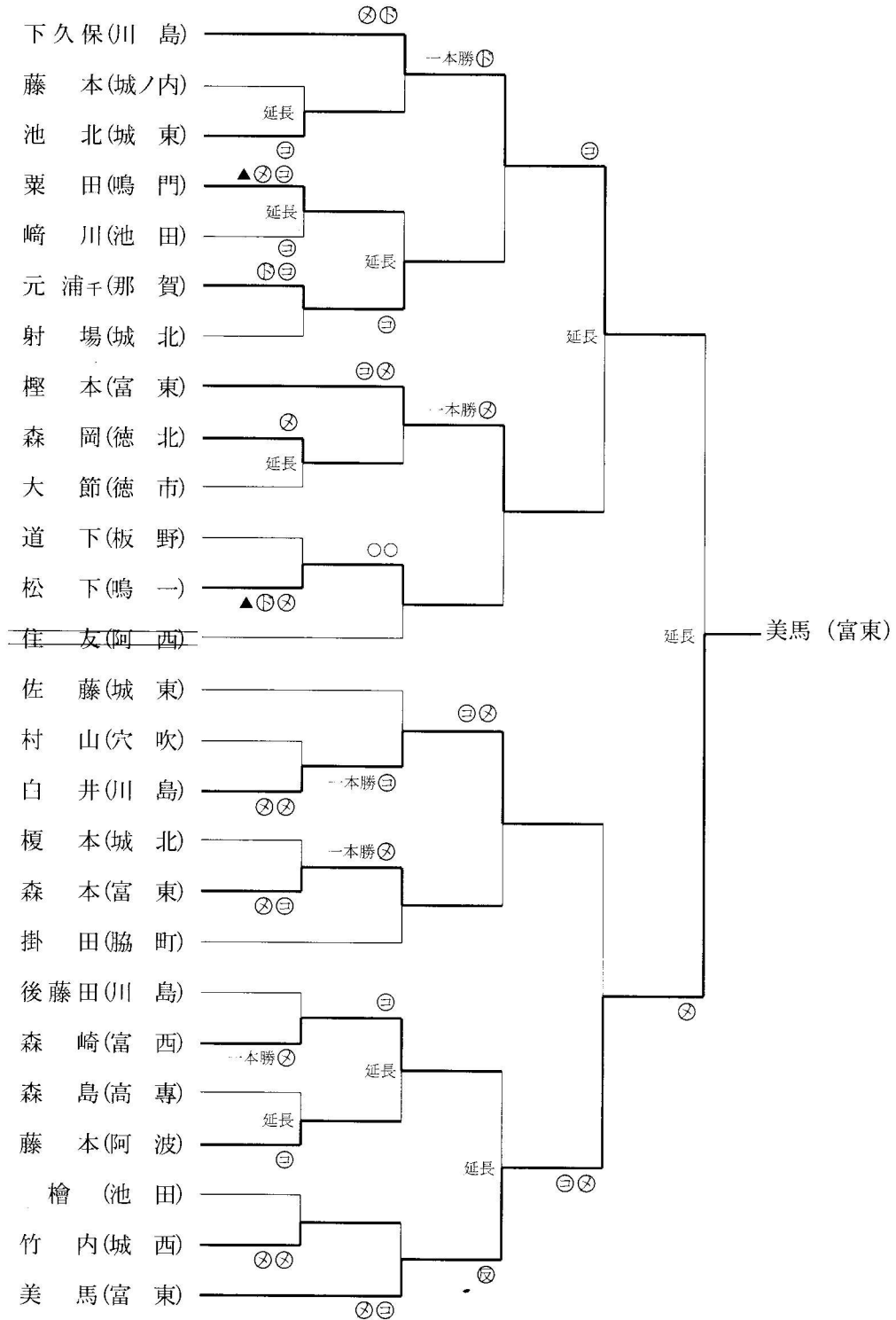
### 〈女子団体戦〉



〈女子個人1組〉

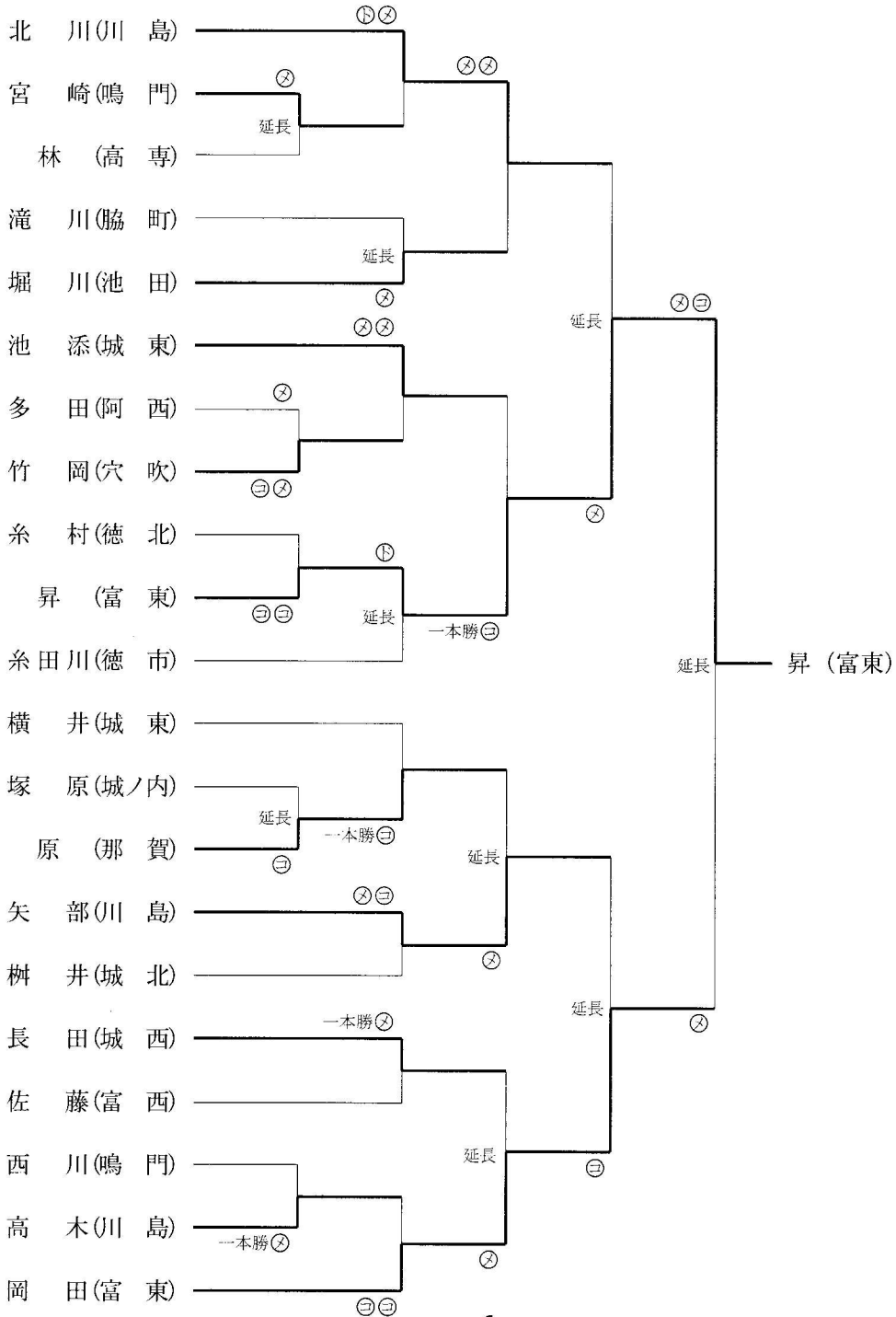


〈女子個人2組〉

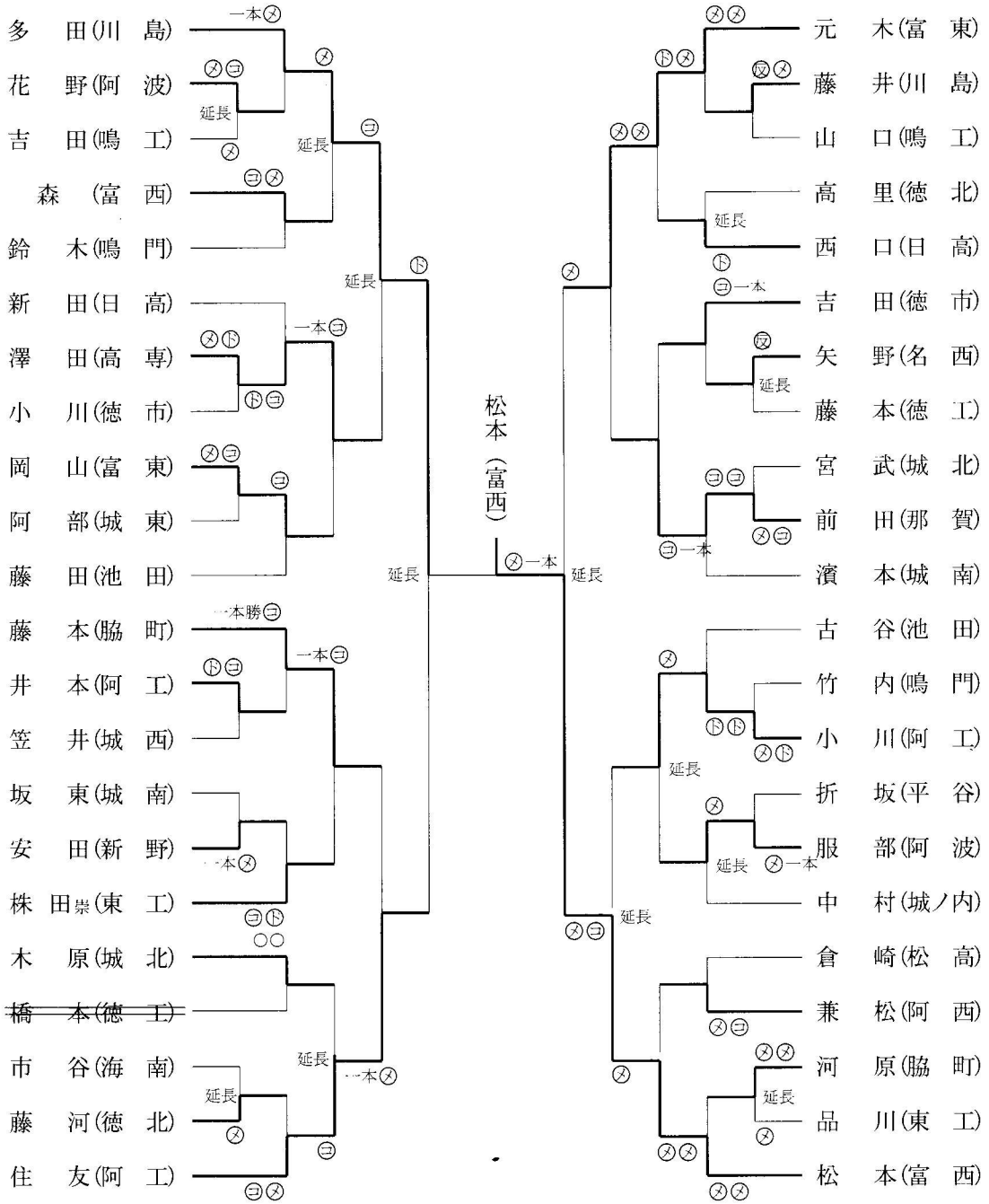




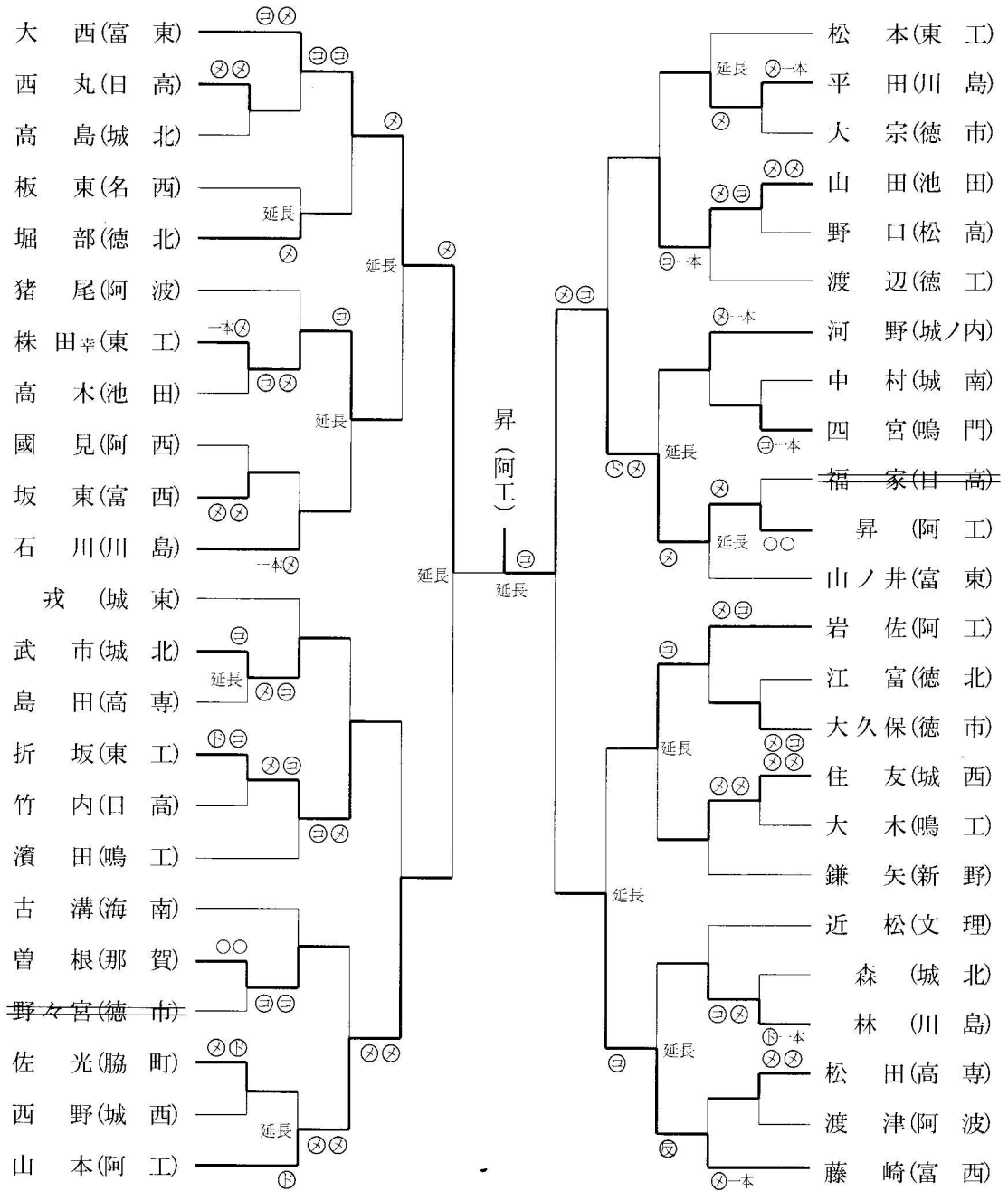
〈女子個人4組〉



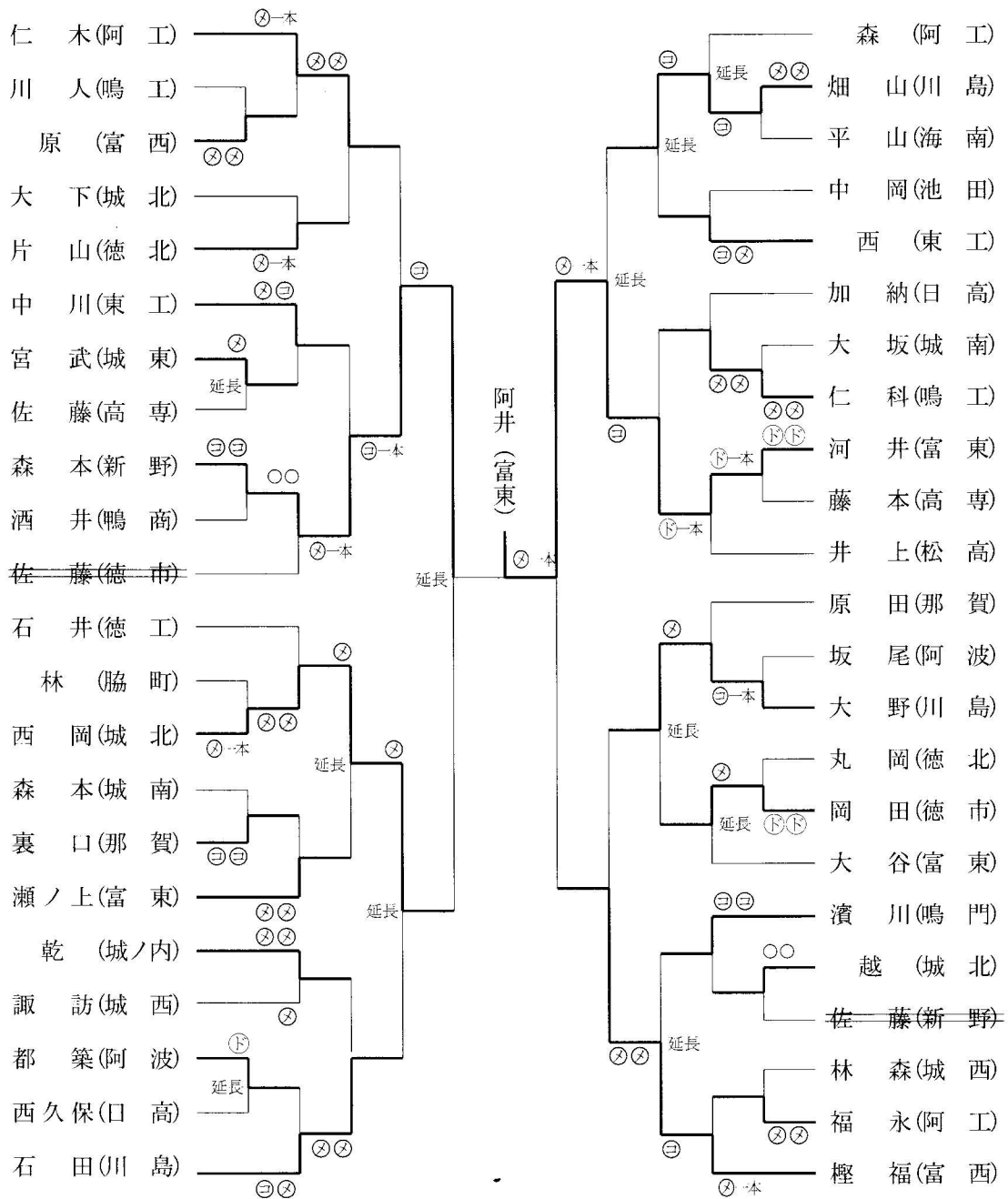
〈男子個人1組〉



〈男子個人2組〉



〈男子個人3組〉





# 決勝リーグ

(男子団体)

校名	先	次	中	副	大	得点
阿南工	昇	仁木	森	元木	住友	4 2
	メ	コメ	延長	延長	一本勝メ	
徳島東工	メコ					2 1
	品川	△松本	△瀬尾	△西	折坂	

校名	先	次	中	副	大	得点
富岡西	横手	星野	松本	原	藤崎	3 2
			メメ	延長	一本勝コ	
富岡東	メ一本勝		延長	延長		2 1
	元木	河井	竹亭	坂本	△大西	

校名	先	次	中	副	大	得点
阿南工	昇	仁木	森	元木	住友	1 1
	延長	延長		メ一本勝	延長	
富岡西			メ一本勝		△藤崎	1 1
	横手	星野	松本	原		

校名	先	次	中	副	大	得点
徳島東工	品川	松本	瀬尾	西	折坂	2 1
	一本勝メ	延長	メ		延長	
富岡東			メメ	メ一本勝	メ	4 3
	元木	河井	竹亭	坂本	大西	

校名	先	次	中	副	大	得点
阿南工	昇	仁木	森	元木	住友	0 0
	延長	延長	延長	延長	延長	
富岡東						0 0
	元木	河井	竹亭	坂本	大西	

校名	先	次	中	副	大	得点
徳島東工	品川	松本	瀬尾	西	折坂	3 2
	メメ			延長	一本勝メ	
富岡西		メコ	メメ			4 2
	横手	星野	松本	原	藤崎	

(女子団体)

校名	先	次	中	副	大	得点
富岡東	美馬	榎本	小林	昇	矢野	7 5
	一本勝	メ 延長	コ メ	メ メ	コ 延長	
富岡西				メ	△	1 0
	福田	竹内	長田	古高	茂村	

校名	先	次	中	副	大	得点
富岡西	東根	森崎	山下	佐藤	坂本	0 0
	延長				延長	
富岡島		一本勝	一本勝	メ メ		4 3
	矢野	下久保	北川	河野	阿部	

校名	先	次	延長	副	大	得点
富岡東	美馬	榎本	小林	昇	矢野	6 4
	延長	一本勝	メ メ	ド ド	一本勝	
富岡西						0 0
	東根	森崎	山下	佐藤	坂本	

校名	先	次	中	副	大	得点
富岡西	福田	竹内	長田	古高	茂村	0 0
	延長	△			△	
富岡島		メ ド	コ メ	メ メ	一本勝	7 4
	矢野	下久保	北川	河野	阿部	

校名	先	次	中	副	大	得点
富岡東	美馬	榎本	小林	昇	矢野	0 0
	延長	延長	延長	延長	延長	
富岡島						0 0
	矢野	下久保	北川	河野	阿部	

校名	先	次	中	副	大	得点
富岡西	福田	竹内	長田	古高	茂村	3 2
		一本勝	コ メ	メ メ	延長	
富岡島	一本勝			コ コ		3 2
	東根	森崎	山下	佐藤	坂本	

## 決勝リーグ

(男子団体)

	阿南工	富岡東	富岡西	徳東工	勝数	勝者数	勝本数	順位
阿南工		$\frac{0}{0}$	$\frac{1}{1}$	$\frac{4}{2}$	2	3	5	2
富岡東	$\frac{0}{0}$		$\frac{2}{1}$	$\frac{4}{3}$	1.5	4	6	3
富岡西	$\frac{1}{1}$	$\frac{3}{2}$		$\frac{4}{2}$	2.5	5	8	1
徳東工	$\frac{2}{1}$	$\frac{2}{1}$	$\frac{3}{2}$		0	4	7	4

(女子団体)

	富岡東	川島	富岡西	城西	勝数	勝者数	勝本数	順位
富岡東		$\frac{0}{0}$	$\frac{6}{4}$	$\frac{7}{5}$	2.5	9	13	1
川島	$\frac{0}{0}$		$\frac{4}{3}$	$\frac{7}{4}$	2.5	7	11	2
富岡西	$\frac{0}{0}$	$\frac{0}{0}$		$\frac{3}{2}$	0.5	2	3	4
城西	$\frac{1}{0}$	$\frac{0}{0}$	$\frac{3}{2}$		0.5	2	4	3

# 決勝リーグ

(男子団体)

	(富岡西) 松本	(阿南工) 元木	(富岡東) 河井	(阿南工) 昇	勝数	勝本数	得失点	順位
松本 (富岡西)		メ	一本勝メ	メ	3	3	3	1
元木 (阿南工)	△		コ	メコ	1	1	-1	3
河井 (富岡東)	△	△		メコ	1	2	0	2
昇 (阿南工)	△	一本勝	△		1	1	-2	4

	選手名		選手名
1	元木 コ 延長		河井
2	松本 △メ 延長		昇
3	元木	一本勝	昇
4	松本 メ一本勝		河井
5	河井 メコ		昇
6	松本 △メ 延長	△	元木

	選手名		選手名
1	昇 ココ	メ	矢野
2	小林	延長	コ 美馬
3	昇	メ一本勝	一本勝
4	小林	延長	コ 矢野
5	矢野	メ延長	美馬
6	小林	延長	コ 昇

男子最優秀選手 (松本 真治)

女子最優秀選手 (昇 葉子)

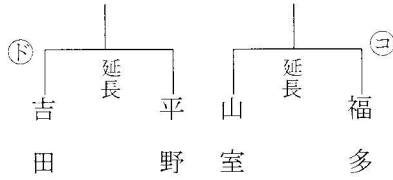
(女子団体)

	(富東) 小林	(富東) 昇	(富東) 矢野	(富東) 美馬	勝数	勝本数	得失点	順位
小林 (富東)		△	△	△	0	0	-3	4
昇 (富東)	コ		ココ	メ	3	4	3	1
矢野 (富東)	コ	メ		メ	2	3	1	2
美馬 (富東)	コ	△	△		1	1	-1	3

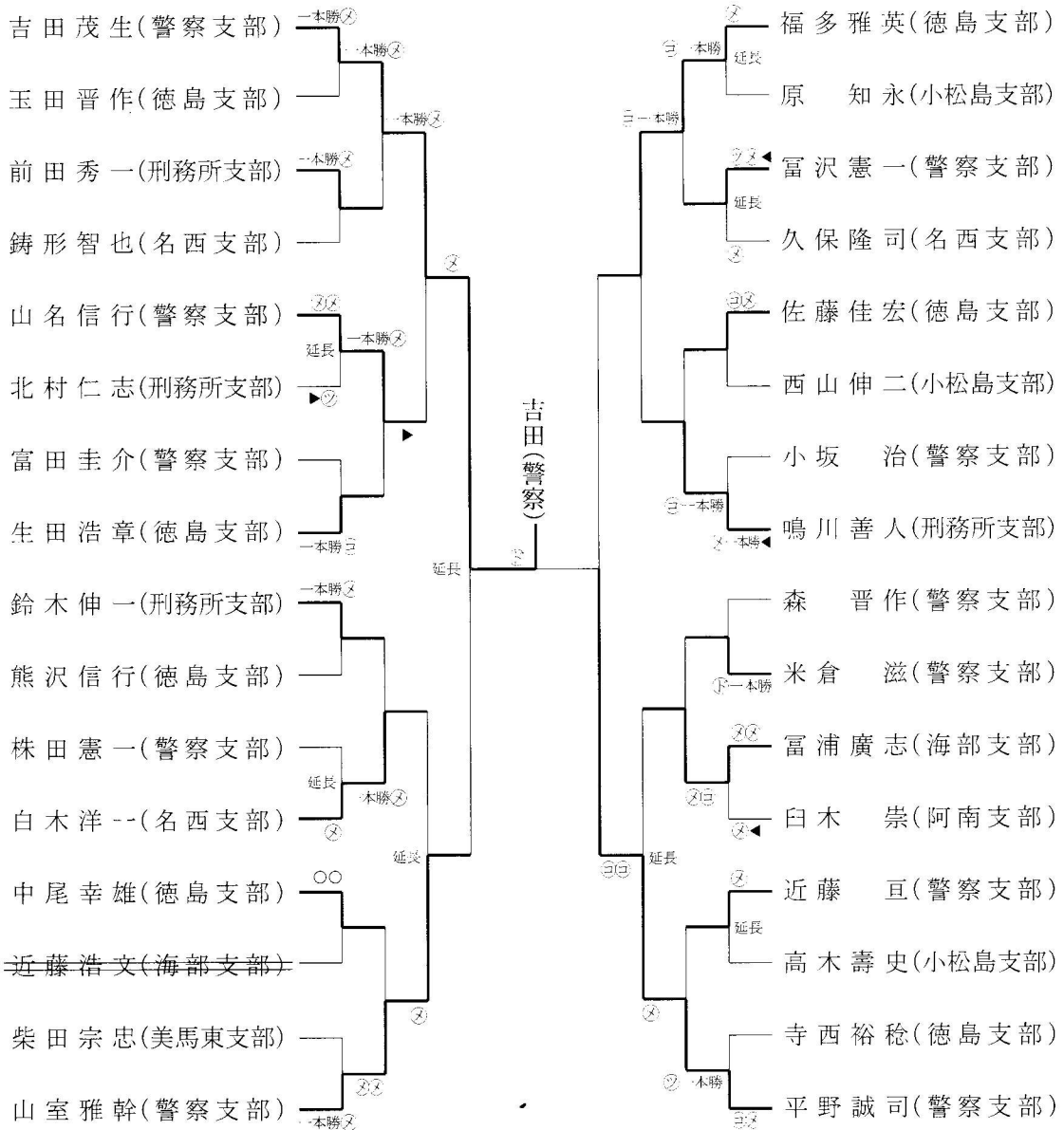
# 第12回 徳島県剣道選手権大会兼全日本剣道選手権大会予選会

決勝戦 三位決定戦

日時 平成12年5月28日(日)午前9時  
場所 中央武道館



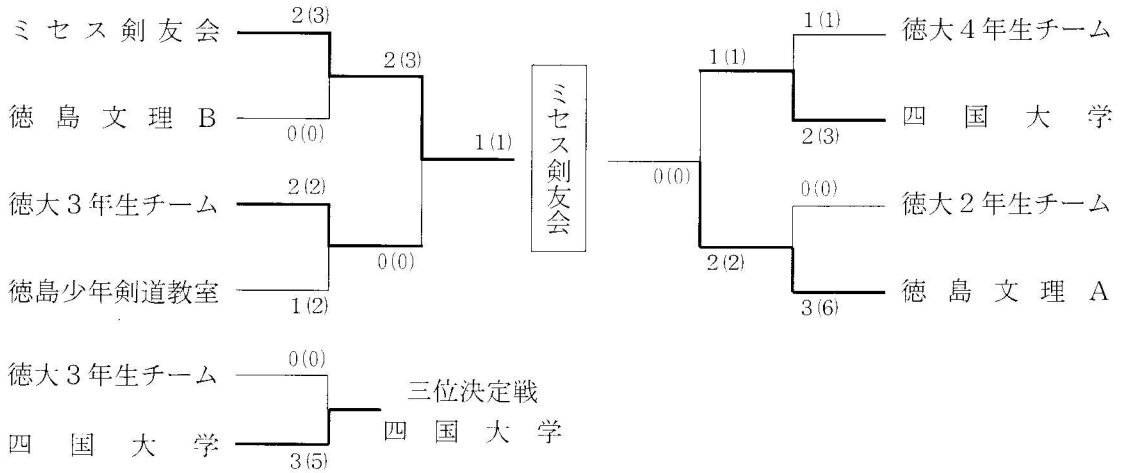
優勝 吉田茂生 (警察支部)  
準優勝 平野誠司 (警察支部)  
第三位 福多雅英 (徳島支部)



# 第 21 回 徳島県女子剣道大会

## 〈団体戦〉

日 時 平成 12 年 6 月 25 日(日)午前 9 時  
場 所 徳島県立中央武道館



### 決勝戦

	先鋒	中堅	大将	
ミセス剣友会	岩	平	竹	① 1/1
	木	野	内	
徳島文理 A	延 長	延 長	延 長	△ 0/0
	井	木	岡	
	出	村	本	

### 三位決定戦

	先鋒	中堅	大将	
徳大3年生 チ ー ム	山	奥	梅	△ 0/0
	田	町	本	
四国大学	一本 メ 勝	メ ド	メ ド	⑤ 3
	山	小	日 野 石	
	崎	川		

### 準決勝

	先鋒	中堅	大将	
四国大学	山	小	日 野 石	△ 1/1
	崎	川		
徳島文理 A	一本 メ 勝		一本 メ 勝	② 2/2
	井	木	岡	
	出	村	本	

### 準決勝

	先鋒	中堅	大将	
ミセス剣友会	岩	平	竹	③ 2
	木	野	内	
徳大3年生 チ ー ム	延 長		コ コ	△ 0/0
	山	奥	梅	
	田	町	本	

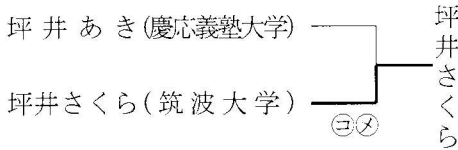




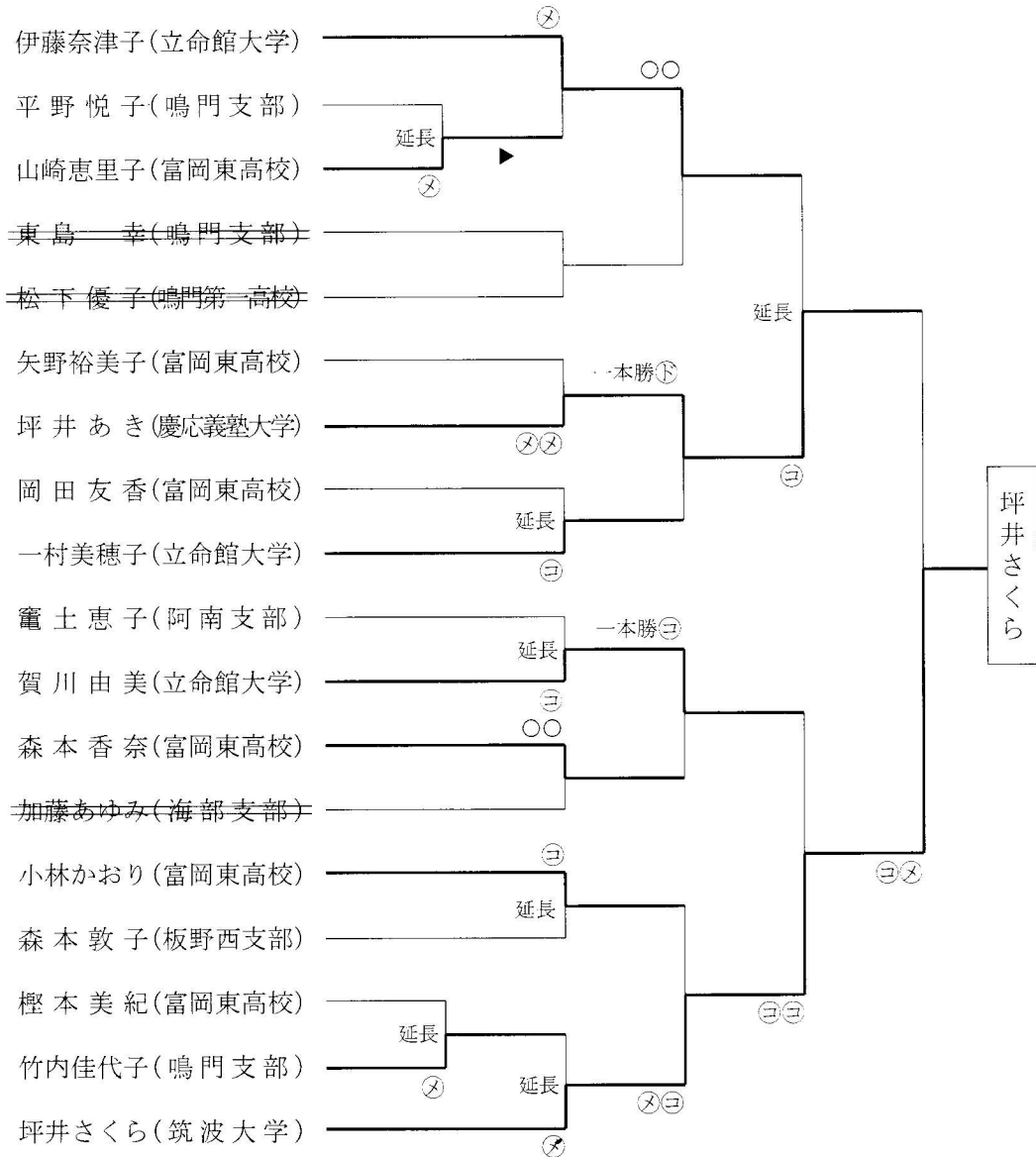
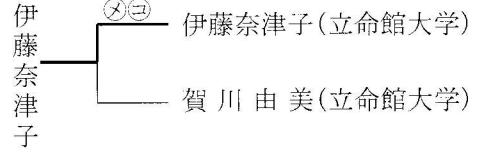
### 第3回 徳島県女子選手権大会

日時 平成12年7月9日(日)午前9時  
場所 鳴門武道館

#### 決勝戦



#### 三位決定戦



## 第 54 回 徳島県中学校夏季総合体育大会

日 時 平成 12 年 7 月 23 日(日)午前 9 時  
場 所 鳴 門 武 道 館

### ① 団 体 戦

	男 子	女 子
優 勝	阿 南 第 二 中 学 校	阿 南 第 一 中 学 校
準 優 勝	平 谷 中 学 校	相 生 中 学 校
第 3 位	阿 南 第 一 中 学 校	鴨 島 第 一 中 学 校
第 3 位	相 生 中 学 校	鳴 門 市 第 一 中 学 校

#### [ 男子決勝 ]

学 校 名	先 鋒	次 員	中 堅	副 将	大 将	勝 敗
平 谷 中 学 校	的 場	品 川	小 林	株 田 巧	折 坂	1 ( 1 )
			⊗一本勝			
阿 南 第 二 中 学 校	⊗⊕	⊗一本勝		⊖一本勝	⊖一本勝	4 ( 5 )
	大 石 洋	山 田	田 村	横 田	大 石 真	

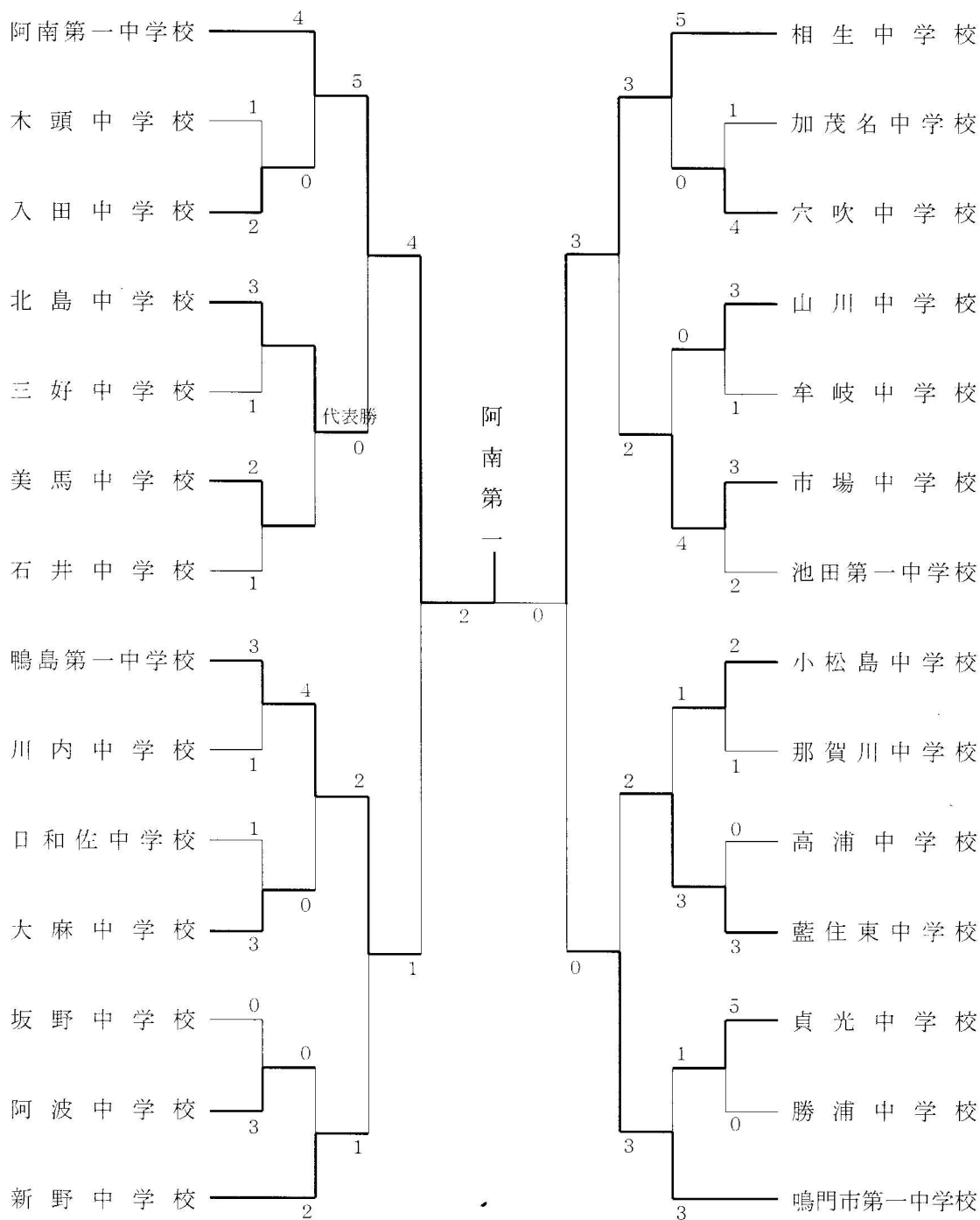
#### [ 女子決勝 ]

学 校 名	先 鋒	次 員	中 堅	副 将	大 将	勝 敗
阿 南 第 一 中 学 校	茂 村	佐 竹	村 井	岡 本	住 友	2 ( 2 )
		⊖一本勝	⊕一本勝			
相 生 中 学 校						0 ( 0 )
	谷 澤	檜 本 倫	東 根	昇	井 東 香	

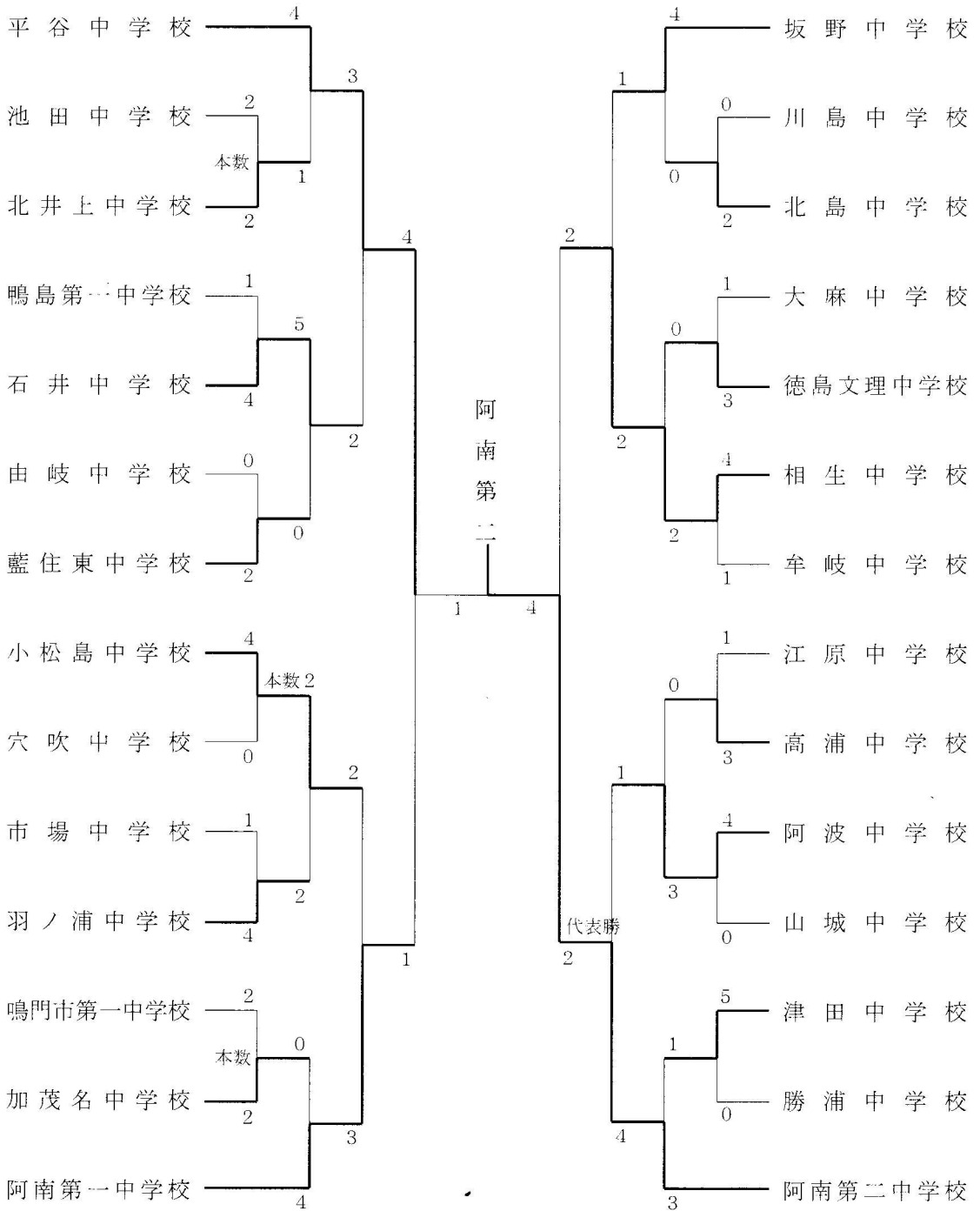
### ② 個 人 戦

順位	男 子	学 校 名	順位	女 子	学 校 名
優 勝	大 石 真 也	阿 南 第 二	優 勝	白 井 佳 織	阿 波
準 優 勝	玉 田 康 朗	文 理	準 優 勝	新 居 見 綾	鴨 第 一
第 3 位	西 崎 雅 弘	坂 野	第 3 位	昇 志 穂	木 頭
第 3 位	岩 本 正 尊	石 井	第 3 位	東 根 直 子	相 生

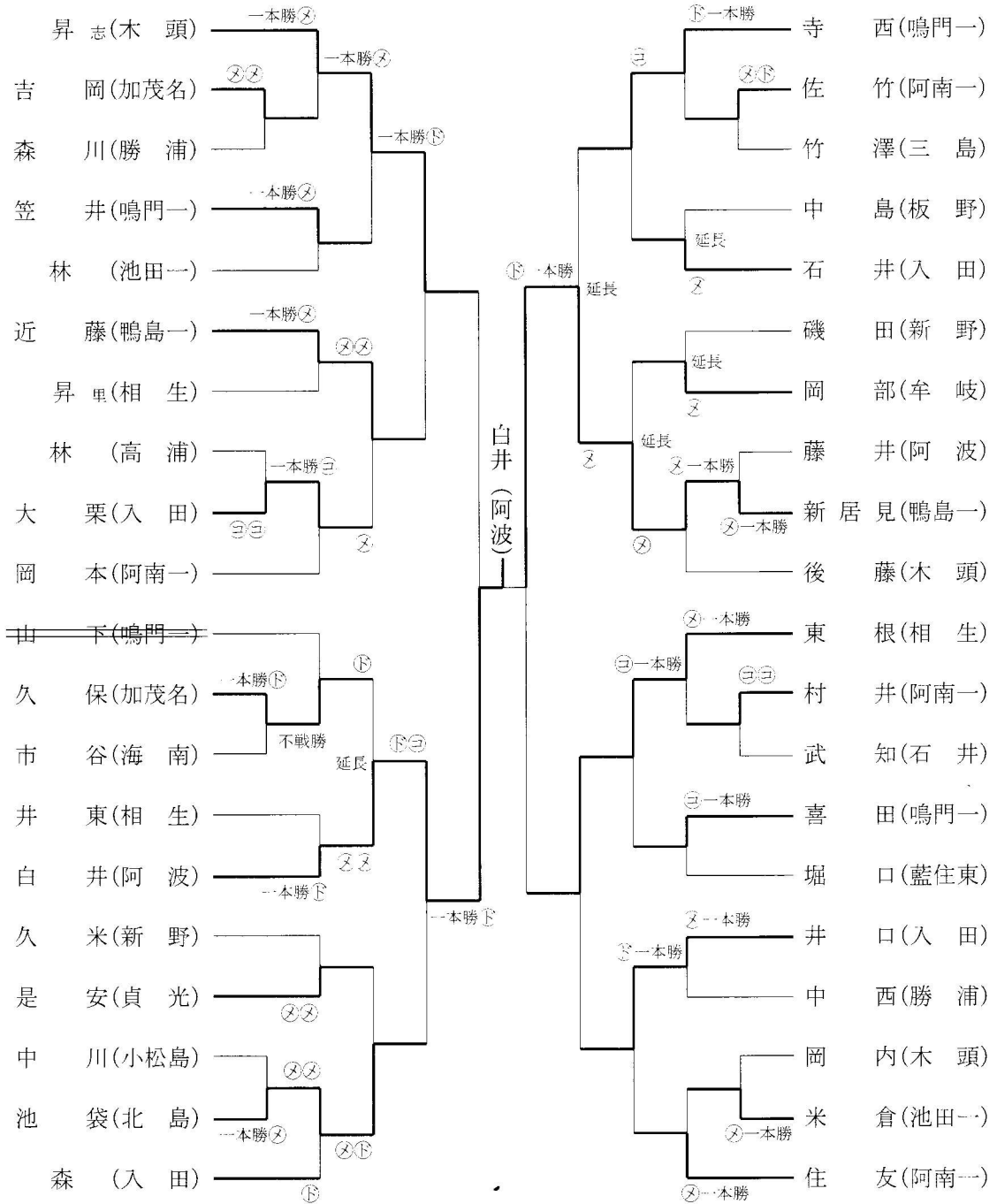
『女子組み合せ』



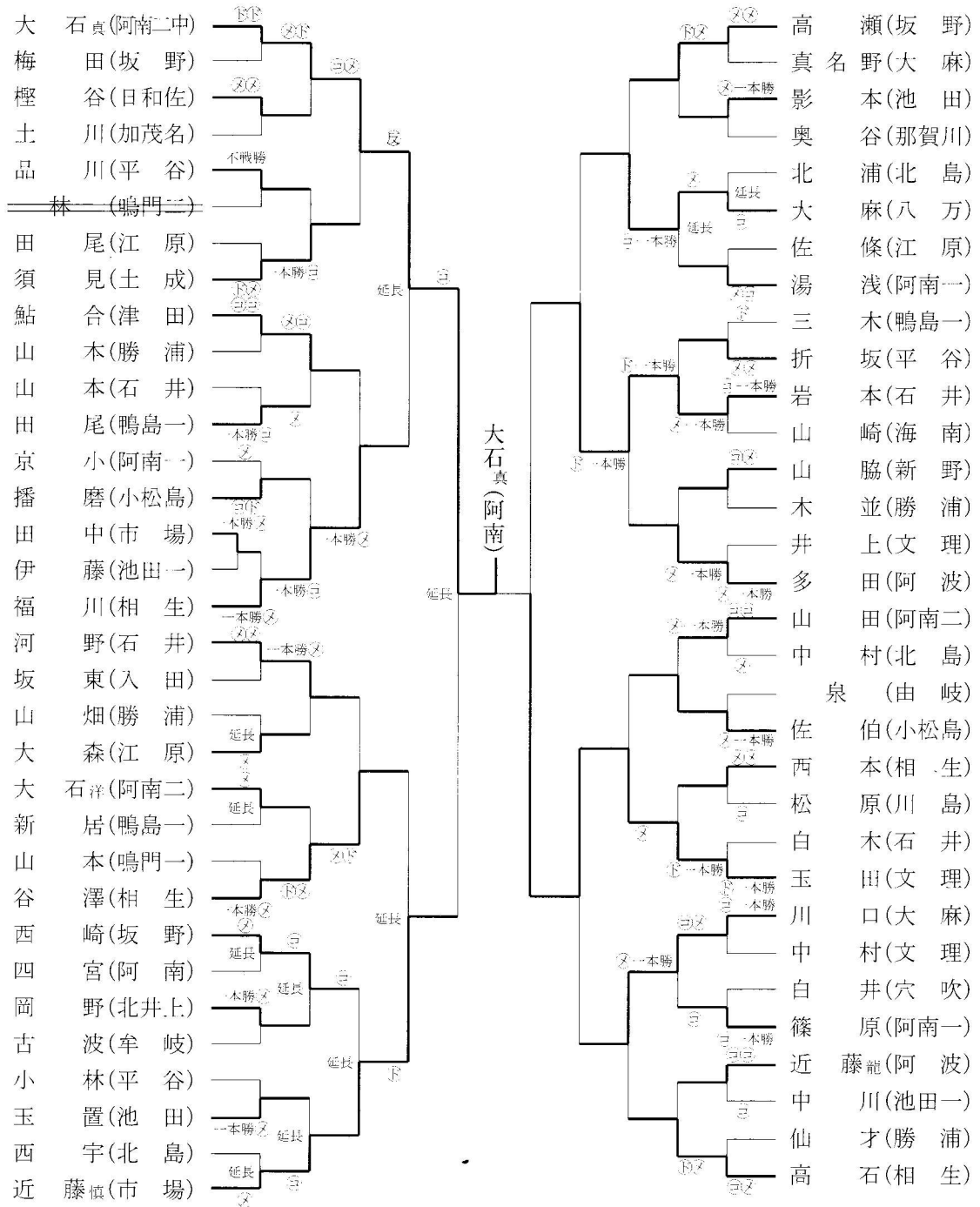
『男子組み合せ』



『女子組み合せ』



『男子個人組み合せ』



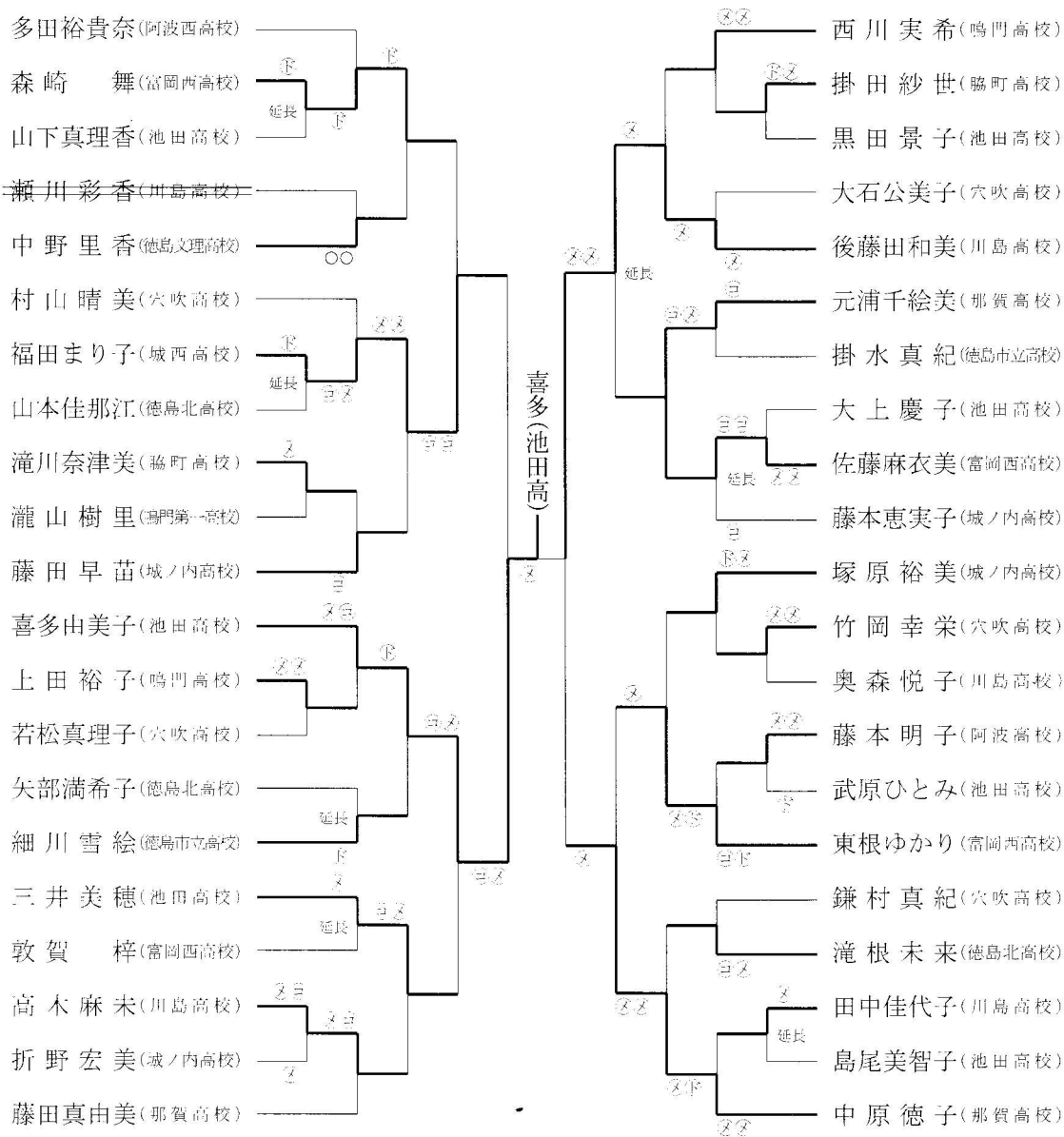
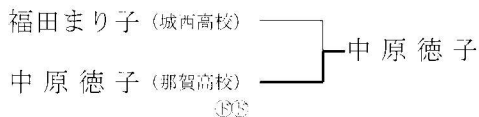
# 第24回 徳島県剣道段別選手権大会

日時 平成12年8月20日(日)午前9時  
場所 鳴門武道館

## 初段の部 (女子)

- 優勝 喜多由美子 (池田高)
- 準優勝 後藤田和美 (川島高)
- 第3位 中原徳子 (那賀高)

## 三位決定戦







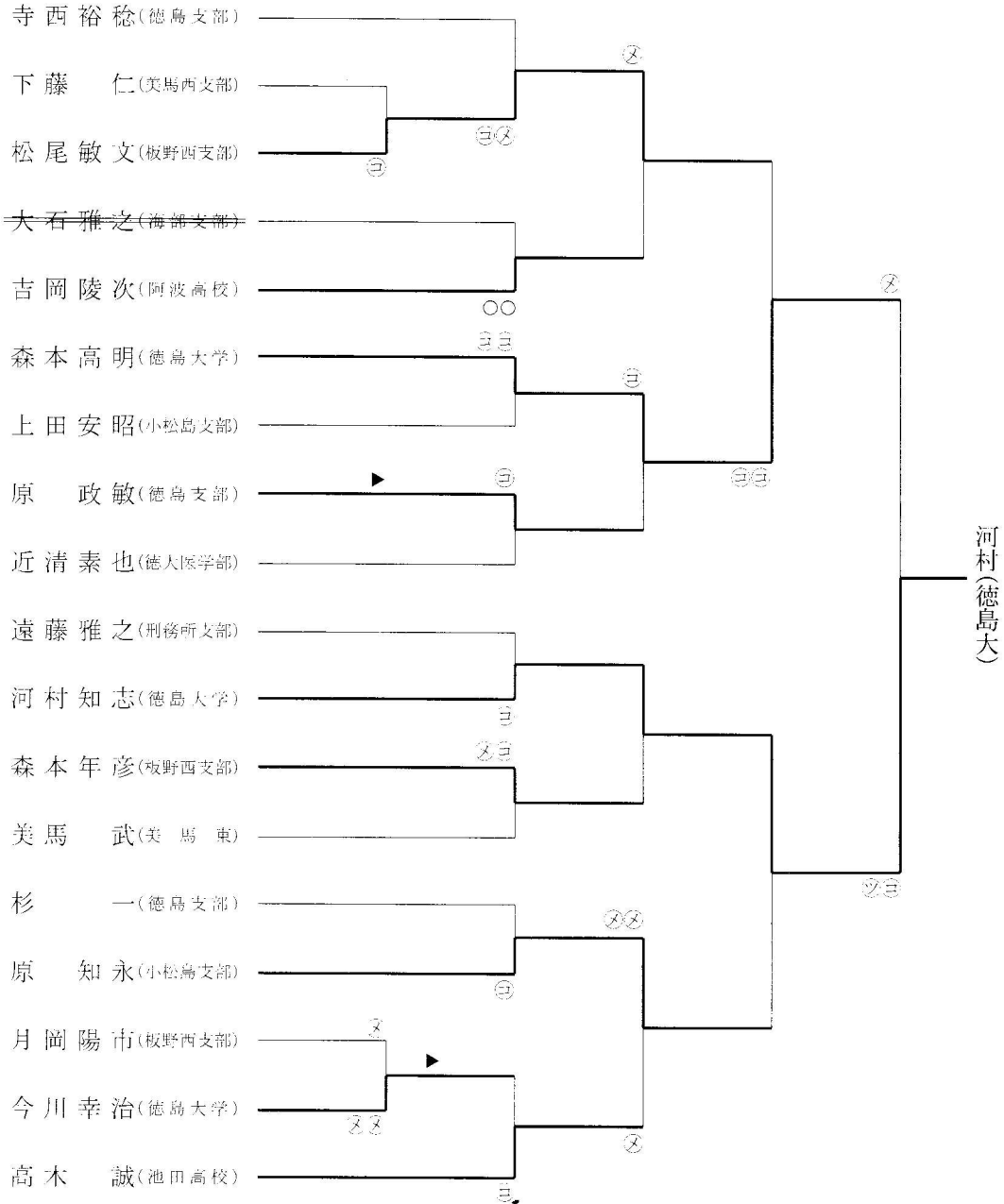


### 三段の部（男子）

優勝 **河村知志** (徳大)  
 準優勝 **森本高朗** (徳大)  
 第3位 **原知永** (小松島支部)

### 三位決定戦

松尾敏文(板野西支部) — ②  
 原知永(小松島支部) — ②  
 — 原知永



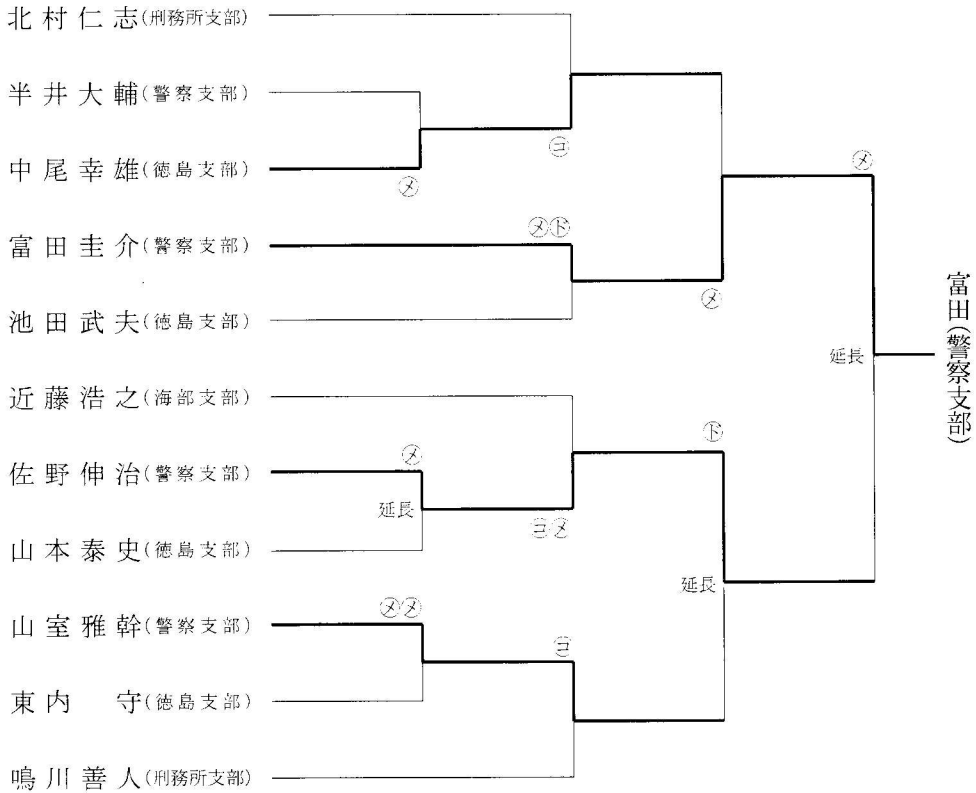


五段の部 (男子)

優勝 富田圭介 (警察支部)  
 準優勝 佐野伸治 (警察支部)  
 第3位 山室雅幹 (警察支部)

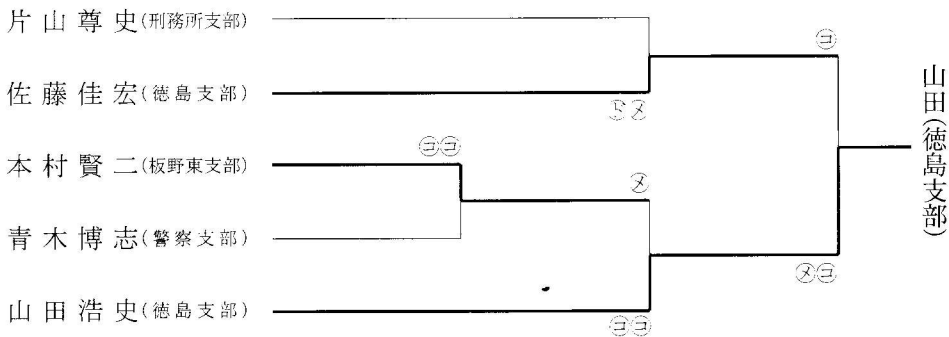
三位決定戦

中尾幸雄(徳島支部) ————  
 山室雅幹(警察支部) ————  
 〇



六段の部 (男子)

優勝 山田浩史 (徳島支部)  
 準優勝 佐藤佳宏 (徳島支部)



# 第 24 回 徳島県社会人剣道大会

日 時 平成 12 年 10 月 22 日(日)午前 9 時  
場 所 鳴 門 武 道 館

予選リーグ

A	岫雲館	小松島航空隊	三好支部	勝者数	勝者数	勝本数	順位
岫雲館		$\frac{1}{1}$	$\frac{\Delta}{0}$	0	1	1	3
小松島航空隊	$\frac{1}{1}$		$\frac{1}{1}$	1	2	2	2
三好支部	$\frac{4}{3}$	$\frac{\Delta}{0}$		1	3	4	1

C	阿波支部 B	板野東支部	小松支部(山)	勝者数	勝者数	勝本数	順位
阿波支部 B		$\frac{6}{3}$	$\frac{9}{5}$	2	8	15	1
板野東支部	$\frac{\Delta}{0}$		$\frac{3}{2}$	1	2	3	2
小松支部(山)	$\frac{\Delta}{0}$	$\frac{\Delta}{1}$		0	1	3	3

E	振武館	徳島支部 B	海部支部 C	勝者数	勝者数	勝本数	順位
振武館		$\frac{\Delta}{1}$	$\frac{5}{3}$	1	4	8	2
徳島支部 B	$\frac{3}{2}$		$\frac{5}{3}$	2	5	8	1
海部支部 C	$\frac{\Delta}{0}$	$\frac{\Delta}{5}$		0	2	5	3

G	小松島支部(林)	美馬東支部 A	刑務所支部 A	勝者数	勝者数	勝本数	順位
小松島支部(林)		$\frac{9}{5}$	$\frac{\Delta}{1}$	1	6	11	2
美馬東支部 A	$\frac{\Delta}{0}$		$\frac{\Delta}{0}$	0	0	1	3
刑務所支部 A	$\frac{6}{1}$	$\frac{8}{5}$		2	9	14	1

B	海部支部 D	阿南支部 A	城西徳農剣友会	勝者数	勝者数	勝本数	順位
海部支部 D		$\frac{\Delta}{0}$	$\frac{\Delta}{0}$	0	0	0	3
阿南支部 A	$\frac{10}{5}$		$\frac{\Delta}{1}$	1	6	12	2
城西徳農剣友会	$\frac{10}{5}$	$\frac{3}{2}$		2	7	13	1

D	阿南少剣教室	蔵本剣道クラブ	美馬西支部 B	勝者数	勝者数	勝本数	順位
阿南少剣教室		$\frac{\Delta}{1}$	$\frac{6}{3}$	1	4	9	2
蔵本剣道クラブ	$\frac{6}{3}$		$\frac{6}{3}$	2	6	12	1
美馬西支部 B	$\frac{\Delta}{1}$	$\frac{\Delta}{0}$		0	0	4	3

F	鳴門支部 B	阿波支部 A	徳島錬心館	勝者数	勝者数	勝本数	順位
鳴門支部 B		$\frac{\Delta}{1}$	$\frac{8}{1}$	1	5	10	2
阿波支部 A	$\frac{1}{2}$		$\frac{1}{3}$	2	5	8	1
徳島錬心館	$\frac{\Delta}{0}$	$\frac{\Delta}{0}$		0	0	2	3

H	阿南支部大野	美馬西支部 A	海部支部 B	勝者数	勝者数	勝本数	順位
阿南支部大野		$\frac{\Delta}{1}$	$\frac{2}{0}$	1	3	4	2
美馬西支部 A	$\frac{3}{2}$		$\frac{\Delta}{0}$	1	2	4	3
海部支部 B	$\frac{\Delta}{0}$	$\frac{7}{5}$		1	5	7	1

I	徳島支部 A	小松島支部(風)	麻植支部	勝者数	勝本数	順位	
	徳島支部 A	△ <sub>1</sub>	△ <sub>1</sub>	△ <sub>1</sub>	1	5	10
小松島支部(風)	△ <sub>4</sub>	△ <sub>1</sub>	△ <sub>5</sub>	2	9	16	1
麻植支部	△ <sub>1</sub>	△ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub>	0	1	4	3

K	鳴門支部 A	美馬東支部 A	阿波支部 C	勝者数	勝本数	順位	
	鳴門支部 A	△ <sub>2</sub>	△ <sub>2</sub>	△ <sub>1</sub>	1	3	5
美馬東支部 A	△ <sub>2</sub>	△ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub>	0	2	3	3
阿波支部 C	△ <sub>1</sub>	△ <sub>5</sub>	△ <sub>0</sub>	1	6	9	1

M	刑務所支部 B	美馬東支部 C	養武館	勝者数	勝本数	順位	
	刑務所支部 B	△ <sub>5</sub>	△ <sub>2</sub>	△ <sub>2</sub>	1	7	11
美馬東支部 C	△ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub>	0	0	0	3
養武館	△ <sub>2</sub>	△ <sub>1</sub>	△ <sub>1</sub>	1	6	9	2

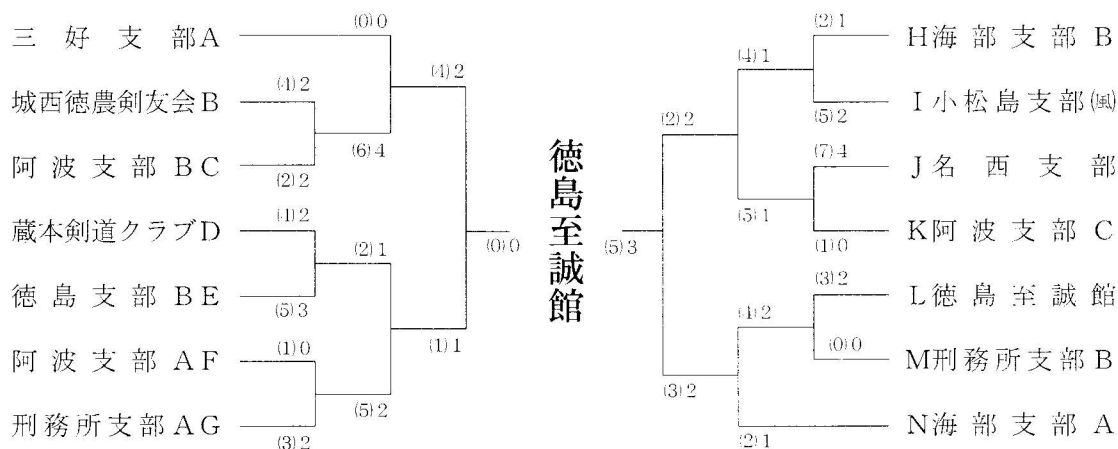
予選リーグ

J	竹友館	阿南支部 B	名西支部	勝者数	勝本数	順位	
	竹友館	△ <sub>1</sub>	△ <sub>1</sub>	△ <sub>1</sub>	1	5	7
阿南支部 B	△ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub>	0	0	1	3
名西支部	△ <sub>2</sub>	△ <sub>5</sub>	△ <sub>0</sub>	2	7	14	1

L	小松島支部(火)	徳島至誠館	木頭錬心館	勝者数	勝本数	順位	
	小松島支部(火)	△ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub>	0	0	0
徳島至誠館	△ <sub>1</sub>	△ <sub>3</sub>	△ <sub>0</sub>	2	7	13	1
木頭錬心館	△ <sub>5</sub>	△ <sub>1</sub>	△ <sub>1</sub>	1	6	10	2

N	徳島支部 C	海部支部 A	板野西支部	勝者数	勝本数	順位	
	徳島支部 C	△ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub>	0	0	1
海部支部 A	△ <sub>2</sub>	△ <sub>2</sub>	△ <sub>2</sub>	2	4	9	1
板野西支部	△ <sub>1</sub>	△ <sub>1</sub>	△ <sub>1</sub>	1	5	9	2

## 決勝トーナメント



## 準決勝戦

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	得点
城西徳農剣友会	佐藤	高木	佐々木	榎本	植田	2 (4)
	×	メ	×	メ	▲	
刑務所支部A	鳴川	前田	北村	森	中村	1 (1)
	×	×	×	×	一本勝	

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	得点
名西支部	近藤	鑄形	白木	久保	大西	2 (2)
	×	×	一本勝	×	一本勝	
徳島至誠館	玉田	白木	村井	河田	木下	2 (3)
	×	一本勝	×	×		

## 決勝戦

- 優勝 **徳島至誠館**
- 準優勝 **城西徳農剣友会**
- 第3位 **刑務所支部A**
- 第3位 **名西支部**

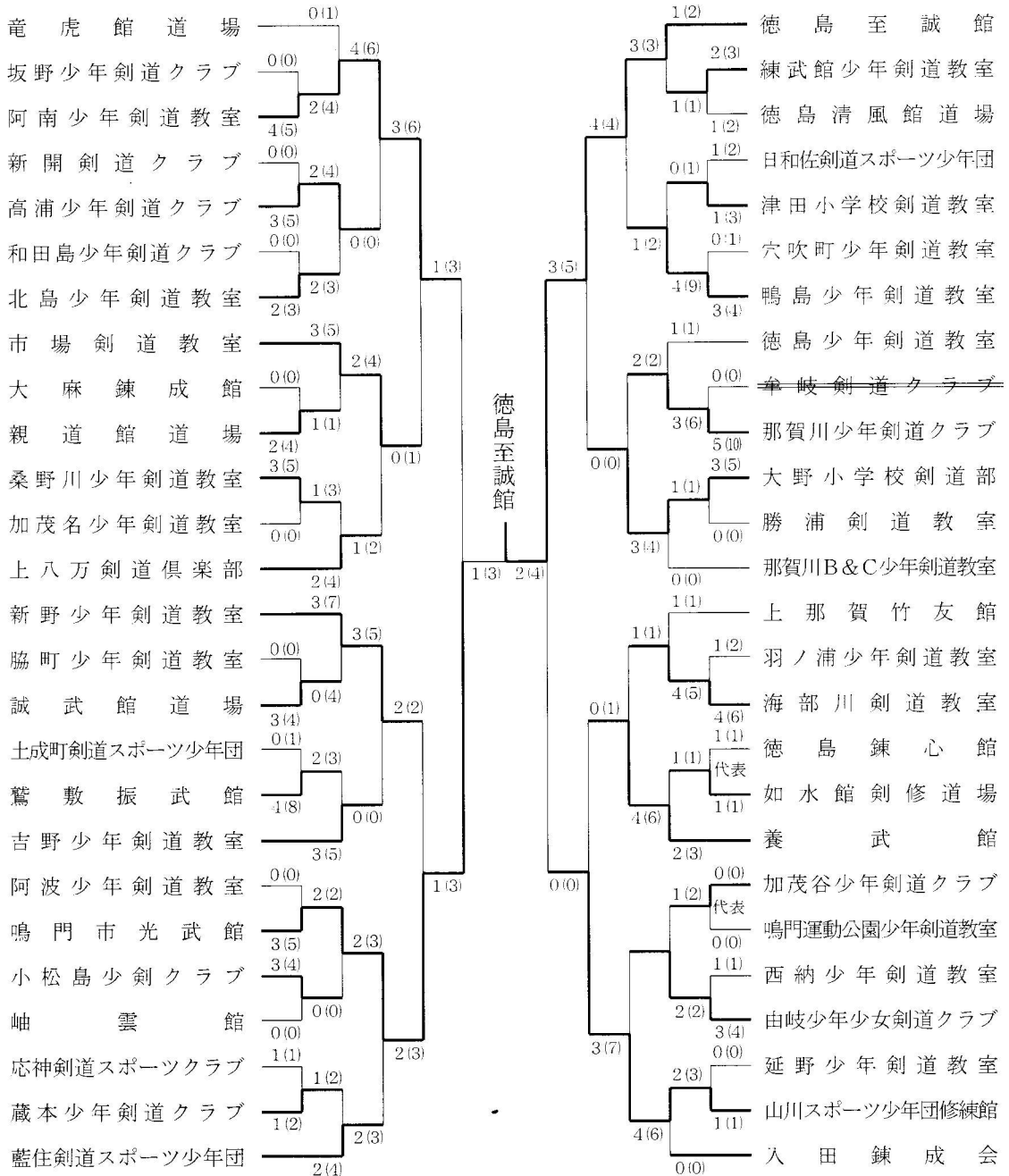
チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	得点
城西徳農剣友会	佐藤	高木	佐々木	榎本	植田	0 (0)
	×	×	×	×		
徳島至誠館	一本勝	一本勝	一本勝	一本勝	一本勝	3 (5)
	一本勝	一本勝	一本勝	一本勝	一本勝	

# 第11回 徳島県小・中学校剣道強化練成大会

少年の部 (52 チーム)

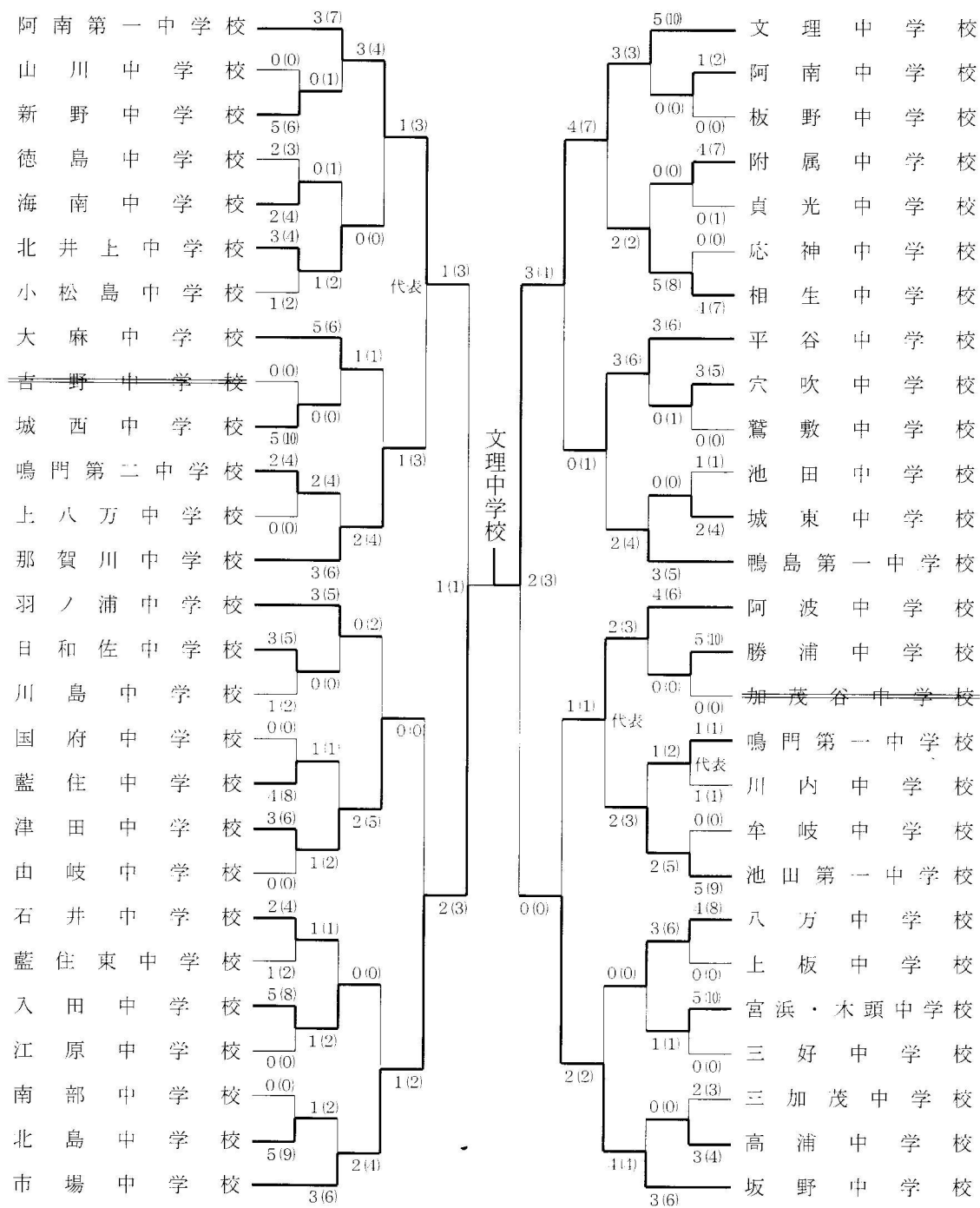
日時 平成13年1月21日(日)午前9時  
場所 鳴門県民体育館

優勝 徳島至誠館  
準優勝 光武館  
第3位 阿南少年剣道教室  
第3位 山川スポーツ少年団修練館



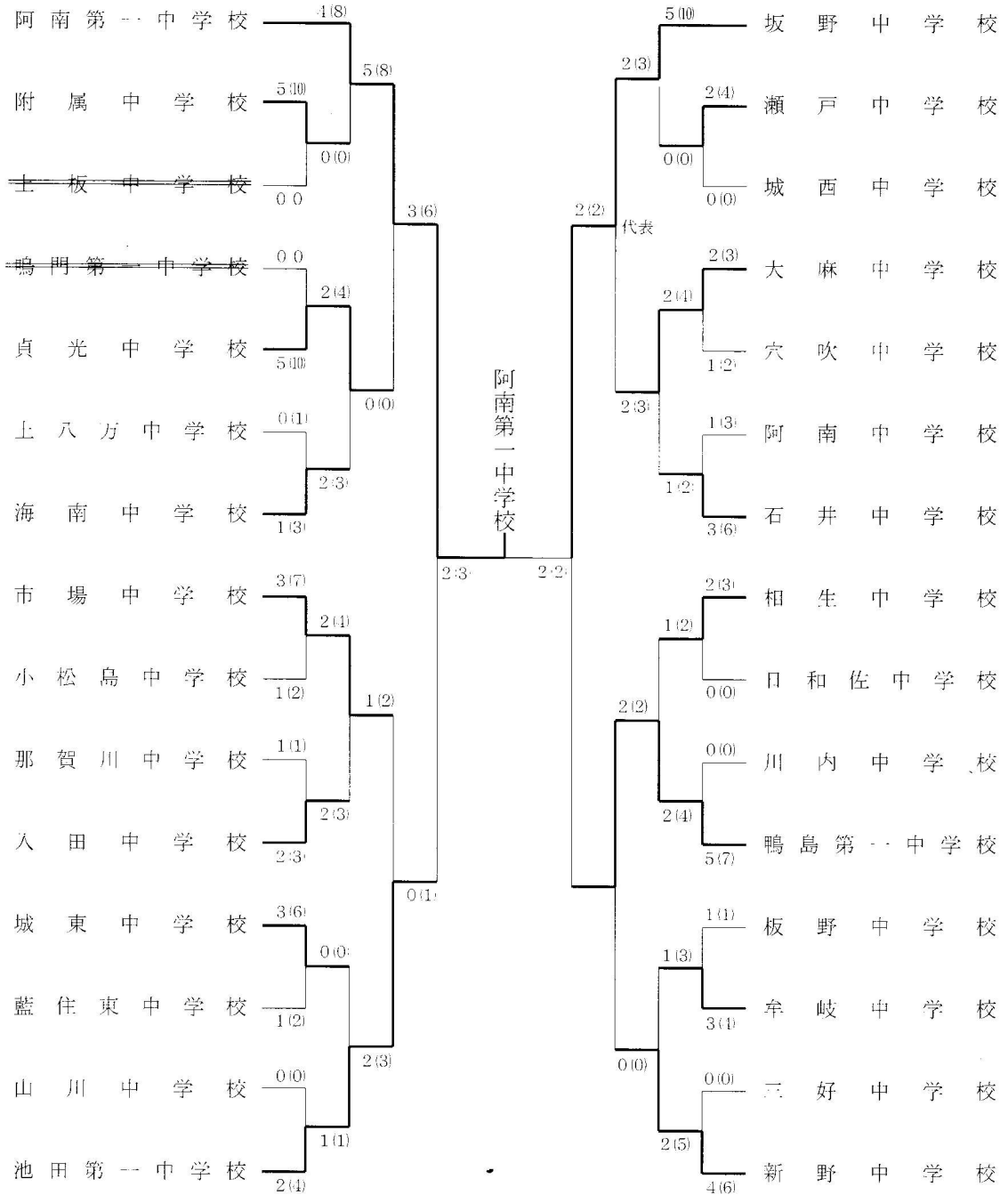
中学校男子(54チーム)

優勝 文市 理場 中中 学学 校校  
 準優 勝 阿南 第 第 中 中 学 学 校 校  
 第3位 第3位 坂 野 中 中 学 学 校 校



中学校女子(30チーム)

優勝 阿南第一中学校  
 準優勝 南野第一中学校  
 第3位 坂池嶋  
 第3位 南野第一中学校



## 準決勝戦（少年の部）

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	代表
阿南	横手	泰地	大津	四宮	永浦	横手
	▲	Ⓣ	ⓧ	ⓧ	ⓧ	ⓧ
光武館	梅木	平野	山本敬	小倉	山本義	山本義
	ⓧ	ⓧ	ⓧ	ⓧ	ⓧ	ⓧ

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	
山川	桑野	國見	森西	柳谷	原田	
	ⓧ	ⓧ	ⓧ	ⓧ	ⓧ	ⓧ
至誠館	鎌田	澤田	河田	村井	玉田	
	ⓧ	ⓧ	ⓧ	本勝ⓧ	ⓧ	ⓧ

## 準決勝戦（中学女子）

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	
阿南第	宮崎	近藤	島田	賀上	吉岡	
	ⓧ	ⓧ	ⓧ	一本勝ⓧ	ⓧ	ⓧ
池田第	崎川	山下	米倉	田中	三木	
	ⓧ	ⓧ	ⓧ	▲	ⓧ	ⓧ

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	
鴨島一	塩田	田尾	新居見	森本	近藤	
	ⓧ	ⓧ	ⓧ	ⓧ	ⓧ	ⓧ
坂野	村瀬	藤本	櫻木	大西	中島	
	ⓧ	ⓧ	ⓧ	本勝ⓧ	本勝ⓧ	ⓧ

## 準決勝戦（中学男子）

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	
阿南	立岩	山ノ井	京小	西浦	大西	
	ⓧ	Ⓣ▲	ⓧ	ⓧ	ⓧ	ⓧ
市場	湯浅	近藤	笠井	尾田	田中	
	本勝ⓧ	ⓧ	一本勝▲ⓧ	ⓧ	ⓧ	ⓧ

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	
坂野	佐川	平岡	坂本	岩本	本田	
	ⓧ	ⓧ	ⓧ	ⓧ	ⓧ	ⓧ
文理	鎌田	魚里	中村	花房	玉田	
	ⓧ	ⓧ	一本勝ⓧ	ⓧ	一本勝ⓧ	ⓧ

### 決勝戦（少年の部）

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将
光武館	梅木	平野	山本敬	小倉	山本義
	⊗		一本勝 ⊙		⊙
至誠館	⊙	一本勝 ⊙		一本勝 ⊙	⊗
	鎌田	澤田	河田	村井	玉田

### 決勝戦（中学女子）

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将
阿南一	宮崎	近藤	島田	賀上	吉岡
		⊗	⊗	一本勝 ⊙	
坂野	一本勝 ⊗	⊗			一本勝 ⊗
	村瀬	藤本	櫻木	大西	中島

### 決勝戦（中学男子）

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将
市場	湯浅	近藤	笠井	尾田	田中
		▲	▲	一本勝 ⊙	
文理	⊙	一本勝 ⊙			▲
	鎌田	魚里	中村	花房	玉田





剣道

◆第25回県西部地区少年剣道大会(11日・阿波中学校体育館)

徳島市以西の各郡から小・中学生47チーム350人が参加。団体、個人戦で熱戦を繰り広げた結果、小学校団体が市場剣道教室Aが優勝した。

川、鴨島第一  
 【個人】小4①林明史(高浦少年剣道クラブ)②鈴木達也(徳島清風館道場)③石川雅俊(阿波少年剣道教室)高松朋輝(入田錬成会)▽小5①塩田伯大(鴨島少年剣道教室)②森達裕(鴨島少年剣道教室)③中山圭一、内藤隆仁(以上六吹少年剣道教室)▽小6①三木吉博(阿波少年剣道教室)②三木翔太③尾形直哉(以上市場剣道教室)近藤雅規(入田錬成会)▽中1男子①三木良平(鴨島第一)②西宇真之(北島)③谷内良也(阿波)白木健一郎(石井)▽同女子①新居見綾(鴨島第一)②寺井なつみ(阿波)③塩田美雪、近藤三葉子(以上鴨島第一)▽中2男子①多田賢司②三木健(以上阿波)③桑原昌隆、岩本正尊(以上石井)▽同女子①白井佳織(阿波)②美雨絵里奈③井内安紀(以上市場)藤井真実(阿波)

2月23日

藤花杯

入田錬成会が団体V

24チーム276人熱戦展開



◆第6回藤花杯争奪少年剣道大会(2月27日 石井中学校屋内運動場)

町内外の小中学生24チーム276人が参加。22チームが熱戦を繰り広げた団体戦では、入田錬成会が優勝した。

校剣道教室、高浦少年剣道クラブ  
 【個人】1・2年①鈴木智也②岡田紘平(以上徳島清風館道場)③白木恒三郎(徳島右武館)▽3年①若雲祥吾(鴨島少年剣道教室)②高橋理恵(山川スポーツ少年団修練館)③森出大介(入田錬成会)▽4年①鈴木紀博(加茂名少年剣道教室)②林明史(高浦少年剣道クラブ)③中山大介(鴨島少年剣道教室)▽5年①西岡敬太②岩雲天樹③須見康生(以上鴨島少年剣道教室)▽6年①坂東潤②近藤雅規(以上入田錬成会)③新居見航(鴨島少年剣道教室)

あわいスポーツ

3月6日

# 2000 全国高校選抜大会 春に挑む卓勢

●●4

【剣道】(27、28日・愛媛)

知興春日井市総合体育館) 団体は八年ぶり二度目の男子・川島、八年連続八度の女子・富岡東が挑む。過去二回、3位に入っている富岡東は全国強豪の一つ。五年はベスト16が最高で、今年にかけの意気込みは相違ない。秋田商(秋田)・甲府商(山梨)との予選リーグを勝てば、決勝トーナメント一回戦で強豪・島原(長崎)が熊本国体準優勝の藤田西(静岡)と当たり、2回戦も優勝候補の一角・守谷(茨城)が控える。河田監督は「昨年のメンバーが3人残り、一年生も力がある。全体的には昨年より上。前の3人が攻撃型の剣道で流れを作り、副将、大将につなぐ」と、3位に照準を合わせる。

【ホッケー】(25、30日) 熊本阿蘇郡小国町林間広場(ラウンド) 阿南工が三年連続六度目の出場。選抜は初戦突破がなく、悲願の1勝に闘志を燃やす。メンバーのうち、シュート力がある守野、状況判断の良い内原、藤山の3人は昨年の熊本国体を経験。二年生の島尾もスピードと高い技術力を兼ね備え

【ボクシング】(27、30日) 四国選で優勝したパンナム級・原尚広(鴨島商)、ライトウエルター級・新居博文(鴨島商)、ウエルター級・原田剛(川島)の3人が出場、ともにベスト4入りを目指す。原は相手に応じて戦い方を変えられる器用さがある。半面、相手を見過さる癖があり、攻撃的なボクシングができるかどうかがホ

## 剣道女子団体 3位以内 目指す富岡東

初戦の相手は成東(千葉)。関東勢はレベルが高く、実試合展開は望めそうにない。阿南工は無失点で勝利した四国予選の決勝と同様、DF陣の密着が不可欠。守りからのカウンター攻撃などで反則を誘う、ペナルティ・ストローキックからのセットプレーで得点したいところ。

試合は人工芝のグラウンドで行われるため球脚が速く、走り負けしないことも大切だ。

【ボクシング】(27、30日) 岐阜県多治見市総合体

【剣道】	選手名	所属
男子団体	川島	春日井市総合体育館
女子団体	富岡東	春日井市総合体育館
監督	河田	春日井市総合体育館



昨年のメンバー3人が残る富岡東女子剣道部。3位以上を目指す一団

と防壁のリスムが分かれて  
いることでこれを突破  
すれば上位が見えてくる。

3月8日  
スポーツ

# あわ-スポーツ

## 剣道

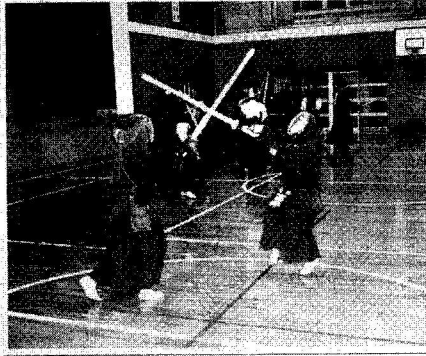
◆第24回大野剣道大会  
(2月27日・大野小学校体育館)

組 ①大野小剣道部②練武館少年剣道教室③那賀川B & C剣道教室④小松島少剣道クラブ⑤B組 ①徳島卒誠館②那賀川少年剣道クラブ③青英館④練武館少年剣道教室(花)▽C組 ①阿南少年剣道教室A②新野少年剣道教室③坂野少年剣道クラブ④羽ノ浦少年剣道クラブ⑤D組 ①鴨門市光武館②大野城山道場③阿南少年剣道教室B④桑野川少年剣道教室(同決勝)⑤ナマン上▽準決勝 大野小1-0至誠館、阿南A1-0光武館▽決勝 大野1-0阿南A

【個人戦】1年生準決勝 松本好史(至誠館)下 福崎友菜(坂野)下 岩佐将希(練武館)メ+上田義弘(至誠館)▽決勝 岩佐メ+松本1-2年生準決勝 湯浅将平(至誠館)メ+上田義弘(練武館)メ+上 仁木悠美(練武館)、山田大野小体育館

涙太(B&C)コ1-0表原寛人(至誠館)▽決勝 湯浅メ+上田(3年生)準決勝 湯浅彰義(至誠館)コ1-櫻木鉄也、岩内美沙希(那賀川)メ+水浦隆(阿南)▽決勝 岩内メ+湯浅(4年生)準決勝 中野由貴(B&C)メ+切中めのみ(小松島)、松本明真(至誠館)メ+上田祥平(小松島)▽決勝 中野メ+松本(5年生)準決勝 河田毅(至誠館)コ1小倉有紀子(鴨門)、清野智之(至誠館)下 片田裕也(大野)▽決勝 河田コ1清野(6年生)準決勝 山田愛(那賀川)メ+山下純子(鴨門)、石立康洋(新野)コ1 岩本達也(和山)▽決勝 山田コ1石立

熱戦が繰り出される大野剣道大会 阿南市内の大野小体育館



3月14日

## 剣道

◆第18回徳島剣友会少年剣道錬成大会・第4回勝浦杯争奪剣道大会・榎本英夫・高木壽史先生剣道7段祝賀剣道大会(19日・城西)

【団体戦】中学男子①島第一②津田③高浦④加茂名⑤同女子⑥入田⑦加茂名⑧北島⑨龍住東⑩小学校A⑪鴨少年剣道教室A⑫入田錬成会⑬延野少年剣道教室⑭市場剣道教室

【個人戦】中学男子①三木良平②岡野嘉平次③西手真之④後藤一也⑤同女子⑥堀口あさみ⑦久保雅美⑧森由伊⑨井由美⑩小学6年⑪板東清⑫湯浅真浩⑬井口あすか⑭木翔太⑮同5年

①西岡敬太②原田光晴③岩雲大樹④須貝康生▽同4年⑤鈴木紀博⑥中山大地⑦新居春菜⑧古田香▽同3年⑨中山健人⑩岩倉祥吾⑪柳谷俊樹⑫山口拓也▽同2年⑬鈴木智也⑭桑原大樹⑮小倉歩⑯三祐人▽同1年⑰木下裕貴⑱堀祥昌⑳新居京⑳鈴木美沙

3月22日



# あわ—スポーツ



中学、高校生ら約300人が熱戦を繰り広げた山家旗争奪県下剣道大会。観戦者も盛況。G海洋センター体育館

## 剣 道

### 相生A(中学)の部が優勝

山家旗争奪大会 350人参加、剣技競う

◆第3回山家旗争奪県下剣道大会(16日・観戦者B&G海洋センター体育館)地元鹿野町をはじめ、阿南市、徳島市、坂野郡など県内各地から中学校29校、高校男子10校、高校女子8校の約350人が参加。クワース(1)と5人1組の団体戦で競い、中学校の部では相生中学校が優勝を飾った。

【中学校】①相生A(谷澤健太郎、山本佳博、高石龍一、西本宇志、福川晋也、井東春彦)②多谷③放野【高校男子】①富岡西A(藤友、横手裕一、星野宣哉、飯沼顕士、松本真治)②富岡東A③阿南東A【高校女子】①富岡東A(矢野裕美子、櫻本美紀、岡田友香、山崎恵理子、小澤さくら)②美馬真奈美、山崎恵理子

【個人戦】5人勝ち抜き①山ノ井徹(富岡東高)②元佳奈③富岡東B④川島B⑤山ノ井徹(富岡東高)⑥元佳奈⑦矢野裕美子、元本寛(富岡東高)⑧下久保奈々枝(川島高)⑨佐光俊介(脇野松高)⑩岩佐健太(阿南高)⑪松本真治(富岡西高)⑫同7人⑬六條勝仁(川島高)⑭同8人⑮同9人⑯同10人⑰同11人⑱同12人⑲同13人⑳同14人㉑同15人㉒同16人㉓同17人㉔同18人㉕同19人㉖同20人

4月19日

子(富岡東高)▽同10人!!  
寺井あゆみ(川島高)





# あわ-スポーツ

◆第22回全国スポーツ少年団剣道交流大会(3月29



全国少年団交流大会

## 団体戦でベスト8

### 県選抜小学生チーム健闘



全国スポーツ少年団剣道交流大会に出場した選手ら＝札幌市の北海道立総合体育センター

31日・北海道立総合体育センター  
 県選抜の小学生チーム  
 (寺西明弘監督 選手11名)

5月7日

井原、井口あすか、林勇作、島田和佳、原裕司)が団体戦でベスト8入りを果たし、敢闘賞に輝いた。中学生個人には大石真也さん(阿南二中)寺西由佳さん(鳴門一中)の2人が出場したが、惜しくも予選リーグを突破できなかった。

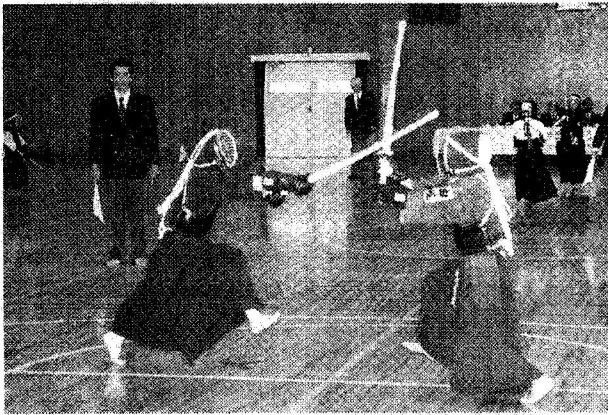
【小学校団体戦】予選リーグ 徳島4-1岩手、徳島4-0千葉▽決勝トナメント1回戦 徳島4-1奈良▽同準々決勝 岡山3-1徳島

# あわ—スポーツ

海部郡少年大会

## 牟岐Aが団体制す

個人6年 柳瀬君(牟岐)に栄冠



熱戦を繰り広げる豆剣士たち—由岐町田井のB&G海洋センター体育館

剣道

◆海部郡防犯少年剣道錬成由岐大会(7日・由岐町B&G海洋センター体育館)

郡内の小学生41人が参加。団体・個人の6部門に分かれて競い、団体は牟岐剣道クラブA、個人6年生は牟岐の柳瀬亮君が栄冠を手にした。

【団体】①牟岐剣道クラブA(美馬憲太、藤井玲名、柳瀬亮、山本和弥、西澤英吾)②海部川剣道教室

③由岐少年少女剣道クラブ

【個人】2年生以下①唐谷翔太(牟岐)②平井孝則(由岐)③杉谷雪(口和佐)▽3年生①小澤裕貴(牟岐)②柳瀬美希(牟岐)③津田利明(牟岐)▽4年生①泉利昌(由岐)②申川綾那(海部)③多田恭平(由岐)▽5年生①宮田嗣久(海部)②藤井玲名(牟岐)③花木翔(由岐)▽6年生①柳瀬亮(牟岐)②申川和樹(海部)③美馬憲太(牟岐)

5月10日

# 相生中が団体制す

## 丹生会少年 少年剣士113人熱戦 剣道大会

◆第38回丹生会地方防犯 学校(福川智也、西本宇 郎)福川智也(以上相生) 少年剣道大会(14日・巖敷 志、高石龍一、山本佳広、 中学校体育館) 谷澤健太郎、福本文)▽ 那賀郡丹生会5町村から 小学生の滝虎館(福永 和)秩田巧(以上相生) 小、中学生113人が出場 己、岸貴之、前田洋佑、西 川了意(相生)▽以上順 大会出場▽小学5、6年生 閉じ、団体と個人で熱戦を展 ①松本和起(延野少年剣道 開した。 教)②福永龍③岸貴之 (個人)中学生④相生中

# あわ—スポーツ



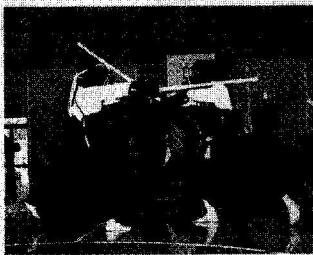
力のこもった戦いを繰り広げる少年剣士たち 右：巖敷中学校体育館

5月17日

④西村太一(以上滝虎館) 以上順大会出場▽小学 3、4年生の福川敬太▽前 川海史(以上滝虎館)⑤株 田敦史(上那賀竹友館)▽ 小学1、2年生の西村光司 (滝虎館)⑥谷澤西(北川 小剣道)⑦福井美映(木 頭練心館)

# 川村君(賢)に栄冠

上位者は県大会出場へ



白熱した攻防を繰り広げる少年剣士たち。板野勤労者体育センター

◆第7回板野管内防犯 少年剣道大会(14日・板野 勤労者体育センター) 板野管内4町から小学生 29人、中学生34人が参加。 トーナメント方式で争い、 (各)②武田寛(各) 中学生は上位3人、小学生 は上位4人が県大会団体戦 (6月10日)に板野管内 代表チームとして出場す る。 (中学生)①川村昌史 (龍住東)②永木(馬)吉 野)③西太一(龍住東) 【小学生】①森本龍毅 (各)②武田寛(各)

5月22日

③前俣介(龍住南)④吉岡 万里子(板野東)

◆第13回徳島西警察防 犯剣道大会(13日・徳島西 警察道場)

徳島西管内の小中学生17 人、中学生26人が参加。 トーナメント形式で個人戦 を行い、小学生の部は須藤 健太君(岫雲館)、中学生 の部は石井由美さん(入田 錬成会)がそれぞれ優勝し た。

小学生の部上位4人中 田錬成会③上田圭介(北 井)井上少年剣道教室)④湯村 道雄(徳島総合運動公園武 道館)で開かれる第13回徳島 県防犯少年剣道大会(10日) 開催。

【中学生】①石井由美 (入田錬成会)②松田健輔 (入田中学校)③坂東潤 (入田錬成会)

**笠井ぶつたん**

# 県選抜3年ぶりV

## 四国4県剣道

第五十二回四国四県剣道大会は十一日、鳴門武道館で四県の選抜チームが参加して団体戦を行い、徳島県選抜が三戦全勝で三年ぶりに九度目の優勝を飾った。

試合は男子の年齢別に女子二人を加えたチーム13人で競った。徳島県選抜は高知、香川両県選抜には快勝しかし愛媛県選抜戦では苦戦を強いられたが、粘りをみせて逆転で接戦をものにした。

◇徳島関係の成績

徳島	高知	香川	愛媛
松本	清水	宇野	小笠原
徳島	高知	香川	愛媛
松本	清水	宇野	小笠原

山前	平野	徳島	松本
山前	平野	徳島	松本
山前	平野	徳島	松本
山前	平野	徳島	松本
山前	平野	徳島	松本

5月23日

### 剣道

◆第15回美馬西部防犯少年剣道大会(21日・貞光中学校体育館)  
少年剣士56人が出場し、



気迫あふれる少年剣士ら  
士成町

5月24日

団体戦と個人戦で練習の成果を競い合った。小学校高学年の部では西村知美さん(11)・重清東小6・美馬町中沼田が優勝した。美馬西部防犯連合会が主催。

【団体】①美馬町剣道教室A②美馬町剣道教室B③半田町剣道教室

【個人】小学校高学年の部①藤田雅也(美馬)②木美里(美馬)③城尾康太(美馬)▽小学校高学年の部①西村知美(美馬)②木翔太(美馬)③長江恵(美馬)▽中学校1、2年の部①栗尾太一(美馬)②長江智浩(美馬)③武岡繁(美馬)▽中学校3年の部①藤本真太郎(貞光)②藤原アキラ(貞光)③近藤紫央(美馬)

◆第13回市場署管内防犯剣道錬成大会(20日・土成トレーニングセンター)

市場署管内の板野部土成町、阿波部市場、阿波両町から女子8人を含む小学生18人が参加し、熱戦を展開した。藤本恵利加さん(土成剣道教室)の選手宣誓の後、4ブロックに分かれ、個人リーグ戦をし、上位2人ずつが決勝トーナメントに進出、激しい攻防の末、近藤雅俊君(阿波剣道教室)が優勝した。上位4人が6月10日の県大会団体戦に、既に決定している中学生代表の3人上にも、市場署管内代表チームとして出場する。

【個人】①近藤雅俊②石川雅俊(阿波剣道教室)③桑原直哉(同)④湯作伴典(市場剣道教室)▽政岡寛 光水香織(土成剣道教室)

5月29日

(17) スポーツ

第3種郵便物認可

アサヒ



鮮やかな活脚が決まり、3連覇を達成した吉田（警察支部、右）■中央武道館

# 吉田（警察支部）3連覇

男子個人

## 全日本剣道選手権

全日本剣道選手権の最予選を兼ねた第十二回県選手権は二十八日、徳島市の中央武道館に31人が参加して男子の個人戦を行い、吉田茂生（警察支部）が三年連続四度目の優勝を飾った。吉田は全日本選手権（十一月三日・日本武道館）に出場する。

二年連続で吉田と平野（警察支部）が対戦した決勝は、延長にもつれ込む接戦となったが、吉田が鮮やかな活脚を決めて決勝をつけた。

警察支部・平野誠司選手（決勝で二年連続で吉田に敗れて奮闘を果たせず）「お互いが手の内、打つポイントを知り尽くしている。気を抜かないようにし

ていたのだが……」「いちかばちかで」○：三十分及び決勝に終止符を打ったのは吉田（警察支部）の連続の逆勝だった。一度目は外れたが、ちかばちかで、もう一度試みたと、二度目のひとつ振りか平野（警察支部）の左脇を先づきにとらえた。楽に勝ち進むことばでき

なかつた。準決勝も四十分の大接戦。決勝と合わせる二試合で二時間十五分も戦ったことになる。しかし「体がしんどい時や息の上がつた時の方が、逆に気分が乗って集中できる」と吉田。蓄積する疲労は苦にならなかつた。これで三連覇。県内では無敵といっていただろう。しかし、全日本選手権ではまだ三回戦以上に勝ち進んだことがない。「全国大会は県内一の選手ばかり。これまででは負いもあつたが自分の剣道ができればいい結果は出るはず」と言葉に力を込めた。

# あわ—スポーツ



板野郡などの小・中学生190人が技を競った「第10回北島ライオンズクラブ少年剣道大会」＝北島中学校体育館

ズ会  
オン大  
イ少  
ライ少  
北島  
クラブ

## 藍住東中、団体でV

### 小中学生190人が熱戦展開

◆第10回北島ライオンズクラブ少年剣道大会(28日)・北島中学校体育館  
板野郡内各町・徳島市川内、応神両町から小・中学生190人が参加。個人戦と学校や剣道教室、道場別に成績を競う団体戦が行わ

れた。  
【団体・小学生】①藍住剣道スポーツ少年団の北島少年剣道教室  
【団体・中学生】男子①藍住東中の北島中▽女①北島中の藍住東中  
【個人・小学生】3年生以下①山本健太(北島)②佐藤天介(藍住)③白石けい子(誠武館)▽4年生①北浦(誠武館)▽4年生①北浦(誠武館)▽4年生①北浦(誠武館)

5月30日

介(北島)③井上卓也(藍住東)市川元(藍住東)▽女子①仁科由希(介内)②池袋一葉(北島)③堀口あゆみ(藍住東)中村千秋(北島)

# あわ—スポーツ



気迫のこもった熱戦を繰り広げる少年剣士たち＝徳島東署武道場

## 庄地島君(小)が優勝

### 中学の部は玉田君に栄冠

◆第3回徳島防犯少年剣道大会(5月28日)・徳島東署武道場  
徳島東署内の小学生20人、中学生23人が参加。小学生の部は庄地島康太郎(養武館)、中学生の部は

玉田康朗君(徳島文理中)が優勝。小学生の部上位4人中中学生の部上位3人は6月10日に鳴門武道館で開催される第13回防犯少年剣道大会に出場する。  
【小学生】①庄地島康太郎(養武館)②長谷直輝(津田小学校剣道教室)③岡野飛斗史(徳島鎮心館)④橋年(養武館)、中学生の部は

本郷也(親遊館)【中学生】①玉田康朗(徳島文理中)②大麻島(八月甲)③野中太介(養武館)  
麻植郡大会  
片山君らV

◆第12回麻植郡内防犯少年剣道大会(5月27日)・山田中学校武道館  
川島署管内の「鳴島少年剣道教室」と「山川スポーツ少年団」修練館の2道場から小学生14人、中学生5人が参加。小学生の部は片山将志君(鳴島)、中学生の部は木良平君(鳴島)が優勝。小学生の部上位4人と中学生の部上位3人は県大会団体戦に出場する。  
【小学生】①片山将志(鳴島)②須見康生(同)③若菜大樹(同)④藤田伯大(同)  
【中学生】①三木良平(鳴島)②須見政弘(同)③新居賢誠(同)

◆小松島署管内防犯少年剣道大会(5月27日)・小松島署道場  
【小学生の部】①榎木雄一郎(坂野少剣会)②岡田直樹(同)③田村稔津季(和田少剣会)④上田祥平(小松島少剣会)  
【中学生の部】①播磨良幸(小松島中)②坂本和人(坂野中)③平岡達也(同)

6月3日













# 全日本女子学生剣道選手権で2年連続準優勝した筑波大4年 坪井 さくらさん(22)



剣道の全日本女子学生選手権で2年連続の準優勝に輝いた坪井さくら選手

## 「全国で優勝したい」

### 卒業後は指導者をを目指す

つばい・さくら選手 6歳から那智川少年剣道クラブで剣道を始め、那智川中学時代は3年連続で全国中学生大会に出場。団体では一年の時に準優勝、二年で優勝、三年ではベスト8入り。富岡東高校でも3年連続でインターハイに出場し、95、96年と同様に連続で団体3位入賞する原動力となった。個人でも二年連続で二冠。

高校時代と比べて変わった点があれば、年齢を重ねたこともあって、あまり動かなくなったように思います。ただ、一本一本に集中し、しっかり打てる

落ちていて、リラックスして試合に臨むことができます。日常生活ではそれほど集中力を必要とする場面はないですね(笑)。

今後の試合予定は、七月下旬の団体四国プロリーグ予選のあと、九月には全日本女子選を兼ねた関東女子学生剣道優勝大会があります。まずそれを勝ち抜き、全国でも優勝したい。学生時代には出られない大会なので、ベストコンディションで臨みたいですね。

最後に将来の夢や目標を聞かせて。

大学卒業後は指導者になりたいな、と思っています。五月下旬から三週間、母校の富岡東高で教習実習しました。教壇に立つチャンスを与えてもらい、あらためてこの仕事について、あらためて自分の底からわいてきました。教員採用試験を間近に控えて、今後は強と剣道の両立を本気で忙しうけれど、残り少ない大学生生活を充実したものになりたいと思っています。

大学の女流剣士日本一を決める第三十四回全日本女子学生選手権(7月2日・日本武道館)で、徳島県出身の坪井さくら選手(筑波大4年、富岡東高出)が準優勝に輝いた。昨年の同選手権でも2位に食い込んでおり、坪井は二年連続の準優勝という偉業を成し遂げた。決勝で延長の末、岡田圭(鹿屋体育大)に敗れ、頂点に立つことはできなかったものの、持ち前の集中力を発揮し、闘志あふれる戦いぶりをみせた。剣道に宿る思いや今後の抱負などを聞いた。

## スームアップ 話題の人

大会を振り返って。四年連続出場だが、今年が一番調子が良かったと思えます。雰囲気にも慣れていた

鹿屋体育大の三年生と対戦した1回戦がポイントでした。お互いが慎重になり試合が長引いたが、延長でメンを

す。ただ、今年が最後の年だったから、試合後は「やはり勝ちたかった」という気持ち

がわいてきました。結果については満足していません。決勝までいけると思っていたので、それだけよかったと思います。

剣道は集中力が重要な要素。どうやって養っているのか。試合前は眼をつむり、一分ぐらいじっと何も考えないよう

し、何よりも自分のペースで試合ができました。決勝では敗れたが、堂々の準優勝。要因は

毎って勝つことができた。これで波に乗り、それ以降は引き技がよく決まりました。

ようになってきたかも。話はややそれるが、剣道を始めたきっかけと魅力は

幼なじみが剣道を始めました。この話を聞いて私も始めました。今は煩雑などに悩まされず、対戦相手と気持ちのやり取りをし、「このように集中する時間を楽しんでいます。



選手を先導する矢野さん（富岡東）

こたえた蒸し暑さ

○：「野球場を歩くのは初めて。剣道の試合ほどは

緊張しませんでした。暑かった。36校の選手を先導した富岡東高剣道部の矢野主将。

日焼け止めを塗って歩いたが、やはり蒸し暑さを感じたようだ。

県総体で活躍した女子選手の手先導が恒例になっており、矢野主将に白羽の矢が立った。野球のことはあまり知らないそう、突然の依頼に「驚きました」。団体四国ブロック予選を二日後に控えた大役。開会式後はほっとした表情を見せ「あとは剣道で頑張るだけです」。

7月15日

**山岳などで 出場権獲得** 県 勢

第五十五回国体の剣道と山岳、ボウリングの四国予選が十六日、高松市総合体育館などであり、徳島県勢は剣道で少年女子、山岳で少年男子と成年女子、ボウリングで成年男女が出場権を獲得した。（記録は1位と徳島県勢）

◇剣道（高松市総合体育館）

【少年男子】リーグ戦 愛媛3-2高知、徳島4-1香川、愛媛5-0徳島、香川3-2高知、高知5-0徳島、愛媛5-0香川

▽順位①愛媛3勝②高知1勝2敗③香川1勝2敗④徳島1勝2敗⑤徳島1勝2敗⑥香川1勝2敗⑦徳島1勝2敗⑧徳島1勝2敗⑨徳島1勝2敗⑩徳島1勝2敗

愛媛、高知が団体に出場

【成年女子】リーグ戦 高知2-1徳島、香川2-1愛媛、徳島2-1愛媛、高知3-0香川、愛媛3-0高知、香川2-1徳島

▽順位①高知2勝1敗②香川2勝1敗③愛媛1勝2敗④徳島1勝2敗⑤徳島1勝2敗⑥徳島1勝2敗⑦徳島1勝2敗⑧徳島1勝2敗⑨徳島1勝2敗⑩徳島1勝2敗

7月18日

2位、3位は勝者数による。

高知が団体に出場

【少年女子】リーグ戦 徳島4-1高知、愛媛4-1香川、徳島5-0愛媛、香川3-2高知、高知3-1愛媛、徳島3-1香川

▽順位①徳島3勝②愛媛1勝2敗③高知1勝2敗④香川1勝2敗⑤高知1勝2敗⑥香川1勝2敗⑦高知1勝2敗⑧高知1勝2敗⑨高知1勝2敗⑩高知1勝2敗

徳島、愛媛が団体に出場

# 剣道

矢野 裕美子 (富岡東)



主将としてチームを引張る矢野



⑦

## チームワークが一番大事

過去インターハイ、全国選抜大会とも団体3位が二度という輝かしい実績を誇る富岡東の主将を昨秋、任された。選手たち全員の投票によるものだった。主将になって初めて迎え

た三月の全国選抜大会。団体で快進撃を続け、三度目の3位になった。「チームワークが一番大事」ということを再確認した。プレッシャーはあった。「私自身、先輩たちの必死

から」と主力の小林。絶対的なエースこそ

三年生六人は特に仲がいい。「みんな目標が一緒だから」と主力の小林。絶対的なエースこそ

県総体、四国選手権とも競り合いを勝ち抜き、優勝した。「流れに乗れば勝てる。全国ではまず予選リーグの突破に全力を挙げたい」。初めての決勝進出に向けて、闘志を奮い立たせている。

7月25日





◆剣道 第31回県少年練成大会  
(30日・鳴門武道館)

【団体】準々決勝 徳島至誠館  
2-1 滝虎館、鳴門市光武館3-1  
1 徳武館少年剣道教室、那賀川少年剣道2-1 藤敷振武館、大野小剣道部 1-0 幸岐剣道▽準決勝 徳島至誠館1-0 鳴門市光武館、那賀川少年剣道2-1 大野小剣道部  
▽決勝  
那賀川少年剣道2-1 徳島至誠館  
市瀬 1-メ 鎌田○  
榎山 メド 松本○  
○大磯 メメエ 村井  
今川 ー 河田  
○整本 メエー 玉田

【個人】準々決勝 澤田(至誠館)判定 岡田(清風館)、鈴木(加茂名) ドトメ 米倉(川崎)、元木(滝虎館) メー 喜多(川崎)、森本(吉野) メー 鈴木(清風館)▽準決勝 澤田(至誠館) 鈴木、元木コ 森本  
▽決勝 元木、澤田

8月3日

2000年(平成12年)8月4日

金曜日

スポーツ (22)

## 四国中学総体あす開幕

◆剣道 徳島勢は地元で四国一をかけた戦いとなる。男子は阿南二と平谷が出場。高知、大川ら実力校の一角を崩したところ。女子は阿南二と相生が出場し、住友主将を軸に粒ぞろいの阿南一に期待がかかる。

個人男子では、大石真(阿南二)玉田(徳島文理)らが有望。女子は手(わい)香川・白鳥の選手らに對し、白井(阿波)新居見(鳴島一)らがどこまで食い込むことが出来るか。



# 富岡東 初戦で敗退

女子団体  
決勝T

## 剣道

【男子】団体決勝

高輪 4-1 (桐蔭学園)  
 (東京) 4-1 (神奈川)

○安藤② メー 渡辺②

○安藤② メー 増田②

○山本② コー 八巻②

○平野② 一メ 小野寺②

○中沢② メー 雨谷②

高輪は3年ぶり2度目の優勝。

▽同個人決勝

佐々木昭

③ 川野明浩②

① 熊本・阿蘇

② 熊本・阿蘇

1回戦

【女子】団体決勝トーナメント

御殿場西 3-0 (徳島)

○大門② コー 榎本②

○飯田③ 一 岡田②

○佐野③ メー 小林②

○梅原② メー 昇②

小松③ 一 矢野②

▽同決勝

阿蘇 3-2 (茨城)

○熊本② 一 川端②

○宮川② コーメー 関②

○古沢② コー 矢口②

○椎葉② 一メ 小磯②

○古賀② 反一 武元②

阿蘇は2年連続6度目の優勝。

▽同個人決勝

坂本亜津  
 沙 (宮崎) ③  
 高千穂  
 光永聖子③  
 (長崎) ③  
 島原

納得のできる試合

○：剣道女子の富岡東は御殿場西(静岡)に0-3で敗れた。河田監督が「相手は打たせてくれなかった」という通り、五人全員



が1本も取れなかった。それでも大将・矢野(写真)と、この日からメンバー入りした次ほつ・岡田(写真)が、昨年の個人ベスト8の選手と引き分けるなど、粘りをみせた。その岡田は「自分の納得のできる試合ができた」という。全員が思い切りのいい戦いぶりだった。「スピードなどは

相手が上だったが、いいムードで試合は運んでいたと思う。とにかく悔いは残っていない」と、矢野主将は言葉を締めくくった。

8月5日



高校・高専・大学・教委の部

福多(城北) 准優勝

全国教職員剣道

第四十二回全国教職員剣道大会がこのほど、宮城県河北町総合センター・ビッグバンで開かれ、徳島県から出場した福多雅英(城北高教)が高校・高専・大学・教委の部で準優勝を果たした。団体戦は2回戦で富山に敗れた。

△徳島関係の成績

【高校・高専・大学・教委の部】1回戦 福多(徳島・城北高教)コト 榎田(北海道)▽2回戦 福多コト 山口(山梨)▽3回戦 福多コト 辻(沖縄)▽準々決勝 福多コト 大関(栃木)▽準決勝 福多コト 居村(石川)▽決勝 佐藤(宮城)メー 福多

【幼・義務教育の部】1回戦 川上(大阪)メー 白木(徳島・石井中教) 【女子の部】1回戦 藤川(大分)メー 竹内(徳島・大麻中教) 【団体】2回戦 富山 2-1 徳島

8月16日

○田中	中川	浅野	高瀬	○油谷
メー	メー	メー	メー	メー
阿南工高教	佐々木(城西高)	由岐中(高津)	本田(徳島市立高教)	赤松(景山)

男子六段は

山田(徳島) V

県剣道段別選手権

第二十四回県剣道段別選手権は二十日、鳴門武道館で行われ、男子六段は山田浩史(徳島支部)、女子三段以上は亀土(阿南支部)が優勝した。

【男子】初段の部準決勝 原(富岡西高)メー 小川(阿南工高)、前田(那賀高)コト 松元(徳島大)▽決勝 原メー 前田▽二段の部準決勝 元木(富岡東高)メー 松本(徳島東工高)、六條(山陽高)ドー 元木(阿南工高)▽決勝 元木メー 六條

河村(コトメ) 森(本東高)▽四段の部準決勝 切中(小松島支部)コト 森(警察支部)、富沢(警察支部)コト 三牧(鳴門支部)▽決勝 富沢メー 切中▽五段の部準決勝 富田(警察支部)メー 中尾(徳島支部)、佐野(警察支部)ドー 山室(警察支部)▽決勝 富田メー 佐野

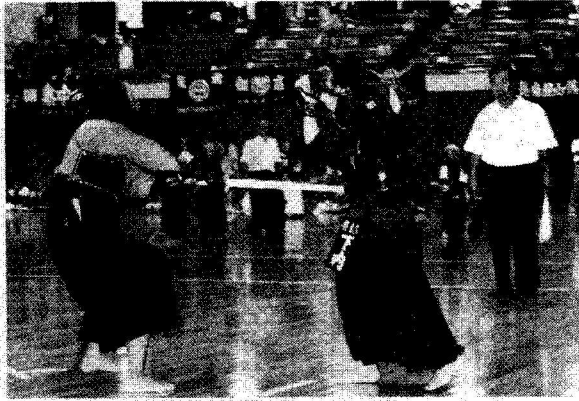
山田(徳島支部)メー 佐藤(徳島支部)メー 木村(板野東支部)、佐藤(徳島支部)メー 片山(刑務所支部)▽決勝 山田(コトメ) 佐藤【女子】初段の部準決勝 後藤(川島高)メー 中原(那賀高)、喜多(池田高)メー 福田(城西高)▽決勝 喜多メー 後藤

8月22日

美馬(昇)▽三段以上の部準決勝 平野(鳴門支部)メー 拙友(徳島商高)、亀土(阿南支部)メー 福池(鳴門支部)▽決勝 亀土メー 平野

# あわ—スポーツ

熱戦を繰り広げる少年剣士たち 鳴門県民体育館



6年生の部

## 玉田くん (至誠館) 優勝

### 県内外59道場560人が熱戦



◆第29回徳島県少年剣道  
練成大会(13日・鳴門県民  
体育館)  
県内と兵庫、香川の59道  
場から約560人が参加。

小学校4年生から6年生ま  
で学年別に分かれて熱い戦  
いを繰り広げた。徳島県七  
一ターボト競走会主催。  
敢闘賞 山口拓也(鴨島)  
鈴木健太郎(錬武館) 藤本  
健登(光武館) 上田未来  
(加茂名)

【4年生】①櫻木鉄也  
(坂野) ②岩雲祥吾(鴨  
島) ③庄地島康太(養武  
館) ④細川美波(錬武館)▽  
千尋(光武館)▽敢闘賞

【5年生】①細川瑞貴  
(十河) ②鎌田憲賢(至誠  
館) ③林明史(高浦) 平野

坂東大輝(栗林) 元木龍太  
(龍虎館) 豊石貴之(小松  
島) 曾根恵(至誠館)  
【6年生】①玉田魁大  
(至誠館) ②塩田伯大(鴨  
島) ③片山将志(鴨島) 池  
田佳南(大野小)▽敢闘賞  
松本和起(延野) 神元育巳  
(錬武館) 須見康生(鴨  
島) 服部明日香(大野小)

8月23日

◆剣道 第20回四国教職員記念大  
会(23日・香川県立丸亀武道館)  
▽リーグ戦 高知5-1徳島  
香川5-3愛媛、愛媛5-4徳  
島、高知4-3香川、香川5-1  
徳島、愛媛4-3高知  
順位①香川2勝1敗②高知2勝  
1敗③愛媛2勝1敗④徳島3敗1  
1位は勝者数、2、3位は本数差  
による。  
香川は4年ぶりの優勝。

8月24日



# あわ-スポーツ

## 剣道

◆第19回普通寺近県少年剣道大会(8月27日・香川県普通寺市民体育館)  
 四国各県と兵庫、岡山両県から64チームが参加。高学年の部で、徳島至誠館(羽ノ浦町・中山繁輝監督、鎌田憲資、松本明真、村井僚、河田紋、玉田魁大各選手)が優勝を飾った。

# 徳島至誠館に栄冠

## 近県64チーム、技を競う



優勝を飾った徳島至誠館のメンバー

徳島至誠館は、21チーム一勝ち抜き、決勝リーグでによる予選トーナメントをへ、同様に予選を勝ち抜いた。

9月19日

た愛媛武揚会(愛媛県)と仏生山スポーツ少年団(香川県)と対戦した。愛媛武揚会との対戦では2-1で勝ち、仏生山とは引き分けた。決勝リーグでは、徳島至誠館1勝1分け、愛媛武揚会1勝1敗、仏生山スポーツ少年団1敗1分けとなり、徳島至誠館が栄冠を手にした。



団体高学年は  
至誠館が制す

◆第18回小松島市坂野少年剣道錬成大会(9月10日)

坂野小体育館  
県内の小学生16チーム、  
280人が競い、団体戦は  
高学年の部で徳島至誠館  
(羽ノ浦町)が優勝した。

【団体】高学年①徳島至誠館②那賀川③小松島ク  
誠館②那賀川③小松島ク  
③那賀川B&G▽低学年①  
和田島ク②那賀川B&G③  
那賀川ク③小松島ク  
【個人】1年①合口褒真  
(那賀川B&G)②若江倫

10月2日

生(錬武館)③福崎泰樹  
(坂野)③飯沼謙太(坂  
野)▽2年①岩佐将希(錬  
武館)②岩原紗也香(至誠  
館)③上田勇輝(坂野)③  
上野恭生(那賀川)▽3年  
①臼木郁登(至誠館)②櫻  
木舞(坂野)③西田ちなみ  
(坂野)③表原寛人(至誠  
館)▽4年①櫻木鉄也(坂  
野)②平井悠基(坂野)③  
岡本浩宣(育英館)③大西  
梓(大野)▽5年①松本明  
真(至誠館)②岩佐勇希  
(錬武館)③稻岡哲平(育  
英館)③市瀬綾香(那賀  
川)▽6年①片田裕也(大  
野)②櫻木雄一郎(坂野)  
③中野加菜(那賀川B&  
G)③河田紋(至誠館)



◆第12回県西部小・中学

生剣道六吹大会(9月15日)

六吹町スポーツセンター  
【団体】小学低学年①鴨

島少年剣道教室②鴨門市光  
武館③六吹町少年剣道教室  
③入田錬成会▽同高学年①

10月7日

鴨島少年剣道教室②高浦少  
年剣道クラブ③六吹町少年  
剣道教室③藍住剣道スポー  
ツ少年団▽中学男子①鴨島  
第一中学校②池田第一中学  
校③藍住剣道スポーツ少年  
団③蔵本少年剣道クラブ▽  
同女子①入田中学校②池田  
第一中学校③市場中学校③  
鴨島第一中学校  
【個人】小学2年生①堀  
祥昌(加茂名)②森本翔次  
(吉野)③武田雅幸(川  
島)③村上遥香(六吹)▽  
同3年生①鈴木智也(清風  
館)②河村俊平(鴨島)③  
岡田紘平(清風館)③山西  
彩輝(蔵本)▽同4年生①  
竹澤諒(春風館)②尾崎勇  
大(春風館)③山下涉(佐  
馬地)③横川由佳(三好)  
▽同5年生①中山大地(鴨  
島)②新居春菜(鴨島)③  
掛田麻衣(川島)③武田裕  
平(川島)▽同6年生①米  
倉裕作(川崎)②森西由香  
(山川)③伊丹慶介(揚武  
館)③岡田泰造(清風館)

# 徳島、強豪倒し8強 少年女子

## 有力選手そろう鹿兒島下す

### 剣道

【少年女子1回戦】  
 徳島 4-1 石川  
 ○昇②コト 宗 勝②  
 ○岡田②ドメト 中村②

○矢野②ヌメー 杉村②  
 ○同2回戦  
 徳島 3-2 鹿兒島  
 ○昇②コメー 有上②

○小林②ヌコー 西②  
 ○岡田② 一ノ又②南田②  
 ○矢野②ヌメー 小高②

好調継続が自信に

○：剣道少年女子が、強豪を倒してベスト8入りを決めた。2回戦の相手・鹿兒島は選抜大会で2位、インターハイで8位になったメンバーからの選抜。212のあと、決着をつけた大将の矢野（富岡東高）は「練習でも好調で、自信を持って戦えた。あしたもこの調子を持続したい」と充実した表情。

河田監督（富岡東高教）は「何とかが大将までつないでほしいと考えていたが、先ほかが勝ってくれたのがよかった。しかし、こんなにははらはらした試合は久しぶり」と胸をなでおろしていた。



剣道少年女子2回戦・徳島対鹿兒島 212で迎えた大将戦で矢野裕美子（富岡東高）がメンを決める。庄川町民体育館

10月16日



その他

◆2000年度阿南市体育祭(9月10・10月4日・阿南市武道館ほか)
【剣道】小学校の部①阿南少年剣道教室②大野小学校剣道部③桑野川少年剣道教室▽中学校男子の部①阿南第一②阿南▽中学校女子の部①阿南第一②阿南▽高校男子の部①富岡西②阿南工業③富岡東▽高校男子個人の部①森貴雄(富岡西)

②岩佐健太(阿南工業) ③板東悟(富岡西)

10月21日

第3種郵便物認可

5/度

あわ-スポーツ

剣道

◆徳島眉山ライオンズクラブ結成40周年記念・小中学校剣道大会(9日・徳島市立体育館)

羽浦中(男子)が優勝

ライオンズクラブ女子は阿南第一中40周年大会

市立体育館 中学生約180人、小学生約500人が参加。保護者ら大勢の応援も詰め掛け、会場は熱気に包まれた。選手たちは日ごろの鍛練の成果を披露し、見事な竹刀さばきを見せた。団体・中学校の部では、男子は羽浦中、女子は阿南第一中が優勝し、県南勢の健闘が目立った。
【団体】小学校高学年①徳島至誠館②鴨島少年剣道教室③那賀川少年剣道クラブ③那賀川B&G剣道教室▽同低学年①鴨島少年剣道教室②小松島少年剣道クラブ③徳島至誠館③入田錬成会▽中学校男子①羽浦②阿南第一③徳島文理③坂野▽中学校女子①阿南第一②入田③新野③鴨島第一
【個人】小学校高学年男子①玉田赴大(至誠館)②山本義征(光武館)③山田久志(桑野川少年剣道教室)③神元吉巳(錬成館)▽同女子①福永悦子(竜虎館)②星野知世(那賀川B&G)③石井やよい(小松島少剣クラブ)③大城由香里(日和佐剣道スポーツ少年団)▽同低学年男子①松本濃太郎(和田島少年剣道クラブ)②湯浅翔平(至誠(新野中))

久志(桑野川少年剣道教室)③神元吉巳(錬成館)▽同女子①福永悦子(竜虎館)②星野知世(那賀川B&G)③石井やよい(小松島少剣クラブ)③大城由香里(日和佐剣道スポーツ少年団)▽同低学年男子①松本濃太郎(和田島少年剣道クラブ)②湯浅翔平(至誠(新野中))



熱戦を繰り広げる剣士たち(徳島市立体育館)

10月23日

# 徳島至誠館V

県社会人剣道

剣道の第二十九回県社会人大会は二十二日、鳴門武道館で予選のあと、上位14チームの決勝トーナメントを行い、決勝では徳島至誠館が3-0で城西徳農剣友会を下して優勝した。

10月23日

▽決勝トーナメント1回戦 城西徳農剣友会2(本数勝ち)2阿波支部B、徳島支部B3-2蔵本々、刑務所支部A2-0阿波支部A、小松島支部(風)2-1海部支部B、名西支部4-0阿波支部C、徳島至誠館2-0刑務所支部B  
 ▽準々決勝 城西徳農剣友会4-0三好支部、刑務所支部A2-1徳島支部B、名西支部1(本数勝ち)1小松島支部(風)、徳島至誠館2-1海部支部A  
 ▽準決勝

城西徳農 剣友会	2-1	刑務所支 部A
徳島至誠 館	2-2	名西支部
城西徳農 剣友会	3-0	城西徳農 剣友会
徳島至誠 館	3-0	城西徳農 剣友会
玉田	メメ	佐藤
臼木	メメ	高木
村井	メメ	佐々木
河田	メメ	榎本
木下	メメ	榎本

## ◆剣道 全日本学生優勝大会 (29日・大阪府立体育会館)

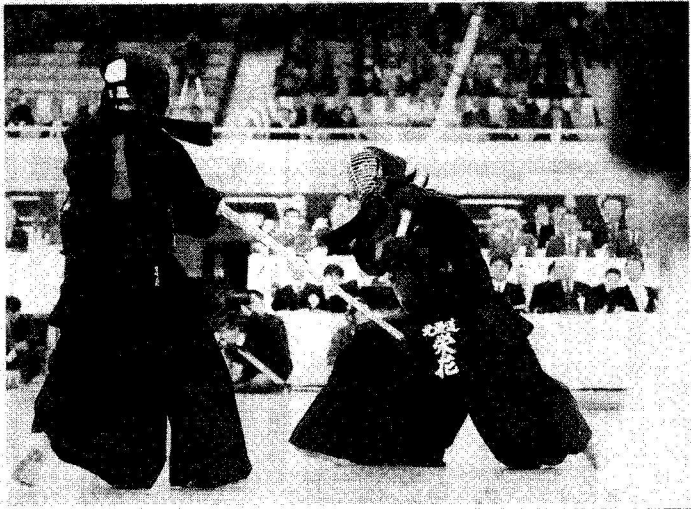
明大	4-0	帝京大
中大	1-0	筑波大
重慶大	2-1	鹿屋体大
東北学院大	4-2	中京大
▽準決勝		
明大	2-1	亜細亞大
中大	2-1	東北学院大
▽決勝		
明大	4-3	中原大
野村	メメ	大重
吉永	メメ	尾塚
岡北	メメ	石塚
前田	メメ	友井
内村	メメ	野口
岡下	メメ	野口
齊藤	メメ	和田

明大は2年ぶりの3度目の優勝。

10月30日

# 栄花、延長制し初V 全日選手権

決勝で宮崎正裕(左)を破り初優勝した栄花直輝(右)日本武道館



第四十八回全日本剣道選手権は三日、東京・日本武道館で六十四選手が出場して行われ、栄花直輝六段(北海道警)が決勝で、史上初の三連覇を目指した宮崎正裕七段(神奈川県警)を延長の末破り、初優勝した。

続ながら危なげなく勝ち進んだ宮崎正と対戦し、延長では宮崎正の面を、下がってかわして小手を決めた。警察関係選手が優位の中、初出場の立花義人四段(九州電力)が原田とともに3位と健闘した。

宮崎正(神奈川)	深谷(警視庁)
原田(北海道)	石原(岡山県)
立花(九州電力)	佐藤(大阪府)
宮崎正(和歌山)	立花(花)
高教田(高教)	原田(田)
栄花直輝(北海道)	宮崎正(宮崎)

11月4日

## 美馬郡中学校 秋季新人大会

【剣道】団体男子A  
 ①江原2勝②脇町1勝1  
 敗③貞光2敗▽B  
 穴吹2勝②美馬1勝1敗③  
 半田2敗▽決勝トナメ  
 ト準決勝 江原3-2美  
 馬、脇町4-1穴吹▽決勝  
 江原3-2脇町  
 ▽団体女子①穴吹3勝②  
 貞光2勝1敗③脇町1勝2  
 敗④美馬3敗

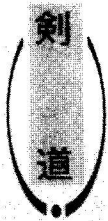
▽個人男子1年の部①正  
 木翔太(江原)②小角陽一  
 (脇町)③上浦和也(貞  
 光)④藤澤慶典(美馬)▽  
 同2年の部①白井浩志(穴  
 吹)②尾形智(江原)③幸  
 内慎也(江原)④佐藤森也  
 (江原)▽女子1年の部①  
 白井由加理(穴吹)②山田  
 佳奈(穴吹)③黒田あゆみ  
 (穴吹)④津山みゆき(穴  
 吹)▽同2年の部①長江綾  
 美(美馬)②中山麻衣(穴  
 吹)③川村美奈実(貞光)  
 ④市原歩(貞光)

11月7日

◆剣道 清原杯兼第45回県下大会  
 (3日・阿南工高体育館)  
 【小学校】①鴨島少年教室②徳島至誠館③阿南少年教室③那賀川少年  
 【中学校】男子の部①阿南一②那賀川③羽ノ浦③鴨島一▽女子の部①阿南一②鴨島一③入田③新野  
 【高校】男子の部①富岡東②富岡西③川島③阿南工▽女子の部①富岡東②川島③富岡西③鳴門  
 【一般】①阿南支部A②小松島支部B③四電エンシニアリング③海部支部

11月10日

◆鳴門市体育祭剣道競技



11月11日

(10月14日・市光武館道場)  
 【小学校】1、2年生の部①白髪晃佳(運動公園)②山本次郎(光武館)③宮浦慎治(光武館)③坂東郁弥(運動公園)▽3、4年生の部①藤本健登(光武館)②川辺祐樹(光武館)③宮浦昌平(光武館)③松下晃大(運動公園)▽5、6年生の部①山本義征(光武館)②平野千尋(光武館)③白髪陽介(運動公園)③山本敬太(光武館)

【中学校】男子の部①山本義裕(鳴門一)②林勇作(鳴門二)③市橋孝昌(大麻)③竹原征士郎(大麻)▽女子の部①武内恵(大麻)②山下純子(鳴門一)③筒井美帆(大麻)③中野宏美(瀬戸)  
 【優良賞】梅木宝命、原中綾女(以上光武館)松尾俊、長谷目香苗(以上運動公園)原田涼子、藤原菓(以上大麻中)笹部香織(瀬戸中)佐藤宏亮(鳴門一中)森雄一(鳴門二中)

# 阿南一がアベックV

## 県中学新人剣道

第十五回県中学校新人剣道大会は十日、松茂町総合体育館で男子五十七校、女子十二校が参加して団体戦を行い、阿南一がアベック優勝を飾った。準優勝は男子が徳島文理、女子は坂野だった。

【男子】一回戦、加茂2-0北高、市場2-1穴吹、入田1-0加茂、相生2-0高浦、市場2-0入田、

八方4-0藤代、徳島文理4-1美馬、日和佐2-1海南、羽浦1(本数勝)1大野、3回戦、阿南一3-0加茂、阿波2-1鳴門、鴨島2-1池田、坂野3-0津田、那賀川3-0徳島市場2-1相生、徳島文理3-1八方、羽浦1(本数勝)1日和佐、準々決勝、阿南一1(代表勝)1阿波、坂野2-1鴨島、市場1(代表勝)1那賀川、徳島文理2(本数勝)2羽浦、準決勝、阿南一1-0坂野、徳島文理3-1市場

出川 加茂2-0鷲敷、江原4-0上六、北井2-1三宮、阿波4-0南郷、鴨門3-0宮浜、池田4-0脇野、鴨島4-0侍屋、阿南3-1鴨門、小松島3-1山崎、津田2(本数勝)2平谷、藤代2-1加茂、谷川内3-0三好、池田4-1牟岐、徳島(代表勝)1板野、高浦3-0勝浦、相生4-0野、高浦3-0勝浦、相生4-0北高、市場2-1穴吹、入田1-0加茂、相生2-0高浦、市場2-0入田、

市場 池田1(本数勝)1相生、準決勝、阿南一3-1新野、坂野2-0池田

▽決勝  
阿南一 4-0 坂野  
○宮崎  
○高浦  
○市田  
○田中  
○大西  
○藤本  
○高橋  
○高橋

優勝選手を発表  
県剣道連盟

〇〇〇年度の県中学校優秀選手44人(男子22人、女子22人)を次の通り発表した。

【男子】太田真也、山田裕、田村洋介、横田幸一、元山和樹(以上阿南)、横川智也、谷藤健太、高橋龍一(以上相生)、折坂浩太、小林平、品川廉太(以上平谷)、西崎雅弘、高瀬法詩(以上坂野)、岩本正輝、河野二郎(以上石井)、多田賢司、三木健(以上波儀)和貴、湯浅輔(以上阿南)、近藤慎也(市場)、佐藤隆仁(小松島)、結合龍記(津田)

【女子】住友登枝、岡田千村、井千裕、佐居加奈、茂村美穂(以上阿南)、東根直子、藤本直昇、黒野井重香(以上相生)、昇志穂、後藤泰奈(以上市田)、寺西由佳、笹井友加(以上鴨門)、白井佳織、阿波池袋一葉(北高)、大黒重子(入田)、久保美(加茂)、墨安志保(貞光)、阿部宏紀(牟岐)、美馬重奈(市場)、堀川志沙(牟岐)、佐藤久米可奈(新野)

11月15日

11月20日



◆第47回丹生谷剣道大会(5日・上那賀町西町民体育館)

【団体】小学校①竜虎館(相生町)②振武館(鷲敷町)③竹友館(上那賀町)④延野少年剣道教室(相生町)▽中学校①相生中A②相生中B(以上相生町)③平谷中(上那賀町)▽一般①振武館(鷲敷町)②竜虎館(相生町)③上那賀町A、同B

【個人】①2年生 ①福井美咲(木頭)②西村光司(竜虎館)③福田稜

(延野) 株木佑介(竹友館)▽同3年生①藤本稜(竜虎館)②株田智典③久保貴寛(以上竹友館)▽同4年生①福永啓人②福川啓太③前川淳史(以上竜虎館)折上海人(北川)▽同5年生①元龍太②西田義玄(以上竜虎館)③山田奈奈(木頭)久保俊樹(竹友館)▽同6年生①福永龍己(竜虎館)②松本和起(延野)③岸貴之、西田昌玄(以上竜虎館)▽中学1年生①新田裕(相生)②株田薫(平谷)③生杉直也(鷲敷)▽同2年生①辻本武司②福永晃久③合澤鮎美(以上相生)の場大和(平谷)

# 富岡東がアベックV

「男子・元木寛 女子・昇」

## 県高校剣道選手権

剣道の第二十四回県高校選手権は十九日、城西高校体育館に男子百三十六人、女子七十九人が参加して個人戦を行い、男子は元木寛(富岡東)、女子は昇葉子(富岡東)が優勝した。

男子は元木寛と元木高志(阿南工)が決勝に進出して勝った。昇と北川希依(川島)の対決となった女子決勝は、昇が延長の末、胴を決めて熱戦に終止符を打った。北川は二年連続の準優勝。男子の上位16人と女子のベスト8が六月の県総体のシード選手となる。

## 男子準々決勝

(富岡東) 元木寛  
(阿南工) 元木高志  
(川島) 昇  
(富岡西) 北川希依  
(富岡東) 元木寛  
(阿南工) 元木高志  
(川島) 昇  
(富岡西) 北川希依  
(富岡東) 元木寛  
(阿南工) 元木高志  
(川島) 昇  
(富岡西) 北川希依

元木高志(阿南工)が逆胴で優勝を決めた。相手は後ろに下がったところを攻め込んで、狙いすましたように打ち込んだ。「やった、という気持ちでした」

手権、胴総体の個人戦でもベスト16。優勝する力は十分にあった。「次は一月の全国選抜大会県予選(団体)で優勝したい。皆の力が似ているので、これからは頑張ります」。金メダルを胸に新たな目標を掲げた。

「女子準々決勝」(富岡東) 昇 橋本(富岡東) 北川 美馬



延長で北川(川島、手前)から胴を奪って優勝した昇(富岡東) 川城西高体育館

我慢し自分のペース

○：「序盤は攻められたが我慢しているうちに自分のペースに持ち込めた」

女子で優勝した昇(富岡東)は今年の県総体チャンピオン。前評判通りの実力をみせた。

とはいえ、決勝は楽な試合でなかった。北川(川島)の思いきりのよい攻撃に苦しみ、決定打を奪えないまま延長に突入した。一進一退の攻防の末、ようやく鮮やかな引き胴が北川の右わきを先へきにとらえた。

「一回打っても決まらなかった。でも、最後はこれで絶対に決めようと思って打ちました」。感慨深げに優勝を持たした一撃を振り返った。

11月21日

那賀川剣道大会

小、中、高校生  
750人が技競う

「第千八回読売杯・磯部旗争奪那賀川剣道大会」(那賀川町教委など主催、読売新聞大阪本社後援)が二十三日、同町B&G海洋センターで開かれ、県内の小中学生や高校生七百五十人が日ごろ鍛えた技をぶつけあった。

団体は小学校低学年、同高学年、中学・高校の男女別に、個人は小学校学年別と中学校男女別に分かれて熱戦が繰り広げられた。選手は相手のすきを突いて

果敢に打ち込み、応援に駆け付けた保護者や教師から拍手や声援が送られていた。結果は次の通り。

- ◇団体▽小学校低学年①徳島至誠館②龍虎館③和田県少年剣道クラブ、鳴門市光武館▽同高学年①徳島至誠館②阿南少年剣道教室③那賀川少年剣道クラブ、桑野川少年剣道教室▽中学校男子①羽浦②徳島文理③相生、坂野▽同女子①阿南第一②坂野③牟岐、阿南▽高校男子①阿南②富岡西③富岡東④川島⑤富岡西、徳島市立
- ◇個人▽小学一年①谷口奨真(那賀川B&G剣道教室)②齋上陽介(練武館少年剣道教室)③株木祐介(上那賀竹友館)井上裕大(那賀川B&G剣道教室)▽同二年①松本好史(徳島至誠館)②上田勇輝(坂野少年剣道クラブ)③土井翔吾(練武館少年剣道教室)上田義弘(徳島至誠館)
- ▽同三年①松本真生(徳島至誠館)②藤本稜(龍虎館)③仁木悠美(練武館少年剣道教室)高瀬雄一朗(新開剣道クラブ)▽同四年①田村嘉崇(和田県少年剣道クラブ)②

- 湯浅彰義(徳島至誠館)③吉岡夏美(大野小学校剣道部)宮下あい(同)▽同五年①藤倉純(阿南少年剣道教室)②岡田直樹(坂野少年剣道クラブ)③島田晃郎(大野小学校剣道部)市瀬綾香(那賀川少年剣道クラブ)▽同六年①桜木雄一郎(坂野少年剣道クラブ)②清野智之(徳島至誠館)③一宮雅登(新野少年剣道教室)藤原樹里(木頭練心館)▽中学男子①大石洋史(阿南第一)②山ノ井陽介(阿南第一)③若見恭輔(八万)岩沙佑樹(相生)▽同女子①寺井なつみ(阿波)②一瀬綾(市場)③天満美咲(同)湯浅稚奈(阿南第一)

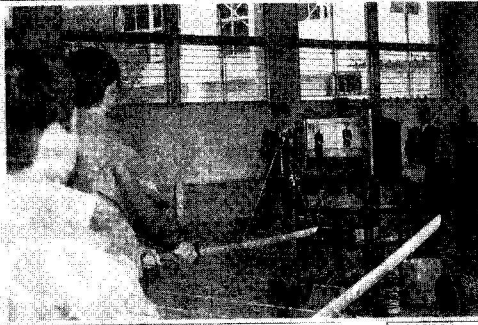
11月24日

那賀高

徳島市へ驚歎リアルタイムで

テレビ通じ剣道学ぶ

双方向システム使い授業



高強度映像受信システムを使って徳島市内の教師から剣道を学ぶ那賀高校生。左側教室内の同校武道場。

11月23日

武道場にいる生徒が、授業中の情報機器やカメラに向かい、映像・音声と話していた。同校では、丹生谷地域五町村にある大中学校並みの中高一貫教育の導入が研究室の一人高瀬が、二十日、那賀教育研究会(県教委など主催)の公開授業として行われた。

一年生の男子生徒十三人の高強度映像受信システムと教師一人が同校武道場を、徳島市と連携しながら、指導教師は徳島市と連携しながら、指導教師を教えたほか、生徒は本を演習して授業を受けた。

「互はこういう形の授業形態が期待できる。同校は授業は初めてだったけれど、分かりやすくてよかった。」

研究大会には、県内各地の高校教師ら五十二人が参加。コンピュターを使った授業や講演会なども開かれた。

中学個人の部

男子玉田 孝吉岡

全国スポーツ少年団

交流剣道県予選

剣道の第十八回県スポーツ少年団交流大会兼第二十三回全国スポーツ少年団交流大会県予選は、このほど、鴨門武道館で小・中学生の個人戦を行った。中学校男子は玉田康朗(至誠館)、女子は吉岡穂(桑野川少年剣道教室)が優勝し、全国大会(2001年3月28-30日・宮崎市)中学個人の部への出場を決めた。また少年団体の部には、小学校各都上位の岩雲祥吾(先ぼう)、鴨島少年剣道教室(河田紋(次ぼう)、至誠館)玉田越太(中堅)、至誠館)長地千景(副将、那賀

川B&G少年剣道教室)塩田伯大(大将、鴨島少年剣道教室)が出場することになった。

【小学校】四年生の部①岩雲祥吾(鴨島少年剣道教室)②酒巻依暉(阿波少年剣道教室)③庄地康太(兼武館)④福永啓人(竜虎館)▽五、六年男子の部①玉田越太(至誠館)②塩田伯大(鴨島少年剣道教室)③山本義征(光武館)④岸貴之(竜虎館)▽同女子の部①長地千景(那賀川B&G剣道教室)②河田紋(至誠館)③山本颯子(北島少年剣道教室)④中野加菜(那賀川B&G剣道教室)【中学校】男子の部①玉田康朗(至誠館)②株田巧(上那賀町スポーツ少年団)③北浦優介(北島少年剣道教室)④坂東真伍(入田錬成会)▽女子の部①吉岡穂(桑野川少年剣道教室)②山田愛(那賀川少年剣道クラブ)③島田和佳(大野城山)④石井由美(入田錬成会)

12月8日

12月9日

剣道

11月22日

◆剣道 第23回全国スポーツ少年団交流大会(2001年3月28-30日・宮崎市)出場者  
【中学個人】男子 玉田康朗(至誠館)▽女子 山田愛(那賀川少年剣道クラブ)  
【少年団体】岩雲祥吾(鴨島少年剣道教室)河田紋(至誠館)玉田越太(至誠館)長地千景(那賀川B&G少年剣道教室)塩田伯大(鴨島少年剣道教室)

◆第19回市場町文化祭剣道大会(5日・市場中学校体育館)  
【団体】小学生①鴨島少年剣道教室②阿波少年剣道教室白組③山川スポーツ少年団修練館▽中学生男子①阿南第一②坂野③市場A▽同女子①阿南第一②鴨島第一③坂野【個人】小学生①笠井栄一②岡田浩江③須賀樽介、滝下千紗(以上市場剣道教室)

レベルアップを目指して練習を重ねる選手たち 徳島市立体育館



## あす大野旗高校剣道

徳島市

# 県勢“全国”相手に腕試し

高校剣道の第八回大野旗大会が二十七日、徳島市立体育館で開かれる。高校生剣士たちの強化、レベルアップを目的とした全国大会で、試合を前に錬成会も始まった。

徳島での大会開催は初めて。参加するのは二十五都府県の男子六十八校、女子四十四校。男子では昨年の岐阜インターハイで優勝した高輪（東京）、女子は九

### 試合を前に錬成会で汗

州勢の熊本商（熊本）高千穂（宮崎）など、各都府県のトップクラスの高校が集まった。

県勢は男女計二十七校が出場する。遠征の少ない学校にとっては県外の強豪と腕試しをする、またとないチャンスとなる。

大会を控えて二十四日から錬成会が始まった。二十五日は同体育館と城北高体育館で各校がそれぞれ十試合前後行い、竹刀が激しくぶつかり合う音を館内いっぱいに響かせていた。

12月26日

12月12日

### 剣道

◆第28回磯部旗争奪那賀川剣道大会(11月23日・那賀川B&C海洋センター)

徳島至誠館②龍虎館③和田島少年剣道クラブ③鳴門市光武館▽小学校高学年①徳島至誠館②阿南少年剣道教室③那賀川少年剣道クラブ

【団体】小学校低学年①美③高瀬雄一朗▽4年生①田村嘉菜②湯浅彰義③吉岡夏美③宮下あい▽5年生①藤倉純②岡田直樹③島田晃郎③市瀬綾香▽6年生①榎木雄一郎②清野智之③一ノ宮雅登③陸原樹里

【中学校】男子①大石洋史②山ノ井陽介③岩見恭輔③相生③坂野▽中学校女子①阿南第一②坂野③牟岐③阿南▽高校男子①阿南工業②富岡西③富岡東③徳島東

工業▽高校女子①富岡東②川島③富岡西③徳島市立

【小学校個人】1年生①谷口栞真②曾上陽介③株木拓介③井上稔大▽2年生①松本好史②上田勇輝③土井翔吾③上田義弘▽3年生①松本真生②藤本稜③仁木悠美③高瀬雄一朗▽4年生①田村嘉菜②湯浅彰義③吉岡夏美③宮下あい▽5年生①藤倉純②岡田直樹③島田晃郎③市瀬綾香▽6年生①榎木雄一郎②清野智之③一ノ宮雅登③陸原樹里

【中学校】男子①大石洋史②山ノ井陽介③岩見恭輔③相生③坂野▽中学校女子①阿南第一②坂野③牟岐③阿南▽高校男子①阿南工業②富岡西③富岡東③徳島東

湯浅雅奈

12月12日

### 剣道

◆第27回板野東支部剣道錬成大会(11月23日・松茂鎮成大会)

【団体の部】小学低学年の部①北島剣道教室▽小学高学年の部①誠武館道場▽中学生男子の部①北島中学校

【個人の部】小学1・2年①白石騎士②藤田直也③矢野一輝▽小学3年①矢野優貴②白石けい子③三輪高大▽小学4年①北浦良介②山村由梨③槐康平▽小学5年①矢野翔太②白石磨也③谷口昌郷▽小学6年①木内康寛②山本聖子③田根雄一郎▽中学生①西宇真之②河西智史③佐古賢太

12月18日

### 剣道

◆第7回海部郡スポーツレクリエーション祭牟岐町文化祭少年剣道大会(11月25日・牟岐小学校体育館)

【団体】①牟岐町剣道クラブA(西澤、山本、美馬)②日和佐剣道スポーツ少年団A(杉谷、大城、岩本)③由岐少年少女剣道クラブA(松井、花木、多田)④牟岐町剣道クラブD(菅谷、藤瀬、柳瀬)

【個人】2年生以下①菅谷翔太②杉谷雪③平井孝明③向原啓悟▽3年生①小沢裕貴②柳瀬美希③津田利明③貝塚佐和子▽4年生①申

12月25日

川綾那②泉利昌③杉谷玄矢③向原伸悟▽5年生①宮田嗣久②藤井玲名③花木翔▽6年生①西澤英吾②美馬憲太③柳瀬亮③岩本浩希

### 剣道

◆第26回県民スポーツ祭記念美馬西部少年剣道大会(3日・美馬中学校)

【団体】中学生の部①美馬中A②貞光中A③美馬中B▽小学生の部①半田町剣道教室B②美馬町剣道教室C③美馬町剣道教室E

12月26日

【個人】中学生男子①長江智浩②栗尾太③武岡繁③藤田進▽同女子①長江綾美②川村美奈吏③金井浩美③逢坂千鶴▽小学生低学年①藤田侑妃②高井伸也▽同中学年①藤田雄也②藤田幸希③辺見康太③城尾康太▽同高学年①河井一馬②藤本彩③長江恵③栗尾了史

# 女子 富岡東が初優勝

大野旗全国高校剣道 高校剣道の第八回大野旗争奪大会は十七日、徳島市立体育館に全国から男子六十七校、女子四十四校が参加して団体戦を行い、女子で徳島東の富岡東が3-1で高千穂(宮崎)を下し、初優勝を成し遂げた。決勝で富岡東は先ほどの岸が開始早々にメンを奪って優位に立った。次は岸の口が懸命に引き分けたあと、岸が一本勝ち。中堅まで2-0を勝ち、試合をほぼ決定づけた。続く河田は敗れたもの大野旗でも美馬が鮮やかなメンを奪い、有終の美を飾った。

△相良(静岡)、尾城学園(香川)A  
 川)5-0阿西(八代東(熊本))  
 本)5-0(熊本)池田(熊本)  
 高輪(東京)、豊(香川)5-0  
 O徳北 姫路T(兵庫)5-0  
 鴨門、菊池(熊本)2-0徳島東  
 2水谷陵  
 工、東海大市安(千葉)5-0川  
 島)3-0(熊本)高千穂(宮崎)2  
 O富岡東、桐葉園(徳島)2  
 3-1富岡西、岡山東商(岡山)  
 山)3-1O城西、法田(広島)4  
 0徳島中実、桐葉園(徳島)4  
 海陽、舞(香川)3-0池田  
 川)3-0(熊本)豊(香川)1  
 O徳島北 赤穂(兵庫)4-0  
 △4回戦 岡上館(東京)3-0



果敢に攻める富岡東の美馬主将(左)一徳島市立体育館

## 「先行逃げ切り」勝ち。パターンに

富岡東

富岡東が二十世紀最後の大会を初Vで飾った。じつと選手たちの頑張りを見詰めた河田監督はこの優勝は生徒たちの自信になる」と目を細めた。流れを呼び込んだのは先ほどの岸だった。先陣、同級生の頑張りを先で奮起したと岸、脚力を生かした力強い竹刀さばきを披露して4勝。しかも、3試合が二本勝ち。3回戦の沼田(広島)戦こそ引き分けたが、十分すぎるほど、先兵役を務めた。一種良い緊張感のなかでやりやすかった。地元だったから」と振り返る。

富岡東が初Vで飾った。じつと選手たちの頑張りを見詰めた河田監督はこの優勝は生徒たちの自信になる」と目を細めた。流れを呼び込んだのは先ほどの岸だった。先陣、同級生の頑張りを先で奮起したと岸、脚力を生かした力強い竹刀さばきを披露して4勝。しかも、3試合が二本勝ち。3回戦の沼田(広島)戦こそ引き分けたが、十分すぎるほど、先兵役を務めた。一種良い緊張感のなかでやりやすかった。地元だったから」と振り返る。

阿波西、沼田(須賀山)2-1  
 門)2回戦 富岡東2-1O初芝  
 (大阪)、川島3-1O西大寺(岡山)  
 山)、池田3-1O第五(愛媛)  
 媛)3回戦 富岡東2-1O沼  
 田(新潟)、新沼(新潟)4-1O川  
 島(香川)3-1O徳島西  
 徳島決勝 富岡東3-1熊本西  
 (熊本)  
 △準決勝 富岡東2-1岡山東  
 商 高千穂2-1広島皆実(広島)  
 △決勝  
 富岡東3-1高千穂  
 O岸、メー、西川  
 瀬口、牧野  
 O岸、ドコ、松岡順  
 河田、メ、假、櫻、れをつつてくれ、理想的な展開で勝った。次は選抜大会にいけないよう、予選で優勝したい。」

のは中堅の岸。岸と同様、4勝した。大会前の錬成会で引き分けが多かった河田監督をよきも言させたが、本番に強い一面をみせた。

二人が軸となり「先行逃げ切り」の勝ちパターンをつくった。「強いイメージがあり、勝てると思っていなかった(岸)という決勝の高千穂(宮崎)戦でも中堅までの貯金があるといい、3-1で快勝した。

強要が数多く集まったなかでの優勝。春の全国選抜大会制覇に向けて弾みをつけた。このころ、選抜は過去八回出場し、二度の準決勝進出を誇るが、まだ決勝進出と優勝の喜びを味わっていない。「一月十四日の予選から気持ちを入れたら頑張りたい」と岸、年明けからのさらなる飛躍を誓った。(延)

12月28日

1月10日

# 剣道

## 小学校の部は 相生・竜虎館

◆第46回県剣道連成大  
会(12月10日・日和佐町総  
合体育館)

【小学校の部】①竜虎館  
(相生町)②那賀川B&G  
剣道教室A③鎌武館少年剣  
道教室(阿南市)  
【中学校の部】男子①徳  
島文理②坂野A③羽浦▽女  
子①新野②坂野③日和佐

1月12日

## 剣道上達願 児童威勢よく

池田のクラブが鏡開き  
三好郡内の少年・少女が



鏡もちに竹刀を打ち込む  
子供たち 池田署柔剣道  
場

通う剣道クラブ「池田剣正  
堂」(影本好広会長、二十  
八人)の鏡開きが九日夜、  
池田町ウエノの池田署柔剣  
道場で行われた。

幼稚園児から小学六年生  
までの男女十六人が防具を  
身にまとい参加。指導員  
の高橋和宗さんも、同町  
白地、無職から鏡開きの  
意義を聞いた後、代表の  
三人が供えられた直後約二  
十秒の鏡もちに精神、技術  
両面の向上を願い、勢いよ  
く竹刀を打ち込んだ。続け  
て二手に分かれ紅白試合も  
行われ子供たちの気合に満  
ちた掛け声が響き渡った。  
鏡開きは、クラブが  
同署で練習を始める日に行  
っている。

# 龍虎館(那賀郡)に栄冠

鳴門 中学男子は大石君(阿南)

## 6003人参加 練習の成果を競う

# 剣道



◆第3回西杯・光武館  
建20周年記念県選抜少年  
剣道大会(12月17日・鳴門  
武道館)

1月17日

徳島、香川、愛媛の3県  
から中学校33校、小学校39  
チーム計600人が参加  
し、日よの練習の成果を  
競った。

【小学校】団体①龍虎館  
(那賀郡)②鴨島少年剣道  
教室③徳島至誠館④大野小  
学校剣道部▽個人戦1、2  
年生の部①若佐得希(鎌武  
館)②木下裕貴(入田鎮成  
会)③松本好史(至誠館)  
④渡辺廣文(香川・飛田)  
▽3、4年生の部①福川敬  
太(龍虎館)②桑原大樹  
(鴨島少年剣道教室)③櫻  
木鉄也(坂野少年剣道クラ  
ブ)④小西貴大(那賀川B  
&G)▽5、6年生の部①  
玉田超太(至誠館)②山本  
義征(鳴門市光武館)③大  
津孝太郎(阿南少年剣道教  
室)④片山持志(鴨島少年  
剣道教室)

【中学校】個人戦男子の  
部①大石洋史(阿南)②  
鍛えた持を繰り出す剣士  
 鳴門武道館

玉田康朗(徳島文理)③浅  
井敏博(石井)④大西嘉雄  
(阿南)▽女子の部①吉  
岡穂(阿南)②新橋見綾  
(鴨島)③中川一美(小  
松島)④近藤三葉子(鴨島)

# 富岡東、川島を圧倒

女子  
決勝

## 男子富岡西は16度目頂点

### 全国高校剣道県予選

剣道の第四十五回県高校予選は十四日、城西高体育館で男子二十校、女子十三校が参加して行われ、男子は富岡西が二年ぶりの十六度目、女子は富岡東が九年連続十五度目の優勝を果たした。

男女とも上位四校が第一回四国新人大会(2月18日・香川県豊平町)に出場する。

<p>【男子】1回戦 川島5-0 城北内3-1 新野 徳島北2-1 鳴門 脇5-0 池田 城西4-1 城南 小松島2-1 徳島市立2-2 回戦 富岡西3-1 川島 阿南高専2(本数勝ち) 2阿波 那智2-1 城北内 徳島東工4-0 徳島北 富岡東2-1 0 脇岡 日和佐2-1 城西 城東2-1 鳴門 阿南工5-0 小松島 徳島西4-0 阿南高専 那智 富岡西4-1 富岡東5-0 2位 徳島東 富岡東5-0 和佐 阿南工5-0 城東</p> <p>▽準決勝 富岡西5-0 那智 富岡東1-1 阿南工 (代表勝ち) ▽3位決定戦 阿南工2-1 那智 ▽決勝 富岡西2-1 富岡東</p>	<p>原 山井 ○横手 コー 竹亭 ○的場 メココ 坂本 ○櫻福 メコ 元木 【女子】1回戦 鳴門3-1 脇町 池田2-0 徳島北 富岡西4-1 六次 城東2-1 徳島市立 城内4-0 城北 徳島市立 富岡東5-0 鳴門 池田2-1 富岡西 城西3-1 城東 川島3-0 城内</p> <p>▽準決勝 富岡東3-1 池田 富岡西4-1 城西 ▽3位決定戦 城西2-2 池田 (本数勝ち)</p> <p>▽決勝 富岡東5-0 川島 ○岸 コメー 後藤田 ○瀬口 メー 寺井 ○昇 トコ 田中 ○河田 コー 高木 ○美馬 メコ 北川</p>
---	--

1月15日

### 冷静さ失わず逆転

○：男子富岡西は一年生の副将・的場が決着をつけた。最初に坂本(富岡東)にコテを奪われ「うしろか」と思ったそうだが「チームメートの励ましで気持ちを立て直すことができた」と振り返る。冷静さを失わず、的場はメン、コテを奪い返して逆転。副将戦を終えた段階で2-0となり、優勝が決まった。富岡西にとっては二年ぶりの全国選抜大会出場



女子決勝で2本勝ちした富岡東の先ぼう・岸。左は後藤田(川島)＝城西高体育館

で試合後、山田監督と全選手ががちり握手し、喜びを分かち合った。

「昨年上回りたい」  
○：女子は富岡東が九連覇。決勝では川島を5-0で破り、危なげなく「選抜切符」を獲得した。「伝統をつなげなければいけない」と美馬主将。河田という意識があったという。美馬主将は「はつとした表情だった」。

選抜大会では昨年を含め過去三度、3位に入賞している。「昨年の成績を上回りたい」と美馬主将。河田監督は「攻撃力が増すように、それぞれの良いところを伸ばしたい」と口調に力を込めた。

◆剣道 第11回県小・中学校強化  
錬成大会

(2日・鳴門県民体育館)

【少年の部】準々決勝 鳴門市  
光武館2(本教勝) 2新野少年  
教室、阿南少年教室3 0市場教  
室、徳島至誠館4 0大野小剣道  
部、山川又平1 少年団修練館3  
0 徳武館 準決勝 鳴門市光武  
館1(代表勝) 1阿南市少年教  
室、徳島至誠館3 0山川又平1  
少年団修練館

▽決勝

徳島至誠 2 1 鳴門市光武館

鎌田 1 1 榎木

河田 1 1 平野

玉田 1 1 小倉

【中学男子】準々決勝 市場1  
0津田、阿南1(代表勝) 0  
1那賀川、徳島文理4 0平谷、  
坂野2 1阿波 準決勝 市場2  
1阿南、徳島文理3 0坂野

▽決勝

徳島文理 2 1 市場

中村 1 1 近藤

花房 1 1 笠井

玉田 1 1 尾田

【中学女子】準々決勝 阿南1  
5 1 0 眞光 池田 2 1 市場、  
嶋島 2 1 0 新野、坂野 2(代表  
勝) 2 大塚 準決勝 阿南 1 3  
0 池田、坂野 2 1 嶋島 1

▽決勝

阿南 1 2 1 坂野

(本教勝)

宮崎 1 1 村瀬

近藤 1 1 木本

島田 1 1 藤本

吉岡 1 1 中島

1月24日

国士大剣道部  
活動再開へ

傷害致死事件で  
解散した名門

部員同士の傷害致死事件  
が起こり、一九九九年十月  
に解散した名門・国士館大  
剣道部が学内サークルとし  
て活動を再開することが二  
十四日、分かった。当分は  
公式戦への出場は控える。

国士大の西原春大理事長  
は「事件から学んだ教訓を  
謝罪や反省にとどめるべき  
ではない。本当の武道精神  
を伝えるという使命を背負  
って、活動を再開したい」と  
説明した。被害者の遺族  
の子解も得ており、来月八  
日の学生主任会の正式承認  
を受けてスタートする。

事件は九九年九月二十八  
日に東京都町田市の男子剣  
道部寮内で起き、四年生部  
員が一年生部員の腹部をけ  
つて死亡させた。大学チャ  
ンピオンに過去十一年輝いた  
名門校における理不尽な  
上下関係が明らかになり、  
実態上は別活動していた女  
子剣道部も合わせて解散と  
なった。

1月25日

# 徳島県剣道連盟事務分掌表

平成十三年四月一日現在



## 編集後記

ある縁で、全剣連の常任理事であり、かつて高体連で長く専門部長を勤められた岡村忠典先生に前号の『徳島の剣道』をお送りすることがあり、折り返し、岡村先生より、次のようなお手紙を頂戴しました。私ひとりの感動に留めるのではなく、皆さんに紹介することで、今回の編集後記とさせていただきます。

拝復 『徳島の剣道』はすばらしい。ありがとうございます。私の座右の銘が平野誠司君の文章に出ており、うれしく思いました。又、高体連で共に努力してきた仲間達が多くのことをここに出しておられるのもうれしいことでした。

第十六号とありますが、これと同じ様なものが毎年作られているとすれば凄いことだと感服しました。これは剣道というものを文化として継承していく最高のものであろうと思います。すべてを網羅しているその内容の木目の細やかさも、私の知る限りにおいては、第一等のものであろうといえます。これの作成にあたる方々は正しく剣道活動をしている方々と言えらると思えます。心から敬意を表します。

剣道人にはいろいろな方がおられます。剣道を高める人、剣道を広める人、剣道を伝える人、剣道を楽しむ人、それらの人々がそれぞれの働きをすることで剣道がすばらしい文化として洗練され、後世に伝承されていくものだと思います。その結集の凄さがこの本の最も大きな価値と高く評価させていただきます。

私の感動の深さをうまく伝えることは出来ませんが、これをもって拝読の御礼とさせていただきます。

敬具

平成十二年七月二十五日

岡村忠典

## 『徳島の剣道』第十七号

### 編集委員会

編集顧問

堀江幸夫

木原資裕

中村稔裕

大川功

福多雅英

美馬和義

武岡美智

**『徳島の剣道』 第十七号**

平成 13 年 8 月 10 日発行

**編集・発行 徳島県剣道連盟**

**代表者 遠藤 一美**

〒772-0853 徳島市中徳島町 2 丁目 96

**TEL 088-652-2337**

**FAX 088-652-2360**